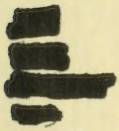


East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

DS 895 F92G3 v.3

Gamban shiryo sosho

East Asia

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/gambanshiryssho03fuku

岩磐史料叢書

下巻

LIBRARY
OCT 24 1967
UNIVERSITY OF TORONTO
DS
895
F92G3
V.3

本卷輯錄書目

奧陽仙道表鑑　相生集（自卷之第十四稿至卷之第二十稿）

會津双櫻記　文化甲子年撰風土記

淺川騷動見聞錄

岩磐史料叢書下卷

例言

一、本叢書は、岩磐史料刊行會の編纂に成るもの也。而して岩磐史料刊行會の趣意書及規定等は、之を上卷に揭載せり。

一、岩磐史料刊行會は最初午來丈助氏之を計畫し、予、後ち之を引受けて完成したる也、隨て本會に關する一切の責任は、予に在り。

一、予は隱れたる史料を搜索すべく、數月に涉りて、縣下各地を旅行したり而も獲る所甚だ鮮かりき。實際に輯錄する所と、發行豫定書目との相一致せざるは、搜索の結果此と彼と相換ゆるの至當なるを發見せるに由る。又二三特志者の注意に依り、變更したるもあり。

一、由來寫本には、誤字異文多甚し。轉寫の際無意に出でたるもある可く、增補修正の意味を以て、後人が故意に改作したるもある可し。而も筆記の年月明ならざるを以て、其何れが原本たるかを判定する容易にあらず。故に本書は、種々の異本あるものは、比較的原本に近しと信ずるものを、其

儘に採錄し、文章、用語等に意味不通の點あるも、敢て改作を加へず。其原形を保存するに努力せり。又原本蟲喰等の爲め文字不明の個所は□の印を組み置きたり。

一、本書の出版完結が、豫定の期日より、壹ケ年以上遲延せるは、原本蒐集及撰擇の都合に依り、又印刷所の非常に繁忙なりしが爲めなるも、亦會費納入の成績等豫定の如くなるを得ざりし自然の結果ならずんば非ず。特に會員諸氏の諒恕を請はんと欲する所也。

一、岩磐史料として刊行を要するは、固より本叢書三卷に輯錄せる所を以て盡きたりとせず。現に輯錄の目的を以つて筆寫を了し、其儘予の手元に殘りたるものゝみにても、十餘種あり。故に予は更に適當の方法を講じ、適當の時機に於て、此等殘りたるものゝ刊行を繼續し、以て完全なる岩磐史料叢書の編纂を結了せんと欲す。而も事業は、予の豫期以上に困難也き。窃に恐る。微弱なる予の獨力を以て、再び克く此困難なる事業の繼續に耐ゆるや否やを。是れ又予が切に會員諸氏の同情を請はんと欲する所也。

大正七年三月

幹事長　釘本衛雄

中卷下卷 書目解題 並著者略傳

相生集（中下二卷に輯錄）　大鐘義鳴輯

安達全郡及安積郡の大部分即ち舊二本松藩封内の地理沿革人物事蹟名區等を詳細に記述したるもの也。異本種々あり此版は主ら二本松第二尋常高等小學校所藏の寫本に依りたり。

大鐘義鳴通稱具後彌兵衛と改む清風、桂園主人、錦鋼堂等の號あり。江戸御臺所取締役、奥御用聞、御勝手方勘定奉行等に歷任し、其學和漢を兼ね、歌文を能くす、文久二年十一月卒す、而して相生集は天保十二年の著也。

信達一統志　志田正德撰

解題及び著者略傳上卷に在り。

福島城相傳　金澤椿山撰

福島城に關する沿革を記述したるもの也。

金澤椿山幼名孝平後ち父の名を襲ぎ彌五兵衛と改む。代々町年寄役を勤め、明治初年廢藩と共に職を解く。晩年書筆に親み、鳥羽繪を善くす、明治十五年沒す。年七十、十一代の祖丹波重貞初めて米澤より來り福島に住すと云ふ。

源忠公御常行記

著者不詳

板倉重矩公の言行、事蹟等を記錄したるもの也、公は一代の賢君として、其當時に名を馳せたるの人其一言一行は、取つて以て吾人の範とするに足るを見る。

東奥標葉記

藤橋隆重編

標葉氏が今の雙葉郡苅野村大字藤橋に居住し相馬氏に滅さゝるに至るまでの事蹟を記述したり。元祿十三年藤橋隆重の集錄する所也。隆重の傳不詳。

會津孝子傳

森雪翁著

舊會津領内に於ける孝子義僕節婦等の列傳記也。

森雪翁通稱與一郎、若松城下に居り、今古の書を讀み、聖賢の道を愛す。藤井懶齋編集する所の本朝

孝子傳を見て感ずる所あり、會津孝子傳を著す。其次第序文に明かなり。其他の經歷詳かならず。

磐城風土記　著者不詳

其書名の示すが如く舊岩城、岩前、菊多、楢葉四郡の風土記也。寛文年中内藤侯の處士蕦山爲篤の撰する所ならんかと言ふ。

奥陽仙道表鑑　著者不詳

會津、伊達、須賀川、白河等の戰亂實記にして、戰國時代に於ける奥陽歷史の好資料たり只著者及其著述の年號等詳ならざるを遺憾とす。

會津双櫻記　著者不詳

會津蒲生家の忠臣石部主稅兄妹敵討及烈婦錦太夫の事蹟を詳述せしものなり。

文化甲子年撰風土記　著者不詳

淺川騷動見聞錄　同

右二書は書名の示すが如きものにして、特に解題を要せざる可し。

奥陽仙道表鑑

奥陽仙道表鑑 卷之壹

關東兵亂之事

應仁に天下亂れて民間靜ならず遠國波濤悉く戰場となりしかば專ら武備を事とし遍く弓箭を業として虎賁英雄或は邊鄙の酋長より起りて飽まで超涯の皇澤に浴し或はいまだ君臣の道を知らずして忽ち豺狼の心あり、黨を樹て威を振ひ軍を屯して逆をなす、爾來王法正に衰へ佛法殊に滅す濫次の甚だしき事昔より未だ聞す徒黨一揆の形勢赤眉の咸陽に入に軼きす黃巾か河北に關するに越へたり、無辜の黎民とたんに墜つ其積惡を論するに誰か歎息せざらんや、爰に人皇九十五代後醍醐天皇の御宇に當りて武臣北條相摸守兼修理太夫平高時入道宗鑒關東將軍守邦親王を蔑にし奉り己の武威につのり積惡の餘り天誅を蒙り公家一統の政道に歸し奠、處に又新田義貞足利尊氏兩將の確執より事起りて國家大いに亂れ官軍利なふして武家天下に權を取りしより以來京鎌倉と申奉り諸國武士源平藤橘の名家まで悉く歸服し奠、中にも鎌倉は尊氏卿の三男從三位左兵衞督基氏下向ましまして東八ケ國を管領せられ基氏性潔寬仁大度にして士をなづけ民をあわれむ事深かりければ關東は申に及ばす越後佐渡出羽陸奥の方までも皆鎌倉の下知に背く事なし老臣上杉民部大輔憲顯入道道昌武威ます〳〵強して基氏を補佐し奉る基氏の父尊氏卿母儀は上杉の女なるか故に上杉家爰に至りて繁昌す其威當家の一門に越へたり基氏逝去の後は嫡子左兵衞督氏滿相續して關東を領せらる氏滿の息滿兼と號す父の跡を相續せらる滿兼の舍弟滿直は奥州の管領たりし是を篠川殿と申奉る滿兼の息持氏は永享十一年に京都將軍義敎のために滅亡す其嫡子義久も同時に生害まし〳〵次男春王三男安王は結城中務太輔氏朝同七郎光久父子具し奉り下野國結城の城に籠られ玉ふを山內の上杉安房守憲實武命を蒙り同名中務太輔持房御旗を給て下向し上杉兵庫頭清方扇谷の修理大夫持朝等大軍を率ひて結城の城を責るに氏朝父子力戰して是を防ぎいへ共終に永享十二年四月落城して結城一族悉く亡びぬ其時春王安王兄弟生捕られ玉ひ

て長尾因幡守御供申す美濃國まで登り玉ふやまた京都より御使ひ有て垂井道場金蓮寺に入らせ玉ひ御兄弟共に切服まし〳〵ければ是により關東主なふして國々大きに亂だれ大は小を打弱きは強きに隨られて家の輩も皆管領上杉の下知を背き皃、八家と云は鎌倉氏滿の時代京都將軍家は三管領四職を立て威を逞し玉ふ關東よりも是をまなんで管領氏滿を私に將軍と云鎌倉の公方と號す執事上杉を管領と云上杉家山の内扇ヶ谷の兩流相分かるにより兩上杉と號せりまた千葉宇都宮小田佐竹小山長沼結城那須是等の人々は八家と稱し關東高貴の歷々たりとそ東國のかく亂だれたるによりて出羽奥州の方までも次第に武命を輕んじて管領上杉の下知をも聞かず公方の威をも蔑にしけるにや已に奥州の探題たりし大崎二本松幷會津の蘆名出羽の最上以下の輩迄皆己の領地に引籠りて武備を逞くし驕に重過せり其頃鎌倉持氏の四男永壽丸は永享の亂れを逃れて信濃國へ落玉ひ大井甲斐守持光を賴まし〳〵成人の後名を成氏と改め又結城氏朝が三男政朝は常陸へ落行て時節を窺ひ成朝は忽成氏を取立まゐ從一つに成て關東へ出張あり共に父の仇を報すると稱し旗を擧られしかば東國また大いに亂れて合戰止事を得さりしに北條新九郎平長氏入道早雲と云者有て駿河國今川上總介氏親の助力を得て伊豆國に立越堀越の御所左兵衞督政知の長男菊丸を亡して相摸國へ攻入大森筑前守實賴の居城小田原を明應の頃乘取て居住し三浦介陸奥守義國入道道寸嫡子荒次郎彈正少弼義基か荒井の城を責落してより以來威勢近國に振ひしかば兩上杉相共に北條を防て關東の合戰日々夜々に相止ます終に早雲の子左京大夫氏綱其子相摸守氏康か時に至り兩上杉を亡して八州の軍勢皆北條に屬す只安房の里見常陸の佐竹だけ隨はすして殘れり其外の國々應仁より萬民安からさる事世に知る所也故に記すに及ばす陸奥を領する諸侯等或は北條と約し或は佐竹に組し越後の上杉と諸し京都將軍に應して只己か器量次第に家を興し名を揚んとする輩多き中にも會津の蘆名修理大夫平盛氏は一身の武功を以徒卒の諸將と相爭ひ終に人の下た手に附かず、是によりて探題二本松大崎等の諸將も次第〳〵に衰て仙道七郡の中には盛氏に肩をならぶるものなし其外相馬岩城田村二階堂白川の結城高野

の石川等悉く起り合て堺目の爭論榮枯日々に改り興亡月々に替れる有樣誠に戰國七雄の昔しもかくやと覺あさましかりし世の中也

奥州國司並探題之事

抑陸奥の國と申は遠く甸服を隔遙に東鄙の僻地として大事の藩鎭也聖武天皇二年に國府の外に亦鎭守府を置て國司が國府に有て國務を司り將軍は鎭守府に在て府務を行ふ信夫郡より南の租稅を以て國府の公廨に充て苅田郡より北の稻穀を以鎭守府の兵粮に充つ中古より以來府國竝べ置す陸奥守と鎭守府を兼て一人として國中を帶し四ヶ年以任限とせり尤重職たり聖武天皇天平寶字閏十二月從五位上國中朝臣多太麿を以陸奥守兼鎭守副將軍とす同九年鎭守將軍とすいまだ府の名なし時代遙に押移りて人皇五十四代仁明天皇承和十年九月に及初て陸奥國に鎭守府を置是府を置の初也と云々將軍は多太麿より始て大野東人大友駿河麿大納言紀古佐美記飯麿中納言大伴家持大伴乙麿大納言坂上田村麿文屋綿麿小野春藤原小黒麿藤原利仁其外六孫王源經基同滿仲同滿政同賴光同賴信平國香同良文同貞盛同繁盛藤原秀鄕同子時同子晴同子常父子源賴義同義家を始として鎭守府將軍に任す世々の名將當國に對せらるゝ者數をしらず康平に賴義安倍貞任の猛威をくじき同宗任を擒にし寬治に義家清原武衡か勇威を避同家衡の惡逆を鎭められしより奥州出羽の輩彼の父子の威勢に恐れて長く源氏の摠官となれり義家の下知として藤原清衡を奥六郡の主として指置玉ふ其子基衡其子秀衡まで三代は鎭守府將軍に補せられ元暦に鎌倉右兵衛佐賴朝天下を取玉ひて後は六十餘州悉く武家の掌握に落て諸國に守護を立庄園に地頭を置かれしより以來奥州の國司鎭守のさたとなりけるに人皇九十五代後醍醐天皇の御宇にあたりて武臣相摸守平高時入道天誅を蒙りて公家一統の政に歸し鳧時に先つ東奥を鎭めらるべしとて元弘三年十月村上天皇の御末北畠大納言親房卿の嫡男參議右近衛中將源顯家を陸奥守になしてつかはさる顯家時に十八歲代々和漢の稽古を業とし朝端に仕へ政務にましはる道をのみこそ學び待りし吏途の方にもならわす武勇の道にもたちさわらぬ事なれば度々いなみ申せしか共公家已に一統しぬ文武の

道二つなるべからす昔は皇子皇臨せしも執政大臣の子孫のみ多は軍の大將に指置れしか今より武を兼て藩屏たるべしと仰玉ひて　主上御自から旗の銘を書しめ玉ひ様々の兵器を添下たし玉はる任國に趣事も絶て久敷成りにしかは古例を尋て罷り申の儀有則顯家を御簾近く召れて勅語念頃に御衣御馬なと給ひき猶奥の固にもと申請て當今第八の宮義良親王を伴ひ奉りかけまくもかしこき南朝後村上帝御事也かくて勢揃し御震筆の銘旗をひるがへし宮の御供仕年經て住し花洛をは冬たる空と詠軍勢駒に鞭打て關の東にこころさす陸奥に着けれは結城上野介入道道忠を始として顯家の武威に恐れ我先にと弓を伏せ甲を抜て御味方にまいりければ誠に奥の方様兩月をかけて皆なひき隨ひ鳥建武三年にまた天下亂だれて足利武藏守尊氏新田播摩守義貞と威をあらそひければ王位も靜かならず正月十日官軍破れて朝敵已に近付く故主上比叡山東坂本に行幸あり日吉の社を皇居としておわします内裏も燒數代の重寶も失なわれ玉ひ昔しよりためしなき程の亂逆也此時尊氏が一族なりし足利尾張守高經か嫡男斯波三郎家長を陸奥守になして奥州の守護に任じ彼國の勢をさいそくせよ迚指下たさる然れ共先達て顯家か宮を具し奉り伊達郡靈山ヶ嶽に城郭を構て國中を領し給ひ八國人皆宮方に心をよせて家長によする者一人もなしかかりし程に顯家卿は都の亂を傳へ聞玉ひ親王を先立奉り陸奥出羽の軍兵を率して攻め登る足利陸奥守家長も漸々國人をかりもよふし顯家卿の跡を追ふてそ登られける顯家卿は二月十二日近江國愛知川の宿に到着せられて佐々木六角判官氏頼が其頃いまた十一歳にて千手丸と申て觀音寺の城を搆て籠りけるを新田が一族なる大館中務太輔幸氏を先陣として彼の城を責落し敵を討事五百餘人氏頼逃れて城を出て頓て早馬を以て事の由を坂本へ申されたりければ主上を始め奉り月卿雲客諸軍勢に至るまで悦ひを申さすと云事なし則道場坊の助註記祐覺に仰て湖上の船七百餘艘を點し志賀の濱の宮の御勢六萬餘騎を一日の中にそ渡されける夫より京都へ攻登て尊氏を落す其軍功萬人の上に立つ去る程に尊氏西國へ落下たり重て勢を催し攻上るにより奥州方心元なしとて義良親王顯家諸共に歸國せらる此時顯家鎮守府將軍に任し元の兩國に指添へて

常陸下野を賜りて則親王御元服まし〳〵直に三位に叙し玉ひ陸奥の大守に任し玉ふ此國の大守は是を始とそ承る顯家權中納言に成り玉ひぬ結城入道以下武功の者共御供して再び奥州へ下向まし〳〵是時に建武三年二月二十九日尊氏卿攝津國湊川の軍に討勝楠正成討たれしかば　主上猶山川に臨幸あり夫より京都を御出まし〳〵終に芳野へ行幸あり新田義貞は北國へ下たる同四年十二月（延元二年也）顯家再び大軍を催し鎌倉を攻尊氏の子義詮を追落す此時足利陸奥守家長は杉本の觀音堂にて顯家の勢に討負自害せらる顯家卿は宮を補佐し奉り鎌倉を立て上洛し玉ふ路次濃州青野ヶ原にて跡より追來る土岐頼遠桃井直常等と合戰あり大きに敵を討破る其後芳野殿へ參候ありければ主上叡感在て顯家を右大將に任せられ同五月泉州安部野に於て高野師直がために顯家討死あり年二十二歳天下の輩惜まぬ者はなかりし也主上甚だ御なけきありて從一位右大將をおくられ是顯家卿討れ玉ひければ其舍弟春日少將顯信を奥州の國司に補せられ從三位陸奥介鎮守府將軍に任じ延元三年九月また宮の御供して伊勢の國より御船に召し奥州へ下向有然る所に海上に於て風波の難に逢ひ宮は伊勢の湊へふき戻され玉ひて芳野へ御歸りまし〳〵顯信の乘たる船は常陸國に吹つけらる夫より當國關の城に入玉ひ岩城を經て奥州へ下たり玉ふ顯信奥州の國司と成りて暫く國中を領せらるといへ共官軍終に利を失ひ武家の鉾先強きにより出羽奥州まで皆足利家へ志を通しければ國司の勢ひひそろき一國官領の驗もなくて顯信の息新中納言信親は芳野へ歸り玉ひて後征西將軍の宮懐良親王の御供して西國へ下たり菊地肥後守武光か元におはせしが太宰少貳頼尚と合戰の時筑後の國にて討死せられしとそ聞へし尊氏卿は斯波家長鎌倉にて討れし後奥州固として一族の足利尾張守高野か弟大崎伊豫守家兼陸奥國に下向して宮方成し石堂何某を責亡し陸奥を治るといへ共不幸にして延文元年六月十三日四十三歳にて卒去し是依て尊氏卿より猶一族成し畠山上野介高國を奥州探題になして重て東國へ指下たさる高國初て陸奥國安達郡に住し宮方の殘黨を平らけ家號を二本松と改め入道して信元と號し威を東鄙に振ひけるがはからすも觀應二年二月十二日宮方と戰て討死しけれは京都より又吉良修

理大夫貞家を以て奥州一方の管領として指下たさる二本松高國の嫡子左馬頭國氏も管領職を賜り父の遺跡を相續して吉良貞家と相竝兩管領と號して國中の事を取行國氏か子修理大夫國詮其子左京大夫滿泰まて以上四代相續して奥州探題とす偖吉良貞家か子中務太輔滿家も一方の管領として二本松と兩雄たり吉良二本松大崎三家代々の探題職を司りしに應永の頃大崎家兼か孫左京大夫詮持一方の大將と成て應永七年九月八日宇都宮氏廣父子を討て其首を鎌倉へ献するにより其領地を詮持に賜る是より吉良二本松兩家は次第に衰へてあるかなきか如し大崎の家は日を追て繁昌せり吉良滿家か末は絶て二本松滿泰計國中にわたかまりて大崎とは肩おもならべたりしか其子修理大夫持泰其子治部少輔政泰より次第に衰微して後の修理大夫義國の時に至りては漸く安達郡半分安積郡半分を知行せられしかは隣堺の固めもおろそか也此節會津の芦名修理大夫盛氏武を仙道に振ひ名を遠國に耀して自然と隣郷を併呑せしかは二本松義國も終に彼か下風にそ屬せらる往年顯家卿奥州の國司と任せられしより以後吉良二本松大崎の輩探題管領に補せられたる事も異説まち〳〵にして何れを正としいつれを非とせんや其頃の舊記民間の語傳もなけれは委しく是を知る人なし吉良二本松大崎の家譜竝安達郡川東の石橋家傳譜に依り豫め考る所かくの如しと云云

芦名家由來之事

會津芦谷盛氏と申は桓武天皇の御末佐原十郎左衛門尉平義連の後胤也義連は桓武天皇より十八代の苗裔三浦大介義明か末子にて身のたけ七尺五寸力量有て武勇世に勝れたる大剛の者也頼朝卿に仕へて關東に伺候し源九郎義經一ノ谷の城責られし時は義連先陣して鵯越鐵拐か峯を落す其武勇あたかも鬼神の所爲也とて世皆感心せり頼朝卿奥州追討の時御供して戰功ありければ奥州會津郡を恩賞に給り初て會津の領主と成義連の嫡子佐原太郎景連とて鎌倉に伺候す是蛯川佐原眞野等の元祖也二男佐原次郎盛連と號す母は伊東氏也盛連後に從五位下遠江守に任ず子供數多あり嫡男三浦大炊介經連奥州猪苗代に住する故氏を猪苗代と號す二男廣盛奥州河沼郡北田に住す藤倉

三郎と號す四男光盛始て會津四郎と稱す從五位下遠江守に任じ會津大沼二郡を領す父盛連殊に愛子にて會津の家をば讓らんとぞ聞へし五男五郎盛時は奥州那摩郡加納の庄三ノ宮に住す光盛と盛時別て北條相模守時賴恩顧の者にて鎌倉に伺候す盛時を以從五位下三浦介に任じ其子孫代々三浦介を兼たり六男六郎時連と號す那摩郡持宮に住す盛連の六子皆鎌倉に伺候せられしに四男光盛の末繁昌して後に會津の正統となる其嫡子會津新左衛門尉經光二男佐原左衛門尉泰盛と號す泰盛の嫡子八郎政盛は氏を長井と號す從五位下甲斐守に任ぜらる二男盛宗遠江守と號す其子盛員芦名遠江守太夫判官と號す建武二年八月十七日中先代北條相摸次郎時行蜂起の時相州片瀬川にて其嫡子芦名治郎左衛門高盛と父子一所に討死す盛員を正傳莽月浦道圓と諡す盛員の二男芦名若狹守直盛と號す其子彈正少弼詮盛其子修理太夫政盛其子左衛門尉盛久子なきによつて弟盛信を養子として家督を讓る盛信を左近將監と號す寶德三年三月十八日卒す萬松山天寧寺に葬る寶岩寺殿元慶聖喜と諡す其子下總守盛詮其子修理太夫盛高常勝院と號す其子出羽判官成繼子なきによつて壹岐守盛舜に讓る盛舜芦名の嫡流を繼て遠江守と改め天文二十二年八月二十一日卒去す其嫡子從五位下修理太夫盛氏の時に至て武名ますます盛んにして仙道中を靡かしければ須賀川二階堂を始め仙道表の諸將皆旗下たに屬す盛氏相州の北條氏康氏政父子甲斐の武田晴信入道信玄と心を合數年常陸の佐竹岩城の人々越後の上杉と戰て隙なし誠に良將の氣質知謀の達人と世に流布したる會津の盛氏とは此人の事なりとぞ

須賀川二階堂家由來之事

奥州盤瀨郡須賀川の城主二階堂駿河守輝行の由來を委く尋るに大職冠内大臣鎌足公四代參議治部卿乙麿より出たり乙麿の息半屋右大臣藤原是忠卿七代の遠江權介爲憲と云人有伊豆國に住す是工藤狩野伊東河津宇佐美津見二階堂の元祖也爲憲よりまた八代の後白尾三郎行政と云ふ者有賴朝卿に仕へ政所の執事職に補せられ藤野民部丞と呼れしは是也後出雲山城權守に任ぜられ世人大山城と號す又字を生毘沙門と呼れ鎌倉に伺候の節は二階堂の側に居宅を作り住

するより時の人二階堂と云へり是より二階堂家繁昌して子孫大きにはびこり此行政より又八代を過きて式部大輔爲綱と云有爲綱實は近衞殿の末葉にて後醍醐天皇御愛童なりしか遠江國の住人二階堂何某の養子となり鎌倉に下たり關東將軍守邦親王に仕へ奉武家と成爲綱田舍の住居を物うく思ひ都をしとふのよし叡聞に達し其志し不便に思召て御製を下たされし其御歌に

東路の遠き隔もなかりけり馴にしかたへ通ふこゝろは

爲綱是を賜り當家の面目子孫の規模是に過すと朝恩の有難さ身に餘りてぞ見へに鳧正慶年中皇軍關東平太守の威猛を亡し給ひ公家一統の政事に皈し時に上洛して禁中に候す其後建武の大亂に宮方にて軍功あり爲綱か子孫等は關東に下つて武家方となり鎌倉に伺候す足利左兵衞督持氏の時奥州盤瀨の郡を二階堂三河守に恩賜有ければ則奥州に下着し須賀川の城を築て在住す爲綱曾孫遠江守爲氏十二歳の時嘉吉三年二月父の三河守におくれて幼少の間一族たりし二階堂治部少輔と云者を代官として須賀川の城に指置鳧に治部少輔驕奢に國の政我意に任せて振舞ければ爲氏か伯父民部少輔と云者を指下たして治部に異見を加へ領地を治めんとしけるを治部少輔是を方便北澤と云所に新城を拵へて民部を居へ置則治部少輔か妹千歳御前と云へる容色他にまれなる美女を以民部に嫁せしめ其心を取ければ民部も色に耽り欲に迷ふて治部と心を通し須賀川の仕置おろそかなり民部少輔鎌倉にては濱尾と云所に住居し人呼んで濱尾御殿と云り是によつて北澤をも濱尾と改號し鳧となん爲氏鎌倉に有て治部少輔等か私有事を聞大きに憤り治部追討のため持氏へ訴へて軍兵を催し文安元年三月七日鎌倉を打立同十三日奥州磐瀨へ下着して直に須賀川の城へ押寄る爲氏相從ふ者共には先一族の二階堂山城守を先として矢部伊豫守谷刑部少輔須田左衞門遠藤雅樂入道同對馬守土岐左衞門尉一色圖書介佐々木右近大夫須田大膳亮宗像越中守朝日伊勢守矢田野和泉守荒木清右衞門尉倭又半内完草與一郎白羽因幡守熊澤大學介相生玄蕃を始其勢四百餘騎持楯疊楯突しとみて手痛く攻るといへ共治部か方も精兵の勇士多く籠りて是を防により爲氏の軍利なふして引退く和田村に陣を取り猶近隣の加勢を得て治部を攻んと

せられしに治部か方にある鳧伊藤左近と云者潜に爲氏の方なる一色圖書介か元へ忍來り無事を調ひ治部娘十二歳になり鳧を爲氏に娶合て三年を經て後城を渡すべきよし堅く約して合體相調治部か娘を以爲氏の簾中とし其中無事になり鳧角て三ケ年を經れ共治部曾て城をわたさねば爲氏大きに怒て治部とまた事切有此上は迚須田左衞門異議を申て爲氏の内室を須賀川へ送り歸す然るを治部兵を出たして其送りの使者宗像越中守倭又半内完草與一郎を始悉討果して捨ければ和田勢共内室の乘られたる輿を昇すてゝ和田村さして逃れ行鳧矢部伊豫守須田左衞門遠藤入道等すかさす馳付て治部か討手の者雲霞のごとくきそひかゝれば須賀川勢打負て和田村妙見山の麓にかゝり漸須賀川へそ引取鳧かくて内室の輿をば岩田の南暮谷澤戻り橋と云所の邊に捨置をに簾中は前後をぼうして行べき方もなく泪にくれておわしけるか世の中既に限り有とて父の方へ筐とも取認泣々送り届られて終に輿の内にて自害をそせられ鳧其時二首の辭世を殘されけりとなん其歌に

思きや間はゝ岩間の戻り橋なかさて暇くれや澤とは

限りある心の月の雲はれて光りと共に入る西の空

是まで附添奉りし爲氏の侍に岩間の藤田左衞門と云者有簾中の御死骸かたの如く取納て己も腹切たり鳧比類少しとぞ見へし爲氏はいかにもして治部か惡行をしつめ須賀川を先規の如くに領せん迚廻文を以兵を語らわれ鳧に伊豆相模駿河信濃に有し一族並知音の大小名より加勢來て程なく千餘騎になりければ終に攻落されて治部少輔自害して失にけり治部か召鳧若丸と云十八歳になり鳧か治部か首を搔落して携へ下野國へ走りある山寺にて其首を灰となし其齒骨を取て高野山へ登り出家して治部少輔か菩提を弔ひ鳧となり誠にやさしき志なりとて聞人感心せぬはなかり鳧治部に一味せし多珂八郎梶原左衞門尉景光兒玉河内守と云三人の勇士等も散々に戰ひ一足も引すして討死しければ爲氏異儀なく須賀川を攻落して一城を再興し須賀川屋形とあふかれて磐瀬郡を一圓に領せられ鳧濱尾民部少輔は安達郡四本松へ引籠石橋家に助力を賴んで居鳧を二階堂山城守扱を以爲氏と民部少輔と和睦有則須賀川へ歸住す時に文安五年正月十一日とかや民部少輔須賀川の城に入つて爲氏に對

面せしに合體せし印迚盃を出され鳧時に裝束をぬきて取替着し給ひけりと也是よりして濱尾家に正月十一日の禮に素袍引と號して毎年かわらす佳禮と成り鳧とき磐瀬安積兩郡の境目白方の鄉明石田の面の廣野は磐瀬の搦手として會津二本松等の敵を拒の地なれば一城なくしては叶ましとて文安三年の春より新たに城を築かれ鳧に事成就しければ名を新田城と改め幸ひ濱尾民部少輔須賀川へ歸參せらるにより新田城へそ入置れ鳧其年八月の頃とか爲氏籠中の靈あらわれて夜々爲氏の寢所へ近く來り玉へ恨み怒れる有樣にて爲氏を苦しめ玉ひしが近習に召仕れ鳧十四五歳の童に取付て暮谷澤にて自害の事共殘らす口走りて申けるか彼の童爲氏に向て一首を詠じける其歌に

契りしに三年鳴海のうつせ貝身を捨る社恨みなりけり

按するに死後三年目現し來る文安三年八月の事なるべし

人々是を聞て偖は籠中の魂魄中あるに迷ひ玉ひ鳧にやとて秀快明觀といへる兩法師をして是を御神名姫宮といわる暮谷澤の東に塚を十三築て卒都婆を建月窓大禪師と云る名僧を招請し奉り籠中の御跡を念頃に弔ひ奉りければ其後は怨靈のさたなかり鳧とそ此月窓は禪門の一大事を得て長錄年中に則長錄寺を開基有て一派繁昌の法祖也時の天子も此僧の法德を感じおわしまして勅號を下され惠正禪師月窓明潭大和尚と號し世に字を小釋迦と云はれし名僧也越後國觀音寺を開ひて閑居し其所に於て遷化有しとそ聞へし偖又濱尾民部少輔死去せられて其嫡子尾張守二男修理大夫と家督爭論の事有て尾張守屋形を深く恨み妻子を引具し俄に新田の城を開きて田村左京大夫利顯を賴照村の庄へ退かれければ屋形も力なく堺目の城に主なくしては如何也迚尾張守か弟修理大夫入置る尾張守は田村の助勢を得て小倉小屋の要害へ取掛佐久間何某か城を一夜の內に攻落しければ佐久間兵大半討れて小山田沼の平をさして敗北せり尾張守勝に乘りて追討し首五十餘討取りて田村へ引き返す爲氏是をきゝて時日を移さす遠藤雅樂入道一笠を大將として勢を付け小倉の城へ入れ置きければ其の後田村勢も尾張守が勢も攻め來らず程經て磐瀬の人々扱を入れければ尾張守心解けて歸陣す頓て屋形より岩淵松塚大桑原稻村新田の內五ヶ村を賜りて稻村の舘を普請し尾州の居城たるべしと宣ひ當分は此の城へ移

らける其の頃田村二本松伊達など方々の諸將蜂起して國亂れ家さはぎ世の中靜かならずされば稻村の城普請なすべき隙なく一日〳〵と打過ぎけるに尾張守重病を受けて終に死去す爲氏是を憐み其の嫡子左近將監を始めて兄弟五人相違なく父の所帶をぞ與へられける爲氏卒去有て其の息中務權大輔政行は京都に登り其の頃の將軍義政公に仕へて詩をたまはり文武の達人和歌の道に無双たりしとぞ然るに應仁の亂出で來り管領細川右京大夫勝元山名右衞門佐持豐入道宗全と威を爭ひ洛中東西に陣を張り合戰に及びければ將軍義政同く義親御兄弟東西の陣へ出御有りて制せらるゝと云へどもしつまらず是より諸侯大夫國を爭ひの本となりしかば政行は文明年中に京を去りて須賀川へ下向せり政行の子息遠江守時行と號し其の子駿河守輝行是れ迄爲氏より四代嫡流相傳して須賀川の城を領せらる其の頃出羽の長井の領主伊達左京大夫植宗と二階堂家數年其の中惡しかりけるに植宗白河の結城上總介と一戰の時二階堂輝行と和睦有り植宗の妹を以て輝行の簾中に定め双者となりて深く骨肉の中とはなられける。

奥陽仙道表鑑　卷之壹　終

奥陽仙道表鑑 巻之貳

今泉合戰並松山合戰之事

奥州田村の庄三春城主田村左京大夫利顯は征夷將軍坂上田村麿の後胤として累葉連綿とし來り英雄豪傑の聞へ近國に隱れなし利顯岩城中村棚倉安積郡の端を多く攻め取りて其の武威漸く仙道表に震ふ利顯死去の後嫡子從五位下大膳大夫義顯父か遺跡をつぎて田村の庄を領せらる此時永錄二年二月二十五日の事なりしに義顯我が身三春に有りながら嫡子安藝守隆顯に一千餘騎をさし添へて須賀川を攻めらる隆顯軍兵を二手に分けて舍弟彈正少弼顯氏に五百餘騎を指し添へて安積郡富岡へ指し向け須賀川の郎徒守谷出羽守今泉九郎左衞門矢部周防守同伊勢守須田備前守濱尾豐前守同駿河次郎明石田左馬介越久豐前守等と渡り合ひて相戰ふ須賀川勢大軍にて方々の城より打出で道路をさへぎりつまり〳〵にて横矢を入れ下り重りて攻めければ顯氏の軍兵多く討れ終に戰ひ負けて川より東へ引き退く須賀川方勝になりて今泉の城を表として兵粮多く籠め置き兵を揃へて加勢し是を守り田村勢を支へんとす隆顯是をきゝて顯氏と牒し合せ八百餘騎を三手になし今泉へ取り掛り息をもつかず散々に攻めたりける此の城本丸にては矢部周防守二の丸は婆川左衞門佐籠り居て近邊七鄉の侍三十餘騎を相從へ堅固に籠城して命をかへりみず力を盡して防ぎ戰ひければ寄手も左右なく攻め落すべしとも見へざりげる隆顯今泉を攻る由須賀川屋形二階堂輝行きゝ及び矢部婆川等助の兵なく嘸軍に隙有るまじ急ぎ後詰して田村か者供踏み散らし捨んとて其の勢五百餘騎にて濱尾內藏介に先陣させ玉の木と云所まで出張せられ扨田村勢是を見て願ふ所の幸ひやと悅び今泉の城をは顯氏の手勢にて押置隆顯三百餘騎を二手になして一手は態と足輕計に騎馬少々相交へて弱々と相しつらい敵を廣野へおびき出して隆顯の旗本二百餘騎不意に山合の茂りかけより起て是非なく切て掛れば輝行一戰に討負軍兵なたれたつて立足もなくまき立られ大久保さして引退く隆顯の軍勢勝に乘て逃るを追かけ透間なく付入にして大久保の

林に火を掛近邊を放火して攻たりければ輝行猶大久保にもたまらず矢田野を志して夜中に引取漸く須賀川の城に歸り鬼安藝守隆顯一戰に討勝首共切掛させて勝閧を取行ひ直に今泉の城を取巻き玉ふ爰に彌三といへる大いたづら者有元來田村の者成しが勝れたるあふれ者にて田村より追出たされ此五六年か間今泉に居住して有鬼か彌三先非を悔何卒田村に歸住し度望有て御忠節申べく間歸國を賴奉ると顯氏へ達て訴訟しければさあらは汝案內せよ今泉の城をたに攻取らば汝歸住の事仔細有ましとの約諾也彌三大いに悅び申しけるは此の近邊の者供一人も殘らず田村の大手の勢を追立て戰ひ候故城中無勢に候早々押し寄せられ候得て今泉の城を取り玉ひとて則ち案內し顯氏の勢を引き入れしかば今泉籠城の者供片時もこらいず私財雜具を持ち運び谷澤畑田舘岡を志して逃げ散りければ矢部が兵悉く敗北して其の夜に長沼へ退散す顯氏今泉の城を攻め落して悅び勇み彌三に數々の褒美を與へて田村へ歸住をぞ許されける其の後顯氏千餘騎にて今泉の城に入り替り此の城の鎭衞として隣國を押へられける後世に今泉の城主田村月齋と呼ばはれ給ひしば此の顯氏の事なり二階堂輝行は今泉の城を敵に取られて矢部周防守居城なくては須賀川につぼみ居りけるを不便にや思はれけん濱尾の城をぞ預かられける周防死去の後は嫡子伊勢守相續して濱尾の城を守りける田村彈正少弼顯氏は今泉の城を攻め取られて後は須賀川の武威恐るゝに足らずと欺むいて永祿五年八月二十四日自ら千餘騎を卒して南橫田松山の城へ出張して楯籠り給ふ此の城四方平地につづきたる所もなく山城にて殊に橫田治部少輔が須賀川方として籠られたる南橫田の方は松山の城猶更高き岩石にして橫田の城を目の下に見下す所と云へども鐵砲を打ち矢を射るには其の間遠くして城中へは屆かず盤瀨の人數も松山を日がけて度々攻むれども大剛の顯氏なれば少しもひるまず依て盤瀨勢松山の四方を取り巻きて兵糧多く橫田の城へ籠め置き長陣にして控へたり田村顯氏かくてはかゝる事有るまじとて究竟の千餘人松山に籠め置きて其の外の勢を以田村へ返し其の身は今泉に籠られける松山に籠りたる者供顯氏の下知をも待たずして或夜風雨のまぎれに盤瀨の陣に夜討ぞしたりけるくらさ

は闇し寄手大いに騒動して既に危うかりけるに横田治部少輔明石田左馬介越久備前守須田備前守が兵供々にかしこより大勢助け來りて戰ひければ夜討に出でたる松山勢終に討負けてぞ引きたりける其の後盤瀬の輩相謀りて道々に伏兵を置き松山へ運ぶ兵糧の人夫供討ち取りければ城中糧乏しくして難儀に及ぶ此の由今泉へきこへしかば彈正少弼顯氏四五百騎にて打出で松山へ後詰めせらる盤瀬是を見て則ちかけ向つて合戰す爰に須田備前守輝村が嫡子源次郎奥年生年十八歳になりけるが黒糸の鎧を着し白星の甲を確としめ鹿毛馬に乘りて先登に進み近付て敵の弓手の小腕内甲あたる幸に切つて廻る田村勢是を見てあますなもらすな討ち取れとて切先ならべ討てかかる源次郎事ともせず追ひ立て〳〵白刃に光りをとばし鎺本に血をしたへて馬に息をもくれず切つて廻りけるが雨霰の如く放つ鐵砲に鉢付の板より後へかけて討ぬかれ馬より眞逆様に落る顯氏が兵供すかさず首を取らんと大勢爭ひ進みけるが盤瀬方には源次郎が首を取らすな者供とて我も我もと掛け合ふ鎗を入れ突き立てもみ立て散々に戰ひける田村勢終に突き立てられてしどろになれば顯氏もいや〳〵此軍には限るまじ軍勢多く討れては何かせんとて軍扇を取りて乘をまとめ輕々と引き取りて松山の陣をばほぐされける其の日磐瀬方を討ち取る首數五十三横田の城の南に切り掛けさせ勝閧をこそ取り行ひける

田村義顯卒去之事

田村大膳大夫從五位下坂上姓義顯は無双の武勇に依て隣國近村を押領せられ我が身は三春の城に上へを見ぬ驚の榮華を極め武威は日につのりけるがいつの頃よりか心地例ならず大病に犯され給ひ醫術しるしもなく永祿八年八月二十六日卒去せらる則ち法名梁山棟公とぞ申しける嫡子從五位下兼左衞門佐隆顯相續有りて田村の庄を領せらる年々隣鄉の諸侍と拒み爭ひて合戰に隙なく戰國の間に苦みて武略智謀の大將とは呼はれけり田村は小地の所なれば大家の武威には及ばず會津芦名修理大夫盛氏へ一味して多年彼れの下知に付き盛氏白川棚倉へ働かれし時も度々馬を出して是に從へ給ひける

結城家由來竝淺川合戰之事

其の時當國白河郡小峯の城主結城七郎義親と申すは大職冠の御末安部左大臣魚名公より五代の孫鎮守府將軍從四位下武藏守俵藤太秀鄕の裔胤なり秀鄕の息男鎮守府將軍下野守千常より八代の孫小山下野の大掾政光が末子小山七郎朝光を始めて結城と號す後に從五位下上野守に任ず法名日阿と稱す賴朝公に仕へて軍功莫大なれば殊更に厚恩を蒙り賴朝公奥州伊達泰衡追伐の時結城七郎朝光大木戸の城搦手より土湯の嶽鳥取越をして敵城の後ろの山へ打登りて攻め入り大木戸の城破れたり是又泰衡が郎等金剛別當秀綱を朝光討ち取つて名を萬代に揚げたり大木戸の城破れたる事專ら朝光が戰功たりとて賴朝卿大いに御感有り奥州白河郡を恩補せられ是に依つて下野國結城を添へて白河郡を領す朝光建長六年二月二十四日酉の刻八十七歲にて卒去す其の嫡子賴廣をも結城七郎と號す後に正五位下大藏少輔に任ず康元元年十一月廿三日鎌倉の北條相模守平時賴出家せられし時賴廣も同時に白河に於て出家す法名信弘と號す其子上野介廣綱は下野國結城に住して結城の嫡流の元祖なり二男彌左衞門尉祐廣は奥州白河郡に住す是を奥の白河結城と號す祐廣が子結城上野介宗廣入道道忠は元弘建武の亂に宮方として奥州國司北畠源中納言顯家卿に屬して軍功有り顯家卿泉州安部野に於て討死有り後に道忠南朝に候す顯家卿の弟顯信其の代りとして奥州國司に任ぜられ鎮守府將軍を兼ねて南朝の宮義良親王を供奉し伊勢より御船に召し海上を御下向有らんとせられて結城入道道忠を以て案內者とせられしが風波によりて船進む事叶はず時に道忠伊勢國にてふしきの亡瑞有て死去す道忠が嫡子大藏少輔親朝相續して白河を領す南朝に候して修理大夫に任す又三河守に任す此の親朝より十有餘代を過て結城七郎義親と號し代々勇士にして其名天下に隱れなき名家なれば會津の修理大夫盛氏の一女をして義親に嫁せしめ交りを結び玉ふ義親累年高野郡石川大和守昭光幷下野國那須の輩と對境を爭ひ合戰止事なし石川か一族淺川治郎左衞門尉と云者は武勇の名有者にて度々白川勢に手強くあたりければ義親是をしたかへんと多年軍兵を起し攻るといへ共城堅固にして落城せす淺川は常陸國佐竹義昭旗下に屬して有ければ佐竹この由を聞き我旗下の城をたやすく攻ふせては

無念の事なり迚既に常陸を發足して下野へ廻り白川へ亂入せんとす義親は班目信濃守に先陣させて其勢貳千餘騎淺川の城へ押寄て火水になれと攻めたりければ淺川治郎左衞門尉身命を捨て防戰ふ信濃守自ら楯を引そめて息をもつかすな者共と下知して眞先に掛入けれは白川勢大和田左近白石式部等我劣らしと討るゝ者を乘越へ〳〵もみにもんて攻鬼程に淺川の城三の丸卽時に乘り破て白川勢我も我もと込入事夥しとも云計なし淺川治郎左衞門尉は雜兵千計になりて本丸一つを賴楯籠り箭種をおしまず鐵砲の玉藥を盡して散々に射立打立汗水になりて防けれはさしもいさめる白川勢も精氣つかれて少し猶豫して見へた所を治郎左衞門尉緋威の鎧に高角打たる甲の緒をしめ金作の太刀を帶し源太栗毛といふたけ逞しく無双の馬に黑鞍置て打乘り舞鶴の紋書たる白地の大旗を眞先に進んて其勢八百餘人にて同音に時の聲を發して透間もなくとつと突て出けれはよせ手一度にまきおとされて討たるゝ者數しらず中にも大和田左近濱尾十郎白石式部志田玄蕃なといふ一騎當千の兵共三十六騎三の丸を枕として一所にそ討れに堯白川勢終に打崩されて敗北す次郎左衞門尉一戰に利を得て敵を追返し一城堅固たりといへ共始終はこらへかたく見へしかは飛脚を以て佐竹へ急を告たりけれは佐竹右京大夫義昭是を聞て彌白川へ發向有べし迚嫡男常陸介茂重を大將軍として茂武左馬之介同和泉守河合甲斐守等を始其の勢三千餘騎下野より廻りて那須勢を先立白川へ發向有べしと也此由白川にても聞及んで那須境關和久の城を堅固に持かため候を置て中島上野介石根薩摩守船尾彈正を先として其勢一千餘騎備をかためて陣を取る會津に佐竹白川へ發向のよし風聞しけれは若輩なる義親を攻伏させては緣者の甲斐なく後聞如何成とて芦名修理大夫盛氏自ら馬を出し後攻として白川へ出陣す盛氏の先手平田左京亮同周防守同尾張守富田美作守松平伊豆守佐瀨大和守中野目式部太輔沼澤出雲守澤井備前守新國上總介同下總守猪苗代彈正盛國嫡子盛弼猶野浦甲斐守三橋越中守三野坪大藏少輔等各先登を爭ひ白坂まで出張し對陣す佐竹の先手も出向ふて少々こせり合有といへ共いまた花々鉋合戰はなかりけりかゝる所に關東相州小田原城主北條左京大夫平氏政同陸奥守氏照兄

弟兼て盛氏と同意や有けん佐竹奥州出陣の隙を伺ひ三萬餘の大軍を率し下總國へ發向し關宿の城を揉落し直に遠州へ攻入るべき支度にて關東勢雲霞のごとく攻來るよし梁田中務太輔か元より早打ちを以佐竹の陣へ急を告る事三度に及べは義重大きに驚き大敵を拒み留すは自國の難儀也とて白川表をは打捨那須芦野太田原佐久山等の城々に兵粮を籠置軍令固く申付義重佐竹へ引返さる芦名家も他國迄攻入べき支度にもあらされは會津へ引返され鬼か序に郡山福原へ働き二本松義國か郎等共の田村須賀川へ敵對したるを攻伏て踏しつめまた高野郡へ打ち廻りて石川昭元か端城共に向て一戰し敵少々討取て盛氏は會津へ歸陣せられ鬼

佐竹氏由來之事

佐竹義昭義重父子は上總國生實の御所源義明同基頼兄弟幷安房の里見義弘と諾し相州小田原氏政と相戰ひ國を論じ合戰隙なく奥州調儀の支度暫く延引有しとそ聞ゆ抑此の佐竹氏の由來を豫尋るに清和天皇の御末鎭守府將軍義家の舍弟新羅三郎義光より出たり義光の嫡男進士相模守義業と云義業の第三の子相模三郎昌義と云人有後に從五位下信濃守に任す母は常陸國住人清幹と人の女也扨氏の緣にて常陸國久慈郡佐竹鄉を領（今の天神林道也）其子太郎忠義後從五位下常陸介に任す子なきにより弟四郎隆義子供數多有中より嫡子太郎義政は治承四年十一月四日常州國府大矢橋に於て頼朝卿の爲に誅せらる二男別當秀義祖父常陸介忠義と相共に金砂の城に籠り戰ひ鬼叔父の藏人義弘返り忠によりて落城し忠義討れ畢秀義は奥州花園の城へ逃行後赦免ありて鎌倉へ歸伏す文治五年七月頼朝卿奥州發向の時御供に候せしに白旗を指て參陣しけれは頼朝卿我旗と同き事然るべからす迚日の丸の紋書きたる扇を下たし賜り是を旗の上にさすべしと仰せられてより秀義家の紋として佐竹一黨是より日の丸をゑかきたる五本骨の扇を付ける事始めとなりぬ奥州追伐の後頼朝は秀義が武功を稱せられ美濃國山田の鄉を下し賜はる其の子別當重義從五位下常陸介に任ず母は美濃の源氏山縣先生が女なり承久の亂に關東方として武功有り其の子長義其の子義胤其の子別當左衞門尉從五位下行義嘉元三年の冬卒して嫡

子別當貞義家督す後ち常陸介遠江守上總守等を兼ね
て從五位下に叙す母は二階堂下總守賴綱が女なり貞
義足利高氏卿に屬して軍功有り入道して佐竹上總入
道道彌と號し文和元年九月卒す其の子佐兵衛尉義敦
と云ふ母は海上胤泰が女なり義敦後に從五位下刑部
大輔右馬權頭義信後左馬介伊豫守に任ず康應元年七
月十四日卒去す其の子義厚寬正三年二月卒す義厚に
女子一人ありて男子なく上杉安房守憲定か二男を聟
養子として佐竹右京大夫義仁と號し從五位下に敍す
應仁元年十二月二十四日戰死す其の子五郎義俊從五
位下伊豫守と號す文明元年霜月二十四日卒す其の子
左衛門佐義治入道一峯齋と號す延德二年四月二十五
日卒去す其の子右京大夫義舜永正十四年三月卒去す
其の子右馬權頭從五位下義篤後ち大膳大夫と云ふ法
名月光と號す天文十四年四月卒す其の子右京大夫從
五位下義昭と號し新羅三郎義光より義昭に至りて凡
そ二十一代に及べり常陸源氏の隨一として國中は申
すに及ばず隣鄕遠村までも武威を振ひ家名を知られ
ずと云ふ事なし義昭は永錄八年霜月三日に病死有り
て其の子義重相續有り從五位下常陸介に任ず此の人
武名大に顯はれ相州小田原の北條家と相爭ひ下野奥
州下總の國々へ手をかけ關東六大將の內に撰まれ勇
略兼備の程世に隱れなしとぞ聞へし

小平城軍之事

田村左衛門佐隆顯嫡子玄蕃允清顯父子は盛氏へ一
味して其の勢二千餘騎にて出馬せられしが佐竹白河
兩家退散に隆顯父子とも三春へ歸陣せらる角て文錄
二年の事かとよ田村庄小平村の城主小平大膳亮朝鎭
逆心して籠城しければ隆顯父子是をきき我れ足元よ
り出でたる謀叛人をば世上への見こらしに葉を枯し
根を斷へとて父子馬を出だされ小平の城を十重廿重
に取り卷きて持聲楯突きしとみ〳〵荒手を入れ替へ
入れ替へ息をもつかせず攻めたりける小平方にも小
平八郎兵衛同作衛門小平但馬中川美作同與一新額田
一學等を始め大勢木口に下り合せて鐵砲玉藥を盡し
て防ぎ戰ひ左右なく攻め入るべき樣もなし清顯の先
陣鬼生田彈正前館主水大剛の兵なれば向ふたる所を
一足も退かず彈正か黑絲威の鎧に星白の甲なるに二
尺斗りに見へたる鍬形の元一寸斗り置きて切り折ら

れ甲の星も少々けつられたるが三尺五寸の長刀を馬の平首に持たせ近付く者を切つて落す主水は白糸の鎧血となり手負ながら大斧と太刀左右に持ちながら彈正と二人肩を合せたるを幸ひになぎ伏するに敢て近付く者もなし常葉伊賀守清重橋本刑部少輔貞綱田村宮内大輔顯貞舍弟秋田民部少輔顯輝田村石見守顯朝大越紀伊守信貫田村右馬頭清忠田村右衞門大夫隆信富田右近隆家等を始めとして田村の親族大剛の覺へ有る者供人數引き連れて助け來り荒手を入れ替へもみ立てければ小平大膳が兵供今朝辰の刻より申の刻迄の戰に大半討れて今は結城の城に引き籠り戰ふべくとも見へざりければ大膳中村美作を田村顯貞の元へ遣して命計りは御助け候へ城を開いて退散仕るべきにて候と申し降を乞ひければ其の儀ならば城を開き退くべしとて虎口をくつろけらるれば大膳亮則ち下城し石川大和守昭光を頼みて高野郡へぞ退きける隆顯清顯父子は小平の城をもみ落して小平八郎兵衞を始め宗徒の侍二十餘人雜兵彼れ是れ三百餘の首供切り掛させ勝閧をこそ上げられける頓て小平の城へは富田右近を入れ置れ父子共に三春へ歸城せられける

石川由緒之事

石川大和守昭光は小平大膳亮朝鎭が田村隆顯父子に敵對して小平の城を攻め落され棚倉へ退きけるを己が方へ引き取つて落着せしめ田村と事切れし合戰に及びぬ此の昭光と申すは常州佐竹義重の妹聟なれば義重父子是が後ろ楯となりて田村は申すに及ばず白河須賀川會津二本松迄も手に入れんとぞ企みける石川が先祖は清和天皇の御末にて多田滿仲の二男大和守賴親の後胤なり賴親の三男大和守三郎賴遠是を福原三郎と號す奥州石川郡を知行せらるにより始て石川殿と稱す其の子有光是を石川源太と號す奥州に住せり子供數多有り嫡子太郎光祐二男澤井次郎光平三男石川三郎元光四男石川四郎光家皆奥州に住す足利將軍高氏卿の御時石川の庄の領主石川大和守時光舍弟掃部介高光相爭ふて兄時光は芳野の宮方に屬し奥州の新國司北畠顯信卿に從ひ弟高光は高氏卿に屬し無二の武家方となりて其の頃奥州探題畠山右馬權頭國氏吉良右京大夫貞家等に從ひて軍功有りければ

石川掃部介が武家方になりし時に奥州守護吉良貞家より鎌倉管領基氏の執事南遠江守宗繼の元へ遣しける古き文に

石川板橋掃部介高光と申所領陸奥國石川の庄の内千石板橋八幡宮神領下川邊村に於て澤尻等之事

右彼所領は高光重代相傳の處舍弟千石大和權守時光宮方の時押領せしめ畢て時光降參の後畠山右馬權頭管領の時口論に及ぶと雖も高光裁許せられ當地行と云云爰に時光顯信卿に同意せしめ當時兒徒の隨一なり高光に於ては最初より御方のため去年度々軍功致し今に至て戰功を抽ず上者當所寺本領當地行相違なく安堵の御下し文預るべきの旨之れを申し急速御沙汰を經られ候や高光軍忠若し僞り候はば八幡大菩薩御罰蒙るべく候此の旨を以て御披露有之べく候恐惶謹言

観應三年四月十三日　　貞家判

進上

遠江守殿

石川の一族久しく奥州に住して世系或ひは兄より弟に譲り甥より叔父の家を繼ぎて十有餘代押移り石川大和守昭光に至りて常州佐竹右京大夫義昭の聟となりて佐竹の人々と組し近郷を攻んとて企みけるとなん

奥陽仙道表鑑 卷之參

佐竹蘆名南鄉合戰幷田村隆顯卒去之事

天正二年の秋佐竹常陸介義重石川大和守昭光牒し合せて四千餘騎を率して仙道表を掌握にせんとす義重先づ棚倉へ出馬せられ南鄉寺山羽黑の城に人數をこめ置き近々仙道へ出馬して白河須賀川田村等の城々を攻め落し其の威に乘じて會津を手に入るべしと其の支度夏中より會津へきこへしかば人に先を越されんよりは逆寄にして戰はんとて芦名修理大夫盛氏嫡子判官盛興白河大藏少輔義親田村安藝守隆顯嫡子右京大夫清顯一味して都合其の勢一萬三千餘騎高野郡へ發行せらる二階堂遠江守盛義も濱田筑後守須田美濃守に千餘騎を指し添へて加勢有り佐竹勢會津の旗先を見ると等しく攻めかかる武州岩槻の城主太田美濃守資正入道三樂齋道擧其の頃佐竹に屬して常州水戸に有りけるが六百餘騎を引率し一陣に進めば佐竹中務少輔義久を始めとして緒貫大藏少輔河合甲斐守大繩式部少輔茂竹左馬介同但馬守平井薩摩守二千餘騎にて道擧が跡に押續き會津勢に討て掛る芦名方には佐瀨源兵衞尉本名右衞門佐澁澤出雲守鵜浦甲斐守中目式部大輔等先途に進んで雌雄を爰に決せんと爭ひ拒み戰ひければ互に勝負は見へざりけるに芦名盛興と田村隆顯同清顯父子馬廻りの勢計りにて山寺の敵を押へて居られしが雜兵少々出で敵領の作毛をなぎ捨て引き取らんとせし所へ佐竹方石川千石板橋澤尻と河邊等の一族二手になりて其の勢二千計りひた〳〵と付きしだひ〳〵にとめければ盛興と隆顯と一同に引き返して相戰ふ隆顯兵を下知して旗本供に崩してかけ合ひ自ら敵に相當り七顚八倒して戰ひけるに石川方突き崩されて羽黑の城主石川近江守と云ふ者討れける其の外究竟の首五十二雜兵五百餘人討れければ石川千石等悉く敗北して退く盛興則ち生捕十一人有りけるに驗五十二級相添へ田村父子働の次第父の元へ仔細云ひ遣りければ盛氏喜悅斜ならず隆顯の元へ佐瀨大和守を使者として今日の御手柄感心尠からず候と禮儀を正くして謝せられけるかかる所

に隆顯以ての外病難を發して陣中にたまらず二三日が間中田と云ふ所に引き退きて養生せられけれども氣分勝れざりければ盛氏へ使者を以て此の旨を申され田村へ歸城せられける隆顯は三春の城へ歸りて病氣醫術を盡さるゝと雖へどもかなはずして天正二年九月六日卒去せられぬ諡して前藝州大守長岳泰公と號す子息右京大夫清顯相續して田村を領せらる田村彈正少弼顯氏は父子離れしより世の中萬に付面白しとも思はれざりしにまた兄隆顯卒去せられければ彌世をあじきなくやおもわれけん忽法體して法名月齋有繁とぞ號し扇此人子供數多有ければ其嫡男は幼少より出家の望有りて出羽國秋田宗輪寺より行法を勤て終に釋門の徒となられしかば二男宮內少輔顯貞惣領を繼ぎ玉ひぬ岩城境の城上宇津志村と云所に一城を預り玉ふ三男民部少輔賴輝は新田村の城主となり稱號を新田とぞ申扇四男石見守顯朝五男右馬介顯純是は淺川村の城代に置れし故人皆淺川右馬助とぞ申扇六男右京亮顯義安久津と號す七男善九郎顯繼木の目と號す八男顯直は大槻內藏頭と號し何れも月齋の子息達也清顯を補佐して無二の一族たり偖又田村顯盛と云者は是も清顯の一門也剃髮して櫻雪齋と號し其嫡子右馬頭清忠は跡を繼で小野瀨町の城主となり又田村右衞門大夫顯信と云ふ者は櫻雪齋の弟の孫右門尉顯忠が子なり是れも小野鄕に一城を預れり其の外常葉清重橋本貞綱大越信貫以下の一族各志を一にして清顯を補佐す清顯武勇の逞しき事恐らくは越後の上杉謙信にも劣らぬ程の猛將なれば一生戰場勇敢を施されずと云ふ事なし先づ田村家相續の手合にとて鬼生田彈正前館主水を先陣にて芦澤の城を攻めらるゝに芦澤治部少輔三影尙其の頃石川大和守昭光と密に諸して田村を僞き居たりけるが手痛く攻め付けられて叶はずとや思ひけん甥の修理亮吉尙とて十四歲になりける童を人質に出して降參せり續いて富澤の城を攻めらるるに富澤伊賀守隆冬是又一戰に利を失ひ甲を脫き弓を伏せて從ひける此の勢に乘りて熊耳掃部助三本木十郎新館肥前守等皆田村の旗下に屬す清顯益々威勢强大になりて東安達四本松の內へも度々發行有りければ四本松の城主石川が家老石川彈正忠寺坂山城守等も彼の武威に恐れ忍び〳〵に田村へ內通して御味方に參るべき由內々其の約諾をぞし

られけるとぞ聞へしなり

蘆名盛興卒去并盛隆會津相續之事

天正三年六月五日會津よりは芦名四郎判官平盛興二十九歳にて病死有りければ父盛氏甚だ歎き給ひ其の上嗣子なき事を憂て須賀川の二階堂遠江守盛義の嫡子七郎を養子として芦名七郎盛隆と名乘らせ芦名十七代の家督と定めらる金上兵庫守盛備を始め富田松本佐平郎四人の家老共事を司りて國の政治をぞ取り行ひける

石橋家由來之事

其の頃東安達郡四本松の城主石橋治部大輔源義久と云ふ者有り裔祖を委く尋ぬるに八幡太郎義家七代足利尾張守家氏が四代の孫石橋左衛門佐從四位下兼三河守和義が末葉なり和義元弘の始め足利高氏卿に屬して軍功有り建武三年二月尊氏卿西國下向として備前國兒ヶ島に着き給ひける時に京より討手下らば三石邊にて防げとて備前に殘されし軍勢の中にも石橋左衛門佐は殊に大將の命を承けて家の子郎等並田井飽浦内藤松田の一族共を從へ忠を存じ義を重んじ武備の賞翫他に異りしかば家の繁榮爰に至りていちるし和義の子宮内少輔棟義は武官の氣質歌道の達人なり父の遺跡を繼ぐの後陸奥守に任ぜられ新後撰遺の作者敷島の道類ひなかりしとなり或時の歌に

戀しなぬ身の爲めつらき命とも
さて生きのぶるわらひにぞ知る

帝是を御感有りて其時代の集にも入れられしとかや棟義の子息左近將監滿廣は鹿苑院義滿公に奉仕して御諱字を下さる其の子從五位下右衛門佐祐義より義久迄七代なり人皇百四代後土御門院の御宇文明の頃祐義の曾孫石橋左近將監義衡奥州安達郡四本松の内上太田村住吉村を城郭として近郷遠村に威を振ひ一郡豪英たり義衡武勇に長じ仁義に通じたる人なれば士を撫で民を育つる事古きを引きて將帥の機有川東の者供從ひ靡かずと云ふ事なし義衡子右衛門大夫義仲其の子宮内大輔義次法名靜阿と號す天文年中死去せられて嫡子治部大輔義久相續有りと云へども愚昧にして民を愛せず驕奢にして文武を顧ず日夜遊宴を事として一家滅亡の事をも曾て知らず是に依て一族

郎臣の内實なるは退き姦なるは進み追從輕薄を以て世を渡りしかば武威日々に衰へ天命の程既に顯れたり此の弊に乘りて川東を切て取らんと虎狼の志を含む輩三春の田村清顯を始めとして岩城石川須賀川會津白川二本松相馬大崎米澤の人々附鳳の勢を貪りて攀龍の望みを達せんと多年境目へ出張して一戰の功を爭ひしかば仙道七郡伊達信夫會津四郡共に亂れて強弱を屠り榮枯地を替へて一日も未だ靜ならず是等應仁に天下動亂して其の徒國々に蜂起せるが故なり石橋義久は其の臣大内能登守石川禪正寺坂山城守澤神但馬守等をして萬事の仕置を行はしめ我が身は彌々歡樂を事とし武威次第に滅して法令只管相違する事石橋家滅亡の程近に有りとて志有る者は諫言をなすと雖も寺坂澤神を始めとして佞人共日夜義久の前に近習して善を拒み惡を進むるが故に正道の臣等は朝夕に忠義を掠められる爰に石橋常陸介隆次入道松岸齋の子に石橋新介隆則入道道海と云ふもの有り武勇智謀一郡に知られたる大剛の兵なり殊に和漢の才有りて文學に達しけるが義久の行跡良からざるを歎きて諷諫より〳〵なりしか共義久敢て承引なく結句勸當の體にて有りしされども道海存する旨有りけんあるとき義久の前へ推參して申しけるは君聞かずや奢りを極め樂を盡して國家の危きを知らず滅亡せし輩古今其の例多し今天下傾敗に及んで強きは弱きを倒し大は小を討ちて並合の氣を專らとする折りなるに武備を忘れ歡樂を事とし給ふ事天命の程恐れ有り當家終に他家の掌握に落ちて禍の來らんこと目前に有り壽永の六波羅元弘の鎌倉是れ等は大家藩屏の豪英なれば假へを取るに似るべくもなし目近くは周防の山口上野の平井斷滅の先蹤是を以て武家の亡滅の禁とこそ存じ候得彼の山口の城主義隆は管領從三位大内介義興の子にて天下第一なりしかども武を忘れ奢れる心有りしかば頓て運命傾き天文二十年九月朔日長門國大寧寺に於て家臣陶尾張守晴賢が爲に滅亡平井の城主憲政は上杉山内の管領にて其の威本朝に隱れなかりしかども同年相州小田原氏康に數代相傳の管領の地を奪はれ越後に有りて長尾を賴み上杉の名字竝管領職を讓り浪々の身となり候事是れ奢侈の心深く極信正道の輩を隔て利口無益の者を愛し美酒に飽き遊興に耽り國家の費を知らずして行跡違ひ亡び

たる事誰か是を笑はざらんや榮達は是れ其身の果福と云へども國家の盛衰は只正道の甲乙に存し前車の覆を見て以て後車の戒とするは是れ正路に歸するの謂なりと御祖父金吾入道常に仰せ候得き臣不肖なりと云へども當家の一門に連る身なり家の亡滅爭でや是を歎かざらんや晝夜只骨髓に徹して歎息殊に絕ず願くば佞臣を遠ざけ忠臣を稱し遍く一郡撫饒の政を執行せられて正路に歸せしめ給はゞ先祖尊靈への考義たるべしと存じ奉り候と極諫の詞に辯說の花を唉かせて申しけるこそ誠に忠義の至りなれ然れども積惡耳には金言却て空吹く風の習ひなれば義久曾て是を聞き入れず臣として君を憚らざる諫言奇怪なり重ねて我が前に出づべからずとて勘當の身となりければ道海忠言徒らに却て恨み韓彭漢室を興して功成五湖に向ひ遊べる事をと述懷して忽ち四本松を去りて諸國行脚し偏に悟道の出家になりにける石橋義久か忠臣の諫言をも聞き入れず日々夜々に遊宴を事とし我が儘重疊しけるが運命の極る所は義久病腦に沈みて限りの床に臥しければ世の中今は是れまでとや思ひけん家老の者供召し集めて嫡子松丸を補佐し石橋の家を相續さるべしと云ひ置きて終に死去せらる是によりて松丸幼少の間は大内能登守其の子備前守石川彈正忠寺坂山城守等諸事相談にて家の政道を取り行ひける然るに田村大膳大夫清顯田村の庄城持共一一に攻め伏せて武威益〻盛になりければ往〻は四本松の警衛も叶ふまじと思ひければ内々大内石川寺坂等に相議して田村に降參すべき趣なれば石橋の一族に美濃守三河守と云人此の有樣を推し色々彼等をなだめて當家の興亡を掛んこそ忠臣の法なれとて扱ふと云へどもきゝ入れず結句兵を催し石川彈正百目木の城に於て旗を揚げ近里遠村を押領せしめ四本松へ向て楯を築く石川能登守父子は宮森の城へ引き籠りて逆心の色を立てければ詮方なく石橋の一家悉く分れて合戰に及び嚴角之城主石橋玄番允と云ふ者は義久の親しき一門なりしかども四本松の政道非義有る事を憤りて恨を含む最中なりければ忽に逆心を起す平石の城主甲斐守武賴と云ふ者も同く四本松に叛きて皆敵となりければ住吉山の警衛薄氷を踏む心地して危うかりければ美濃守と三河守と二人相談して松丸僅か四歳になりけるを抱きかゝへ山寺屋と云ふ所

へ忍び入り相馬大膳亮義胤を頼みて中村へぞ落ち行きける後に松丸成長して石橋五郎左衛門と號し其の子孫中村に住して今に有るとなん石川彈正が兵供馳せ散れて石橋家の殘黨等少々攻め伏せ三春に至りて清顯へ謁して此の由を申しければ恩賞として四本松を下し賜る大内能登守嫡子備前守二男助左衛門尉大内長門守同石見守等を始め殘らず三春へ馳せ參り降參の由を申せば清顯斜ならず悦ばれ此間手に屬せし所なればとて安積郡片平城を大内に下し給ふ此の城元は伊東何某が城なりしか清顯の武勇によりて安積半郡田村領地となれば伊東も終に攻め亡されて今大内が領地とはなりにけり能登守我が身は安達郡宮森に在住すれば片平には大内勘左衛門と云ふ者を城代に指し置きぬ能登守死去して嫡子備前守成義が時に至りて片平の城をば舍弟助衛門尉に讓り是によりて片平助衛門とも申せしなり

仙道諸將田村と合戰竝水村が妻子怨靈之事

田村清顯次第に武威强大になりければ須賀川の二階堂二本松畠山中村の相馬岩城の常陸高野の石川白河の義親等皆々三春を中に取り込めて合戰數度に及ぶ會津の芦名も元は二階堂の裔胤より出でたれば實父方の領地を大半田村に切り取られて無念なりと思ふより田村と芦名其の中不和になりければかゝる處に清顯安積郡へ出馬し會津方須賀川方の小城主供を片端より攻め伏せて片平村迄其の道五里が間を切り取り我が有とせられければ芦名三浦七郎盛隆大いに怒りてさらば清顯と雌雄を決すべしとて片平村へ出陣せらる新國上總介先陣たり須賀川遠江守盛義も父輝行より相續き持ち來る所の領地過半清顯の爲に切り取られて怒を含みし最中なれば芦名の加勢を得て是れを取り返すべしとて濱尾筑後守箭田野下野守須田美濃守遠藤對馬守箭部伊豫守等を先として田村郡へ亂れ入らせらる二本松修理大夫義國嫡子右京亮義繼も安積郡の抱への城々大方田村の爲に攻め落されて剩へ六倉の城主畠山治部大輔郡山の城主伊藤太郎左衛門尉等も皆田村へ降參と聞へしかば義國安からぬ事かな其の儀ならば清顯と一戰して兩家の運を雌雄の鋒先に決せんと議せられ父子一所に出馬せらる

鹿子田和泉守先陣として新城彈正少弼大槻中務少輔高林内膳正遊座丹波守同下總守堀江越中守氏家新兵衛尉太田主膳於田豊後守箕輪玄蕃允等を始め都合其の勢三千餘騎にて本宮へ出張有り氏家が堀を後ろ楯にして觀音堂に陣を取る田村大膳大夫清顯舍弟善九郎友顯を大將として從ふ者供には田村顯盛入道櫻雪齋小野右衛門大夫隆信橋本刑部少輔貞綱常葉伊賀守清重富澤式部少輔本田左衛門大夫新田民部少輔顯輝田村石見守顯朝安久澤右京亮顯義大内備前守齊義同助右門尉寺坂山城守石川彈正忠大内長門守を先として其の勢二千五百餘騎安積郡へ出張す二階堂の先手箭田野下野守が兵と田村友顯の先陣富澤式部少輔と日出の山に於て合戰ふに田村勢強くして盤瀨勢手にも立たず敗北せしにより其の場を三里引き退きて陣をなし四方の城主共へ牒し合せて重ねて合戰を挑んとす此の間に岩城左京大夫常隆兵を起し竹貫三河守同但馬守猪狩中務少輔同下野守三坂前守等先陣にて上移の城を攻め落さんと小野郷へ押し寄る此の城には田村宮内大夫顯貞五百餘人にて籠りけるが小勢なれば覺束なしとて小野新町の城主田村右馬頭清忠小野六郷の兵七百餘人を催して顯貞へ加勢す又大越の城には橋本紀伊守信貫七百餘人にて籠城し鹿股には鹿股彦四郎を大將として三百余騎其の外三本木十郎左衛門尉熊田掃部助富澤伊賀守隆多新舘肥前守三丁目主水蒲倉式部少輔清久芦澤治部大夫景尚同く修理亮吉尚石澤の城主萩野何某常葉の城主石澤修理亮氏夏福原内匠介景定長谷豐前守西荒井五郎左衛門尉以下の城持共皆田村方として東西南北へ入り亂れて合戰相止む事ぞなき大膳大夫從五位下坂上宿禰清顯仙道中に隱れなき猛勇離倫の名將智謀武略の達人なれば仙道の諸將多く一味して田村を中に挾み其の虚を窺ふと云へども事ともせず弱から方へ加勢すべしとて其の勢一千餘騎浮武者になりて四方の城々へ敵寄ると等しく打出〳〵後攻めせられければ軍の度毎に田村方勝に乘らずと云ふ事なし爰に木村何某と云ふ者二本松修理大夫義國に組して田村の透間を窺ひ新城彈正少弼と遊座下總守が勢を引き入れ田村勢を討んと計りけるを清顯きゝ出して大いに怒り卽時に踏みつぶせとて鬼生田彈正忠前館主水正に下知せらる木村が城は逢隈川を隔て安積郡の川端に添ふ

てかまへたりしを前舘鬼生田物の數にもせず大雨の時分川を渡り一散に攻め入りければ木村の兵共悉く討れて大將木村も引き退かんとしけるを前舘鬼生田矢を放つて射殺したり剩へ木村が妻子を捕へ逢隈川手の久保と云ふ所の深き淵へ沈めにぞかけたりける其の時木村が妻子其の所の主となりて長く恨をなすべしと怒りたるが最後の一念朽ちずして木村が妻子の靈川の主とけり前舘鬼生田は申すに及ばず彼等が一類迄に深くあだをなせしとぞ聞へし戰ひ數度なれば何れを敵いづれを味方とも見分かぬ程にぞ有りける然る所に二本松修理大夫病腦身を責めて對陣叶はず二本松へ歸られ二階堂も須賀川へ歸城有りければさまで仕出したる事もなくて盛隆も會津へ引き取り岩城の人々も上杉を攻め兼ねて岩城の平へ引き退きければ彌〻田村の威勢日々にまさりけるとなり

奥陽仙道表鑑　巻之參　終

奥陽仙道表鑑　卷之四

二本松家由來之事

二本松義國と申すは清和天皇の御末足利上總介源義兼の嫡男義純の後胤なり義純を足利太郎と號す從五位下遠江守に任ず子三人有り嫡子藏人時兼是を若松遠江守と號す二男を朝守忠次郎と號す三男泰國畠山三郎と號す母は北條遠江守時政が娘にて畠山庄司平重忠が後家なり重忠討れし後義純に嫁して泰國を生みし故に元の夫の氏を繼いで畠山三郎と號す成人の後從五位下上總介に任ぜらる鎌倉將軍頼經卿に仕へて上總介入道空蓮とぞ申しける其の子に畠山三郎太郎時國後ち正五位の下阿波守に任ず其の子太郎高國後に從五位下上野介に任ず尊氏將軍の時高國を奥州の探題になして陸奥國へ下されし時高國始めて安達郡に住し宮方の殘黨を平げ家號を二本松と改め入道して上野介入道信元と號す然るに高國觀應二年二月十二日宮方と戰つて討死しければ京都より又吉良修理大夫貞家を以て奥州一方の管領に補せらる二本松高國の嫡子治郎國氏父の遺跡を繼げり後四位の下に敍し中務大輔右馬權頭に任ぜられ吉良貞家と兩管領に任ず國氏の子修理大夫國詮相繼いで探題となり其の子左京大夫滿泰同く探題を司り以上四代奥州を管領せり、滿泰京都將軍義敎公より御内書を下され奥州の守護たるべき由仰せ付けられし時太刀一腰馬一匹滿泰是を京都に進献す其の時義敎公自筆の書を授けらる其の文に曰く

爲内書禮太刀一腰馬一頭到來神妙に候也

八月二十五日　　義敎判

畠山左京大夫殿

滿泰の子修理大夫持泰其の子治部少輔政泰其の子右馬頭晴國其の子修理大夫義國迄相續して武威を振ふと云へども家運次第に衰微して義國の時には漸く安積郡半分安達郡半分を知行してかすかなる體なれば終に會津の盛氏盛隆の旗下になられけるとかや天正八年八月朔日二本松修理大夫從五位の下源義國卒去有り金剛院殿其阿彌陀佛と謚す嫡子治郎義繼は父の遺跡を受けて二本松畠山高國より九代の家を相續せ

らる後仙道中にかくれなき勇將大力の聞へ有りし二本松左京亮とは此の義繼の事なりし

下小山田合戰之事

天正八年三月十二日卯の刻に田村大膳大夫清顯の舍弟孫八郎重守を大將として田村石見守顯朝同く右衞門大夫隆信富田右近家隆以下の人々都合其の勢二千餘騎磐瀨郡へ出張して洞樫内の山堤の分に陣取り和田濱尾下小山田を目の下に見て己の刻迄備を亂さず屯して居たり是は盤瀨方の體だらくをとくと見澄して折よくば直に須賀川の城に取り掛り一戰の下に萬功を立て運命を天の照覽に入れんとの支度なりとぞ聞へし和田濱尾下小山田の者供小勢なれば出合ふて防ぐ事もならず只愛の塚かしこの岡に走り登り相圖の貝を吹き立て須賀川へ急を告る事夥しく是によりて川東の兵矢部下野守を始めとして取り散す少々馳せ集り洞樫内の北に支へて田村勢の引んとする所を待ち請けて討留めんと支度せり下小山田の方へは未だ一人にても來らず須賀川にても此の由をきゝて鐘をならし妙見山に狼煙を上げ手袋長檀其の外方々にて貝を吹けば白方鄉北の兵供取るものも取り敢へず鎧取つて肩になげかけ馬の上にて上帶しめ弓よ鎗よとあわて騷ぎて我れ先にと馳せ付き江持渡戸を越へて堤の地に打出て只一手になりて扣へたり然れども東西の須賀川勢百五十騎には過ぎざりければ大軍の田村勢に馳せ合ふて戰すべしとは見へず是れや車輪の轟を見て蟷螂の一斧を頼む心地して須賀川勢かたづを飲んで前へは進まず敵に小勢に見られじとて川東の兵供かねて用意やしたりけん童供の紙小旗に龜甲輪蓮花靱二つ引兩三つ瓶子色々の紋書きたる旗供を其の數多くさしつらねて木陰山陰に立ち竝べたりければ折ふし西風にひるがへりて實にも大勢の籠りたる有樣にて楠正成の謀も角やと見へし田村勢の陣取りたる所よりは遠目にて其の間遙なれは是を見損じ大勢出でたりと心得爰は足立惡しくして掛け引き自由なるまじければ押の兵をさし置敵出ば掛け合い相しらひ廣野へおびき出して討果し逢隈川へ追ひ入れて討取るべし先づ南の方に備の見へて其の勢四五百人に過きじと覺ゆれば馳向つて掛け破らんに北の敵後より掛け來らば瀧川を前に當て防ぎ戰んとて

田村石見守顯友に逞しき兵すぐりて二百餘騎を相添へ後に殘し置き鹽田川の下邊に北の敵の押へとして指し置き大將孫八郎重顯の勢四百餘騎は須賀川の旗本を目掛けてまつしぐらに魚鱗になりてぞかかりける大將重顯は氣早なる若武者にて直に須賀川へ乘り入らんと備の亂るゝおもかへりみず早られけれは旗本の兵供我れ劣らじと西の方廣戸の郷より南伏見の瀨を打渡りて二十騎三十騎宛打群り〳〵馳ひ向ひける須賀川勢は小山田關八幡山の陰に作田大六なとと云ふ切所〳〵に伏兵を置きて能き敵を撰み討に討んとわざと勢の有る所を敵に見せず爰かしこに群り立ちてそ備へける大將二階堂遠江守盛義も須賀川の城を出て馳せ向はれけるが今日ぞ田村二階堂運くらべの軍なりと思はれければ一際すぐれてぞ出で立ちける肌には白き給小袖脇深くかきたるにかし鳥威の鎧きて鍬形打ちたる甲の緒をしめ黃金作りの大刀を帶し二十四さしたる鶴の本白の征矢を負ふて重藤の弓の眞中を握り墨黑と云ふ無双の馬に鞍置いて打ち乘り眞先にこそ進まれける遠藤對馬守義遠箭部伊豫守貞武は旗本の武者大將をうけたまはりて二人一樣に黑糸威の鎧着て心々のさしものさして盛義の馬の前後にくつわを揃へて歩ませたるは樊噲周勃が呂氏の亂を靜めし後二十萬の士卒指揮に備へたりしも是れ程にはと武者振の揚るを感せぬはなかりける屈強の兵態と百騎斗りすぐりて糟打川を前にあてまばらに控へて敵の勇銳をそ謀りける田村勢是を見て小勢なりとあなどり一同に突いてかかる大六と北の内の間の狹き所へ田村勢深々と進んで來りけるを盛義糟打川を越へて河原へ打ち上り軍扇を取りて兵を進め時分はよきそと早掛かれと大音揚げて呼はり給へば所々に控へたる伏兵一同に起り立つて掛合ひ敵味方入り亂れて天地を響して相戰ふ大刀の鍔音馬の足音東西南北に響き渡りて夥し北の方なる磐瀨勢は鹽田瀧川の方より寄せ合ふて田村方の殘し置きたる石見守が二百餘騎の勢に馳せ掛り弓鐵砲一同につるべかけて火水になれと戰ひけるに其の一陣に進みし小倉の住人佐久間孫左衞門尉は石見守が魁首伊田平內に寄り合ふて戰ひけるに伊田が兵供二十人斗り前後より鎗を以て突き貫きて虛空にさし上げたりければ知部下野が組下の兵供大いに腹を立てあれあま

すな討取りて佐久間が供養に報せよと野田齋藤坂尾石那の輩我れ先にと掛け合ふ散々に攻め戰ひて伊田が兵大半討れて平内も三ケ所迄創を蒙り然るに田村勢北南より大勢に包まれて籠の内の鳥とこゝならず東八幡山辨榮堂（按ずるに辨才天堂なりしか）の方より鐵砲にて目の下に打伏せられ叶はじとや思ひけん八幡山へかけ登りて逃げんとすれども叶はず西は阿武隈川の岸高く水底深くして丈もたたず猶又大六の西より所々に淵有り折ふし二三日雨降り川水濁り淺きも深きも別り兼ね此の川下に二股の瀨にて船もなく橋もなし中川の平二三町有りて水東西へ分れ川面狹く水色藍に染みて而も早く流れければ渡すへき樣もなし田村勢洩れて出づべき所もなく進退爰に極りて只討死するより外はあらずと命を捨てて戰ひけれども味方は續かず敵か持領の事なれば方々より追々に馳せ重りて雲霞の如く競ひ集り田村勢は只的になりて討るゝ者供數を知らず矢部和泉守貞綱は川端に控へ三騎迄馬上より切落し首を取る遠藤勘解由はすぐれたる武功の兵にて三尺餘りに見へたる長刀を持ちて馬の平首にさしならし東西南北へ馳せ走り働き田村勢を七八騎討ちて落し高名す然るに終逃る敵をば討す及向ふ兵斗りを撰み討にしけるに薄手一ケ所も負はざりける誠に粟生篠塚とも云へつべし田村孫八郎重顯は餘りにかく深入りして味方既に破れし磐瀨方は勝に乘りて其の身も遁れ難しとや思はれけん只一騎太刀を眞向に振りかさして敵の中にかけ入り散々に戰ひ能き敵三騎を同じ枕に切り伏せて氣色ばうてぞ立れける然る所に濱尾同く內藏介爲家能き敵と見てあれば駒一散に進ませ討ちてかゝる孫八郎少しも騒かず八方を拂ひ天地を響して討合いしが內藏介押ならべむつとくみ馬より引き落して取つて押へ首を取らんとしける所へ重顯の兵三十餘人透間もなく討てかゝる是を見內藏介が嫡子濱尾善九郎生年廿歳緋威の鎧に星白の甲を着三尺八寸の太刀を眞向に揚げ馬より飛び下り小踊して父が前に馳せ塞り命を一刀の下にちぢめんと焚噌の勇を振ひ血眼になりて向ふ者を眞向立割內甲虎鷲輪違車切前後左右にげきして究竟の兵六騎迄忽ち討倒しければ敵の兵へきえきして進み得ず其の隙に內藏介は孫八郎を押伏せて首を取り太刀の先へ貫で盛義に見せんとて乘替に

打乗りて引き返せば善九郎も獅子の怒り毛吹きならす勢ひにて馬引き寄せ打乗りあたりを拂ふて引き退くは綱金時もかくやと見へにける此の善九郎と申すは天正五年四月十七歳にて武者修業に出で中村へ到りて相馬大膳介義胤の城下中澤孫右衛門と云ふ者の元にて同じ武者修行の浪人渡邊瞳之助鳴原愚之助とて共に出羽國最上領北の者なるが彼の二人に出會ひ他事なき朋友となりて義胤に奉公す翌年二月岩城左京大夫常隆と相馬義胤と權現堂て一戰有りしとき善九郎十八歳にて一陣に進み比類なき働して鎗を合せ高名す渡邊鳴原是を感じ頓て相馬の老臣水谷式部少輔に訴へて善九郎が高名を披露しければ義胤喜悦有て感狀を賜りけるとなり其の詞に曰く

今度向權現堂之戰防戰鎗下之高名
無比類働也仍感狀如件
天正六年三月廿七日　義胤　判
濱尾善九郎へ

其の後去年天正七年十一月相馬より磐瀨へ歸りて父が元に有らさるもの有りとは近郷に其の隱れなかりき此度も武勇の働して父が命をも助け其の上大將孫八郎を討取りければ弓矢の冥加是れに過ぎじと濱尾父子が武功の程いとど名高くなりにけるさる程に田村勢大將孫八郎討たれし後愈敗軍して右往左往に崩れ立ち子は親を捨て郎等は主を顧ずぞく引に引立て敢て敵に討ち合する者もなく引き退きけるに二股の瀨より外に渡るべき所もなければ此の川瀨を越さんと引く所に吹田美濃守を始めとして濱尾の城主箭部伊勢守父子同く與力の輩弓鐵砲長刀鎗を揃へて川より敵の上る所を上げも立てず川端に射伏せ卽座に二三十人討ち取りける伊勢守が郎等に早左衛門と云ふ大剛の兵有りしが黑革の腹卷帽子甲に小手脛當て迄皆眞黑に鎧たるか偏に辨慶も角やと覺へる程の强兵にて大身の鎗を以て川岸に進み逃げ行く敵を突いては虛空に投げ揚げ貫きては首を取り七八人手にとり討ち取りければ田村方勢盡き力衰へて向ひたる方を引きかへて中川原下りに淺き深きを嫌はず大勢川にひたりて砂山車渡戸さして引立てける其の有樣人なだれを突いて見へし箭部須田が兵共餘りに戰ひつかれてさのみ追はざりければ田村方よき者共はさまで討れず命をぞ逃れける又北の押に殘りたる二百餘騎

の田村勢も小倉鹽田の方へ落ち行きけるがあまねく斯様の時とや思ひけん小倉鹽田の城主ゑな掛をなして譜代の主の如く頼みにかけて年來見逃しに打捨てこそ退かせける然れ共隣郷の者共は分取りせんと追ひ掛ければ田村石見守顯朝弓手の腕と左の膝口のふかく射られて痛手なりと雖も爰を引く程ならば田村の御曹司の御家運是にて限りなん例へ討死したりとも死骸になりても道路に横り敵を一人も田村の地に足をためさんものをとあくまで廣言吐いて歯がみをなし甲のしころも鎧の草摺もかなぐり捨て馬より飛び下り左の足働かねば大地にむつと居直り大長刀を一掉しして向ふ者を二三人ためす切つて落し一足も退かず討死せんと早らきければいかなる和泉小治郎朝比奈三郎も是にはいかでと皆舌を捲いて感じける、石見守が兵共多く來りて是に限るべき軍にも候はず只引かせ給んこそ屋形への御奉公なるべしとて再三諫めて引き起し馬にかき乗せてぞ引かれけるされば田村勢散々になりて鹽田の地を吉田川さして落るも有り小倉清の森にかかりて七つくれ石橋を通り過ぎ栃本さして落るも有り皆様々に三春に逃げ歸る有様は目もあてられぬ體なれば御曹司清顯の心中いか斗り無念におほすらんおしはかられて哀れなり

田村孫八郎が首須賀川より故郷へ送らるゝ事

二階堂遠江守盛義下小山田合戦に勝利を得て鬼神の如くに恐れたりし田村の猛勢を切り崩しのみならず今度の大將田村孫八郎を討取り勢ひ天を飲み飛龍の山をよじ登る心地して二股川原に馬を立て首共一々實檢せらる討取る所の首數都合二百三十餘級着到に是を記す、中にも大將孫八郎が首をば中川にて血を洗ひ川原の石にて墳を築き据へ置きけるさて又味方の兵も六十三人討死せり矢部伊勢守常貞瓶子一具御盃御肴取り揃へて持參す、かく騒がしき戰場に於て故實を存ずるの條類なき心ばせ哉と皆人感心し給ひけり伊勢守が嫡子下野守盛貞を始め同く伊豫守貞氏同く和泉守貞敎以下の一族配膳す盛義盃を上げ給ふ後其の酒を川にそそぎて流れを多くの兵共に飲しめ給ふ軍勢皆萬歳を唱ふ、須賀川に候れる一族郎従等極老の輩まで追々に馳せ參りて賀し申す其の日白

河の大藏少輔義親より中島上野介西村伊賀守を將として其の勢八百餘騎加勢の爲め馳せ來る所に軍散じて後到着す盛義に謁しける偖盛義西方の者共を召し連れて歸陣有り同く十三日の早朝に保土原江南齋濱尾入道善齋濱尾内藏介爲家矢田野四郎左衞門尉其の外須田美濃守矢部伊勢守遠藤對馬守矢部伊豫守以下會合して田村孫八郎が首實檢の式法取り行ひ其の樣嚴重なり元弘に二階堂出羽入道道蘊芳野の奈摘川の邊にて村上彦四郎義光が首實檢せし其の例なりとぞ偖孫八郎が首と死骸杉板にて箱をしつらへ鎧物具太刀刀迄を取りそへて濱尾筑前守大波石見守を兩使として田村へ送りつかはさる清顯よりも常盤佐渡守石母田式部少輔と云ふ者を境目へ出向はせ是を受け取り畢る偖も彼の孫八郎重顯と申すは前の左衞門佐隆顯の三男にて容儀人に勝れ世に聞へたる美男にて在原中將業平も是れ程にはあらじと其の頃世の人申しけるとなり殊に武略も知謀も御兄の清顯に劣らぬ程の勇將なり出陣の折々花の如くに鎧て老母の御前竝に乳母に暇乞有りし面影忘れ給はす安穩にて歸陣せられん事を今や〳〵と一日の内を待ち兼ね給ふ所に老少不定のならひにて下小山田の合戰に味方利を失ひ孫八郎殿か討れ給ふと聞へしかば手の内の玉碎け闇夜に燈の消へたるに異らず肝魂も御身にそはず歎きしづみ給ふ所に又死骸太刀刀鎧物具まで送り屆けられければこはいかに昔し熊谷次郎直實が一の谷の合戰に平敦盛を討つて其の死骸を送りし時に平家の一門の歎きも是には過じと夢にや有けん又うつつにやと愁傷限りなかりしとかやさる程に盤瀨の盛義は濱尾内藏介を召して盃を賜り今度の忠賞にと有りて内藏介を三河守に改められ嫡子善九郎を内藏介と名付けらる三河守は二階堂先祖の受領なれば殊に以て規模とせり善九郎の舍弟金内と矢部和泉守は袞美として太刀を給はる其の外遠藤壹岐守矢部伊豫守遠藤對馬守濱尾志摩守同筑前守大波石見守矢部下野守各々加恩有つて受領安途の名を蒙る事皆此の時のことなりしとぞ頓て盛義時を移さず一千餘騎を引率して田村の領なる大平の城へ取り掛けて攻めけるに敵も下小山田の敗軍にや恐れけん向ふ敵の旗色をだに見すして田村の城へ引き退き一人も居らず依つて須賀川の兵共思ひの儘に入り亂れ資財雜具は申すに及ば

ず近郷の民家へ打ち入り女童迄亂暴して踏み散らし盛義須賀川へ歸陣せられける

大善寺軍之事附有馬岩田高名論之事

下小山田合戰以來磐瀨勢勝に乘りて田村の武威恐るゝに足らんとや思ひけん須賀川より遠藤對馬守義遠保土原江南齋朝日伊勢守盛連を三將として其の勢二千餘騎田村の庄の内大善寺の東へ働く田村方にも中津川藏人森山の池田志摩守等大勢を率し大善寺村の城へ入りて堅固に取固め矢石を放つて防ぎ戰ふ時に田村方より武者一騎群をはなれて先途に進み磐瀨方の兵岩田木内と云ふ者に突て掛る岩田武勇したゝか者にて物ともせず散々に突き合けるに敵岩田が鎗を受けはずして弓手の腕を突きぬかれ叶はじとや思ひけん引き返へし逃げ行くを木内いづく迄逃るぞ返し合よと呼り追つて行く處に有馬彦市と云ふ大力の兵二間柄の樫柄の鎗にて横合にかけ來り逃る敵の後ろより前へばつと突き通し倒れし處に菊池甚平と云ふ者馳せ來りて敵の首を上げて馳せ歸れば有馬も岩田も骨折りしにほいなく無念たゞ甲斐なかりける、其の後は戰互角にして勝負見へざりければ須賀川の三將相謀りて攻め口を引き取りける、角て數日を經て後或人の家にて饗應の事有りけるに岩田有馬とも出合けるが岩田其の時の首尾かく〳〵にて最屓〳〵に云ふ由を聞きて有馬も是を聞き咎め菊池が居たる所にて傍輩共に有體を云ひきかせんさなくば首尾のよくも人の口しだいに悪くなりし事無念の儀と云ふ岩田木内云ふ樣は我れ先陣に突いて出で敵と鎗を合せ即ち弓手の腕を鎗突きし故敵逃げんとするを鎗は捨て刀を拔いて追ふ所に敵の中より弓を以て有馬を射んとせし故有馬も恐れて後へ二三間退く時に誰とも知らず味方の陣中より放つ矢に敵矢府を負ふて進む事叶はず逃げ行くを有馬是を見て討んともせず居たるを夫れあますなと聲をかけられ二間柄の鎗を以て我れ追ひ行く敵を突き伏せしに菊池が居たる前に倒れしを菊池首を取りたり、諸人の見る所なれば何とていつはりは云はれんと云ふ、有馬是を聞いて我岩田に言葉を掛けられて心付き突きたると申す條虛言なり萬人目前の合戰なればいかで首尾知れざらん

岩田が既に敵に討れんとせしに我れかけ寄りて敵を突き伏せ岩田が命を助けたるぞ左様の事をも存じながら我に向て聲を掛け心を付けしと申す事推参なり猶又此の有馬の武勇の程後日の戰場にて見するべし爭て岩田に一歩も劣るべきやとから〳〵と笑ひければ岩田大いに怒り後日とは手延なり諏訪八幡大菩薩唯今有馬が武勇の程を試んにはかく敷事あらじとひしめきけるを其の座に有り合ふ輩中に入りて漸くに取り静め左右へ引き分けて歸しける、菊池甚平は元來心廉直なる者にて此の由をきゝ傳へ須賀川四天王の人々へ申て此の度某が高名を除きて岩田有馬二人が手柄にせられて兩人和睦仕り候様にと言上す宿老須田美濃守を初め神妙なる申條哉と感心有り家中の輩を兩方へつかはして岩田有馬に和睦せよと有りけるに聞き入れざりければ盛義此の由を聞給ひて諏訪の神前に於てくじを取らしめ神慮に任せ高下をば雙方共に堪忍し無事なれば我に忠の者なりとて此の由二人へ申付けられ候菊池も是非くじと取らんとて其の座に連る諏訪の神主くじ四本拵へ一文字の札一つは高名のくじなり白紙の札一つは是れ互に劣らしまけじのくじなり二文字は白紙に續いて手がらのくじなりとて四段に相定め四つの内一つは神のくじとて神主幣に付けて取りて神に納め殘りのくじを振り合せ三人に取らせけるに菊池一文字を取り岩田有馬は同し白紙を取りければ甚平彌々簽の如く高名になりけるとかや

奥陽仙道表鑑 巻之四 終

奥陽仙道表鑑　巻之五

會津盛氏卒去並二階堂盛義卒去

付御代田城開け渡す事

天正八年六月十七日會津の三浦介芦名修理大夫平盛氏入道止々齋卒去有り瑞雲院殿竹岩居士と謚す養子盛隆其跡を相續す盛隆武勇に長せるにより京都へ使者を立て織田信長公へ一禮申され且又居ながら絶へて久しく三浦介に任せられて威を仙道に振ひ給ふ實父須賀川の二階堂遠江守盛義も天正九年七月二十三日卒去せられて其の簾中磐瀬の城を守り給ふ是は伊達左京大夫輝宗の妹なりされば須賀川も自ら會津のさし引きとなつたる事も元は盛隆二階堂家より芦名の家を繼かるるより盛義死去の後磐瀬郡も自然と芦名の領地の如くになり萬事の仕置大小となく會津の下知に從ふ依て又田村大膳大夫清顯は會津の盛氏磐瀬の盛義死去によりて其の衰を窺ひ軍兵を催し磐瀬郡へ發向有り盛隆是をきゝてさらば軍の手始めに田村と一戰有るべしとて會津を發し仙道へ出馬せらる常州水戸佐竹常陸介重義は會津盛氏の時迄は其の中水火の如く不和なりしが今須賀川盛隆會津の家名相續の後合體して何事によらず親しく通せられけるが盛隆仙道へ出馬の由其の隱れなければ義重も兵を揃へて水戸を發し會津に至つて芦名と一所になり兩家の軍勢牒合せて雲霞の如く田村の庄へ發向す先づ田村の内御代田の城を攻めらる會津の先手平田中の目沼澤等須賀川勢の内須田矢田野濱尾横田保原矢部遠藤等を先として我れ先きに敵に合んとくつわを並べ逆茂木を引き倒して攻め入るさる程に御代田の城をば星の城と號し往昔坂上田村麿東夷征伐の時築れたる城地にて城は萬仞の峰に等しく矢倉雲上に連り名にし負ふたる名城なれば火鏑を飛して城をおびやかし金牛をかつて路を開くとも物の數にもあらじと思ふ程なるに大剛一の御代田三河守を大將にて田村の加勢多く籠たる事なれば木戸〳〵を堅固に持ちこたへて弓鐵砲矢種を惜まず散々に放ちかけてたゝかふ處をば馬武すぐりて驅り立て〳〵防ぎ戰ひければ左右なく落べしとは見へざりける殊に三河守は田村に

て大剛の覺へ有る兵なれば自ら長刀を取り切て出て敵を亡す事數度に及ぶ田村大膳大夫清顯も大軍を以て御代田の後攻めせらるべしと軍評定有りけれども此の折を得て岩城左京大夫常隆岩城平の兵三千餘を催し小野新町の城へ發向有る由聞へ夥し又相馬大膳亮義胤も常葉へ出陣有り二本松左京亮義繼も和田より廻りて田村へ攻め入るなどと聞へしかば清顯も先づ何方へ馳せ向ふて軍をばすべんと僉議區々にて一決せず剩へ御代田の城に兵糧盡きたりとさたせしかば御代田を敵に取られては先非を悔ても叶ふまじとて水練の達人を撰みて白米を負せ逢隈川を川上より流れ渡りにして夜々御代田の城へぞ入れられける數度に及びければ寄手是を覺り知つて鐵砲を以て彼の兵糧運ぶ水練共を打ち殺しければ夫より城中へ兵糧入るべき樣なければ彌々城中糧盡きて難儀に及ぶ三河守が兵共今は早や詮方盡きて九死一生の軍をやする又速に自害をやすると毎日評定取り〳〵なり田村にては清顯月齋と相謀りて御代田の菩提所高安寺は須賀川の普應寺の末寺なれば高安寺を使僧として普應寺を頼み盛隆へ申して御代田の命を助くべしとて則ち高安寺を須賀川へつかはし普應寺をかたらい西堂より矢部須田の四天王へ申て盛隆へわび事し今迄田村方數年押領せられし今泉の城をあけて盛隆へ相渡し卽ち月齋は田村へ引き退き給ふ其の後に安積郡の內には守屋富岡鍋山八幡川田成田多田野大槻俗て又田村の內にては谷田川栃本糠塚御代田三河守をぞ退けられける十三ケ所の討取る村々殘らず磐瀨領へぞ屬せらる是によりて御代田の城には須田備前守を入れ置る今泉の城をば濱尾駿河守に給はる、駿河守祖父濱尾修理大夫は新田城主にて其の子金齋迄住す其の子駿河守今泉へ移り新田の城へは遠藤對馬守入り替り俗又富岡の城には須田三郎兵衞六眞を入れ置れ多田十郎大槻某等が證人を取りかため籠め合に及び田村郡の內谷田川栃本糠塚等をば遠藤右近大夫同內藏介二人が下知たるべしと仕置等殘る所なく立たせられて盛隆は須賀川へ兩日逗留して無事に會津へ歸陣せられける

阿子ケ島會津へ降參並白石合戰之事

安積郡阿子ケ島治部大輔は伊豆國伊東治郎祐親入道寂心が末葉にて二本松右京亮義繼が手に屬したりしが此の間田村に從ふて居たり、盛隆多田野が城をもみつぶし證人を取りかためられしがば治部大輔も叶はじとや思ひけん甲を脫て長く會津へぞくすべしと約諾し會津へ降參したりけるさる程に天正十年磐瀨より矢部伊豫守濱尾三河守兩大將として須賀川勢千餘騎にて田村抱への城白岩を攻め鐵砲矢軍終日もひとしく寄手城のふもとなる猪垣どもを引き倒し步立になりて攻め入る城中にも大剛の兵共多く籠り居て強弓の手を揃へて射立てければ寄手討るゝもの數知れず三河守が子內藏介金內兄弟一樣に緋威の鎧着てくつはをならべ先に進む金內鎧踏み張り大音揚げて天津兒屋根の苗裔大職冠の御末二階堂三河守が嫡子濱尾內藏介同く金內なるぞ出向ふて勝負を決せられよと呼りければ城中の兵共返事もせず金內聲をかけて其の名を名乘り給ひやと頻りに大音聲に申せども敢て答もせず堀の端に添ふて備を立て橫矢を入れて散々に防ぎ戰ひければ寄手過半討れて卷きほごし引き取るに須賀川勢の內顯家彌五郎と云ふ者元は關東の者なりしが當地矢部伊豫守に仕へて居たりける咏方の敗北のまぎれに鐵砲にて腰を打拔れ倒れ伏しが其の矢目夥しく痛む事限なしとて大聲を揚げて只今死ぬ事云ふにより軍兵共介抱して今迄鐵砲に當りたる者其の數多し然れども是程に痛む事は未だ見ずさりながら腰骨なれば左こそ有らめ但し血の少しも出ぬは如何にと問ふ彌五郎聞て道理なり胴の中へ血引きぬれば外へは出ましきと云ふによりさらばとてあんだにのせて須賀川に連れて歸り藥など用ひし時迄ぎければ氣分もよく食事も心能く進みしかば帶を解きて矢きずを見んと云ふに彌五郎大事のきずは急には癒かぬるものぞとて敢て見せざりけるが親しき者共二三人取り寄りむたひに帶を引きちぎりて是を見れば一幅木綿の帶を三重にしたるを二重に打通し內の一重は打通らずしてきず尠しも無く帶解くと其儘玉はころりと落る見る者興を覺し彌五郎面目を失ひける此の間事々しき體だらくにて醫術を盡せし恥しき誠に頻少くぞ見へし主人伊豫守貞武是をきき大いにり怒て臆病至極の男物の用に立つべからず諸人の見こらしめに我前に連れ來れ細首を小刀にて貫きな

ぶり殺にして捨んと大いに罵しりけるを郎等共兎角詫事して漸くに死罰をば許されければ武士仲間の體合叶はずして終に浪々しけるとなり

守山合戰之事

七月中旬の頃なるに磐瀬の臣濱尾兄弟遠藤矢部朝日の者共三千計りにて田村の庄へ出張し耕作を荒し亂刈りして田畑の中を押し通りける田村勢是を見て弓鐵砲を打掛けて防ぎ戰ふされ共敵大勢故田村方防ぎ兼ね守山指して引き退く所を濱尾遠藤等すかさず追ひ詰めて攻め討んとしければ田村勢は御殿河原より宿尻迄追ひ來る敵をかまはずに引來るが餘りに急ぎ追ひける故宿尻にて取つて返し矢鐵砲を揃へて散々に防ぎ戰ふ濱尾内藏介同じく金内遠藤壹岐守三騎轡をならべて掛け散らさんとしける處に守の野伏道慶萬九郎と云ふ者掛け立てられて脇へ飛び去り内藏介が馬の腹帶結ぶ所を矢聲をかけて突きけるにさしもの駿足なりけれ共大力にて突き通されて馬は屏風を倒す如くがつばと伏せば萬九郎きほいかかりて鎗を引き拔くとしけるに折節麻を乾したる上になりければすべりてどうと倒れけるを内藏介急ぎ馬より飛び下り打つてかかる萬九郎手早く起き上り鎗を捨て通げ行きければ内藏介齒がみをなして討洩したる口惜さよと一人言しながら萬九郎が捨たる鎗を取りて下人に持せ乘替に打乘つて又おめいて掛る濱尾後に續いて中村米三郎と云ふ者生年十八歳になりけるが緋威の鎧に蜂甲の緒を締め鎗を取りて一陣に進み散々に戰ひけるを守山勢の内高倉彦七と云ふ者渡り合ひ雌雄を爭ひしに彦七手を負ひ既に討れんとしけるが運や强かりけん米三郎鎗を突き折りて大刀を拔んとする所を彦七踏みこみて米三郎を討ち伏せける偖又米三郎と一所に先を爭ひし橋本與八郎と云ふ者十六歳になりけるが大剛の勇士にて直に彦七に渡り合ひ及を交へて拒み爭ひしが彦七は米三郎を討取りし時手傷三ケ所まで蒙りければ若手の與八郎に切り立てられて請太刀になつてひるむ所をいらつて散々に切り付け終に彦七を切り伏て首を取りけるが遠藤壹岐守も自ら太刀討して高名しけり田村勢宿尻に支へて急を守山の城へ告ぐる事夥しかりければ守山の城より常葉讃岐守橋本刑部少輔淺川右馬介大越甲斐

守同く修理亮を先として其の勢雲霞の如く馳せ着きければ磐瀬方にも急には破れ難しと見ければ輕々に引取りまん丸に備へ弓鐵砲を前に立て息をつきけるに守山勢さのみ追ふ事なかりしかば磐瀬方は御殿川原をすじかいに逢隈川を渡りて須賀川へぞ引き取りける

那目川合戰之事

天正十一年の春田村善九郎友顯手兵六百餘騎を引率し滑川へ出張して須賀川を攻んとす近邊に有り合せたる須賀川の者共纔に百騎計りにて滑川を前になし東の阿武隈川を右に請けて滑川の小坂の上に陣を取り旗打ち立てて控へける、友顯は勢を二手になし一手は新田民部少輔顯輝石母田式部少輔義條を兩將として三百餘騎兒が塚の西より敵の後ろへ廻りて大將友顯は二百五十騎皆旗をもささず雜にまぎれて海道の方へ討てかかる田村勢の分際左迄大勢と見へねば磐瀬方の大將遠藤對馬守同く壹岐守等討て出で防ぎ戰はんとしける所に顯輝義條兩勢兒が塚の西より磐瀬方の後ろへ出で鬨をどつと作りて眞しくらに押し掛かれば磐瀬勢大いに驚きすはや敵後ろへ廻りたるぞと云ふより早く亂れかかれば取る物も取り敢へず柏木が外屋迄敗北す田村勢勝に乘りて追詰め〳〵切て落す遠藤對馬守同く壹岐守濱尾三河守父子伯父甥後殿して味方を討たせじと返し合ひ防ぎ戰ふ爰に田村勢の内より黑糸威の鎧着て三枚菖蒲の立物したる甲をかぶり黑き馬に乘りたる武者對馬守に討て掛る遠藤も太刀を拔いて相戰ふ時に橋本與八郎かけ來りて對馬守が討太刀に續いて敵を切り伏せ貴殿の御高名は度々の事なり此の首たまはり候へと云ひければ對馬守聞て若輩の心掛け神妙なり汝去年細田城攻めと守山合戰に高名し又當年十七歳にて二十歳より内に三度の手柄なり早々首を取れと取らせつゝ是を討たせじとて返し合ひ戰ひける程に對馬守壹岐守濱尾三河守同く金内相共に傷を蒙り各々郎等に助けられて須賀川へ落ちて行く爰に三河守譜代の郎等に僧都丸と云ふ者十八歳となりけるが主人三河守父子が手負たるを助けんとて數度返し合ふて防ぎ矢射りけるに田村の郎等樫内某が勢十六騎が中に取りこめられて終に討れけり又岩城出雲守近藤十郎左衛門尉有

馬意休齋等は共に七十有餘の古兵にて駿河守輝行が時より覺へを取りたる大剛の者なりければ武道忘れ難く軍見物に出でけるが思の外味方敗北して大勢討れ引き取るにより心ならず落ち行く勢に引き立てられて須賀川さして落ち行きけるが老武者の事なればにげ合はずして三人共に一所に討れける其の日須賀川勢敗北して馬物具を捨て長刀鎗を落して足の踏み所もなく命かな〳〵逃げ行く有樣先年下小山田合戰に田村方討負けたりしに等しく其の返報したりとて田村勢は籠をたゝき絃を鳴らしてぞ悦びける去る程に田村勢は勝に乘りければ新田石母田大越常葉富田淺川の人々勝ちほこりたる勇氣に汗馬の足をだに休めさせず落ち行く敵に追ひすがりて追討にす須賀川勢の内只一騎矢部主膳歩行立ちの兵二三十人引率し新手となりて馳せ來り下宿の西に支へて大勢に渡り合い命を限りに戰ひければ田村勢卽座に三十餘人討れて須賀川方色を直し落ち行く勢是にて思ひ〳〵に取つて返し主膳が勢に擔替る其の外須賀川より守田鹽田の一族共二百餘人旗さし連れてかけ來れば田村善九郎いや〳〵味方も疲れたり後に續く兵もなし磐瀨方は須賀川の居城を枕にして討死せんと防ぐならば由々しき大事なるべしとて矢部が持ちこたへたるを幸に物分れして友顯は勢を引き揚げ田村の庄へぞ歸られける其の日須賀川方に討るゝ者二百三十餘人なり須賀川盛義の後室此の軍の次第委しく尋ね問はるゝ後矢部主膳が忠義拔群なりと感ぜられ女性の褒美如何なれども軍功を賞するの由宣ひて宿老共に命じて矢部に厚く恩賞をぞ行はれける

奥陽仙道表鑑　巻之五　終

奥陽仙道表鑑　巻之六

高倉軍之事

安積郡高倉の城主畠山治部大輔は二本松修理大夫義國の門葉として清和源氏の名家なり田村顯隆父子の武威強きによりて一旦は田村の手に屬して居たり同郡阿子ヶ島治部大輔祐高は會津の手に屬し多田の十郎大槻等も悉く盛隆の爲めに攻め亡されて今の高倉の近邊皆須賀川と會津へ與するに依り是にては始終田村方としてほろぶべしとも覺へすかゝる處に西安達郡高玉の城主畠山紀伊守が嫡子太郎左衞門常賴と云ふ者に高倉治部少輔が嫡子近江守は妻女の兄なりしが一類を捨て田村へ與力の條心得ずと治部少輔諫言しければ高倉父子忽に旗をひるがへし元の如く二本松へ在番すべしと申すにより二本松義繼と一度は後世の見こらしめに踏みつぶさんとはせられけれども高倉山は名城なれば力攻めには叶はず何卒すかして元の如く招き寄せん兼て計略の折りなれば幸ひ哉と悦び治部大輔父子が此の間非を改めて元の如く高倉の城に指し置るべしとの返事なれば治部大輔父子限りなく悦んで急ぎ二本松へ參勤し義繼へ謁し頓て田村へ事切れをぞ致しける安積郡の内には高倉の城計りなれば敵不意に起らん時加勢せよとて兼て本宮の城に氏家新兵衞遊座丹波守を千餘騎にて入れ置れ玉井の城には太田主膳同く采女と云へる大剛の兵を籠め置る依又高玉の城には畠山太郎左衞門尉常賴楯籠り杉田の城には杉田豐後守同く石見守を置れ軍のかけ引は新城彈正が計らひとして己れは椚山の城に有り義繼は數氏相傳の二本松の城に住して田村より高倉を攻めば早々加勢すべしとて鹿子田和泉守同じく右衞門佐父子遊座下總守に究竟の兵を二千餘騎さし添へて備を堅くして待れけるに案の如く田村大膳大夫清顯天正十年三月諸勢を引率して田村を出馬せしめ安積表へ出張し高倉の城下迄押し寄せしが高倉近江守兼て期したる事なれば敵の旗色を見ると等しく相圖の狼烟を擧げて四方の味方に知らせ軍兵を進めて相戰ふ敵は名にし負ふたる田村彈正入道月齋の嫡子宮內大輔顯貞田村右衞門大夫隆信眞先に進ん

で楯を顯羽に突きしと〳〵各々先を爭ひ大軍にて野も山も平に押し入れんと攻め付けば近江守此を先途と身命を抛ち自ら鎗を取つて大勢に渡り合い手嚴しく掛れば敵も攻めあぐんで見へる所に近江守が相圖の狼烟に驅きて本宮の城代氏家新兵衞遊座丹波守馬に諸鐙を合せて一千餘騎が一時の間に馳せ來り玉ノ井に居たる太田主膳同く采女兄弟も時を移さず馳せ來れば田村勢叶はずとや思ひけん虎口をくつろげて引き取り川にそへて陣をなす所へ高倉近江守遊座氏家太田兄弟透間なく押掛けて討立てければ田村勢散散に掛け立てられ逢隈川へ追ひ入れられて究竟の侍五十餘人討れける清顯の勢終に打ち負けて逢隈川を渡りて引き退く此の威勢に恐れて日和田の城主佐藤左衞門佐も田村方として立て籠りけるが忽ち降參して二本松へぞ隨ひける

松本太郎謀叛之事

天正十二年六月十三日の事なりしに會津には芦名累代の長臣松本太郎十六歲なりけるが不敵に謀叛をぞ企てける此の松本と申すは會津四天王の宿老として平田松本佐瀨富田と呼れたる其の隨一なり祖父を松本右京介と號す父を圖書介と云ふ天正三年五月十三日郡山合戰に圖書介討死して嫡子太郎幼少なりと云へども家督相違なく相續せり然るに松本太郎芦名家を深く恨む仔細有りて己れが男色の知音なりける笈川の栗村下總守を語らひて盛隆城東の羽黒東光寺へ登り給ひ舞樂の遊覽有りける隙を得て松本栗村兩勢合せて八百餘騎黒川の城へ押し寄せたり俄のことなれば留守居に殘りし者共こはいかにと騷ぎて少々出合支へたるを悉くなぎ伏し黒川の城へ乘り入れて四方の城戸をさして取り籠るかゝる所に佐瀨河内守手の足輕を引き具して西の戸口へ廻り相戰ひ追ひ散らしければ凶徒こらへずして城中へ引き入り本多右衞門佐東の城戸より盛隆の籠中を介錯申し粮藏へ隱し奉る此の由東光寺へ注進有りければ盛隆大いに怒りて中目式部大輔其の外佐瀨河内守を大將として急に突き出で攻めける故松本太郎は俄の籠城なれば城の分內は廣し防く兵は少く東西南北只手に火水を押へる心地して散々に攻め立てられ軍兵過半討れて大將松本太郎も終に討れたり此の時寄手の方にも大波主

膳同じく孫太郎兄弟深入りして討死す是は盛隆幼少の時盛氏の養子となられけるに須賀川より供して來る侍なり偖又栗村下總守も深手を負ひて休み居たりけるが赤塚藤内と云ふ者と渡り合ひて終に藤内に討たれける盛隆早速に凶徒を亡し二度黒川へ歸城せられて軍功を賞し佐瀬河内守をば父が武功の名を繼がせられて源兵衛と名乘らせ本多右衛門佐をば讃岐守とぞ名付けられける

盛隆横死之事

其の年の冬の始め盛隆の寵臣大場三郎衛門と云ふ者多年恩顧深かりけるに色有る花の榮落時替る習ひなれば何時しか寵愛の程隔たりて薫籠が袖を藉へたる寵彌子班の枕を參したる戯も仇なる夢となれば盛隆近習の面々もいつとなく三郎衛門を疎み年々のふるまひ樣變りたる事のみ多ければ大場深く是を憤り十月六日の朝いたわしや盛隆を一刀に殺し奉り西の城戸口迄逃げ出でけるを種橋大藏と云ふ者追ひかけて三郎衛門を討止めける、盛隆時に二十四歳なり是より世の中騒がしくなりて芦名家漸く傾んとしけるを龜王殿と申して今年九月中旬に生れ給ふ若君の有りけるを守り立て奉り平田左京佐入道と富田美濃守是を補佐し程嬰揹臼が跡を踏みて何事も只兩人が計らひなればはかゞしき事もなく近國の強敵を防ぐべきさたもなかりける

大内兄弟逆心並唐矢糠澤合戰之事

かゝる處に田村の手に屬したる大内備前守成義俄に四本松の内宮森の城へ引き籠り舍弟助衛門は安積郡片平の城に引き籠り會津方へ屬し田村に叛くにより大いなる合戰出で來り田村數度敗北に及ぶ其の源因を尋ぬるに岩城左京大夫常隆兵軍を率し小野新町邊へ出馬せしめらる新野の城主田村右馬頭清忠加勢を乞ふ事頻りなれば清顯出陣して常隆と一戰有り其の時四本松石橋家の郎臣等田村へ從ひし者共石川彈正忠太田備前守同く片平助衛門寺坂山城守澤神伊豫守同く俱馬守等を始めて何れも相從ふ然る處に片平助衛門の家人と田村右馬頭が家人と喧嘩を仕出したるに右馬頭が家人非道の事を多く申したりければ誅せらるべしと大内兄弟申と云へども右馬頭は田村一

番の大名にて清顯の一族梅雪齋が嫡子なり又降參不忠の大内等が事なれば誰取りて計ふ者もなく其の儘さし置きける故大内兄弟大いに怒りて備前守は東安達郡小濱宮森の城へ走り歸り片平助衞門と安積郡片平の城へ歸りて兄弟會津へ使を立て御味方に參る由申しつかはしければ兄弟は元來武勇の聞へ有る者なれば會津にても則ち是を賞して神妙に候とて返答せられける大内備前守限りなく悦びさらば田村へ向ひ一戰の支度すべしとて宮森小濱の兩城を嚴しく拵へて岩角の城主石橋玄番允と牒し合せ且又二本松右京亮を後ろ楯に賴み竝に小手森の城主をも拵へて軍兵を入れ置き針道源太に牒し合せければ源太も究竟の兵を催し針道の城を丈夫に普請して楯籠り石川彈正は百目木の城に在て田村に一味の事なれば大内備前守眞先に彼れを亡して四本松中を殘らず手に入んと思案し二本松へ加勢を乞ひければ箕輪玄番允遊座下總守堀江越中守三百餘騎にて宮森へ馳せ來り備前守此の勢を合せて一千餘騎百目木へ押し寄せたり石川彈正出向ふて相戰ふ大内方梶田彈正大内長門守同く掛ければ石川が兵散々にかり立てられて引き退く大内勝に乘り侍町迄乘り込みあたるを幸ひなぎ伏し〳〵本丸を乘り取らんとす石川彈正今日を最後と心掛け敵を近々と引き受けて千人計りの兵二手になりて同時に城戸を開き大山の崩るが如くおめき叫んで驅り出でける寄手の勢此の勢にもみ立てられて卽時に突き崩さればつと引けば彈正續ひて追かけ引き取る敵を爰かしこの谷底堀溝へ追ひ込み首を取れば大内備前守も命かな〳〵助かりて宮森へぞ退きける石川彈正飛脚を立て此の由を三春へ注進しければ清顯き、給ひ物始めよしと悦れける、されば頓て四本松手に入るべしとて大膳大夫清顯へ相從ふ人々には舍弟善九郎友顯同く右衞門佐常顯同く小八郎親顯小野入道梅雪齋田村月齋有繁嫡子宮内大夫顯貞同く民部少輔顯輝同く石見守顯朝同く右馬頭顯澄同く右京亮顯義同く善五郎顯繁同く内藏頭顯直田村右馬頭清忠田村右衞門大夫隆信以下數を盡して出陣せらる先づ四本松の内唐矢の城を取り卷き給ふ城中には大内が兵石橋が徐類石橋志摩守同く因幡守澤神民部少輔市内大學園瀨四郎左衞門などと云ふ究竟の兵共多く籠りけ

れば寄手大勢討るゝ者のみにて攻め落す事叶はず寄手の足輕大將富田右近勢を引き揚げ兼ねて難儀に及ぶ所を清顯見給ひ石井甚十郎と云ふ一大剛の兵を呼びて味方の先手早々勢を引き揚げさせ候へと下知せられければ甚十郎承りて先陣へ馳せ行き右近に早々人數を揚げよと云ひければ敵兵繁げく追ひ立て來る故右近彌々合戰に隙なく味方の勢を揚ぐる事叶はずと云ひければ甚十郎先手の鐵砲を一度に打掛け敵を打縮め其の煙のおほひかゝる内に引き揚げよと下知して鐵砲五十挺一時に放ちかけて敵を少し打ち縮めて煙の間に難なく勢をぞ引き揚げける此の時敵方石橋因幡固瀨四郎左衞門を始めとして五十餘人討死す味方大勢討るゝと云へども恙く勢を引き揚げたる事甚十郎が働也とて清顯大いに感悦有り田村の内椚山と云ふ所を領地に下し給はる其の後四本松の内糠澤の要害へ向て田村勢一戰を始める所に城中より黑糸威の鎧に鍬形打たる甲の緒を締め大長刀を馬の平首に持せて切て出る武者有り味方の勢追の敵哉と我れ先に勝負を受けんと驅り合へるに彼の武者嘲笑つて敵も敵によるぞ四本松に隱れなき大内彌左衞門と云ふ武功の兵なるぞ志の輩は何人も寄せ來れ手なみの程を見せんと廣言吐いてあたるを幸なぎ伏せるに敢て近付く者もなし石井甚七遙に是を見て是ぞ聞ゆる鬼彌左衞門ござんなれ組て勝負をやすると思案して靜に馬を歩ませ寄る所早左衞門も石井を目がけて馬をかけ寄せ人交りもせず相戰ふ石井は血氣張勢の者武者大内は名を得たる打物の達者にて暫時勝負は付かざりけるがいかがしたりけん大内長刀の柄を折りて太刀拔んとする所を甚七すかさず大内が右の腕の所をしたたか打ちたれば彌左衞門少し後ろへ退きて胸を立て直す甚七すかさず馳せ寄り二の太刀にて切り伏せ馬より切り落して首を取る彌左衞門が兵十餘人主を討れて何かこたへべき眞黑になりて切て掛る石井兵押隔て相戰ふ其の間に甚七は彌左衞門が首を取り刀に貫いて清顯の前に持參しければ清顯大いに感悦有つて大内は大剛の有る兵なれば彼れ武勇にあやかるべしとて石井甚七を改め石井彌左衞門とぞ名付けられける（石井老年には越前守と號す）田村方には糠澤の軍に勝利を得て大内彌左衞門を討取り勝鬨を揚げてぞ引にける

大内備前守田村の軍を破る事

（十石畑合戦）

天正十二年六月十八日田村より橋本刑部少輔貞綱を大將として究竟の兵千餘騎を引率し四本松の近郷西新殿と云ふ處迄乘り掛け邊りの作毛を倒して所々の小城を攻めつぶさんとす大内備前守成義安からぬ事に思ひ甥の梶内彈正に先陣させて五百餘騎にて十石畑と云ふ處に出で迎ひ陣を取りて控へしに橋本則ち攻めかゝり巳の刻より矢合して入替へ〳〵相戰ひ汗馬の馳せ違ふ音太刀の鍔音鎧突き山谷に響きて夥し事云ふ計りなり梶内彈正は若武者なれば前後に人なく東西に敵有れども知らぬ氣色にて面も振らず切て廻る大内備前守二百餘騎にて横合を眞黒に突てかゝれば田村方追ひ崩されて敗北す大内勢追討ちに討つ程に首數百五六十取り田村境へ林の如く切り掛けたり世に十石畑の合戰とは是なり橋本軍利なふして田村へ歸りければ清顯憤り甚だしく重ねて四本松へ發向して大内と一戰すべしとぞ議せられける

大内二度三度田村の軍を破る事

（青石初森合戰）

田村又四本松の内青石と云ふ所に出張して砦をかまへ五百計りの人數を籠め置き清顯の陣城として四本松を攻めらるべき由内々其の支度有り大内備前是を聞て時日を移さず八百餘騎を率し青石の砦へ取りかゝりて乘り破る籠めたる兵共爰を先途と防ぎけれ共叶はずして敗北する是を追ひ詰め〳〵首數五六十計り取つて又最前の如く田村境へ切り掛けしかば清顯猶ほ富澤式部大輔に勢を付けて重ねて四本松の内初森と云ふ處の要害へつかはし是を守らせらる大内是をきゝすかさず初森の城へ取り掛り一散に攻め付ければ城中の兵共とり合ふて防ぎ戰ひけるが敵は大勢なり味方は續かず終にもみ落されて軍兵共散り散りに田村をさして大將富澤式部大輔は痛を負ふて引き兼ねしを梶内彈正と大河内五郎が兵共取り籠みて式部大輔をば頓て生捕りにぞしたりける今度は田村勢多く討れずと云へ共大内方へ討取る首數三十餘

右の如くに田村境へ切り掛け富澤式部を生捕りて悦び勇み四本松へ引き返す初森合戦とは是なり

大内四度田村の軍を破る事

（滑川合戦）

大内備前守は十石畑青石初森三度の合戦に討ち勝ちて勝に乗り宮森を打出で千餘騎計りにて稲澤村の内滑津と云ふ所迄出陣す田村勢是をきゝて大越の城主橋本紀伊守澤神但馬守郡山大藏少輔本多佐兵衛尉芦澤治部少輔等を先として千餘騎計りの兵供滑津へ掛け合ひ一戦す互に作る関の聲天地に響き山に答へて谷に傳ふ汗馬東西に馳せ違ふ太刀の鍔音虚空に響き切り先より火煙を出し馬煙天を掠めて追ひなびけ追ひ立てられ巳の刻より未の刻迄戦ひけるに勝ほこりたる大内勢なれば田村勢の分際何程の事か有らんと内々侮る程の氣質なれば又今度も田村方散々に追ひ立てられて引き退くを大内勢息をもつかせず追立て勇み進んで成田小屋迄七里が間を追ひ討にぞしたりける田村方郡山大藏大輔澤野但馬守が兵は痛手數多く負ひければ引き返し〳〵思ふ程戦つて終に討死す其の外侍の首七千計り又田村境へ切りかけて兎にも角にも備前守が鉾先は鬼神もたまるまじと廣言吐いて大内は宮森へぞ引き入りける

大内五度田村の軍を破る事

十石畑より滑川の合戦迄都合四度迄田村方討ち負けしが安からぬ事哉と清顯大いに怒りて天正十二年八月自分馬を出し四本松の内千石森と云ふ處迄出陣有り新城を構へらる相従ふ人々には舎弟善九郎友顯同く右衛門佐常顯中津川小次郎親顯を初めとし彈正入道月齋父子小野入道梅雪齋父子小野右衛門大夫隆信常葉伊賀守清重橋本刑部少輔貞綱同く紀伊守信貫以下の一類都合二千餘騎にて千石森の東西廣野に駒の驅り場を前に殘して南北に分れて陣を取る大内備前守成義は百姓町人等にとくと心を合せ時分を見合せ野伏戦にして悉く討取らんと相謀り我身は千餘騎を率して八月十二日の未明に千石森へぞ寄せたりける田村の兵共出合ひて相戦ふ月齋下知して餘りに逸りて深入りするなと制せられけれども數度の戦に負け腹は立ちたり早り雄の若者共なにかは少しもため

らふべき清顯の舎弟田村善九郎を先として我も〳〵と備を亂して切つて掛り敵も味方も入り交りて辰の刻より入り替り互に相戰ふ友顯は一人の直乘りに紫縅の鎧を着て高角打たる甲の緒をしめ金作りの太刀を帶し二十四指したる切符の矢を負ひ塗込藤の弓を持ちて大鹿毛なる馬に乘り一陣に進んで指詰め引き詰め散々に射る爰に笹の丸の大旗一流飜して勢の程百五十騎計りも有るらんと見へし一群控へ居たるは大内にぞ有るらんそれならば組みて勝負を決せんと思ひければ若武者には目もかけず笹の丸の旗を目がけて攻め入り戰ひけるかゝる所に大内兼て約せし町人百姓共軍見物の體にて大勢出合しが合圖の時分は今なりとて大勢一時に田村の後陣へ切りかゝりしかば是は如何にと周章騒ぐ處を大内が兵共勝に乘りて爰に馳せ返しかしこに追ひ立て攻め詰〳〵切つて落す田村善九郎の乘られたる馬敵の射捨てたる矢尻を前の足の爪に踏み立てゝ足を引き兼ねしかば乘替に乘らんと味方を控へられける處に大内が方より雨霰と放つ鐵砲にて友顯の馬數ケ所傷を蒙り屏風を倒す如くがつぱと倒れ伏しければ善九郎も前へどつとあまされ起き上らんとする所を起しも立てず四本松小濱の町人喜萬新衛門と云ふ者落ち合ひて終に善九郎をぞ討留めける是をば知らず善九郎殿の見へぬは如何にや〳〵と田村の軍兵共爰かしこと走り廻りて尋ぬる處に敵の方より聲を揚けて鬼神の如くさたせし田村の御曹司の御舎弟善九郎友顯をば喜萬新衛門と云ふ者手にかけ奉り討取り申せしと聲々に呼りければ友顯の郎等今は是迄なりと三十八騎何時の爲に惜むべき命ぞと聲を揚け大勢の中に討入り相戰ひ一人も殘らず討死す大將の清顯も舎弟の善九郎は討れ今は是迄ぞと馬を進め鎗を取り働けば鬼生田彈正富田右近前館主水等馳せ寄りて大將の先途を見届けんと自ら敵に當り堅を碎いて相戰ひ白刃相交り矢叫びの音馬の足音天地に響きて動搖たり大内が兵に楯川と云ふ剛の者太刀を抜き放ちて清顯の後ろへ廻りおがみ討に二太刀討を清顯も太刀を抜いて受け流し暫し戰ふ所に前館主水大太刀を眞向に振りかざし驅り隔つれば楯川清顯を捨てゝ引き退く田村勢追ひかけしかどもかまはずして引き退く所を鬼生田彈正の組下の侍に菊池新助と云ふ精兵の手なれ有るが駒かけ出

し追掛りよつ引ひやうと放つ其の矢あやまたず楯川が首の骨を左の小耳の下へかけて射抜きければ楯川二言とも云はず馬より眞逆様に落ちて死にける菊池が兵馳せ寄つて首を取る清顯を二太刀迄討たる剛の者を即座に射殺す條拔群の高名なりとて清顯大いに感悦し給ひ歸陣の後菊池に數々の褒美を賜りける田村方赤沼越前守が嫡子赤沼七衞門尉も討れぬ田村勢悉く敗北して軍難儀に見へしかば新田民部少輔顯輝と田村石見守顯朝と駒を並べ清顯の前へ來つて早々御馬を入れらるべし大内御追伐の事此の軍に限るべからず後殿仕らんと頻りに諫言しければ清顯宣ける は善九郎討れ右衞門小治郎梅雪月齋は驅り立てられぬ今は田村の運命窮りぬとこそ思ひ善九郎が討れたる所へ行き死骸を枕として討死すべしと猶かけ入らんとせられしかば民部少輔大いに怒りて大將の覺悟は驅る時を得て驅り引くべし時を得て引くこそ良將と申し候へ賤しき町人百姓等に支へられて善九郎殿討れ給ふは口惜しくは思召し候はぬかか程云ひ甲斐なくも思ひ給ふ哉重ねて大軍を催し何ケ度も四本松を攻められば こそ善九郎の追善にも成るべければ早早御馬を入れらるべしさなくば民部兄弟御前にて切腹仕るべしと血眼になり大聲揚げて諫められければ清顯理に服しさらば各々兄弟後殿致さるべしとて田村の方へ馬を引き向け給へば顯輝顯朝悦んで兄弟二騎相並んで近付く敵を討拂ひ靜に退き給ふ敵もさ迄は長追はせずかゝる所に顯輝の舍弟宮内少輔顯貞を馳せ來れば彌々力を得て難なく田村へ歸城せられける彈正入道月齋は馬を射られて歩行立になりしを小沼甲賀守乘り替を引き來り是に乘せて引きける大内方勝に乘じ田村の後れ口をさへ切り留めばと百姓町人迄悉く切り合い追詰〳〵討取る程に夜に入りて大内方彌々勝利を得田村方は散々になりて千石森東西の麓の城下かしこの谷崖にて討取らるゝ者數を知らず夜明けて大内方へ討取る首數八百餘級とぞ聞へしなり其の首どもを又田村堺へ切りかけしかば大内が武威益々近隣へ響き鬼神も角やとぞ覺へしさしもの天魔の如く恐れられし田村の武威を部合五度の戰ひに大内方討ち勝ちければ其の武勇仙道中を靡さずと云ふ事なし會津よりも須賀川二本松よりも使者を以て悦びせらる大内備前守は今は清顯の武威恐るゝに

足らずと他迄廣言吐いて嚴角玄番允平石甲斐守が城廓竝小濱小手森四本松へも兵粮を入れて成義は宮森へ歸城す百目木に居たる石川彈正も一度大内を追ひ崩せし程の武勇の者なれども此の度の大内の振舞を見て自力計りにては大内と合戰叶ふまじと思ひければ重ねて田村の後攻めを待ち敢て顏を差し出す事もなければ彌々大内が武勇強大にこそはなりにける

岩城常隆出張並常隆由來之事

大内備前守數度の軍に戰勝ち田村方敗北する由近國に隱れなければ岩城平の城主岩城左京大夫常隆此の折を得て馬を出し九月十三日新町の内赤沼と云ふ所へ押寄せ吉鳥屋と云ふ山上に陣を取り給ふ先陣三坂越前守二陣竹貫三河守嫡子中務大輔父子なり傍田村方小野右衛門大夫隆信右馬頭清忠大越紀伊守信貫が手の者共驅り合い赤沼にて一戰す岩城激しく攻め詰めて赤沼加賀守小野彦七郎が兵共相戰ひ追ひ崩して首數五六十討取りしかば田村方是にも討負けて赤沼の城へ引き籠る同十月常隆三千餘騎にて小野の城へ取り掛り谷津作村に陣を取りて小野の城を攻めける三坂越前守竹貫三河守手なれの射手を揃へて新町の舘を破らんとす田村右馬頭が兵共身命を抛ち防ぎ戰ふにより左右なく攻め落すべしとも見えざりければ岩城勢まん丸になりて先づ勢を引き揚け谷津作村に對陣取りて居たりしに相馬長門守義胤岩城の留守を窺ふ由猪狩中務大夫飛脚を以て早々歸陣有るべき旨告げしかば常隆新町をば打捨て岩城へ歸陣せらる小野新町の者共も大内に數度討ち負けたる後なれば常隆の出張を殊の外氣づかへけるに常隆早々引き取り給へば暫らく安堵の思をなす抑々此の常隆と申すは人皇五十代桓武天皇第五の皇子一品式部卿葛原親王の御末にて平氏一流の正流なり葛原親王より四代に當れる常陸大掾國香と云ふ人の二男鎭守府將軍陸奥守平繁盛の四男出羽權守安忠の息男出羽治部大輔則道と云ふ人仔細有りて奥州岩城郡へ配流せらる則道岩城に住してかすかなる體なりしが子孫相續して氏を岩城と號し終に一郡の主となり則道の息忠清を始めて岩城治郎と號す其の子二郎清顯其の子太郎師隆其の子隆行其の子隆守其の子隆平其の子義衡其の子輝衡其の子輝義其の子下總守隆忠入道實山と號し

此の隆思より五代に當れる岩城左京大夫重隆と云ふ人一女有りて男子なし然るに其の一女を以て出羽の長井の領主伊達左京大夫植宗の嫡子太郎晴宗に嫁せしめんと密に約諾しけるが岩城の家臣志賀右衛門と云ふ者申しけるは白河の領主結城の某を聟とせられ然るべしとて白河と堅く約する故に其の頃は何事も此の志賀が計らひなりければ重隆忽ち伊達へ約を變じて白河の結城を聟とせんとす伊達植宗大いに怒りて二本松の畠山を語らひ軍兵を催し岩城へ押し寄る重隆是をきゝて則ち木戸川と金剛川を支へて戰ひけるに岩城勢破れて大勢討れたり然る所に相馬大膳大夫盛胤と田村大膳大夫義顯石川須賀川の人々に云ひ合せて和談の扱ひ有りければ重隆納得して息女を伊達晴宗にぞ遣はしける但し晴宗の一子出生せば岩城へ呼び返して家督を繼せんとの約諾なりしかば晴宗も同く約して一子出生しければ岩城へつかはし重隆の養子とす成長の後重隆の家督相續して岩城左京大夫親隆と名乘られける此の親隆の息男左京大夫常隆也此の常隆益々武略に達して近隣の城を多く攻め落して諸郡を悉く併呑せんとぞたくまれける

伊達政宗由來並關柴合戰之事

田村清顯は如何にもして大內備前守が武威を攻め碎かん多日肺肝を碎らされけれども大內武威侮り難く咲方五度迄後れを取りければ自力計りにては叶ふまじとて出羽國長井の領主左京大夫政宗をぞ語らはれける清顯には聟なり、政宗を委しく尋ぬるに大職冠內大臣鎌足公の御末從三位中納言山蔭より二十六代の後裔なり此の山蔭の六男にて左京大夫藤原中將と云ふ有り是より九代の後朝宗と云ふ人の子に中村常陸介宗村と云ふ人入道して念西と號し源賴朝卿に從ふて忠功有り文治五年八月賴朝卿奧州征伐の時念西が小供常陸冠者爲宗同く次郎爲重同く三郎爲家等伊達郡澤原にて泰衡が家人佐藤庄司等と戰ふて大いに功有るにより其の時伊達郡を下し給はる宗村より六代の末伊達宮內大輔行朝入道丹如と號す尊氏將軍に仕ふ其の子彈正少弼宗遠法名は宗翼と號す其の子大膳大夫政宗と云ふ初めて羽州長井の庄を掌握す此の政宗無雙の歌人なり一ト年屋代の峠に陣する時に山家の霧と云ふ題にて讀める歌に

山あひのきりはさながら海に似て
なみかときけば松かぜの音

又山家の雪に題して

中々に九折（ツヅラ）なる路たへて

ゆきに隣のちかき山さと

と云へる二首の歌を詠じてこそ歌道の達者とは知られける時に新續古今集勅定によりて撰まるゝ折からなりければ政宗よみける右之二首の歌を献じつゝ勅集へも入れられけるぞと聞へし此の政宗を東光寺殿儀山圓孝と謚す偖て其の子兵部少輔成宗其の子大膳大夫尚宗是を護國院香山圓桂と號す尚宗の息左京大夫植宗と云ふ永祿八年六月十九日卒す知松院直山圓入と謚す其の子左京大夫晴宗天正五年十二月五日卒去其子太郎親隆は岩城重隆の家を繼ぎ二男大膳大夫輝宗伊達の家を相續有りてより漸く武威近隣を靡がす輝宗の子左京大夫政宗なり此の政宗元服有りし時父輝宗加冠有りて則ち政宗と付けらるゝ事先祖大膳大夫政宗武勇名高く歌道達人と呼れし事有れば夫れにあやかるべしとて政宗と名付けらる堅く辭せらるゝと雖も輝宗慮有りて名付けらる由申さるゝにより て政宗とは名付けられける果して成長の後武勇知謀の名將とはなり給ふ天正十二年十月輝宗四十一歳にて隱居有り息政宗十八歳にて家督相續有りければ近隣の諸大名より祝儀の使者多く長井へ來る四本松の城主大内備前守成義も米澤へ來りて是を賀す政宗の威光是を始めとす然るに隣國會津と境堺を爭ひ年々確執止まざりけるに天正十三年五月十一日の事なるに伊達方原田左馬介新田常陸介と云ふ者を兩大將として會津を攻め取らんが爲に關柴の城主松本備中守同く彈正忠を語らひ原田新田は松本を案内者として搦手へ廻り政宗は穴杉九郎五郎を案内として檜原峠より向はるべしと評定相定り密に亂れ入らせらる會津にも此の由をきゝて時日を移さず大軍を率して出向ふ中ノ目式部大輔と本名玄允慶德善九郎は手勢七百餘人を引率して小荒井の宿にかゝり海道を眞直に寺窪と云ふ所へ討て出る伊達の原田左馬介新田常陸介は三千餘の勢を三手になして原田は二陣に控へ大用寺川の此方に惣社の原に陣し新田は遙に進んで土橋瀧川を打渡つて稻田の白山の社の前に透間もなくぞ陣取りける又鹽川に居たる黒川勢の内佐瀬源兵衛尉は兄の中ノ目式部大輔が行末心許なしとて我が一味の足輕供を引率し鹽川の海道を勝れの里にかゝり

新田が控へたる稻田白山の社の前に着くと等しく討掛り散々に戰ひけるに伊達信夫の兵其聲より山路の嶮難を打越へて長途の疲に出合たる事なれば右往左往にかけなやまされて敗軍すこらへ兼ねて中田附へ引き退きしが爰をも破られて猶龍寺村の内土橋と云ふ所にても返し相戰ふされども黒川勢強くして伊達勢悉く敗北し藥品右近を初として大勢討れにけり又原田左馬介は慶德が旗と味方の新田が旗の色なるを見損じ油斷して居たる所へ中ノ目本名慶德等どつと馳せ寄り突き立たればこはいかにと周章騒ぎ一と防ぎは防ぎけれども終に討ち崩され敗走し先陣の新田も一つになりて敗北しければ會津勢彌々進んで追討に討立るされば目に餘る會津勢熊倉の街道を眞直に惣社の原に押寄せて三方より攻め太鼓をはげしく打てかゝれば伊達勢立足もなくまき立てられて討るゝ者數を知らずされども新田原田悉く引き取りて長井へ歸りぬ松本備中守は姥堂川の邊にて會津勢の内沼澤出雲守と云ふ者に寄り合て討れぬ此の時關柴門光寺の住僧竝舍弟掃門と云ふ者備中守が方の人にて一所に討死す備中守が嫡子彈正は始めより石橋の合戰に加りければ原田が落足に引連れて長井をさして落て行く會津勢伊達の兩將を追ひ崩し松本備中が首を取つて凱歌を唱へて引返す角て備中守が父松本長門守を生捕りて黒川へ連れ來り無道人の親なれば磔來の懲にとて天寧寺の川原に於て串刺にしてぞ殺されける長門守は九旬に餘る老翁なれば最期の體殊に哀れにぞ聞へしなり政宗是より猶憤り深く一度は黒川を攻めつぶして悉く押領せんと常に牙をかまれけるが檜原峠に向ふ城を拵へて五島孫兵衛を入れ置れ內々には猪苗代彈正盛國を語らひ調略を以て會津を攻めつぶさんと企てける且又大內備前が一旦幸澤へ屬すと雖も四本松へ立ち歸りて後政宗の下知にそむきて惡口をなし從はざれば好し其の儀ならば會津追討の軍始に先づ大內を攻めつぶさんと其の支度有りける折節鼻の清顯より四本松追討の後攻め賴の由申し越されければ政宗好む處の幸哉とて異儀に及ばず領承して不日に東安達へ發せらるべしと田村と牒し合されける

奥陽仙道表鑑　卷之六　終

奥陽仙道表鑑　巻之七

小手森落城並針道源太滅亡之事

伊達左京太夫政宗は田村清顯の語らひに應じて四本松大内備前守を攻付べしとて天正十三年の秋長井を打立川俣と云ふ所に出陣せらる田村大膳大夫清顯は去年數度の戰ひに大内に打負けたる恥を雪んと其勢二千餘騎川俣へ打出でられ蕨平と云ふ所にて政宗に對面し偖又大内備前が元へは會津黒川より二本松右京之亮義繼を催促して平田尾張守中ノ目式部大輔等小大勢指繼て加勢有天正十三年八月二十四日伊達田村之兩軍雲霞の如く小手森へ押寄せ相戰ふ城中には大内が郎等荒井半内小野主水楯籠り防ぎ戰ふ備前守も宵より此城へ入りて軍の下知せしめ切て出で戰ふに寄手の先陣切崩されて引退くを政宗の旗本五百餘挺の鐵砲を打立て入れ替りて攻られければ敵打立られて城中へ引籠る二本松勢もつめより軍さすれば政宗も急には攻められず五六里引退きて陣を取られける備前守は城中に小野荒井兩人を殘し置て我身は四本松へ引返す同じく廿七日政宗竹屋敷へ陣を移されば伊達藤五郎成實同上野介政景未明より小手森の城近く陣を移す其の跡に引續ひて白石若狹守片倉小十郎盛重濱田伊豆守櫻田右兵衛尉原田左馬介新田常陸介大條尾張守亘理美濃守黒木肥前守瀨上中務少輔桑折攝津守柴田藏人五島孫兵衛尉等一勢〳〵押續き攻寄る折しも惡風烈しく吹きける間盛實が手より火を放ちて燒立ければ城中是に周章ふためく所を四方より同時に攻入りて悉く撫切にぞしたりける此勢に恐れて樵山に籠たる大内が勢も小濱の城も落ちてちり〳〵になり大内備前守叶ずして九月二十五日四本松の城を落ちて二本松へ引き退く終に會津黒川へぞ落行きける

和田巖角の城も平石村の城も落て今は早川東には針道源太が城計り會津方とては殘りける政宗は小手森を攻落し和田巖角小濱四本松平石の城ものこらず落居せしかば清顯は田村へ政宗は小濱へ移らるべしとて通られけるに針道の城はまだこらへて有ければ

序に攻落す可しとは思はれけれども是しきの小城攻ずとも降りなんと油斷してのさ〳〵と城の麓を通られけるを針道源太が一族に針道源兵衛と云へる不敵の者有けるが矢倉に登りて政宗とは云はず政市座郎此所は苧澤山なる處なれば苧勸進に來るかと嘲笑ひければ政宗是を聞きて甚だ怒り惡くし其の儀ならばふみつぶせとひた〳〵と取り掛り無二無三に攻め入らんとしければ源太も聞ゆる兵にて打出で散々に相戰ふ寄手打るゝ者を數知らずさしもの政宗攻めあぐみて向ふ陣を取り其の日は牙をかんで控たり、翌日又押つめ持楯かは楯突しとみ〳〵ゑいや聲を揚て城下の町屋に火を掛け攻入ければ源太散々に攻め立てられ主從百餘人一人も殘らず城戸を枕として討死す殘るところの足弱共は裏つたへに木幡山飯野を指して退きければ政宗一旦の怒に多くの兵を討せけれ供針道源太の首を取りて城を踏みつぶし兎にも角にも伊達の弓矢は強かりけりと廣言吐て小濱へ陣を移されければ父輝宗は宮森に陣を取られける

二本松義繼伊達輝宗を討つ事

二本松右京亮義繼は其の元祖數代奥州探題にて名家なりと雖も時代遙になり下り家衰へ名消て有るかなきかの體なりければ終に會津芦名の手に屬し多年彼の下知を重んじ今度も大内が許へ加勢の先陣として發向せられしが大内已に討負け川東一圓に政宗に屬せしかば今は我れ一人有て二本松の城抱ん事叶ふまじと思はれければ伊達輝宗の叔父兵部大輔實元が八丁目の城に有りける義繼の家臣遊座下總守多年知る人なりければ下總守を以實元を頼み輝宗政宗父子へよきに申て御味方に參ん可く云入れられしかば政宗父子限りなく悦び對面有る可き由なれば天正十三年十月六日義繼宮森へ行て降參の禮をなし頻に彼の下知に從ん事を乞はれしかば輝宗父子七日豊過藤五郎屋實の陣に來りて義繼に對面有て義繼の子息梅王を人質に渡す可き由約束せしが同く八日の朝義繼は郎等鹿子田和泉守高橋内膳大槻中務少輔半澤源内遊座孫九郎以下屈強の侍供二十三騎を召具し宮森へ來て輝宗に對面す此の時下部の雜説に義繼を謀討にす可しと云ふさた有る由鹿子田和泉守の家人聞き出し主人に告げしかば急ぎ此の由を京亮に私言しけるに

義繼打駭き安からぬ事に思ひ輝宗と對面し其の座の首尾によりて安否を究んと思はれければ和泉守を始として郎等供指心得座中に目を配つて一列退出の時に及びて輝宗送り出でられけるに伊達上野介政影と同藤五郎成實と二人左右に付き添へ左右なく討つべき樣なかりし所に庭前に下りて柴の袖垣有りて口狹かりければ政影と成實は跡に控へ輝宗計り先へ出らる所を義繼すかさず和泉守に目配しまさのふも某を闇打にせられんとは情なしと云ふ樣に輝宗の胸つくしを取りかいつかんで引立走り出られば和泉守同く刀を抜いて輝宗に引つそい引出す高林内膳大槻中務等各々大刀を抜いて敵を拂ふ半澤須田遊佐孫九郎弓に矢を番ひ鎗に穗を揃へて二十三騎の兵供輝宗の前後を取りかこみ既に東路十里餘を引延べ平石村の内栗巢迄引き退きけるに伊達藤五郎同く上野介等此の由を政宗に告げて遁くる跡をしとふて追ひ來る又政宗は鷹居へて狩場へ出でられしが路にて是を聞き大いに驚き直に追ひかけ來り鐵砲を放ち掛け攻めしかば義繼も今は叶はじと權現谷地と云ふ所にて輝宗を一刀に害し我身も腹十文字に掻き切り自滅せられける政宗の軍兵すきまなく追ひかけ戰ひければ鹿子田和泉守を始め二十三騎の輩殘らず討果してけり

二本松よりも迎の大勢出合しかども早軍散しければ力なく二本松へ引き退き義繼の子息九郎義綱其の頃は梅王とて十二歳になられしを大將に取り立て義繼の從弟新城彈正弼を後見とし鹿子田和泉守が嫡子同苗右衞門佐を始遊佐丹波守同く下總守堀江越中守氏家新兵衞尉箕輪玄蕃允等都合二千餘人にて籠城す偖て政宗は輝宗の死骸を小濱へ送りて早速長井の資福寺へ送られ形計りの葬禮を營みける輝宗今年四十二歳覺範寺殿性山受心と諡す家臣遠藤山城守同く馬場七右衞門尉多年輝宗恩顧の者なりしがせめては冥土の御供して死後に御恩を報せむとて二人供に殉死せり又須田伯耆守入道道苦と云ふ者は長井に有りけるが之も輝宗の恩深く蒙りければ長井に於て切腹す政宗是を聞きて百餘里隔たる所にての殉死其の詮なしとて大きに不興して道苦が嫡子も伯耆守と云ひけるが左迄の忠賞にも預らざれば深く政宗を恨み後に蒲生氏鄕へ返り忠して政宗の惡事の程を訴へけるとぞきこへける

二本松籠城の事

伊達左京大夫政宗は父大膳大夫輝宗死去の後は一向に二本松を攻めつぶして仇を報せんと謀計の外他事なし天正十三年の暮宮森を打ち立ち逢隈川を打渡りて政宗が城より南に當りたる大原山へ打登りて陣を取らる

大原山は後世俗に呼んで愛宕山と稱す又政宗陣場ともいふ竹に雀の大旗を霧山（今二本松城の事）の下風に吹き靡かせて東西四五町が間に透間なく屯す、伊達上野介政景同藤五郎成實白石若狹守櫻田右兵衛尉濱田伊豆守伊藤肥前守富塚近江守瀨上中務少輔中島伊勢守中村主水桑折攝津守大條尾張守柴田中務以下の諸勢は大原山の東の端に沿て荒井山狐の崎北向の峯々東光村の峯々に一勢一勢引分て嚴しく陣を取り詰矢掛近くぞ寄せたりける片倉小十郎盛重は他の勢を交へず己が手の者三百餘騎にて東光寺の後ろ松濱山（今世に摩尼寶山と號す）によじ登りて七曲の嶺續きと南と云ふ在郷の西なる山に打登つて鐘の紋畫きたる大旗を安田多良山の大嵐白旗峯の西風に飜させて一馬を皆西頭に揃へて陣を取るされば其の對陣の間諸勢一馬の鞍を下し山の頂なる石に掛けて暫時馬を休めたる其の所を後世鞍掛石と名付けしも此故とぞ偖又二本松梅王は今年十二歳後に九郎義綱と號す弟七郎後右京之進國次と號す兄弟幼稚の事なれば軍の掛引は新城彈正少弼鹿小田右衛門佐が計ひなり遊佐箕輪堀江氏家等は内々小十郎としめし合す事や事や有りけん萬事の相談にのらず殊に遊佐下總守は伊達藤五郎成實と別懇の中なり義繼討れて後は安積郡の武士供悉く政宗に心を通じ二本松に背く者多ければよしや身を退きて伊達の厚恩に預らばやと思ひければ密に成實盛重等が元へ矢文を放て寄手へ奉公すべしと相約す又高倉近江守も元は義繼の一門にて畠山治部少輔の子なり安積郡内高倉の城主にて五百川を前に控へ殊に勝れたる城なれば先手田村大膳大夫清顯安積郡へ出張有つて片平村迄其の道二十四五里が間を手に入れ給ふ時にも高倉の城は落ず只治部が心一つにて清顯へ奉公をばいたしけれかゝる城地を抱へ居たれば縱へ二本松城より大勢を以て攻める共容易に落ちざる可しと思ひければ是も政宗へ使

者を立て御味方申す可しとて云ひつかはしける偖又氏家新兵衛は本宮の城代にて高倉とは間僅なれば是も近江守と牒し合せ伊達へ内通をぞしたりける今はや二本松とては高玉紀伊守が嫡子同太郎左衛門綱頼と太田主膳阿子島治部少輔荒木工之允など計り西安達の邊には殘れり去程に政宗はいとゞさへ寒國なるに嶽風の烈しくて雪と霰の夥しく降り積れば軍すべき様もなく大原山に陣營を固くして只城をにらんで控へられけるされば多の夜の上天高く澄る空に城の本丸と覺しき方を遙に見渡せば篝火の様なるもの雪中をかがやきて俄に二本松の城日中に見しとは事替り本丸の高き事蒼天によじ登りて九萬層とも云ひつべし政宗大いに驚きいや〳〵是は音に聞えたる名城にて古の城主畠山上野介高國入道信元生れたるまくらの二生を以て本丸に築入れたれば牛の精や入れけん敵寄すると夜な〳〵此城高くなりて雲上へのび上り又は霧を追ふて其の形を隠す此故に霧の城とも云ひ傳へたり或は大きなる蜈蚣有て城の腰を廻り是を守護し或は白旗多く何者の所爲とも知らざるに峯々に立てつらねて敵をおびやかせば白旗の城共云傳ふかゝる奇持なる城間近く陣取りて攻めなば如何なる珍事が出で來らむ早く陣所を卷きほこし宮森へ歸る可しと夜明れば陣を引き拂ひ宮森の城へ歸られけるとぞ聞えし後に能く傳へ聞けば城中に鹿子田右衛門佐と云へる大剛の者有りけるが彼は義繼の供して一所に討れたる鹿子田和泉守の子なり右衛門佐が智略を聞き成竹を十五六本切り寄て其の先に明松を結び付け夜毎に足輕供に持せて高く指し上げ本丸の櫓に上つて件の明松を振り廻し東西南北へ往來する様にのみ見へけるとぞ、大原山を引き拂ひ給ふ時不思儀や政宗引き取は何様智略にてもや有るらん誰か有る見て參れと新城彈正下知すれば箕輪玄番允承り某見て參らむとて只一騎黒革威の鎧着て白河毛なる馬に乘り城を出て根崎山と云ふ所へ乘り上りて引き行く敵を遙に見渡せば片倉小十郎是を見てあはや城中より出て喰ひとむる爰を返して討ちらし首尾よくば付け入りにせよと下知して一番に引返せば玄番允少も構はず政宗の陣の後を能く見渡して矢取て打番ひ一筋切つて放ち其の儘馬を引き返して城中へぞ走りかへりける後に玄番謀叛の事顯れて栗が崎にて討れ

し時偖は玄番允が物見に矢文を射んとての智略なる可しかくこふも此事露見して打果しては捨てたりなど新城彈正誠に悦びけるとぞ其の後政宗宮森へかへりて敢て城を攻んともせず只往還の道を塞て兵粮を斷ち粮攻めにせよと下知せられける伊達勢兼てより澁川の城に伊達藤五郎成實有つて奥道を塞ぎ宮森へは政宗陣し給へは川東よりの運道絶へたり、西は又高倉近江守逆心なれば安積郡よりは兵粮塞りて二本松の城次第に粮盡き助の兵もなく難儀にぞ見へたりける、かゝる所に二本松の舊臣遊佐丹波守同下總守箕輪玄蕃允氏家新兵衛尉堀井越中守等隱謀已に決し政宗に内通して片倉小十郎が兵を忍びやかに引入れ本町杉田町塗屋町に火を掛けて裏切りす可く約諾せしも先玄蕃允が居宅粟が作へ小十郎が勢を引入れ遊佐氏家堀江共に皆玄蕃が舘へ集り居て忍び忍びに内談を究めけるに譜代相傳の主を倒さんとする不道人等いかでか天も惠み有らん忽ち此の由新城彈正聞きつけて惡き奴原が振舞がなとて城には鹿子田を大將として梅王を守護せさせ我身は屈強の兵三百餘人引率して直に粟が作へ押掛け一散にもみつぶして逆心の侍共遊佐堀江箕輪を始として一人も殘らず討ちたりける誠に彈正が手柄と云へ忠義の程比類なくぞ見受けられし實にも清和の一流畠山の枝葉なりとて世人感じ合り翌日新城と鹿子田と二人矢倉に上り足輕供に下知して逆臣の者共其の外小十郎が兵共の首共に一々に切らせて都合三百餘東口の山端にかけならべて置れければ伊達勢是を見て偏に鬼神の所爲ならむとて恐れあへり

高倉軍之事

會津にて四天の宿老共相談してさらは政宗と一戰し二本松へ力を付べしとて佐竹岩城白河の人々と牒し合せ仙道中を先規の如くに歸せしめんと評議し大軍一同に安積郡へ打出て同年霜月十四日伊達方なる中村の城を攻め落し敵の首を切る事二百餘級なり是より直に片倉本宮の城を攻め下し北濱へ向つて政宗と一軍して雌雄を決す可しと内談を極む政宗是を聞きて巖角へ出張し先つ方々へ兵を分けて先つ高倉の城には畠山近江守楯籠りて義繼討れし日より政宗へ降りたる事なれば是と牒し合せ一軍せよとて伊藤肥

前守重信富塚近江守濱田伊豆守瀬上中務少輔櫻田右衛門尉を入れ置る玉の井の城には白石若狭守を大將として方々に勢を分つ伊達藤五郎成實は澁川の城に在りけるが政宗より急を告げられしかば時を移さず馳せ來る天正十三年十一月十六日には會津岩城の人々前田澤兵部少輔を案內者として前田澤の南なる原へ打出て陣を取る明れば十七日高倉の城へ向つて合戰す岩城の加勢竹貫三河守は其の名を得たる强弓の精兵をすぐりて六百餘人肩先揃へて六百の矢を一度に放つて將棊を倒すが如くばら〳〵と射伏せられて面を向ける者ぞなき高倉の勢散々に射なやまされてためらふ所へ三河守拔つれて切つてかかり無二無三に追ひ崩す中にも久保田十郎と云ふ大剛の兵卒の花威の鎧着て黑旗に大半月の指物一陣に進み伊達勢の內茂左內と引組みて終にくみ伏せ首掻き切りて差上る續いて竹貫三河守も自身太刀討して高名す是を軍始として敵味方入り亂れ煙塵天を掠めて相戰ふ又會津勢富田尾張守中目式部太夫沼田出雲守等は本宮の觀音堂へ向つて手痛く軍すれば伊達勢每度負色になつて見へけるを伊藤五郎濱田伊豆守白石若狭守高野壹岐守原田左馬介片倉小十郎伊達元安同上野介同美濃守同彥九郎等汗水になりて防き戰ければ本陣は崩れず會津勢も戰勞れてさつと引き陣營を固めければ其の日の軍は果にけり、會津白河須賀川石川岩城佐竹の人々勝に乘ると雖も不慮なる事出來たり佐竹より加勢に來る義政と云ふ人馬の四下せし下人を湯洗の仕樣惡きとて足にて下人を踏みけるに不敵のくせ者にて頓て其の足を引かせす主の義政を引き倒し卽坐に切り殺しければ側に有ける者共大いに騷き騷て頓て彼の下人を捕へずた〳〵に切りて捨てにける、是に依つて諸陣靜ならず會津の人々も心を置きていや〳〵長居は無益なり重ねて軍有るべしとて殘らず陣を引き拂らひて本陣へかへりければ政宗も同じく馬を入れられける

澁川軍並梅王沒落之事

天正十三年も暮れて明る天正十四年正月朔日の事なるに二本松梅王の家臣鹿子田右衛門佐千餘人を引率し澁川の城へ押し寄て一戰を始め伊達盛實郎等羽田右衛門佐遊佐藤右衛門志賀大炊左衛門等出て向へ

力を盡して防き戰ひければ右衞佐深入りはせず味方負け軍と見て引き退く敵勝に乘じしたひ來るを右衞門佐澁川の此處なる端山の茂が陰に伏兵を置き敵を難所へ引き入して一同に取りて返り伏兵忽ち左右を討ち三方より操り立てしかば澁川勢思の外に討ち立てられて討るゝ者數十人手負は數を知らず八丁目へ引き退く鹿子田も一戰の功を空うせじとにて双方相別れて引き退く其の日二本松二百六十三人討死す件の遊佐藤衞門と云ふ者は澁川の舊主にて遊佐新左衞門と云ふ者の子なり代々二本松の郎等なりしが何時しか伊達兵部大輔實元が手に屬して子息成實に仕へけるとぞ、成實頓て打取る所の敵の首二百六十三各々耳鼻そいて宮森へ進奏すれば政宗當年の物始にとぞ悦れける去程に二本松近邊皆政宗に屬し二本松の城へ加勢の路絶えければ梅王が兵俣兵粮盡き籠城叶ずして新城彈正鹿子田右衞門佐等相計ひ二本松梅王と同じく七郎を具して同年七月十六日二本松の城に火を掛けて會津を指して落ち行き給へば政宗頓て入れ替り城の掃除なさしめ其の後二本松をば伊達藤五郎成實に與へ大森の城を片倉小十郎に與へ四本松の城を若狹守が忠賞に宛て行はれて八月始め頃政宗は米澤へ歸城せられたりあゝ悲い哉畠山探題累代の家續きたりし二本松も伊達の武猛に碎れ永く先祖の領地を他人の物とせられしこそ口惜しき事ども也

龜王丸早世並佐竹義廣會津の家を繼く事

天正十四年十一月二十一日會津の城主芦名龜王丸急病にて俄に早世有りければ芦名の門葉火を消したる心地して忙然たる形勢なりしがかくて會津に守護なくては叶うまじとて芦名の一族猪苗代彈正忠盛國金上遠江守盛備中目式部大輔其の外旗下には田島豐後守實國が嫡子孫七郎盛秀横田の山内刑部大輔氏綱伊南の河原田治部大輔盛次並會津四天の宿老富田美濃守平田左京亮入道沼澤出雲守澁川助左衞門尉等白川結城七郎義隣と相談して常陸佐竹義重二男義廣を申受けて會津の領主と定めければ義廣天正十五年三月三日會津の城へ入り芦名平四郎義廣とて三浦介佐原十郎左衞門尉義連十八代の家をぞ相續せられける義廣會津へ養子のこと宿老富田平田等得心せずして

伊達政宗の弟政道をこそ然る可しと云ひけれども金上盛備沼澤出雲守澁川助衛門尉白川義隣等相議して義廣然る可しと強て是を進め芦名の家督と定め前の三浦介盛隆息女を一人持ちけるを義廣の簏中と定め主君と仰ぎければ富田平田山内等を始め心に合はぬ主とは思ひながら一族衆の命又指をさす可き樣もなくて年月をぞ送りける

田村清顯卒去之事

田村の城主前大膳大夫從五位上侍從坂上宿禰清顯は數年隣軍の諸將と相戰ひ武威を仙道中に振ひ名を上方迄響かし給ひしが無常の敵は防ぐに手段なく病腦身を責て醫術其の驗なく天正十四丙戌年十月九日終に卒去せらる謚して長雲院殿雲岳松香大居士と號す繼子なく女子一人田村御前とて有りけるが是は伊達左京大夫政宗が室なりければ此の由政宗へ申て兎も角も田村の城守護せらるべく宿將共相談せしめ此旨長井へ注進しければ政宗驚き福島迄出られけるが早や卒去之實證を聞き屆けられて夫より使節を以て後室の元へ清顯卒去憚り存するの旨訪ひ申され政宗長井へ歸へられける

そも〳〵清顯の連枝數多き中に善九郎友顯は天正十二年八月十二日四本松の内千石森の合戰に討死せらる其次ざの弟孫八郎重顯は去る天正八年三月十二日磐瀨郡鹽田洞樫の内合戰に討死せり其の次の弟田村右衛門佐常顯中津川小治郎親顯とて兄弟二人あれども家老の面々如何思ひけん此の人々は養子に立すして田村の城には清顯の後室を据へ奉り萬事の指引は清顯の叔父田村彈正入道月齋幷に小野右衛門大夫隆信田村入道梅雪齋橋本刑部少輔貞綱此の四人にて諸事行はれ清顯の後室は相馬長門守義胤の叔母なる故内々小野右衛門大夫隆信と梅雪齋と二人相議し義胤を賴み田村の城を抱んとす田村入道月齋と橋本貞綱は又伊達政宗を賴み田村の城を抱んとし互に其の中好らず月齋貞綱内々飛脚を二本松へ遣はし伊達成實に通じて右衛門大夫梅雪齋の惡逆を一々注進しけり右衛門大夫梅雪齋も内々は相馬に一味して上べはさりけなき體に見せ田村へ奉公をなす事又他事なき樣にも見へたり

赤谷之城落る事

爰に越後の大守上杉越後守景勝の郎等新發田因幡守治長同く源太父子景勝に背きて會津の旗下となり因幡守は越後國五十美（イシミ）野の城に楯籠り嫡子源太は新發田の城に楯籠りて景勝と相戰ふ此の者共は北國中に隱れなき剛の者にて鬼新發田と名を呼れ景勝の養父管領輝虎の時分世に知られたるくせものなり景勝彼等が背きたるを憤りて自ら馬を出し攻め來るにより會津よりも數多の加勢を推し向けて新發田に力を合せて戰けれは上杉も度々利を失ふ事多かりける兼て會津より越後と與州を入れ置き新發田父子に力を添られけるに天正十五年十月上杉越後守景勝諸軍を引き具し藤田能登守信吉安田上總介行易甘粕近江守景持等を先とし大軍にて赤谷の城へ押寄る小田切三河守は僅か二町にても足らぬ小城にあさはかなる要害を頼みてかかる大勢を防くは計略なきに似たりと思案して館の下なる夏井川を渡り三丁南に當りし山々の嶺に取り上り俄に要害を構へて防ぎ戰ふに景勝透間もなく稻麻竹葦の如く打圍んで是を攻る事烈し

く息をもつかせず三日三夜攻めたりけるされども三河守は會津にて大剛の覺へ取りける不敵の曲者なれば少しも屈せず今日を最後と思ひ切り一足も退かず太刀討して防ぎけりされば今に到るまで山を大將陣と名付野を館野と云ふも此故なるとぞ景勝大勢を進めて山へ取り上り谷をうがちていろや聲を上げて攻め上りければ小田切百騎にも足らぬ小勢にては有り助けの兵もなく皆悉く討れにけり三河守只一人になりて最後の軍心よくしてこそ腹を切らめと鎧の袖も草摺もばら〳〵と引きちぎりかなぐり捨て胴計りきて大長刀を水車に廻し切つて出でたる形勢は毘沙門樊噲周勃もかくやと思はれける越後勢は谷峯も嫌らはず攻め上る三河守楯裏に控へて散々に突き伏せなぎ伏せ狂ひければ流石の兵共三河守が手の下になぎ伏せられて手負死人八十餘人人なだれをついて切りたりしはすさまじかりける働なり三河守是を見て今は罪作り詮なしとや思ひけん楯の裏へ引いて入り上帶解て鎧をぬぎ捨て腹かきゝりて伏せければ遖れ大勇の振舞かなと名を後代にぞ知られける寄手一同に攻め入りて悉く打ち取り勝鬨上げて引き返す其れよ

り景勝勢に乘じて十月二十三日越後五十美野の城を攻め落し同じく二十八日夜新發田の城をも攻め落して因幡守治長同じく源太父子滅亡せり是より會津と封境を爭ひ其の中よからず此の景勝と申すは桓武天皇の御末鎌倉權五郎平景政後胤長尾新六定景より十餘代の孫信濃守爲景入道道七が四男彈正少弼景虎後に關東の管領に任せられて上杉輝虎と改め法名謙信と號す北條左京大夫氏政が末子三郎を養子として政景と號す謙信死去の時甥の景勝と政景と鋒楯有り景勝は謙信の姪聟長尾越前守の子なり政景は仔細有りて信州野尻辨才天の池殺が崎と云ふ所にて謙信の命により宇佐美駿河守定綱に殺され其の子息喜平治景勝又謙信の養子政虎を亡して上杉家を相續せられけり

奥陽仙道表鑑卷之七 終

奥陽仙道表鑑　卷之八

大崎義隆由來之事

其頃大崎左衛門佐義隆と申は清和天皇の御末八幡太郎義家より六代の孫斯波尾張守より四代に當れる足利尾張守高經の弟大崎伊豫守家兼より十二代の末葉として代々奥州の大名なり高氏將軍の時大崎家兼奥州の探題に補せられて下向せられしに此の人の祖父家内書年下總國大崎郡を領せられて累代氏を大崎と稱す故に此の人の稱號によりて此の地をも大崎と稱して住居せられける家兼始めは彦三郎時家と號す後には家兼と改め從五位下伊豫守左京大夫に任ず延文十三年六月十三日卒去し四十九歳なり謚して長國寺殿圓承と號す其の嫡子彦三郎直持と云ふ後に左京大夫に任じ奥州探題に補す大興寺殿是れなり次男修理大夫兼頼は按察使に補せられて出羽國最上郡山形の城主に任ず此の人の末葉を最上と號す偖又大崎左京大夫直持の子息彦三郎詮持と云ふ後に左京大夫と云ふ相續いて奥州の探題に任ず金龍寺殿是なり其の子息滿詮をば瀬崎左京大夫と號す奥州田村大越の合戰に討死せらる續燈寺殿と稱す其の子左衛門佐滿持を向上寺と號す、其の子左京大夫滿詮を修身院昌須賀と號す其の子左衛門佐教兼を龍谷寺と號す、其の子陸奥守政兼を長松院同嶽と號す其の子左京大夫義兼を壽松院玉岩と號す其の子彦三郎高兼早世して子なき故に伊達左京大夫植宗末子僧丸を養子として大崎義宣と號す岩出澤の城に住せり仔細有りて葛西へ出奔有り桃生辻堂にて病死せらる其の子左京大夫義直と云ふ其子を大崎左衛門佐義隆なり此の義隆愚昧にして且中頃より大崎の威勢衰へ奥州探題の名も失せ果て僅かに加藤郡伊達信夫の邊を領せられけるに義隆の家臣新田刑部少輔と伊場惣八郎と云ふ者私の遺恨により事起り國中亂れ義隆は新田が爲に方便れて中新田と云ふ所に押し籠められければ愈々國中大いに亂れ騒ぎて合戰止む事なし爰に岩手山の城主氏家彈正と云ふ者松山の城主遠藤出羽守と云ふ者と心を合せ其の外一栗兵部少輔宮野豊後守間山修理亮富澤日向守を語らひ義隆を亡さんと企て長井ハ注

進して伊達左京大夫政宗の出馬を煩しければ政宗も幸かなと悦び仙道表退治の事は遅々するとも先つ大崎郡を手に入れんと泉田安藝守と伊達上野介政景を大將とし軍奉行には小山田筑前守監軍には成田惣右門尉峯修理介等を指添へて大崎郡へ亂入すされば其の地の侍供政宗方大崎方と立ち分れて戰へり大崎へ一味する心なき者共には高岡監物宮崎式部少輔黒澤治部少輔里見紀伊守米泉權右衛門尉谷地守主膳舍弟米澤備前守古川彈正葛太郎左衛門尉石川越前守同く左京亮南條下總守飯川大隅守黒川月舟等なり中新田桑折宮山下新田所々の城に楯籠る政宗へ一味せる氏家彈正遠藤出羽守一栗兵部少輔宮野富澤等相合ふて戰い間もなく政宗より加勢の大將泉田安藝守伊達上野介小山田筑前守等天正十六年三月七日下新田の城へ向ふて合戰を始めけるに軍利なくして小山田筑前守討れける伊達方一旦利を失ふと雖も大崎義隆中新田に有りて勢衰へ運傾きて家臣共逆心を起し領地忽に亂れ右往左往に變化して打出る力もなければ大崎中悉く政宗の手に入る

臺合戰之事

かくて政宗は義隆の領地大崎郡を調議を以て大方手に入られければ此上は會津へ向つて一戰を遂げ仙道中を手に入れんとたくまれけるを會津方大内備前守片平助右衛門等も終には伊達の調議に乘せられて政宗の手に屬し又猪苗代彈正盛國も旗下になり仙道大方政宗に從ひ附ぬ此の故に會津へ調議の程有るまじとて政宗喜悦限りなし斯る所に天正十六年三月廿二日の夜高玉太郎左衛門常賴太田主膳兩大將として討出で玉井城の近邊矢澤と云ふ所に草を入れ忍び來り玉井城を攻んとす此の由味方告げ知らす者有ければ二本松より伊達藤五郎成實早く打出て玉井の勢と一つになりて明二十三日に草を搜すに其の儀なかりければ偖虛說にやとて引き上る所へ晝過ぎ二三十人玉井城近くへ押詰る成實得たり賢しと取りて返し喰留めて臺と云ふ所にて相戰ふ兼て矢澤の小森に玉井の勢二百人程隱し置きたる事なれば悉く起り合討つて掛れば敵崩れて引き退く高玉太郎左衛門尉常賴は緋縅の鎧に鷹の羽打ちたる甲の緒をしめ金の作りの大

刀を佩き二つ引兩の指物さし黒き馬に乗り敵味方兩陣の間を乗り通り味方を下知して静に引くを成實が小姓志賀三郎と云ふ者歩行立ちになりねらひ寄り小河の有る所にて川柳に鐵砲をかけて是をねろうに偏に佐用左衞門範家が元弘の戰に名越屋尾張守ねらひ打せしが如し太郎左衞門斯る事とは夢にも知らず自分太刀打して追ひ來る敵を三人切り倒し邊りを拂ひ氣色ばふて小川を隔て横様に乗り廻るを志賀三郎元來待ちまふけたる矢先なれば二つ玉にて是を打つに一つは高玉の腰にあたり一つは馬の脊のもみ合にあたり馬は横に倒れければ高玉ゆらりと飛び下りたり、高玉の郎等すかさず馳せ付き己が馬に主を打ち乘せて引き退く味方どつときほい押掛しに太田主膳引きかへし敵を追ひ拂ひ殿して静に引く太田は聞ゆる大剛の兵高玉に劣らぬ武勇したたか者にて黒皮縅の腹卷に二たつ引兩の腰さしして近づく敵を討拂ひ〳〵備を崩さずしづ〳〵と引退く主膳小坂へ打上る所を志賀三郎又追掛て是を打つに主膳が腰の後ろ輪を打ち抜き犬子所へ打出ければ主膳うつむきになり腰にさしたる小旗を抜き弟の采女を呼びて是をさせ我れ退きなば味方大崩になる可し汝我に替りて殿を仕る可しと云ひ付けて主膳は馬を早め高玉と一所に引きて入る遖れ大剛の勇士とぞ見へし太田采女兄が小旗をさして主膳は未だ討れぬぞ軍兵共静に引けと下知し心安く味方をぞ引せける敵も長追はせず相引きに引き取り成實の方へ首數百五十三討取り皆鼻をかきて米澤へ遣しければ政宗成實が手柄の程を賞美せられける

石川彈正逆心之事

百目木の城主石川彈正忠は田村へ奉公の身なりしが清顯卒去の後は四本松の白石若狹守が與力に政宗より付けられけり彈正此の事を無念と思ひ逆心を存立て相馬長門守義胤に心を合せて同年四月白石の知行の内四本松の方へ向つて火の手を揚げて謀叛の色をぞ立てたりけり白石若狹守の兵共如何と駭く處に四月十五日石川彈正四本松の内西と云ふ所に打ち出で草を入れ我が身も早朝より出でけるを城中より白石若狹守が兵共是を見付けて討出で相戰ふ彈正物ともせず打ち立ち切り立ち攻め入る所に此の音を聞き

付けて白石若狭守小濱の城より打出て驅け付け切つて掛る彈正が兵共早く引き取り勢を揚んとするを若狭守すかさず追ひ付き首二十計り打ち取りける、彈正手輕く引き取りて百目本へ歸る、白石も西の城に加勢を入れ小濱へ歸る伊達藤五郎成實も二本松にて此の由をきゝて逢隈川を渡りて小濱へ馳せ着きしに早や若狭守歸陣の所へぞ驅け付けたる若狭守藤五郎が助力を悦び頓て成實を宮森へ請じ入て種々の饗應してぞ歸へしける

人取橋合戰之事

さる程に大内備前守片平助右衞門尉等政宗に一味の由會津義廣聞きて大いに立腹しさらば仙道へ馳せ向ひ一々に踏み潰して政宗と一軍せよとて會津勢に須賀川勢を指し添て安積郡へ打出て高倉城主高倉近江守此の由を注進しければ二本松の伊達成實大森の片倉成重と只二人早く本宮へ打出て近江守も來合して軍の評定せしめ信夫勢の來るを待てども未だ一騎も馳せ來らざれば是非片倉と成實が勢計りにても一戰すべしとて玉井本宮に有りけるを催し雜兵彼れ此れ千五六百人にて本宮の觀音堂に陣を取り成實が手勢の內より侍五十餘騎鐵砲を五十餘挺引き分けて高倉近江守に加勢を指し遣す斯て四月十八日の未明に觀音堂近くに寄せ來る會津勢を見れば眞先に進みたる旗は二本松の長臣たりし鹿子田右衞門介と覺しくて只一騎人まぜもせず足輕五十餘人引具して會津須賀川勢の眞先掛けて進み來る其の後に引き下りて須田十郎新屋敷平左衞門尉を先として須賀川會津の勢雲霞の如く引き續きたり味方は石川孫平と云ふ者前登りに進む此の孫平と云ふ者元は二本松義繼の郎等なりしが義繼打れて後ち政宗の臣となり、されば鹿子田も石川も舊友の事なれば少しも後れを見す可きにと誠に晴の軍と思ひ互に身つくろひをするやいなや入亂れて追ひつ返へしつ相戰ふ成實の郎等の羽田右衞門介と云ふ者は名を得たる大剛の兵にて度々の高名數知らず此度も眞先掛けて石川に力を合せて切つて廻れば鹿子田は又仙道中に鬼神と呼れし和泉守が嫡子なれば親子劣らぬ武勇も器量も世に許されたる剛の者にて自分太刀を取り健啖の勇を振ひ切つて廻り追詰め〳〵伊達勢を切り崩し終に石川羽田の勢

を追ひ崩して本宮の觀音堂迄進み來る是に羽田の小姓文九郎と云ふ者有り生年十六歳なりけるが馬上に鎗を取り靜々と殿後をして引きける所を鹿子田が兵供三騎追掛け取り巻きて終に文九郎を馬より下へ切り下して首を取らんとしけるを羽田右馬介取つて返し敵二人を左右へ切り倒し一人に手を負せて追立てければ敵敢へて近付かず其の間に文九郎が首を敵に取らせず死骸共に引包んで引き取る會津須賀川勢人取橋を乘り越して觀音堂迄攻め來るを片倉小十郎伊達藤五郎新手を入れ替へて戰ひ追ひかへさんと是を先途と防き戰ふ爰に須賀川勢の内保土原山城守と云ふ者は保土原江南齋の嫡子にて今年十八歳なりけるが緋威の鎧に高角打たる甲の緒をしめ赤銅作りの太刀を佩いて月毛なる馬に乘り一陣に進んで伊達勢を爰に押詰め究竟の兵六騎迄手の下に切り下す然れ共雨霰の如く打掛る鐵砲なれば山城守八ケ所迄きずを蒙り痛手なりければ引兼ねて終に打れけり、容色又無雙の若武者にて十六歳の時始めて高名し大和守となり去年十七歳にて甲着の首を取り山城守に任せられ大剛の若武者なれば是を見て惜まざる者一人もなし伊達方山城守が首取らんと大勢打つて掛るを濱尾三河守が三男濱尾孫十郎とて是も十八歳なりけるが大太刀を打ち振りて近付く敵の馬の諸膝薙ぎて刎落し〳〵落れは首を取り立所に五人を切り伏せたり其の間に保土原山城守が首を取りて逃げ行くを濱尾其の敵を追ひ詰め引き合ひ頓て敵を切り伏せて山城守が首を奪ひ返して敵に渡さず八面大王の荒れたる如く邊りを拂ひて引き返す迚れ大剛の兵なり實に三河守が子にて内藏介近内が弟程有と皆感せぬはなかりける此の時又伊達勢討ち立てられて會津須賀川勢勝に乘りて討掛る爰に田澤勘九郎とて政宗の小姓なりしが當時主君の勘氣を得て藤九郎成實が元に居たり此の度戰場にのぞみて功名す勘九郎馬を立ち廻し敵を追ひ拂ふて引き退く味方を助く須賀川勢の内より卯の花縅の鎧を着て黒母衣掛けたる武者一騎勘九郎を目かけ走り寄りて勘九郎が乘りたる馬の太腹を鎗にて突き其の時一度に鳥銃肩のもみ合にあたる故に眞逆樣に討返されければ勘九郎下り立ち具足をぬぎ下人に渡し手鎗下げ又引き返し大勢の中へ馳せ入りしが馬上の敵一騎突き落しすかさず首かきりて提げ

引き返して藤九郎に見せたりける味方又觀音堂迄追ひ立てられ鹿子田右衛門佐澁川助左衛門尉須田小十郎新屋敷平左衛門澤井越中守三橋大藏允濱尾近内同孫十郎佐久間主殿介大槻與一郎須田左近日照田大學吉成監物前田信濃守圓谷與三左衛門小原田内膳小川和泉守鈴木帶刀江枝遠江守山寺淡路守荒木田清左衛門尉横澤内膳熊澤四郎左衛門宮崎内記根本左馬允志賀左助佐藤主水下枝掃部を先とし會津須賀川の兵共勇みすさんで分取り高名し伊達勢を追ひ立て切り落し觀音堂迄押詰たり、伊達方牛坂左近羽田馬之助石川孫平三人さたなき味方の有様かなと引き返し八方を拂ひ四隅に當り七顛八倒して攻め立て防ぎ戰ひければ會津須賀川の兵共除りに戰勞れければさつと引けば伊達勢追ひしとふて人取り橋まで追討に討て敵を追ひ散らし首四十三討ち取りて其處にて兩陣一同に引き分れけり世に流布してもてはやしける本宮の人取橋合戰とは是なり會津勢も敵數多く討取り片平助衛門尉が出したる人質を取りて會津へ引き返しける

相馬義胤田村調議異變之事

田村にては清顯の後室を守護し田村月齋橋本刑部少輔小野梅雪齋小野右衛門大夫四人にて萬事を取り行ひける内々梅雪と右衛門大夫とは相馬大膳大夫義胤と内通し逆心を企つ爰に大越紀伊守信貫と云ふ者有り田村の一門にて相馬義胤とは從弟なり田村第二番の大名なりしが此の者義胤と一味す又小野の城主田村右馬頭清忠と云ふは梅雪齋の嫡子にて田村一番の大名なり是も亦相馬と一味せり大越紀伊守は早や已が山城に引き籠りて何事も大越備前守と云ふ者を名代として勤めさせ田村へは出仕せず是に依つて月齋と橋本刑部相計り伊達へ此の由を注進す又梅雪と右衛門大夫等は早く中村の相馬義胤を頼み伊達と事切れ有つて田村の城を抱へ然る可き旨を云ひ遣はさんとしけるを常葉伊賀守等もあへず申しけるは既に清顯遠行の時御名代の事政宗へ申べき由仰せ置れけるを御思案にや及ぶべき伊達家を御頼み然る可しと存じ候さりながら宿老達の御分別もやと眼を見出し居丈け高になりて云ひければ月齋も刑部ももとよ

りの事なれば申すにや及ぶ可きと云ひ其の外田村の門葉衆議一同して伊達家を頼む可きにぞ定まりけるかくて石川彈正逆心して四本松に引き籠り田村の下知に背くにより月齋刑部少輔より白石若狹守を以て彈正謀叛せし故定て相馬義胤を引出し申す可く候政宗殿早々出馬有りて御退治なされ候へかしと長井へ注進しけれども政宗は出羽の最上義光と仲不和になりて取合ふ時分なれば石川が謀叛を靜める事は先つ延引せり月齋刑部頻りに政宗の出馬を促しければさらばとて四月十四日政宗大森迄出馬せられけるに東の筑館と云ふ所へ移られ石川が抱の城は筑館と小手森の二ヶ所有り小手森は先年四本松を政宗の手に入れし時彈正に加增として賜りし所なり相馬長門守義胤は政宗の出馬の一日前に新館山城守を先陣として筑山へ出馬せらる石川彈正も百目木の城を出て小手森の城に籠り政宗の北南へ打て通らるゝ所を鳥銃にて討ちたるも政宗さらに物ともせず靜々と打通り其の日は勢を打ち上げらる伊達藤五郎成實も二本松より馳せ來りて一つになり折節大雨降りて山路の小坂とも皆ぬかりてすべりければ軍勢供進ひ能はず是に依つて政宗二十五日大森へ引き返さる田村には政宗の出馬ありし故石川の滅亡程あるまじと思ふ所に案の外政宗大森へかへり給ふ故月齋刑部を始め大いに駭き偖は石川彈正相馬を引き出しこなたへ寄す可きぞ防戰の用意專一なりとて又大森へ使を立て義胤出馬の時は御出馬され御加勢なされ候得と再三申し遣しけり田村の地にも相馬を引く人多く有りければ外より內を氣つかふて月齋刑部も共に安き心もなかりける偖又大森には政宗筑山には義胤先陣有ければ其の間は雙方の衆出合ふ事は此の砌り如何なれば何樣の用事有るとも兩方より一人も田村へ入れ申すまじくとて月齋刑部相謀り小野右衞門大夫田村梅雪同く右馬頭父子にも其の段を申しつかはし偖又片倉小十郎成重を以て政宗へも內々申し入れ置きけりさる程に相馬長門守義胤は筑山に先陣して田村を一圓に押領せんと明昏調議せられける田村右馬頭清忠小野右衞門大夫隆信內々後室と相談して義胤より內々使來る由にて相馬の長臣新館山城守中村助衞門尉二人田村へ來り五月十一日登城すべしとて其の夜は町屋に宿す、田村月齋橋本刑部は夢にも是を知らず大小となく沙汰せしは伊達衆をも相馬衆をも入

れざる筈の掟なるに相馬より新舘中村二人來るは畢竟明日義胤田村へ見舞の樣に出馬有て直に城を討ち取らんとの支度なる由流布されければ何となく騒き合ひ明れば十二日早朝に新舘山城守中村助衛門尉等相馬よりの使節として登城す橋本刑部少輔定綱は兼て用意やしたりけん切腹の心掛にて又夜の明けぬ内より登城して奥へ通り酒盛してぞ居たりける刑部に一味の兵共五人三人宛云ひ合せ鐵砲弓矢忍び〳〵に用意して城中へ入る凡そ刑部少輔に與する輩三百餘人なり刑部少輔内々に是等に示し合せ義胤登城有らば時分を見合せ鐵砲弓矢を揃へ一同につるべかけに射立て切り立てためろふ所を眞丸になりて城中より切つて出でかさより眞逆樣にかけ落せと軍兵かたく云ひ合せここかしこに勢をかくして刑部は態と知らざる顔にて大盃にたぶ〳〵と引請け酒飲みてぞ控へける山城守も助衛門尉も若黨五十人引き具して來れども使節の事なれば道具はもたせず侍又相馬長門守義胤も忍びやかに出馬せられて田村の城を見廻りながらにてもなく眞に乘り取らんと謀られければ宵より大越紀伊守信貫の兵共七八百人弓鐵砲鳥銃を持ち義胤の下知次第田村の城に眞ぐに攻め入らんと約束して城より東にあたりし林の内深谷に隱れ居る義胤既に城下迄出馬せらるゝ其時田村梅雪も何事なき體にて登城す此の人内々義胤を引き出せし曲者なり梅雪齋登城せしむると其の儘刑部少輔眞綱奥より出て梅雪が手を取つて申しけるは兼て伊達よりも相馬よりも一人も田村へ入れまじきと約束せし所に今日義胤是へ御出の沙汰有るは如何なる事有るにぞや貴殿の心中心元なし只今入る共入るまじくとも屹度分別あられ候へとにらんで申ければ其の勢に恐れ又刑部は聞ゆる大剛の者なれば卽座に殺されん事を恐れて梅雪ふるい〳〵御邊の都合の如くに義胤出馬有るとも城中へは入れ申すまじき心底に候とぞ答へける刑部其の詞を聞いて其の儘具足を着しければ是を見て刑部に一味の兵共ひら〳〵と鎧きて甲の緒をしめ弓鐵砲を揃へて一所に集る田村彈正人道月齋嫡子宮内大輔顯貞民部大輔顯輝田村右見守顯朝淺川右馬介顯澄阿久津右京介顯義木目澤善九郎顯繼大槻内藏頭顯直以上父子八人物具かためて登城し刑部と一所になり田村梅雪齋同く右馬頭隆盛も是非なく物具着して

一列す偖又當葉伊賀守前舘主水鬼生田彈正何れも物具着して控へたりさる程に相馬長門守義胤は僅か百人計りにて押し來り城の坂半分まで登り給ふ所を刑部少輔矢倉の窓を押しひらき申しけるは義胤登城せらるゝ御馳走の爲め橋本刑部が日頃きたへたるところの鳥銃用意仕ると云ふも果ぬに一同つるべかけに打ちければ義胤こは如何にと周章し給ふ相馬の侍二十騎計り袴掛にて押肌脱き義胤の前に馳せ塞り〳〵相戰ふ義胤の乘りたまひし馬の平首にも鐵砲あたりしかば引きかへし東の小口へ出でらる然る所に此の口へも刑部が兵百騎計り馳出で切つて掛れば地形殊更惡しき所にては有り散々に切り立てらればつと引く相馬の侍三百騎計り其の外鐵砲も多く召し連れられけれ共遠き所に引き隱し置きたる事なれば遲くして間に合はず刑部は田村の城を持ち堅め田村宮内大輔は兵を亂して逃れ行く敵を追ひ詰めて打ちにける去越紀伊守が隱し置きたる兵共百餘人悉く現れて戰ひけるを田村宮内大輔物ともせず押詰め切つて落せば大越が人數も相馬が人數も互に過半討れて立足もなく敗北せり義胤危難を逃れて早々田村を引き拂ひて和田村へ掛り筑山指して引き入る大越紀伊守路次に出會ふて暫らく御立ち寄り御休み候得と申しけれ共耳にも入れざる體にて希有にして引き取られける新舘山城守中村助衞門は城中に入りけるや刑部が義胤を防ぐ體を見て早足に馳せ行き逃るを田村の兵共鳥銃にて討留めんと追かけるに刑部少輔是を制して長追詮なし城中を堅固に持ちこたへてこそ然るべしとて討せず其の日刑部が防戰により田村方へ討取る首數百八十三とぞ聞へし頓て月齋刑部の方より使者を立て四本松に居たる白石若狹守が許に告げ知らすれば若狹守早馬を立て大森へ事の由を注進す、政宗大いに驚き其の儘早打にて十三日辰の刻に宮森へ馳せ着き伊達信夫の勢待ち揃へて筑山へ兩日働き出でられしか共義胤も中村の人數相催して千騎斗り雜兵彼是四千計りの人數にて取り向へば左右なく合戰はなかりけり、偖も此の義胤と申すは桓武天皇の御末上總介平高望の後胤千葉介經胤の二男相馬次郎師常の後裔なり師常の子を五郎義胤と號す、承久の大亂に關東方として軍功有り此の義胤より十有餘代を經て相馬彈正少弼從五位下盛胤と號す其の子大膳

亮義胤後に從五位下長門守に任ず先祖の五郎義胤武勇有りしを慕ふて長門守義胤と號す其の威風漸く顯れ奥州中村に居住して近隣岩城田村須賀川東安達の石橋二本松の伊達信夫の大崎等と數年兵を交ゆ義胤伊達左京大夫晴宗の妹等となられしかば輝宗には叔母聟なり故に政宗とは逃れざる仲なりしか其親疎時々に替りて伊達家と水火の如く爭ひ斯の如く弓箭に及びしとなり

石川彈正滅亡並政宗川東所々の城を落す事

伊達左京大夫政宗は伊達藤九郎成實に勢を付けて筑山の押に置き我が身は五月十六日小手森へ押し寄せ鬨の聲揚げるやいなや旗本の勢迄亂して鹿垣逆茂木を引き破り〳〵ゑいや聲を出して攻め入る城中には石川籠り居り打出てて散々に相戰ふ寄手には富近江守伊藤肥前守黒木越中守櫻田右兵衛大夫片倉小十郎濱田伊豆守中島伊勢守亘理美濃守等新手を入れ替へ〳〵もみにもんで攻め入り火を散らして焼き立てさん〳〵に攻めければ終にもみ落されて城中の兵一人も殘らず討死す大將石川彈正は一足も退かず相戰ひ痛手を數多負ふて自害せられければ政宗一旦に小手森を攻めつぶし彈正が首を取りて勝鬨を揚げ其の邊殘らず放火して宮森へ歸陣有り明れば十七日又田村の内大瀧の城へ向つて攻め寄する是が田村の小野右衛門大夫隆信が弟大倉彦七郎と云ふ者楯籠りたる城なり此の彦七郎田村に背きて相馬に一味なしたるにより政宗序に攻め亡す可しとて早朝より取り巻き先つ小口掛をして町の空家十軒計り焼き拂ひ攻め入りければ彦七郎叶じとや思ひけん卜雲と云ふ出家を以て田村月齋伊達成實を頼みわび事して城を開き伊達勢に相渡す政宗其の夜は西と云ふ所に陣を取られ十八日石澤へ打出て石澤の城を攻む此の城には萩野某楯籠り其の上相馬勢多く籠れり大倉彦七郎進み出で政宗に謁し石澤の先手を望みて先登に進み石澤は田村の内にても小地の所なりと雖も相馬勢も多く籠りし故城強くして能く抱かへたり政宗は西と云ふ在所の東に陣を取り對陣せらる然るに其の夜俄に大雨降りければ城中の兵共雨を幸と思ひ夜にまぎれて城を明け相馬をさして引き退く義胤も筑山を去りてか

がり火少々殘して中村へ引き返さる偖又百目木の城には石川彈正が父某籠り居たりしが是も落ちて中村へ引退く今に至つて石川が末葉相馬の家中に存して百目木を名乘るは彈正元は百目木の城主なりし故なり政宗は大瀧石澤の兩城事なく落し百目木の城をも奪ひ取り小手森をも踏みつぶし氣色ばふて宮森へ歸陣す田村月齋父子橋本刑部少輔は勿論なり田村梅雪齋田村右衞門佐小野右衞門大夫常葉伊賀守其の外の者共迄宮森へ馳せ參りて石川彈正御追伐によりて田村迄靜り申す事偏に御威光の故なりと賀し申す中にも常葉伊賀守を殊更政宗感せられて黃金作りの腰の物を賜りける其の後月齋刑部少輔又宮森へ參り片倉小十郎盛重伊藤肥前守重信原田休雪齋を以て大越紀伊守事最初より田村へ出仕も仕らず今度も謀叛の張本として相馬へ一味仕り候得ば早々御出馬有りて御退治然る可しと申しければ政宗の返事には一働計りにては落城すまじ其の上佐竹義重父子安積郡へ近々出陣の由告け來れば彼の城に手間を取り自然佐竹出馬ならばまきほごさん事如何なり先指置くべしと同心無し月齋刑部重て申けるは佐竹出馬必定に候はば御代官下されてなりとも大越を御退治なされ田村一家の輩が心をも休め給るべしと達て申すにより伊達藤五郎成實を代官として遣すべしと約せられ卽ち藤五郎軍勢を催し田村の內船引城へ馳せ寄る此の城大越に一味するにより成實是を攻めれども叶ひ難く寄手の勢引き上る政宗も成實の軍立心もとなく思はれ忍びて出馬あり是を見給ふ處に小野鹿又衆出會ひ攻め戰ひしきりに鐵砲の音聞ゆるにより政宗總人數を返し城內より追出す敵を押し切りければ敵陣破れて方々へ逃げ行くを追掛〳〵討捨にして首數三十計り討取り軍勢を揚られ政宗は宮森へ引き取られければ藤五郎も人數を引き揚げらる

蘆名盛隆の後室死去之事

三浦介盛隆後室と申は伊達左京大夫晴宗の息女にして大膳大夫輝宗の妹なり、須賀川の二階堂遠江守盛義の後室にも連枝にておはしける、永祿の始めの頃會津蘆名判官盛興と妹脊の仲となり給ひて偕老の親しきも最早薨なく終にあだなる夢となり天正三年六月三日盛隆に後れさせ給ひさらぬ別れの涙の露身

を憂き草の根を絶へてさそふ水あるともいかでと泣き沈み給へども修理太夫盛氏様々に勸め給ひて須賀川より二階堂遠江守七郎を養子とせられければ息女の御心も甲斐有つて詮方なく又もや盛隆に寵愛の身となり給ひ程なく二人の御子を儲けさせ給へば越し方の憂さをしばしは忘れ夢の便りせめておはしけるに同く十二年十月六日盛隆不慮に大場三左衛門と云ふ者に害せられ給ひて猶絶えやらぬ御嘆きに袂をしぼり給へども龜王殿の仔細なく芦名の家を相續せられければ乾く間もなき藤衣なげきの内に日も添ふて三年を過させ給ひける同く十四年霜月二十一日武藏鑑とかけて賴み給ひける龜王殿さへ又失せさせ給ひ此の十四年の間三度迄打續く絶えぬ思の數々にいつとなく御身も弱らせ給ひけるにや御年もさのみ老へさせ給はで同五月十一日果敢なく黄泉の客とならせ給ひぬ、此の後室の御かたみとて盛隆の姫君にて女性一人殘らせ給ふ是を會津の四人の宿老供の計らひにて天正十五年三月三日佐竹の御曹司義廣の簾中にはなし奉りける

奥陽仙道表鑑巻之八　終

奥陽仙道表鑑　巻之九

鮎貝謀叛並最上義光由來之事

最上出羽守義光は伊達政宗には母方の叔父なれども親疎も時々に替れば此の近年甚だ睦りしかども何故にか有りけん互に確執の仲となりて常州佐竹義重會津義廣岩城常陸相馬義胤白河義親石川輝光に至るまで悉く内通し伊達家を亡さんと企てければ相馬長門守義胤より茅窪又衛門尉と云ふ者を使者として最上義光の所へつかはし内通の事有り政宗は佐竹會津の人々仙道中へ出馬して伊達を攻めんとするなれば卽時に仙道表に發向せんとせられし處に最上義光伊達の郎等鮎貝藤太郎と云ふ者をかたらひて長井へ向つて謀叛の色を顯されければ伊達政宗足元より逆心の者出で來る事の無念さよと大いに怒り自ら打つて出て鮎貝を攻め亡さんと議せられければ鮎貝藤太郎事の急なるを聞て山形へ使を立て後攻の勢を乞いければ義光此の由を聞きて嫡子修理太夫義康二男左馬介三男清水大藏大輔四男栃岡甲斐守を始め郎等には鮭延越中守野邊能登守里見越後守嫡子民部少輔氏江尾張守飯田播摩守本城豐前守矢柄相模守志村伊豆守山野邊右衛門太夫加藤源衛門富並中衛門草臥備前守日野伊賀守白石備前守以下宗徒の者共召し集めて此の事如何有るべしとて評定樣々なりけるに僅なる事に士卒を催し馬の足つからして詮なし其の上政宗は大崎の領地を大半手に入れ二本松四本松まで大方彼に屬すといへども會津須賀川白河岩城の者共蜂の如く起り合せて政宗と戰ひ隙なき衆中なれば如何なる變か出で來らん先づさし置きて事の樣をよく見合せて後加勢をばせらるべしとて鮎貝が方へ後攻めの汰沙しばらく延引有りければ藤太郎は山形より今や後攻めの來ると待てども待てども其の沙汰なかりければ鮎貝城を打捨てゝ山形さして逃れ退きける政宗は藤太郎の落ち行きしと聞きて長井へ引き返されける偖も此の最上義光と申すは清和天皇の御末八幡太郎義家の苗裔にて伊豫守家兼が二男修理太夫兼頼の後胤なり兼頼は大崎左京太夫直持の舍弟にて高氏將軍の時出羽の按察使に任せられたり延文三年八月六

日出羽國最上郡山形の城へ下向せられて國中を治めらる斯波大崎の家號を改めて最上と號す康暦元年六月八日卒去せらる光時寺殿と謚す其の子右京太夫直家相續して出羽の國を管領せらる是を金勝寺殿と號す其の子修理太夫光直法祥寺と號す其の子修理太夫満家祥會寺と號す其の子右京太夫義春を龍門寺と號す其の子修理太夫義郷を隣郷院と號す其の子治部太夫満代を國盛寺と號す其の子左衛門尉義淳を龍壯寺と稱す其の子治部太夫義定を雲照寺と號す其の子右近衛少將義盛入道榮林と稱す天正八年五月十八日七十歳にて卒去有り是を後の龍門寺殿と稱す其の子出羽守義光に至りて先祖修理太夫兼頼始めて最上郡へ入られしより十一代に及べり義光幼少より武勇に長じ出羽庄内の惡屋形大寶寺光安竝上山満兼等を始めて國中の大敵を攻め伏せしかば中頃衰へたる最上の家義光の代に至りて其の名四方に響き山形上の山庄内其の外領する所の地七十萬石に餘りければ一家益々繁昌して出羽の國中には秋田の安東太郎愛季の外は手指す者なかりける

久保田合戰之事

常州佐竹常陸介義重嫡子右京太夫義宣父子は仙道中を攻め靡かして我が有にせんと相謀り常陸下總の軍兵竝野州那須の兵共を相催し會津義廣白河義親須賀川の勢と牒し合せ大軍にて安積表に出馬せらる政宗是を聞きて佐竹と一戰して運を此の戰に任すべしと議せられ伊達信夫長井の軍兵を悉く引率し六百餘騎にて天正十六年の夏高倉まで出張せられ久保田村の山王山に取り登りて陣を取る佐竹常陸介義重同く右京太夫義宣會津芦名四郎義廣父子は常陸下野會津白川石川須賀川の軍兵都合四千餘騎の大勢にて郡山近所に押出し近々と陣を取る郡山の城には伊藤太郎左衛門尉栖籠れり小勢なれば覺束なしとて政宗大町宮内少輔中村主馬小島右衛門尉鹽森六郎左衛門を大將として鐵砲二百挺偏竟の侍二十人相添へ加勢としてて郡山の城へ籠め置る此の内に太宰金七と云ふ者物頭にてはなけれども申乞ふて加勢の内に入り栖籠る久保田の城へは飯坂右近太夫大嶺式部少輔を入れ置る福原の城へは瀬上中務少輔を籠る高倉城主近江守

が加勢として大條尾張守をさし遣す偖政宗は山王山より段々に備を立て前に石垣二重に五尺餘りにして芝築地をつき其の蔭に伊達信夫の兵共六百餘騎が甲のしころをかたむけ鎧の袖をつらねて日の丸の大旗竹に雀のとまりしさしものして一勢〳〵に扣へたり佐竹人數は元來大軍なれば野も山も平に陣取つて首尾よくば盛岡津輕のはて迄も悉く攻め伏て五十四郡を一圓に押領せんと回天の勢をなし雲の如く充滿したり、六月十八日會津の陣より尾熊因幡守と云ふ者二百計りの人數を引率し山の根の用水堀を埋めさせ道をこしらへさせて馬のかけ場を拵へに出でける處を伊達藤五郎成實が内に究竟の鐵砲の上手有りけるが八人して肩を揃へ二三度迄打ちたる時に因幡守が腕に當りければ尾熊早々引き揚ぐる次に須賀川勢の内保土原江南齋濱尾豐前守入道善齋二人佐竹方の先陣として勇兵すぐつて八百餘騎が備を亂れず近々と詰めよる鐵砲を放つ事軒端を過ぐる雨の足より猶繁く味方には水田の前に田村孫七郎田村彈正入道月齋父子片倉小十郎陣場を取つて三家の輩繰り替へ〳〵人馬に息をつかせず相戰ふ佐竹義重は須賀川の侍須田美濃守箭部伊勢守保土原江南齋濱尾金齋矢田野伊豆守等に先手をさせ會津の富田美濃守平田左京亮を二陣として是非有無の一戰と望まれけるを佐竹の臣川合甲斐守と云ふ者東野中務少輔を以て義重に諫言しけるは同くば今日の御合戰相止められ然るべく候仔細は伊達成實が陣場を見候に城の如く普請致し候南は甲に手かけ候て見へ候三方は合戰のなり難き處なり其の上此の地にて一戰始め候はゞ敵郡山久保田より打出づ可く候押へとして大勢御措置き候へ共兩所より打出し跡にて戰之れ有らば先手の働如何に候と達て申しければ義重もつともなりと心服あつて其の日は一戰相止め同勢を引揚げらる同く二十三日には佐竹方の總手を郡山久保田の間に打ち下し砦の城普請をなす政宗も久保田へ出馬有ると云へども小勢故防ぐ事も叶はず政宗の叔父伊達上野介政景が足輕を出して會津と相戰ふ政宗が旗本よりも大和田佐渡守馳せ來り上野介と一つになりて相戰ける鎗きずを蒙りながら敵の首取つて提て立ち歸る法令に背くと云へども只今の働神妙なりとて政宗感心せられける佐竹方普請せる砦成就して人數を籠め往來をさし塞

ぐ故通路いよ〳〵不自由になりて伊達難儀の體なりすはや今こそ源氏一統の家運開き藤氏滅亡の時至りぬと關東勢潤色してぞ見へし佐竹方二十六日總人數を打ち出し翌二十七日に又東の方に砦の普請なし定番に片平助衛門尉を入れ置る會津四天王宿老富田美濃守同じく將監父子平田左京亮入道同じく周防守同尾張守等を同じく番手として是を守る政宗も相瀬川（俗に呼で久保田川と云ふ）を外になし堀を掘り土手を築き垣を結いて其の要害の番をなす圖どりにして白石若狹守と片倉小十郎濱田伊豆守一組遠藤又七郎と富塚近江守一組原田馬之助と一組田村孫七郎と伊達藤五郎と一組なり然るに片倉小十郎望み有りて藤五郎と一組になる斯て七月四日は小十郎藤五郎用意の番にて有りける處に藤五郎の家臣遠藤駿河守と云ふ者敵の砦の番平田左京亮が旗を見知り兼て會津へ度々使に行きて懇切故駿河守卽ち小十郎と相謀りて矢文を認め平田が陣所へ射てつかはす是を左京亮取りて又返書を射返す小十郎此の文を取りて政宗に見せんと頓て政宗の陣所へ行き見せて歸る時に長沼の城主新國上總介馬上五六騎徒士武者百騎計りにて郡山の南より東へ通り北の砦と久保田の矢來の間へ突き出てしづ〳〵と進み來る藤五郎が場所の前なる故成實が兵共討て出て上總介も渡り合戰ふ小十郎も早々かけ付則ち兩手より勢を出し上總介が兵と追ひつかへしつ相戰ければ佐竹勢是を見てあれ討すなつゞけやとて究竟の兵共扇に日の丸の大旗を眞先に進んで其の勢雲霞の如く馳せかゝる政宗も是を聞て早々馳せ付ける伊達方には伊藤肥前守重信眞先かけて戰けるが佐竹勢折り重りて取り籠る終に肥前守は討れにける後人肥前守か石碑を郡山と云ふ所に建て今に在り偖政宗の人數の內六七十人一所にて討死す辰の刻より未の刻までの戰に佐竹方多く討れて相引きにぞ引きにける伊達勢は佐竹方を二度迄砦の內へ追へ入る則ち原田左馬介と濱田伊豆守が人數を入れ替へて片倉小十郎伊達藤五郎が人數をば引き揚げける政宗は田村月齋を呼びて明日は總軍を押出し佐竹と有無の一戰有る可と申されければ原田休齋と月齋頻りに異見申して暫時合戰を相止めけるかゝる處に岩城左京大夫常隆は蘆名佐竹と伊達と骨肉のよしみ有る仲にて今度確執然る可らずとて石川大和守輝

光と相談す此の輝光は佐竹義重の妹聟なり義廣を始め政宗常隆に至る迄皆外ならぬ仲なれば誠に累年の確執何の不審か是に若かんと相談して岩城の家老白土攝津守を會津佐竹の陣につかはし志賀閑約齋を政宗の陣へつかはし頻りに和談を入れられければ兩方共に納得して八月十日雙方より代官を出し郡山にて和睦の儀式相調ひければ石川輝光も自ら政宗の陣に至りて對面し佐竹よりも小野崎喜次郎と云ふ者を使者としてつかはしければ伊達成實に便りて政宗へ謁す麑名伊達終に和睦の儀調ふて八月十六日互に陣を引きて軍兵萬歳を唱へ皆領地へ歸られければ政宗も宮森へ歸陣せられける。

田村番代之事

同く八月十九日田村月齋田村梅雪齋小野右衞門大夫橋本刑部大輔宮森へ參着して申けるは清顯の後室を引き退け外に番をさし置れ然るべき由一同に申ければ政宗尤と同意有りて田村善九郎友顯の息孫七郎に政宗の一字を授けられて田村宗顯と號して田村の城主になしければ四人の宿老共大に悦び孫七郎を具して田村へ歸り一城を守護し後室をば船引の城へ移し奉りけゝ此の城は田村の郎等小沼伊賀守貞長と云ふ者預の城なり偖て其の後に橋本刑部少輔と田村月齋兩人片倉小十郎を以て政宗へ話しけるは田村に罷り在る所々の浪人共は大方相馬譜代の侍共多く候先年會津にて浪人拂をいたされ御領地靜謐に候由とあらば田村にても此度浪人拂仰せ付けられ内心惡意をさし挾み候者共皆追放なされて然る可しと申上げければ政宗げにもとて其の人々を選らまる、田村梅雪齋同右馬頭清忠小野右衞門大夫隆信も忽に政宗の勘氣を蒙り其れに一味したる浪人共三十人相具して小野の地へ引き籠り此の間物騷きに付きて政宗も田村へ移り三十餘日逗留して仕置等沙汰せらる梅雪齋父子右衞門大夫大越紀伊守等は始めは相馬を賴みけるが如何思案しけん相馬をば捨てゝ岩城へおもむき常隆を賴みければ常隆別して入魂有り抱へ置きける偖若松紀伊守と云ふ者を使節として田村へ申されけるは今度梅雪齋父子小野右衞門大夫大越紀伊守等我等を賴み來り候彼等元來清顯の親類に候へば萬事厚免有て田村へ召返され候へかしと申越されけれども

伊達の家老共一圓にきゝ入れず左樣に返事せしめ使者をばかへしける。政宗もきかぬ顏して門澤栗澤の兩城は小野大越の堺なれば田村衆少々警固に籠られ然るべしとて彈正入道月齋嫡子宮內少輔顯貞橋本刑部少輔貞綱常盤伊賀守清重等か兵を揚げて兩城へ入れ置れ政宗十月初めて長井へ歸陣せられける。

田原谷鹿股落城並大越紀伊守が事

片平助右衞門尉は去冬より會津に背きて政宗に一味しければ政宗大いに悅び天正十七年の春會津と事切れ有りければ岩城左京大夫常隆も偖は田村を攻め落して伊達と一戰すべしとて家老竹貫三河守白土攝津守三坂越前守等としめし合せ木戶楢葉に至り猪狩中務少輔親滿同く下野守に先陣させて常隆六百餘騎を率し天正十七年小野の城へ發向有り同く九日小野の鄕田原谷の城に向て同音に鬨を作りもみにもんでぞ攻められける此の城元は中津川兵衞大夫と云ふ者の城なり兵衞大夫後に中津川の城へ移り田原谷の城には宗方右近と云ふ者を入れ置きける兵衞大夫田村に背きて常隆の手に付きければ家老宗方種々諫言しけれども聞き入れず是に依て右の宗方暇を乞ひ捨て立退きける其の後田村より田原谷の城を普請して軍勢多く籠め置きけるを常隆押寄物ともせずひた攻めに攻めければ終に攻め落して侍百騎其の外雜兵の首四五百取りて勝鬨を揚げ給ふ岩城方にも宗徒の者と賴みたる家老猪狩中務が子息猪狩平次郎同く四郎五郎兄弟討れにける同く二十四日常隆又鹿股の城を取り卷き攻められける城主鹿股彥次郎が兵共身を拋て六七日の間防戰してこらへたりけれども猛卒の岩城死憤の威勢烈しくして彥次郎が兵共大半討れければ終に城を開き田村をさして引退く常隆は兩城を攻め落して敵の首を切る事千餘級森の如くに切り掛させて田村右馬頭清忠が支へたる小野新町の城をも攻め落さんと議せられけるに右馬頭は最初より父の梅雪と一所に岩城へ降りし事なれば仔細なく郎等供皆甲を脫いで弓を伏せ降參の由申せば常隆あみを含み囘天の勢をなして小野の郡へ陣を取りて折りよくば田村の城に亂入せんと支度專らなり政宗此の由を聞き給ひ大いに驚き急ぎ桑折攝津守飯坂右近大夫瀨上中務少輔を田村へ加勢として差遣す爰に大越紀伊守

つぐ〳〵と思案しけるに常隆も小野大越の抱へ末々迄はなり難し我身大事迫れり此の上は政宗へ降参して日頃の非を改めんと忽に心を變じ郎等の本田孫市と云ふ者は田村の本田孫兵衛の子にて有ければ其節目を以て是々遣し白石若狭守伊達藤五郎を以てひたすらに政宗へ歎き申し御味方に參るべく候其忠節には某若此度不心意や有ると常隆疑心せられて某が警固の爲に侍二人勢を付けて龍子山にさし置れ町屋に在陣仕り候さあらば門澤の城より大山つゞきに候間田村宮内少輔と申し合せ御人數を直に本丸へ引き込み未明に町屋へ押掛け二頭の衆を打果し是をしほに御奉公申すべしとて樣々詫事申しければ政宗聞屆けられ相違有るまじき由田村にて義州隆顯の時分より久しく奉公申したる青木不休齋と云ふ者を以て政宗直判の書を大越に賜る是の事如何してもれたりけん岩城常隆聞き給ひ大いに立腹し北郷刑部少輔と云ふ大剛の侍を大越が許へ遣し彼を引き立て來れと怒らるれば刑部少輔畏み奉ると容易く領承して御前を罷り立ち宿所へも歸らず直に大越の城に至りて紀伊守を呼び出し御尋ねの事是れ有る由參られ候へとて引立て小野へ走り行き常隆へ斯と申せば常隆喜悦限りなく紀伊守をば岩城平へ差遣し切腹させらる脩北郷には今度の働神妙なりとて數々の褒美を賜ぬ脩も大越紀伊守が隱謀露見せし事は田村宮内少輔顯貞が許より内々示し合せし謀書を紀伊守懷中して有りけるが誤つて途中へ落せしを其の妾是を見付けてひろい取り舍弟橋本甲斐守と云ふ者に見する甲斐守是を取りて暫時預るべき由云ふて受け取りけるが此の甲斐守元來紀伊守と其の仲よからず今主君に對して逆心を企る是に與すべき樣なしとて忽ち此の狀を常隆に見せ奉る故事露顯して紀伊守囚れける此の忠節によりて大越の城を常隆より甲斐守にぞ賜りける甲斐守大いに悦びて此の恩義をや思ひけん後年常隆相州小田原へ參陣して鎌倉の星ヶ谷にて卒去有り嗣子なかりければ家は白石攝津守と云ふ者佐竹義重の四男能代丸を請ひ受け秀吉公奥州へ御下向の時下野國宇都宮に於て增田右衞門尉長盛を以て攝津守事の仔細を披露しければ秀吉公感心有つて仔細なく常隆の家督を安堵の仰を蒙り岩城にかへり能代丸を元服させて岩城忠次郎貞隆と名乘せ後に從五位下に叙

し但馬守に任す然るに前の京兆常隆死去の年其の妾一人懐妊し男子出生しけるを橋本甲斐守兎角して育てけれども此の人俗體にて有らんは始終のため悪かるべしとて幼年の頃より相州藤澤道場へ遣し剃髪させて名を隆洞と號しける隆洞程なく十一歳になられけるを橋本甲斐守ひそかに是を取り立て先づ貞隆に暇乞ふて岩城を立ち出でけるにはからずも庚子の大亂出で來り石田治部少輔三成滅亡し佐竹岩城の人々も供に出羽國へ移されければ甲斐今は世に憚る所なしとて隆洞に還俗させ形計りも家の名を相續させんと種々企てけれども時や至らざりけん殊更に便り宜からず與力の者もなかりければ甲斐守力及ばずして居たりけるが伊達陸奥守政宗は岩城親隆の甥にて隆洞とは從弟なれば是を賴んには疎略にはおはさしと心付きて隆洞を伴ひ仙臺指して下りけるとかや。

政宗所々の城を落す事

伊達左京大夫政宗は仙道中へ打出て岩城常隆出張せば押寄て合戰すべしとて天正十七年五月三日本宮迄出馬せらる爰に阿子ヶ島治部大輔祐高は工藤一郎祐經が嫡子伊東大和守祐時の後胤にて父右衞門大夫までは二本松義國隨臣の身なりしが義國卒去有りて子息義繼平石にて討死す後は會津義廣の下知を重じ無二の黒川方にて安積安達の輩皆政宗に下ると云へども此の祐高は義を金石に比して阿子ヶ島の城に立て籠り會津須賀川の勢を待ち政宗と一戰し二心なき忠義を顯さんと待ち掛けたるに同く四日政宗押掛り阿子ヶ島の城を取り巻きて一旦に攻めければ治部大輔身命を抛ち庵の内にもつこうの紋書きたる大旗の寸々になるまで火花を散らしてぞ戰ける程に寄手討るゝ者數を知らずされども伊達勢大軍故死人を乘り越へ〳〵三の丸へ攻め入りけるが日西山に沒して旗の手も幽になれば力なく凱歌を唱へて引き退き城をにらんで陣を取り夜もすがら篝火燃して明日を待つ治部大輔叶ふまじとや思ひけん伊達五郎成實が方へ使者を立て樣々に降を乞へば政宗仔細なく同心せられ全く違變すまじき證據なりとて成實が郎等遠藤駿河と云ふ者を治部が方へ人質に出されければ治部大輔悦び彼の者を相具し阿子ヶ島の城を去つて其夜の内に猪苗代に着きそれより終に會津へ落ち行きけり

政宗阿子ヶ島を一旦に攻め落し其の威勢を以つて直に高玉の城へ押し寄せらる城主高玉太郎左衛門常頼は去年玉井にて政宗の郎等志賀山三郎に腰を鐵砲にて打れ其のきず未だ癒へねば身體自由ならずと云へども今日を最後とや思ひけん栗毛の馬に打ち乗りて三の丸迄下り合い諸手に防戰一々油斷なく下知して馳け廻りけるに頃は何時ならん天正十七年五月五日端午の節句とてのぼり甲を飾る童の印地打ち今日は高玉の最後の戰となりて二つ引兩の旗と伊達の三段頭の旗と入り交り散々に戰ひける爰に高玉の妹聟に荒井李允と云ふ者有り李允は昨日迄は阿子ヶ島の城へ馳せ加り治部大輔祐高と命を一所に捨んと約しけるが治部大輔は和を乞ひて會津へ退きければ李允力なく己れが在所へ歸りて討殘されたる郎等共三十餘騎立籠りて有りけるが今日の早天より政宗高玉を攻めらるゝしと聞き即時に馳せ來りて太郎左衛門と一つになり高玉の城三の丸をさし固め向ひたる伊達藤五郎が勢に打ち合い一陣に進んで成實が郎等羽田右馬介と鎗を合せ爭ひけるが互に手負ひて引き分れける李允は兼て今日をかぎりに討死せんと思ひ込しことなれば我が固めたる三の丸を少しもたちろかす散々に防ぎ戰ふて終に討死を遂げにける寄手は大勢なりければ乘り越へ程なく三の丸を攻め破り入込みければ高玉は今はこれ迄と討て出て堀に付きたる寄手の先陣二百餘騎の中へ割て入り無二無三に突のけおしのけ引き入んとせし時政宗近習の者手越内膳とて元は相馬の士族なり生年十六歳になりけるが追ひかけ頓て高玉が鎧の揚巻の邊を切りけれども鎧よければ物ともせずやさしの敵かなと云ふもあへずふり返り手越を手に握んで投げ城中へ入らんとす内膳心きゝたる若者にて高玉の鎧の袖の端れをさし通したりけるに高玉運の限りにや是に痛みて弱りまろぶ所を内膳すかさず乘りかゝり續けざまにさし通し終に高玉をぞ討ちたりける今朝卯の刻より取り掛りて攻戰ひ漸く申の刻に至りて落城す伊達の兵共本城へ攻め入り男女老少の嫌なく一人も殘らず切り捨る高玉の妻子は常頼討死の前に殘らず刺し殺して捨てけるに常頼の末の娘二三歳になりけるを乳母かいがいしく抱き取りて轉び出でけるや情なき伊達の兵共一太刀ないで通りければ薄手少々負ひけるが猶又此

の上何様の憂き目をか見んと恐ろしく思ひ幼き娘を
ば己が袖の下にかくし死人の脇に血まみれになりて
臥し居ければその後手さす者もなく寄手退散して後
其の子の叔父なりける高倉近江守が元へたどり行き
爰にて兎角育てけるこそ哀れなるにも又情深くぞ聞
へし此の女子成人の後蒲生源太左衛門尉が下人某の
妻となる其の子は又高玉太郎左衛門と號し丹羽左京
太夫光重二本松を領せられし時かすかなる奉公の身
とぞなりにけりされば骨肉恩愛の仲にもあらで不拙
き女性だに情有る身なれば己が命に替へて主人の娘
を斯く迄助け養育しける事類ひ稀なる次第なり斯る
貞女も有る仲に殊に勝れて情なくも聞しは片平助衛
門尉が振舞なり抑々阿子ヶ島高玉の兩城不日に落さ
れたる事畢竟此の兩所と會津の間に居たる片平助衛
門尉が敵に與したる故なり彼れは內々去年の夏兄備
前守兼義ともろ供に政宗に與せんと企てしかども如
何思ひけん其の事違變せしめ向後會津へ二心仕るま
じとて己の母を黒川へ質として遣し置きけるが心變
じて母を捨て今度政宗に一味したりければ芦名四郎
義廣大いに怒り給ひ脩は勸善懲惡の爲めに片平が母
を誅して助右衛門兄弟が無道を末代に殘すべしとて
極刑に行れける折から夏の事なればかたびらの片平
と云ふに負ふせて老母辭世に。

かたひらの薄き情や替るらん一重につらき夏の衣に

と一首の歌をつらねて最後の體誠に哀れに聞へけれ
ば見る人聞く人おしなべて皆涙をながし助右衛門の
擧動人非人なりとてにくまぬ者こそなかりける
る程に左京太夫政宗兩城を攻め落して暫時方々の體
をきかれしが左迄仕出したる事もなかりければ五月
六日本宮を立て宮森へ歸城せられける岩城左京太夫
常隆は相馬としめし合せて三月より小野の郷に出馬
して在陣有り相馬長門守義胤も水谷中務少輔と云ふ
者を魁首として田村の內岩井澤と云ふ所に出馬有り
田村には兼て瀨上桑折等をさし置る故に常隆今に寄
せ來るとも一軍すべしとて田村勢中々氣づかふ事も
なかりける政宗は伊達郡より廻りて相馬義胤抱への
城共を攻め亡さんと勢を揃へ五月二十日砂山表へ出
陣せらる義胤が郎等共新地駒ヶ峯の兩城を抱へたり
しを政宗頓て大勢を以て取り卷き急に攻め立て終に
兩城を攻め落して敵の首七八十討取り悅び勇んで政

宗歸陣の時亘理美濃守則ち亘理中の船を廻し假り屋を立て馳走申す配膳を催すにより終日爰に遊興有りて其の夜は金山へ歸られ逗留せらる爰にて諸士の軍功を賞して駒ケ峯を黒木肥前守に賜り新地をば亘理美濃守に賜る肥前守が先頃まで居たる丸森の城をば高野壹岐守に賜りて政宗は二十二日の晩に宮森へぞ歸られける。

奥陽仙道表鑑巻之九終

奥陽仙道表鑑　卷之十

猪苗代彈正逆心之事

會津四郎義廣は片平助左衞門尉が味方を背き敵に與し高玉阿子ヶ島を敵に奪れたる上は坪下の口心許なしとて宗徒の兵二百餘騎を猪苗代へ遣して其邊の非常を警固させ我身は父の義重岩城常陸相馬の義胤と牒し合せ相共に仙道へ出張し伊達と有無の一戰すべし迚天正十七年五月二十七日岩瀬郡へ打て出たり政宗は兼て猪苗代彈正盛國を味方に付て軍すべし迚藤五郎成實片倉小十郎盛重が方より是を語らひけるに盛國嫡子盛胤と中不和に成て一戰に及ひしかば義廣怒て盛國を折檻せらる程經て勘當は免されたれど年來に替りたる會釋なれは盛國無念に思ひ忽逆心を起し親族を離れ伊達家へ降參して家運を外に開んと思ふより早政宗の勢を入猪苗代の城をきびしく拵て忍びやかに會津を謀んとす又南山の城主長沼彌七郎盛秀も會津に恨る事有て盛國が謀叛の由ほのかに聞密に猪苗代へ使を立向後の事兎も角も御邊と一味せんと相約せりさらば黒川勢二百餘騎にて此地に在を何卒して追返すべし迚樣々の言葉を巧にして言送りけるは我此四五年屋形の御意に違ひ不忠の者の樣に成來れば此樣の折節無二の御奉公を致してこそ屋形の御意に叶申度とのみ朝夕の願に候今政宗は相馬岩城と取合の最中なれば中々今日明日の間には此邊へ出馬有まじく候今更無用大勢の是迄打出永々數逗留は詮なき運送の費にかと誠しやかに打解たれば黒川勢も此儀尤と議して猪苗代に指置たる二百餘騎の勢を六月三日の朝黒川へ呼取しは芦名の運の盡る所なり偖政宗は阿子ヶ島迄出張して會津の樣子を伺はれけるに猪苗代彈正は彌二心なき證跡をあらはさんと思ひ我子の龜丸迚十三に成ける童に郎等須川野左馬助と云者を差添つゝ政宗の許へ遣しければ政宗大に悦びさらば打立や者共迚阿子ヶ島を打出られ總軍勢等は坪下越を打せて政宗は僅十七騎を召具し石莚越をして六月四日の夜亥の刻計りに猪苗代へ馳著玉へば盛國斜ならず悦樣々饗應す政宗も盛國が此間の志を淺からすこそ覺へ候迚人質に出たる龜丸を返され

ければ彈正彌心とけて快然たり偖又會津四郎義廣は磨國が隱謀有由何となく雜說區々成ければ事の實否を糺さんために四日の晩天に岩瀨を立て會津へ返られけるにはや成實盛重の勢を猪苗代の城へ引入て盛國が逆心の由會津へ急を告ければ偖は敵の大勢馳着ざる以前に追放してと暫らく須賀川よりの後攻の勢を待揃へる時刻移りて頓て富田美濃守の嫡子將監に先陣させて其日の夜に入黑川を發馬し摺上原へ打出て海道より南十餘丁相隔普藤村の東なる高森山に打上りて常山の蛇勢の屯を張り三つ引兩の大旗を凉風に吹靡せて終夜諸軍籌を燒連て寢る間稀なる夏の夜の夢もむすばれず待ちあかす。

摺上原合戰之事

既に夜も早明なんとせし頃義廣本名李允を召て見へ渡りたる西窪滑津梅の色に敵陣を入立させては中々咏方の障りなるへし馳向て自燒せよと宣ひければ李允畏て候迚足輕少々引率し其邊の在家一宇も殘らず燒捨けり富田左近將監は先陣なれば其日より湯田澤邊へ打出終夜軍の評定して明れは六月五日の早天に星備中に先登させて段々にそ屯しける猪苗代にても政宗櫓に上て摺上の方を見渡し給ひ評定有て偖先陣は領主の猪苗代彈正忠盛國なれば案內者故一陣に進んで敵の位を見るへしと定たる二番は片倉小十郎盛重三番は伊達五郎成實四番は白石若狹守五番は大將政宗左軍大內備中守齊義右軍片平助右衞門尉後軍は濱田伊豆守と相定め手々に勢を分け角て先陣なれば猪苗代彈正忠盛國湯田澤の邊へ馳向ふ其次に繼て盛重成實も段々に勢を押し出す政宗も猪苗代の城を出て盤梯山の麓八ヶ森と云ふ所に取上り義廣の陣所普藤の高森山と其間坂東路七里を隔て眞つ違ひに見渡して陣取られ鬼角て會津の先陣富田左近將監隆實と伊達の先陣猪苗代彈正盛國と吹渡と云所にて出合兩陣相掛りに係て弓鐵砲を打違ひ矢合すとひとしく拔連て入亂れ散々に相戰ふ盛國が郎等石部下總守猪苗代阿波守須賀野左馬介廣瀨藤內等敵も替らぬ芦名の氏族一門中の軍にて敵前の晴わざなれば一足も引なと互に勇みけり一陣に進んで分捕高名す中にも廣瀨藤內は一番に甲着の首を取て政宗に見せければ物始よしと悅れ當座の褒美として名を豐後守と

ぞ付けられ兎さて富田將監隆實は今年二十一歳勇氣強勢の兵にて盛國が今度の振舞を惡さに腹を立きばをかみ透間あらせず追立て盛國を目掛なま首ねぢ切て捨よ〳〵と大音に呼りおめいてかけたり兎折しも西風強く吹て鐵砲の煙に馬煙り眞黑に吹掛ければ盛國が勢前後を忘じ東西失ふて馬の足を立て兼ねる是ぞ譜代相傳の主をせめし一族を離れて人道に背たる驗しよと覺えて淺ましかり兎形勢なり既に盛國が勢立足なく打立てられ敗北すれば二陣に控たる片倉小十郎勢も共にしどろに成て進み得ず政宗は蜂ヶ森に陣せられ兎が此の由を見給ひ太郎丸掃部介に二百挺の鐵砲を指添へて先陣の者共に力を合せよと下知せられければ掃部介畏て候迚猶豫もせず馳着金の團扇を右手に握て左右に下知して二百挺の鐵砲をつるべ掛て入替々々敵を横に見て打たせ兎將監是を見てきやつは芦名累代の郎臣なれ共先年浪々して今政宗に奉公す今日我主の御大事に向つてかゝる振舞奇怪なりと大きに怒て付廻り兎に掃部介が運や盡けん盛國が勢に離て唯一騎討行兎を富田將監天晴よき幸ひ爰ぞと一さんに掛出進むさまに大刀切たりけれ共さまで當らざりければ掃部介ものともせず馬に諸鐙を合て逃れける所を將監いつく迄もと追付き後より指物の根筒をむつと取てひつかへしためす馬より引落し跡に續きたる七宮森助と云者に首取れと云ければ掃部が鎧一縮したる身を大力に馬より下へ引落されて五體合斯やせさりけん御手に手綱をつかんで乘上らんとはしけれ共身重なるに介錯の下人は續かず力なくして見へ兎を七宮森助聲を掛て馳寄掃部が大服草摺掛て薙落しころぶ所を引組で刺通し首掻切て後に續きたる中間に掃部が首と鎗とを持たせ義廣の陣へと返り兎角て伊達方盛國と片倉が兵共さん〳〵に驅散されて味方討負たりと見へければ伊達成實と白岩若狹守が勢馬を西首に駈連れて盤梯山の山際なる細道より七ヶ森の間を掛出て大旗小旗一面に指上たれば會津勢思ひの外敵後へ廻りたるいと周章騷て前後を忘れ兎が其頃義廣の供して佐竹より來り兎大瀧讃岐守と刎石駿河守と云者會津の舊臣富田美濃守平田左京亮入道等と互に權を爭ひそねみ合兎時節なればと諸人心を置かずはや梱うらに謀叛人出來たると云程こそあれ右往左往に崩れ騷で敗北すされば芦名家滅

亡の期や來りけん朝には吹き追いたる西風俄に東に替りて會津山の高嶺下に風彌增鐵砲の煙り馬煙共に芦名の陣へ吹き掛偏に霧の覆ふ如くなれば東西南北見分りがたくして詮方つきしごろになりて人なだれをついてぞ崩れ皃義廣も今日を最後とや思はれけん中々騒たる氣色もなくて普前の丸山よりしづ〳〵と討て出澤井越中守と云ふ大剛の兵を先登として諸卒是が下知に從ひ旗本の勢ひ四百餘騎が太皷を打旗を一面に進めて政宗か本陣を心掛け眞直に討てかゝる政宗も望む所の幸ひなりと自分眞先に進んで鉾矢に備へ大内備前守片平助右衛門尉兄弟の勢を左右に進ませ陽にひらいて弓鐵砲をつるへ掛相掛りに懸て戰ひけるに會津勢の内澁川助左衛門尉黑革威の鎧着て白河原毛の馬に乘り打拔て眞先に進み政宗の郎等飯野大膳と云者に渡り合切先をまじへけるが互に痛みの手を負ひて相分れ皃是を軍の始として敵味方入り亂れて火花を散らして戰けるに傷はしや義廣方大勢のなひき立たるくせなれば足並亂て取りて返す味方は少々八方に散亂て旗本の勢さへ殘り少くなりければ政宗の白石若狹守大内備前守片平助衛門尉濱田伊豆守大條尾張守猪苗代彈正盛國等を先として我討取らんと爭ひすゝめば義廣も討死にせんと自分が敵に相當驅出々々戰はれ皃を近習の者共押隔て年の習ひ何んぞ一旦の勝負を御覽せられ一朝の御怒を以て多くの功を空しくし給ふやと再三諫めまいらせ馬の轡を取りて引返し僅に二十騎にて馬の前後を打圍んで梨木平大寺海道に連りて引退き給ひしに敵頻りに追ひ來れば近習の者共引返し引返し討死にす早新橋をば何者の所爲ならん引落しぬ此河は渡し口より澤り落る湖水の末の流れにて水かさいつも夥敷に大石數多顯れ瀨枕高く瀧鳴て逆卷く波は雪を散らす如くなればいかなる年の大旱魃にも上下十四五里が間に人馬の渡すべき淺瀨はなかり皃去程に遙か西に下りて堂島の橋を渡り義廣僅に十騎ばかりにて稀有の難を逃れ黑川の城へぞ入られ皃爰に佐瀨平八郎と云ふ者實は富田美濃守が二男にて佐瀨山城守が養子とす今年十六歲成皃が餘りに深入して働き痛手負て人心地もなかり皃を中間馳寄り平八郎を肩に引かけ退皃が運盡て落合村の東にて田の畔なる小溝を一つ越しかねて猶豫する所を政宗の兵共十人計り追駈て終に平

八郎を討取り鳧兄の富田將監は今朝の軍に先陣して大敵を破り太郎丸掃部助を討取り猛勇を敵に知られ偖又平八が弟下荒井三郎は今年十三歳にして眞先に掛高名す兄弟三人武勇の名高く其氣質賢なりといへ共父の美濃守奸侫不義にして逆心を起し伊達へ降りければ誠に父子成といへ共其心大きに相違せりと惡まぬ者はなかり鳧偖ても平八郎討れたる其跡に一基の石塔建て置き屍は年經て苔の下たに朽れ共其名は止りて後代に殘れり偖又河原田治郎少輔盛次も味方破れて後黒川を志して引鳧を片倉小十郎鐘の紋書たる旗を進て大勢討て掛れば盛次も巴の紋の旗を進め駈合するに盛次が郎等伊南源介と云ふ者猪の紋付きたる指物指て一陣に進み向ひて引組て馬より下に落鳧が源介大力なれば其敵を取つて押へ首掻切て立たる又盛次が甥の河原田左馬助吉次とて十七歳になり鳧か登り梯子の指物して大勢に渡り合戰ひ鳧が或敵と引組て分捕高名す片倉が兵共是に辟易して強も追付さりければ河原田は難なくそこをば落ち延びぬ金上遠江守成滿入道元は兵庫頭と申せしが去る天正九年に正親町院より芦名盛氏を從五位の下三浦の介に任ぜられ鳧時勅答の使として上洛せしに之も綸言にて盛滿も從五位に叙せられ遠江守に任ぜられ鳧會津の内津川の城に居住し芦名の門類の隨一なりしが味方討負芦名の家運も今日を限と見へければ一足も退かず討死せんとしけるが郎等白箸權左衛門と云ふ者を近かづけて汝は津川へ歸り妻子共の成行かんする有樣を見屆けて我無き跡を訪ひ得さすべしと堅く庭訓を殘し申含鳧に權左衛門承り涙をはら〳〵と流して譜代の主人の目の前にて討死し給ふを見捨ていかに今更かるき命を助かりてなんの面目有てか津川へ歸るべき是非御供して討死仕らんと思ひ切て申ければ遠江守大きに怒て汝後れたり鳧か義を見てせざるは勇なし迚討死を蒙る某が後來をかんがみる事哉早々歸て我妻子の果を見屆けんこそ今生後生の忠義何にか是に如ん哉と再三云ひ含て筐共取出し相渡せば白箸今は力なく泪と共に立別れ津川方へぞ趣き鳧盛滿入道も早心安しと鎧の上帶締直し勢の馬に水くれて身繕し鳧所に佐瀬平八郎が郎等一將落來て遠江守が義を金石に比する有樣を感心するの餘に共に必死の約をなし供して又戰場に蒞ければ適義士ぶり忠臣

なり其功萬世に及ぶ共朽る事有まじ迚其志し遠江守深感じ鬼角て金上入道佐瀬が郎等共主從彼是五騎にて勇控へたる所に伊達の兵共雲霞の如く押來て取りはらい金上入道踏張り大音聲を揚て桓武天皇の御末三浦佐原十郎義連が後胤金上但馬守盛眞が嫡子遠江守平盛滿入道爰に在り討取て恩賞に預と五騎一囘に切先揃へて數千の中へ面も振らず喚て駈入る固より敵は大勢なれば是を小勢と侮りて中に取り卷き餘さじと攻戰へば金上入道轡をならべて弓手へひらき右手へそむき八方へ當て駈立東西南北へ馳走し散々に戰ひて主從五騎いさぎよく枕をならべて討死す金上入道今年六十三歳とぞ聞へし此の時伊達の兵も十六人討たれ鬼去れば此金上義滿生前の義士なれば死後の靈威も徒らならず誠に當時亡跡の古墳わづか殘せるに瘧病に苦しむ者共信心に祈誓すれば忽病苦平癒す迚竹木にて太刀長刀を拵へ賽するもの多しとなり又爰に西勝田小右衞門尉と云ふ者は大剛の覺へ取りたる者なりしが運や盡たりけん政宗の郎等中山大藏少輔が手に掛りて生捕にせられ鬼偕又平井薩摩守と云ふ者は義廣の供して常州より付き來りて大繩刎石平井の三人穴と稱し又評定衆といはれてあくまで驕を究め會津の舊臣宿老と以ての外不和成鬼か今日を限りの又軍なれば手痛く戰て主の先途をも見屆て且義廣勝利を得られなは專ら武威をたくましく振舞はん物をと兼ねての所存に有りければ義廣と政宗と互に旗本の勢を打合たり鬼時平井薩摩守は澤井越中守が後陣有て自から太刀討して敵の首二つ取たりけるを政宗の郎等柴田三郎兵衞押竝て引組刺通しけるを薩摩守も剛の者なれば下に成ながら又柴田を刺通し互に二人共終に同じ枕にぞ打伏し鬼其外會津の大勢新橋の落たるを知らずして行き掛り是非なく馬を川中へ馳倒していやが上に重り伏し水に溺れて究竟の兵五百餘騎底のもくづと成りにける嗚呼此日如何なるぞや天正十七年六月五日摺上原の合戰破れて芦名累代の家一時が内に崩され伊達家多年の望み達て軍勢勝鬨を取り行ひ鬼其日政宗の手に討取りたる首數一千五百八十三とぞ聞へ鬼。

義廣敗北並行末之事

去る程に摺上原の合戰敗れしかば會津の騒動斜な

らず爰に會津四天王の宿老富田美濃守平田左京亮入道同周防守等は芦名代々の家臣として身の浮き沈み家の安危を主と共にする者なるに近年芦名の家傾き前の修理大夫盛氏同判官盛興死去の後は盛隆義廣を始として皆他家より相續せらるゝにより其國より附隨ひ來る新參の輩威を振ひ譜代恩顧の者共は無きが如くにて次第々々に肩をすぼめ權威衰へて家中一同せず是に依て富田平田等新參の大繩刎石等と以ての外に仲惡しかりければ政宗今度會津への出馬を幸ひと悦び忽に心を變じ政宗の手へ降參すれば義廣會津の警衛物さびて相支ゆべき力もなく六日十日の夕さりに黒川の城を出て芦原越へより白河の關路をさして落行き給ふ所に道々の野伏共迄悉く會津に背き落人の通るを討留めなんとひしめきつまり〳〵の切所に出會待掛るを富田將監隆實郎等星備中守に下知して野伏等を靜めさせて難なくそこを通り玉ひぬ偖義廣の簾中をば澁川助右衞門尉具し奉りて義廣の後をしたい頓て追付同十一日の晩景に白河に着玉ふ阿子ヶ島治部大輔祐高は去頃阿子ヶ島の城を政宗に落さるの後會津に來りて猶是迄供したり彼が二心有りと見へければ頓て澁川助右衞門尉に仰て討たせられ常陸の國へ着き給ひ實父義重兄義宣を賴みて江戸崎と云所にぞおはし彼爰に又二本松右京亮義繼の嫡子梅王丸此の時元服して畠山九郎義統と號しけるが男色の事によりて義廣沼澤出雲守同六郎父子に仰て義統を弑させられ彼ぞうたてけれ富田將監是を怒て江戸崎を立ち退き奥州中村へ來りて相馬大膳亮義胤を賴みて中村に住居し彼となり義統年十五歳なり其の弟七郎國次は會津へ立歸り浪々の後上杉越後守景勝會津を拜領の時に附隨ひ慶長五年羽州合戰に比類なき働して天堂彌七郎を討取彼が上杉會津を沒收せられ彼時蒲生下野守忠郷の手に屬し其後三河の水野家に仕て孫今に有り偖又芦名義廣は太閤天下併呑の節訴て二度會津還住の事を願はれしか共相叶はず殊に石田治部少輔三成義廣を難じて云彼は芦名は代々盛の字を以て正統とす其身平氏の門葉として三浦介遠江守盛遠が末なればなり然るを今義廣實父義重の一字を以て盛の字を失す義の字は源氏佐竹一統なり然れば甚だ其本の心を失ふ事是愚將の謂が會津還住の事如何あらんと申彼となり其年俄に改て芦名平四

郎盛重と名乘られ鳧偖慶長の大亂も佐竹義重常州莫大の押領地を沒收せられ羽州秋田へ移されける時に又盛重も江戸崎を立て出羽にいたり秋田に於て終に空しく死去せられけるとなり。

政宗會津の城入並佐竹水戸城攻落之事

去る程に伊達左京大夫政宗は芦名の家を事故なく攻潰して七宮伯耆守が案内にて六月十一日黑川の城にぞ討入給ふ軍勢皆萬歳を唱ふ會津殘黨爰かしこにて悉く誅せらる其後政宗功臣を皆賞して過分の恩祿を宛行ふ先づ家臣には伊達藤五郎成實並伯父の上野介政景を先として片倉小十郎盛重白石若狹守原田左馬介新田常陸介大内備前守片平助衞門尉梁田勘解由兵衞濱田伊豆守等なり其外新參の者共には猪苗代彈正盛國を始め新參と雖も恩賞おろかならず夫々に附あたへ給ふ諸士の隨ひ付く事草の風に靡が如し爰に於て政宗威勢益々甚し仙道中を振て龍の雲を得虎の山によぢ登るが如し偖其頃佐竹常陸介義重同右京大夫義宣父子は常州水戸の城主白石但馬守重通に反き籠城に及たるを攻めんとて同名中務少輔義久をして押向ふ重通は那珂五郎前の但馬守藤原忠通が子なり代々水戸の城主にて武備を專とし敢て佐竹の下風に屬せず居たりしが佐竹既に大軍を率して押寄する由聞へければ重通大にき驚き勢を催し久志川に出向ふ佐竹勢間も透さず出來りて日の丸出したる五本骨の扇の白旗眞先きに進めて川越渡し散々に攻掛れば重通が兵共陽に開き陰に閉て河原違に追ひつまきつ戰けるが佐竹方より酒山左近大夫政義が後ろへ廻りける勢と川合甲斐守緒貫大藏少輔が左右より懸りたる横矢の勢に破られて江戸彥七大瀧左衞門尉を始として主從の兵五十六人一所に討れければ江戸但馬守忽に旗をしぼりて府中をさして敗北す佐竹義重の勢透もあらせず押寄て水戸の城を取圍む七重八重にして誠に城兵は籠の内の鳥に異ならず江戸但馬守防戰の計略も盡きもれ出べき方もなければ三百餘人の郎等共一同に切出塀裏迄着きたりける寄手の五百餘人を二三町追ひ立て其間に城に火を掛大將重通を始一族郎等百三十餘人一時に腹搔切て名を一城一へんの煙の下にぞ殘しける惜い哉重通は關東の英雄武家氣質

世に聊かならず那珂五郎通成より六代弓矢を取りて一國の勇武なりしか共運傾き勢ひ盡き天正十七年夏佐竹義重の爲に亡されて一族悉く滅亡するこそ哀れなれ義重頓て水戸の城を修覆し嫡男義宣を入置き我身は太田の城に居住し南は下總國西は下野國堺既に八十萬石餘悉く掌握なしゝかば勢ひます〳〵坂東に振ひ其頃天下の六大將の一人とぞ仰がれ侍。

奥陽仙道表鑑卷之十終

奥陽仙道表鑑　巻之十一

再久保田對場並下枝合戰之事

天正十七年五月佐竹常陸介義重嫡子右京大夫義宣常陸奥州の勢六千餘騎を率し奥州盤瀬郡へ打出須賀川勢と牒し合大平の城を取り巻き給ふ城には田村勢政宗方として多く籠るといへ共佐竹の大軍物ともせず荒手を入替々々もみにもんでぞ攻破りける籠る所の田村勢散々に攻立られて一人も殘らず討たれにけり田村の内門澤の城には政宗より大町三河守宮内因幡守中島右衞門尉三人を將として籠められしを岩城左京大夫常隆兼て相圖やせられけん佐竹勢大平の城を攻落すと同時に岩城を發し五月九日門澤の城へ取掛て火水になれと息をもつかせず攻たりければ門澤の城終に攻落されて討るゝ者數を知らず大町三河守宮内因幡守等は痛手數所負ひ漸く田村の城へ逃れ歸る中島右衞門尉は敵に前を取り切られて行く所の方を失ひければ迚も逃れましとや思ひけん主從七騎馬の鼻を揃へて引返し大勢に組合死もの狂ひに戰ける所を岩城の三坂越前守が嫡子左馬介駈合て相戰ふ終に中島をぞ討にけり大平門澤の兩城落たりければ佐竹義重父子仙道表へ打出で伊東太郎左衞門が楯籠りたる郡山の城へ押寄せて新手を入替へ攻めたり兎伊東は去年の夏も佐竹の大勢に圍まれながら一足も退ず義を守として籠城し名をあらはしたる剛の者なれば事共せず堅固に持ちこたへてぞ防ぎ居たり政宗は會津に有て此の由を聞き大に驚き急ぎ黒川を打立仙道表へ打て出らる先づ伊達藤五郎成實白石若狹守平田因幡守原田左馬介等に大勢を差ぞへて田村宗顯の元へ加勢として差遣し我が身は後攻として福原迄討て出で佐竹の陣と其間坂東路五里を隔て鶴翼に開きてぞ陣取られ兎七月四日より義重の先手佐竹中務少輔義久川合東桃左馬助等を先として高名せんと勇み進めば伊達方にも去年七月四日に伊達肥前守重信が久保田にて討れたる其恨をなし佐竹の一將を何卒打取て重信の一周忌を弔はんものをと齒がみをなして戰へば互に一足も引かず陣を屯ろして相手を助け一樣にまばら掛する者もなく相白眼んで控へければ

いつ果つべき軍とも見へざりしが雙方進んで相戰一日せり合くらして兩方へさつと引き分れ其跡を見れば死人累々として屠所の肉を積む其日政宗の手へ討取所の首數二百二十七とぞ聞へし偖又同日岩城左京大夫常隆は下枝肥前守と云ふ者田村方として楯籠たる下枝の城へ押寄たる肥前守は聞ゆる大剛の勇士にて韓信が鉢陣平が計を宗とせるくせ者なれば敵の旗の手を見るとひとしく討つて出で散々に戰城も日既に夕陽に及べば岩城勢少しく虎口をくつろげんとしたる所を下枝肥前守透かさずどつと切り掛り山路の嶮難をさへ切て引取追詰て討立ければ岩城勢討るゝ者數を知らず岩城勢の內田村右衞門大夫隆信は殿後して近付く敵を討拂ひて退きけるを肥前守が兵共是を見て車前草の旗は田村右衞門大夫と覺えたるぞ彼は田村方を反むく不道人なり餘すなもらすな討取て惡人原が見こらしにせよと頻に聲を掛追詰無二無三に切掛れば右衞門大夫是迄と五十餘騎引返し命を限りに力戰して一所にて主從共に討死す此右衞門大夫隆信と申すは田村大膳大夫義顯の三男孫衞門尉顯忠が嫡子なり其頃小野鄕に住居するにより小野右衞門大夫と號しける伯父の入道梅雪齋其子右馬頭清忠等と一味して去年より岩城常隆に屬して居けるとなり偖岩城の郎等松本善十郎と云ふ兵引返して進む敵を一鉾に突貫き大勢を追拂ひ樊噲の勇を振ひ力戰しける此勢に辟易して下枝か勢左迄長追はせず右衞門大夫を始め首數多く打取て勝閧を揚てぞ引にける常隆も田村方のあなどりにくしとや思ひけん勢を揚て岩城へ引返されければ仙道表に支へたる義重も引退て常州へ歸陣せられ郡山表も無事になりしかば政宗も陣を拂ひて黑川へ歸られける此の時長沼の城主新國上總介を始として悉く降參して政宗の手に屬す此の上總介は芦名修理大夫盛氏の時より武勇の聞へ有て仙道中に隱なき兵なり後に政宗の手を離れ蒲生飛彈守氏鄕の手に屬せしとなり

須賀川後室軍評定之事

去程に伊達左京大夫政宗は會津仙道を合て押領せられければ猪苗代彈正盛國新國上總介富田美作守平田左京亮入道を始會津譜代の輩悉く伊達の家風に隨ひ今ははや盤瀨郡須賀川の城計りにて外に敵有とも

思はれねば急ぎ盤瀬を手に入れらるべしとの支度なり須賀川の城には二階堂遠江守盛義の後室女城主として是を守る抑往古には尼將軍だにおはしたりといへ共近代かゝる健氣なる女將も又例少く聞へし二階堂盛義は天正九年七月二十三日秋の露と消え玉ひしより以來既に九年の春秋を經れ共後室の威名強く里の一所をも奪はれず偖又盛義の嫡子七郎盛隆は會津盛氏の養子となりて三浦介に任せられ名は奥州に輝すといへ共天正十二年十月六日に家臣大場が爲に弑せられ給ふされば須賀川へは一族の内いかなる方よりも養君を入て二階堂相續有べき所に老臣矢部須田濱尾保土原其外の輩異議有て其事はいまだ決せず後室女性の身にて亡父の後を相續して此九年の間誠に人もなげに振廻れ鬼に今年伊達の威勢日を追ふて烈しくさしも數代連綿の大家會津佐原十郎義連十八代の後胤盛重の時に至りて一朝に是を亡し其威勢天を囘し龍の水を卷くが如し仙道勢に會津勢四郡の勢其外長井大崎の勢を催し盤瀬を攻らるべしと聞えしかば川東郷矢部下野守を先として數代忠勤の輩なりし保土原江南齋濱尾豊後守入道金齋等皆政宗へ降參し其下知を重じ須賀川へ逆心し矢部は森の城へ濱田白石が勢を引入るなんと聞へければ後室は天正十七年十月二十一日郎臣は申すに及ばず城下の町人共迄を岩瀬の城に召し集めて申されけるは汝早く政宗に降り命を全ふし恩賞に預るべしと宣ひければ箭部伊豫守承るもあへず口惜しき御詞を承るもの哉數代の御恩を蒙りし主君を捨て奉り惡逆無道の政宗に與せば人望にも背き神明にも放され永く恥を子孫の面に殘しなんさらば命おしき迚退散したり其人命限り有れば幾年を送るべき所詮は存せず此伊豫守に於ては番所鎭守諏訪明神大職冠の社も照覽あれ屋形の御爲に籠城して御臺の御行末を見續奉り其後は兎も角も一命を捨てゝ亡君盛義公へ死去の（原本蟲喰て五字程不明）仕らんとこそ存じ候へ然し御臺には政宗の爲には御伯母なれば甥としていかでか疎略には存せられん政宗の心には只此城を討取て盤瀬の輩を我下風に附んとの所存なるべし左あればとて御家のさはりには成まじく候へば急き伊達へ御越有りて然るべく某御名代に殘り止まつて兎も角も此の城の見苦敷なき樣に計らい奉るべしと言葉を放て誠にいさぎよく申ければ後室

打笑ませ給ひて矢部を近付玉ひ豫州の諫言尤に候去りながら彼の政宗代々古敵の田村清顯と一味してやもめ伯母を攻めんとて清顯が聟になり舅の味方する事其謂なし其罪是一つ又政宗猪苗代に向ふ猪苗代の妻は自分の娘なり現在從弟聟の城を調略をして己有とす是其罪二つ偖又會津義廣を攻めて大に討勝ち會津の四郡を押領し今黒川の城を乘取て居住す彼の義廣は則政宗が伯母の名跡なり一つは又我子盛隆が名跡といへ佐竹義重の子なれば政宗とは從弟なり彼が領地を攻倒さん事其罪三つなり父輝宗安達郡平石の權現谷地に於て畠山義續に捕はれ急權の折二本松へ人質に取られん事を思ひて勿體なくも父諸共に打取られしと稱して義續に害させし事往古源義朝平治の亂に父が爲に義平入道を弑されたるに相同じ是其罪四つ又佐竹義重の居城常陸太田へ馳向ひ伯母並子息義宣を亡さんと企事其罪五つ此五逆は盜跖の惡逆にも越たり偖又自ら夫の盛義に離れまいらせて以來九年が間あじきなき樣にて暮す身なるを先年田村大膳大夫清顯が小倉の內松か鳥屋の山に大勢楯籠りて折よくは須賀川を乘取らんと謀る間磐瀨の人數を出して防ぎ戰ふといへ共叶はずして清顯已に關河內迄亂入したりしを佐竹義重より後攻の加勢有し故田村勢安す〳〵と追返て松か鳥屋の邊を此方へ取り返し今迄須賀川を領する事偏に義重の厚恩なり左あるを今自からいかに女なれば迚政宗が手に渡りなば仙道中の兵誰か彼の者下知に背者有へきしからば政宗常陸へ發向して義重に仇をなすべし所詮自ら一日も政宗に敵對して防ぎ戰ばさすがの爰は名城なれば士卒の心次第にて急には落まじ左有て政宗が佐竹へ發向の延引なるを以て自分佐竹への恩を報ずる心ばせにすべしと泣々かきくどき給ひてひたすら籠城とのみ宣ひければ箭部伊豫守は申に及ばず須田美濃守父子濱尾三河守父子を始として義心金鐵の勇士等皆尤と同じてさらば籠城の用意せよとて諸士殘らず馳集り須賀川千用寺の秀墓と明林寺の明良と兩僧を招き誓文を書しめ熊野の午王を灰にして酒に入一同決心の輩に飮ませらるゝに上へをや憚りけん敢て盃を初める人なし其時濱尾三河守憚る所もなく進み出で是は常の御酒宴とは事替り盛義卒去の後は何事も須田濃州四天王の隨一として御計らひの事なれば御邊急ぎ御

初め候へと會釋すれば濃州畏て仰尤至極なりさらば某初めて二心なき人々に思ひさし致さんとあざ笑て盃を取りていそぎ常は下戸なれ共爰は一ぱいとたわむれて午王の酒を一盃たぶ〳〵と引請て心よげに飲ほして三河守にむつとさす三河守も是を請ていみじくも見えたり濃州殿さらは此次は三河守こそ賜らんと是も一つ飲みて夫より次第々々に汲かわし屋形へ無二の盟約をぞなしにける其日守谷筑後は西の方にて所用の事有とて立出此盟約の酒宴に加はらず須田濱尾を始めとして諸人是は何樣政宗へ返り忠と覺えたり天晴筑後が今に歸らば討て捨んと各怒りをなしに兎然れ共事の仔細も知らずして譜代相傳の宿老たる人を無下にせんも如何なり先づ仔細を尋よと各異議有て筑後は其日不意に害をぞうけに兎

須賀川落城之事

政宗已に盤瀦を攻らるゝ由其聞え頻りなれは佐竹より加勢として茂武左馬介河合甲斐守槻折日向守等に二百餘騎を差そへて須賀川へ遣はさる偖又岩城常隆よりは竹貫の城主三河守か嫡子竹貫中務少輔と植田城主但馬守八百餘騎の勢を付て加勢せらる竹貫中務は父三河守の兼ねて精兵の聞え有ければ其從ふ處の兵皆弓を以て武功をあらはすにより勝れたる強弓の手だれ共を催して引率しける其中に水野勘解由と云ふ者有彼か矢は其間六寸餘の大雁股にて大弓にせんだん弦掛二十間三十間の敵をばたやすく首を射切る程の精兵なり須賀川方此加勢に猶力を得て城の外はりつけ場の高きところに白旗を立て靡し濱尾三河守同筑後守同志摩守箭部伊豫守遠藤雅樂頭朝日伊勢守大波越後守以下旗本を守護す寄手の向陣には遠藤壹岐守濱尾内藏介同近内同孫十郎長沼彦左衞門尉大波石見守同新四郎朝日萬七内田肥前守須田主膳同右近箭部紀伊守同掃部介根本左馬亮白葉因幡守今泉伊豆守佐藤主水以下なり旗本鐵砲の上手には鈴木六郎左衞門尉泉田將監同左近須田源藏を始め三十四人一人鐵砲三挺四挺宛預り玉藥込する者を二三人宛相そへて一陣に向ふ弓は須賀川に隱れなき恩羽右衞門を始めとして十三束三伏の精兵四十餘人一樣に塗込藤の弓にせんだん弦掛切符の矢森の如くに負なして楯も鎧もあまさばこそ如何なる筑紫の八郎殿もおそら

くは劣るまじと廣言咄て勇み進ます須田美濃守は黒絲威の腹巻に高角打たる甲の緒を締金ね作りの太刀を佩き今度の軍我一人と思ひければ人ませもせず安藤服部小坂橋篠山長瀬山寺鎭鈍柄杯といへる武邊の覺取たる剛の者共を前後左右へ立たせ其勢二百餘騎四つ目結の大旗を眞先きに進ませて馬に白淡かませて群を拔んで進みたり南北は佐竹岩城の加勢を交へて相向ふ去程に政宗は十二月二十六日の早天に山寺の山王山に取上りて本陣を居へ辰の刻に早信夫勢大黒石の畔を眞向ふに攻掛る伊達郡の兵共は雨喚り口と八幡口と兩方より押し向ひ先陣は大内備前守齊義舍弟片平助右衞門尉二陣は伊達藤五郎成實後陣に片倉小十郎盛重都合其勢三千餘騎が一勢だに備へを亂さず雨喚り口より押向ふ八幡崎の口へは新國上總介を先陣として二陣は白石若狹守後陣に四保但馬守と定めて政宗は山下の藥師堂に陣せらる須賀川勢の内須田美濃守か嫡子源一郎岩城よりの加勢竹貫中務少輔植田但馬守大勢を率し宿より三四丁程打出手袋川の端大黒石の邊に支て待掛け敵味方矢長計りなりければ竹貫が手の者共強弓の精兵水野勘解由を始として六百餘人が矢種を惜ます差詰引詰散々に射るあだ矢少もなければ伊達信夫の兵夥敷射殺されて手負死人さんを亂し入塚をついてぞ見へし須田美濃守得たりかしこし早掛れと前後の勢聲を掛互に今日を最後の軍なれば首取り高名無益なり死にぐるひに只働きて大勢を討相よくば政宗と組て勝負決せよといらつて一番に突て掛れば大波石見守高橋右衞門介太田七郎左衞門遠藤雅樂介濱尾金内長沼彦右衞門矢内雅樂介同與左衞門熊澤四郎左衞門中村助七郎矢部奎之助佐藤主水正一同におめいて掛合東西南北に切つて廻れば伊達勢散々に切立てられ究竟の兵百五十騎枕をならべて討れけり其外の兵共人なだれをついて敗北すされば味方の友たち鎗長刀につらぬかれ横死をするも有或ひは深田へ馬を馳倒して大力をも揚け得ずして皆悉く討取らるかゝる所に新國上總介と八代勘解由兵衞の兵共皆歩行立に成り大黒石の池より谷のせまりなる田の畔傳ひに會下町と云ふ小路の南へ亂入し火を掛けんとしけるを須田が後に控へたる箭部主膳正圓谷與三右衞門同右馬允遠藤左馬介鹿島彦八濱田大藏少輔矢田川信濃守江持遠江守川東の郷の

遠藤右近將監同内藏介佐久間主殿介飯村六郎大槻與一郎相生玄蕃允同若狹守日照田大學大寺雅樂頭服部伊豆守吉成玄蕃頭須田内藏介を始として三百餘騎か馬煙を立て掛合弓鐵砲つるべ掛て偖討物になれは鎗長刀の切先揃へて火花を散らしもみ合ければ新國八代が火水の兵共案に相違して三丁計り追立られ計無になるのみならず深田の中へ一同に追込られて討るゝ者數を知らず遠藤右近大夫將監深田の西なる畔に控へて掛るも逃るも云はせず弦なき弓のうらはづにて深田の中へたゝき伏せて敵二人が首取て田の畔にならべ置ば須田左近佐久間主殿介與野將監殿の振舞哉今此軍に首取て高名は詮なし只討捨てにせられよと云ひ捨追掛逃る敵をわたかみ摑で引倒し或は馬の四つ足をなぎ倒して刎落し深田の中へつき入て猛勇を振ひあたりを拂て懸ければ上總介も勘解由兵衞も稀有にして命計りを助り鬼須賀川勢前後左右を乘り廻して死にぐるひに戰へば先陣の大内兄弟の勢もしどろに成て一所に陣を立兼ね進み得ず二陣に控へたる伊達藤五郎是を見て入替り相戰ふ政宗は頃日須賀川より降參したる保土原江南齋を召てとくと謀を約し道々の案内委しく尋ね問ふて大軍一同に四方より攻寄る須田美濃守今度も一陣に進みて大勢の中へ割て入駈立て焚嗾の勇を振て頂羽が勇をなし巴の字に追めぐらし十文字に掛破に又寄手の軍兵百餘人一場に討たれて殘る勢ばつと引は美濃守は氣色ばふて追討の輩を制して長追ひすなと下知して士卒を圍め本陣へ引返すいかめしかりける働なり八幡崎の方も手痛く防戰へば伊達勢攻あぐんで如何せんと案し煩ふ處に雨嗅り口を固めたる守谷越後守と云者兼ねて政宗に内通し盟約にも逃れたる楯裏の謀叛人にて大追物の馬場口番石と云ふ處に上りて己か指物を振りければ兼ねて相圖やしたりけん筑後の郎等小織部金平と云ふ兄弟の者共城より西に當りたる會下町と云ふ小路長祿寺と云ふ禪寺の隱居所あり鬼にやがて火を付たる折節西風烈敷く吹掛て猛火天にひるがへり七堂伽藍に吹き付けて火さかんにもへ上れば餘炎天を掠め城中の役所々々へ飛付いて四方へ煽を吹きしきさしもに軒を竝べてつくられたる屋形へ一同に天を焦して燒上れば守谷に屬して雨嗅り口へ向ひたる鈴木帶刀同八郎山守淡路守小川和泉守同喜太郎手疲將

監滑川藤十郎坂池五郎左衛門を始佐竹の加勢河合甲斐守茂武左馬介等こはいかにと煙りにむせび前後を忘じて力及ばす敵の中へ駈入て戰ひて思ひ〳〵に討死す後室は此有様を見玉ひ守谷謀叛の次第餘り悪しと憤り玉ひて筑後の妻の城中に居たるを引寄せて汝が夫の無道人者が反り忠故須賀川六代の名跡を只今斷絶する條無念の次第なりと齒がみをして宣ひ筑後が女房を刺殺さんとせられしをさすが女のはかなさは側なる女房達大勢押隔後室の袖へ取付てしばしと押し留め奉りければ力及ばす其刀にて自害せんとせられしを近習に扣へし者共あわて取止め奉りける其後政宗より迎ひの侍十四五人馳來れば女房衆八人諸代の侍熊澤四郎右衛門尉長沼彦左衛門尉大波石見守を始として侍九人後室を介錯して燒崩れたる炎の内より泣く〳〵迷ひ出られける哀れなりし次第なり往古二階堂遠江守爲氏の文安元年三月に始めて奥州盤瀬郡須賀川へ下着せられて以來須賀川の屋形六代にて天正十七年十月二十六日に二階堂家滅亡せりされば長祿寺の餘煙城中へ吹掛て殘らず灰燼と成りければ須賀川勢途方にくれ前後を失ふて後室の行末も知れず誰か一人も生き殘るべきと皆思ひ〳〵に討死して恩を一戰の苔の下たにぞ殘しける彼の長鎌寺と申は人皇百三代後花園院の御宇長祿年中に開基なり世に小釋迦と呼れたる月空禪師の草創として百三十四ケ寺の惣祿の其一つ成しとぞかゝる無雙の禪室も一時の兵火に掛りて殘らず炎上したりければ哀傷の思ひ絶えやらず二階堂家滅亡の程いとゞかなしみまさりけりと須賀川古老の輩は皆涙を流さぬはなかりける須田美濃守源義村は度々の軍に手痛き働きして大勢の敵を追ひ靡け暫らく馬の息を休て討殘されたる兵共を一所に屯し又一軍せんと扣へたる處に思ひの外長祿寺より火出來て須賀川中猛火の（盛に喰はれて二字程なし）に覆れくらやみと成りければこはいかにと驚き後室の御行末いかにと思ひ急き引返して見れば早門と築地も燒崩れて爰かしこに朋友の死骸のみ有ければさしもの六代繁昌の一城も原の灰となればあら口惜き次第哉此上は腹かき破り元弘のむかし安東入道聖秀か鎌倉の燒跡にて自害せし如く冥途黄泉の物語りにやするとと獨り言して立たりけるがいや一先居城和田の要害へ歸りて今一度政宗が勢を引請一軍して腹切

るべしと志ざし泣々和田の城へぞ歸りける美濃守が嫡子源一郎隆村は父か後より城中へ歸りけるが燒崩れたる塀の陰なる細道にてむざんやころぶ塀にまこい押倒されて起きかがらざるを政宗の兵多く馳寄りてやがて生捕にぞしたりける運の程こそ無念なれ遠藤雅樂頭同彦市大賀大學玉名與左衛門高崎内記大波越後守等は政宗の旗本を目掛て馬馳入けるが今朝よりの軍に兵粮をもつかわず馬はつかれて一足も進まざれば是にてはあしかりなんと皆々馬より飛び下り〳〵歩行立になり甲をも打落され何れも大童の姿となり討物の切先きを揃て命を限りに戰ひけるが政宗の旗本勢多く折重なりて戰ければ遠藤雅樂頭父子を先として一人も殘らず討死す其中に遠藤壹岐守只一人如何思ひけん政宗の陣中へ駈入甲を脫て降參のよし申ければ政宗聞玉ひ神妙なり迚一命を助けらる又當家に久敷仕はれたる高橋菊阿彌と云ふ不敵の剛の者有しが嫡子の文三郎と濱尾孫十郎と以上三人かしらを合せ一足も退らず働きけるが高橋父子は比類なき働きして終に討れぬ孫十郎は去年より政宗に奉公して在鳧が守谷が返忠にて政宗へ内通せしを能聞知て父の三河守爲家兄の内藏介金内に知らせんと軍の最中に須賀川の陣中へ馳入り父兄の者に尋ね合て守谷の逆心の次第一々に告げ知らせ偖我母と兄が妻のいまだ退き得ずして本丸に殘り居たるを何卒命を助け度く思ひ走り入て尋ねめぐるに多くの女童火を逃んとて築地の上に群集しさんを亂して有ける中に父三河守の妻も兄内藏介が妻も交り居けるを見付て孫十郎大きに悦び力を付て母と姉を只今外へ落ん間各志を頼入と堀の向に居たる政宗の兵を招て申ければ八幡大菩薩照覽あれ見放し申まじと答へけるに孫十郎限りなく悦び立歸りて見ればはや其間に何者か（原本蟲に喰はれ十字程不明）の怒をなし鎗おつ取て東西南北敵味方の嫌ひなく母や姉を奪ひ取りたる者有れば鐵壁成共微塵になさんと當るを幸ひに突伏切伏菊阿彌と一緒に働けるが菊阿彌は最前の如く父子同じ枕に討れて政宗の兵二三十人馳來り孫十郎が討死せんとする中へ押隔て大勇無雙の孫十郎我々が知音の者なり味方討致なと押へてむたいに城をつれ出し保土原江南齋か陣中へ連れ行き昔のよしみなれば迚其夜に保土原へぞ遣しける又岩城よりの加勢植田但馬守竹貫中

務も手の者大勢討れて力及ばす引取けるが伊達信夫の兵共透間もあらせず追掛ける間引返し手痛く軍して但馬は即座に討れぬ中務は栗屋澤と云所をさして落ち行くところを大勢追掛てきたのも後を見せ給ふ物哉同將の但馬殿は早討死にし給ひぬ鬼神の如く沙汰有りし三河守殿の子息にていづく迄引給ふと呼り追掛しかば竹貫あざ笑て返すにかたき事か迚朱に染みたる大太刀眞甲にさしかざして馬の鼻を引返すとぞ見へし忽敵三騎切て落し其後多勢が中へ駈入て散々に切亂し終に討死をぞ遂にける討殘りたる郎等三人主の討死にするを見捨てはるゝ〳〵と竹貫へ逃歸へるを父の三河守安からぬ事なりと大きに怒りて無念の餘りにや臆病者のこらしめに迚三人共に首打て捨たり鬼とぞ聞へし偖又須田美濃守義村は和田の城へ歸りて見るに板橋安藤服部などゝ云ふ兵共漸く二三騎に打なされて味方する者もなく嫡子源一郎隆村も生捕られたると聞き力を落し途方を失ひさしもの義村もあきれはて其夜和田の城を自燒し行き方知らず成りにける此美濃守は須田備前守輝村が一男なり兄源次郎與村は去る永祿五年八月松山合戰に十八歳にて先登し田村月齋の陣へ馳入て討死す是によりて弟源三父の跡を續ぎ美濃守義村と號し須賀川四天王の其一人にて仙道中にならびなき兵なりしとぞ偖又鹽田右近大夫は石川の町を志して落ち行鬼を政宗より石川大和守照光の許へ使を立て須賀川落人のよし角と申されければ大和守終に右近を誅して鬼盛義の後室は新田へ落され玉ひ十日過ぎて十一月五日杉の目（今福島と號す）迄到り玉ひしを政宗よりの仰として後室へ附き添奉し熊澤四郎右衞門尉長沼彦左衞門大波石見守を初として九人ながら誅し玉ひ鬼此石見守は越後守の子にて後室須賀川へ祝儀の節伊達植宗より附られたる侍なり父の越後守は右須賀川落城の時討死せり偖夫より後室政宗を猶々深く恨み憤り玉ひ此の上は伊達へ行くまじと宣ひて杉の目を立せ玉ひ聟なれ迚岩城へ立越へ玉ひ左京大夫常隆の扶助を得てしばらくおはしけるに天正十八年常陸小田原參陣の時鎌倉の星が谷にて死去有し後に水戸へ立越へ玉ひ八九年の間は佐竹常陸介義重の元におはしぬ其後德川家康公關ヶ原御一戰御利運にて佐竹義重の息右京大夫義宣御不審を蒙り常州水戸八十萬石を沒收せられて羽

州秋田へ移されける折節病氣にておはしければ暫時に療治として故郷なれば須賀川へ立寄り給ひ僅に再興の長稱寺へ入らせ給ひ扈が病腦重り玉ひ命の限り有て終に慶長五年の冬世を去り玉ひぬ是誠に盛末は心衰ふの理り哀れ成扈次第なり是伊達大膳大夫輝宗の妹にて二階堂遠江守盛義の内室なり須賀川に殘り居たる譜代の侍共皆民間に下りて有けるが後室の死骸を取隱し形の如く葬禮して其後三十三年忌迄を念頃に弔ひ奉るとぞ聞へし

奥陽仙道表鑑　卷之十一　終

奥陽仙道表鑑　卷之十二

山内刑部大輔氏晴が事

伊達左京大夫政宗已に會津須賀川を併呑せられて武威次第に強く大に成けれは白河の城主結城七郎義親も石川大和守照光も早く味方に參り其外小荒田次部少輔矢田野伊豆守以下の須賀川衆皆政宗の手に屬しぬ偖政宗は須賀川に四十餘日逗留して仕置悉く沙汰して盤瀬をは石川大和守照光領せらるべきよし沙汰せられければ照光大きに悦びやがて入部して郎等矢吹薩摩守を仕置のために須賀川に差置る角て政宗の郎等片倉小十郎盛重方より岩城の家臣志賀閑釣齋が許へ書札を送りて伊達岩城和睦せらるべきの事相計らひ後向異議あるまじくと約せられて政宗常隆和睦し鬼爰に會津蘆名の舊臣に山内刑部大輔氏晴と云者有彼か往古平治の亂に惡源太義平に隨ひ武功十七騎の内にて名をあらはしたる山の内首藤刑部丞俊通が後裔なり會津の横田と云所に知行せしより横田刑部とも申けり去年六日義廣沒落の時直に横田へ歸りて居たりしに原田休節齋片倉意休齋か方より平に政宗へ降參せよと度々催促すれ共聞入れずして居たり鬼が密に京都秀吉公の許なる石田治部少輔三成が方へ事の由を注進して其返簡の來る間いつはりて政宗へ降參の由にて居たりし其内に石田方より返事到來して味方に參らるべく條神妙に思召候追付秀吉公奥州へ御下向是有て政宗を追伐有るべし左あらば彌御味方に參り忠戰有べし領地の儀は聊相違の儀是なきを賜り御舍弟横田大學殿へも大沼郡伊北地を宛行るべきの旨申來りければ刑部大きに悦びて密に會津を方便に出て横田の地へ馳歸つて卽旗を上山内出羽守同左馬之助中丸大膳亮横田石見守同安藝守を先として楯籠れば政宗是を聞て偖はだしぬかれたる口惜哉と怒をなし則大波玄蕃允に勢を付て攻させらるゝに玄蕃利を失て討るゝ者其數をしらず剩へ越後の上杉喜平治景勝より加勢として甘粕備前守清長須田大炊介長義千餘人を率し刑部が方へ馳着ければ伊達方彌あぐんでこそ見へたりしかゝる處に大閤秀吉公相州の北條家追討として小田原へ御出陣有るに付て

越後の上杉も降參あるにより加勢の輩皆越後へ歸りければ刑部大輔力衰へて大鹽水窪の兩陣ばかりをたのみて抱へ居りたりしにさせる事もなくて果けり刑部も早く小田原へ參陣したりせば所領安堵の沙汰も相違有まじかりしを聞入れず小田原へ討出なば其跡にて政宗に横田を無下に押領せられんとのみ是を心もとなく思ひ太閤へ降參しながら參陣せず其實をあらはさざる故其後はなんのさたにも及ばず結句累代の所領を沒收せられて子孫漂浪の身となり扈とぞ聞へしなり

河原田盛次之事

河原田治部少輔盛次と云者有是も會津の舊臣にて去年摺上原の合戰にも比類なき働して隱れなかりし大剛の勇士なり彼れは往古秀鄕將軍十三代結城上野介朝光入道日阿が末子阿波守朝時入道蓮心が末葉なり蓮心が嫡子下總守長廣と云ふ者始て下野國河原田の鄕に隱居してけり其子孫太は氏を河原田と稱す長廣が子玄蕃允長兼其子河原田八郎兼任其子兼尙其子兼定其子式部少輔兼村と云鎌倉左兵衞督持氏に仕へて永享十二年四月結城合戰の時は中務大輔氏朝父子に馳加り結城の城に籠て討死せり其子村友其子友和其子石見守友尙奥州磐瀨郡廣門山田を領す其子筑前守友秀と云其嫡子河原田大膳亮秀繼二男治部少輔盛次なり蘆名修理大夫盛氏同判官盛輿三浦介盛隆平四郎義廣に仕へて會津伊南を領す去年六月義廣沒落の時伊南久川の城に歸りて居たるを政宗より南山の城主長沼彌七郎盛秀に仰て是を攻めさせらるゝに盛次名にあふ勇士なれば物共せず甥の河原田左馬允吉次同庄左衞門友吉芳賀阿波守金井澤左衞門佐五十嵐和泉守宮木兵庫允伊南源介只見大炊介宮床四郎左衞門尉同奎衞門尉馬場彌左衞門大桃右京を先として金鐵の勇士共命を的に投打て戰ければ南山勢軍の度毎に打立られて討るゝ者數を知らず又越後の上杉景勝より清野靑樹軒安田上總介俊易木戶元齋等に三千餘人を差そへて盛次が加勢有ければ長沼彌七郎盛秀が兵共彌攻あぐんで進み得ずかゝる處に天正十八年の頃太閤秀吉公奥州御下向有ければ盛次も宇津宮迄御目見として出扈が石田治部少輔三成と其中よからず兎角の相違有て御目見は叶はずして力及ばず會津へ歸

り幾程なく病死せり其子龜丸とて有けるが越後の方へ漂泊して終に出世の花もひらかず死去せり横田と河原田亡びてより以來手さす者もなく會津四郡仙道中一圓に伊達政宗の掌握にぞ入りにける

白河義親浪々之事

白河の領主結城大藏少輔義親は曩祖彌七左衞門尉祐廣より相續して已に十有餘代白河郡を領し小峯の城に居住し其名隣國迄隱れなかりけるに太閤秀吉公天下の草創の時に至りて東國中の諸大名悉く拜趨の臣となるにより義親の一族中島上野介と云ふ者義親を進めて急ぎ秀吉公へ降參あるべし早く奥州にも南部大膳大夫信直津輕左京亮爲信を先として悉く使者を以太閤へ進送して本領安堵の儀を願はれ候間此方よりも早く其御沙汰有て然るべしと再三諫めけれ共運の末にや義親愚昧にして中島が諫言を聞かず只佞臣共に相議して伊達政宗を賴み使者を一人指添へ海松黑と云ふ良馬に逸物の鷹一聯を太閤へ獻ぜられけるに政宗仔細なく是を領掌して小田原へ參陣せられしが結句御不審を蒙りて相模國底藏と云山中に蟄居せられければ義親の事はさたも及ばず却て義親より太閤へ進上の馬と鷹とは政宗自分の土產なりと披露して義親よりの使者をば兎角方便して白河へ返し是に依て義親降參の事其沙汰遲滯せしかば思ひの外なる御不審を蒙りて闇夜に燈を滅し渡海の船に楫を折りたる心ちして暫時は城の西にあたりたる金勝寺と云ふ禪寺にしのびやかなる體にて居られしが政宗は七月十三日會津を沒收せられて米澤へ移られ白河をば太閤より伊勢國住人關長門守平一政に賜りければ義親は彌浪々の身と成り白河を立いで丶下野國にさまよひ那須の内湯本と云ふ處にあやしげなる住居を求て移住し給ひ其後子孫斷絕に及び兎とかや委く會津四家合考にあり

大崎義隆沒落之事

前大崎の領主斯波左衞門督源義隆は家臣共の逆心に依て大崎中亂ける時分より加美郡新田の城に有けるが天正十八年八月十九日中新田の城を退き同郡小野田の城に移り爰にて路次の用意を沙汰して同二十四に小野田を打出出羽國最上へ掛り上洛して都千本

に逗留して太閤へ平に歎き申され大崎遷住の事を願はれけれ共秀吉公許容なく終に蒲生飛彈守氏郷へあづけ玉へば力なく氏郷に具せられて會津へ下たり若松に住せらる氏郷卒去の後子息秀行下野の國宇都宮へ遷られければ猶若松に殘り長尾中納言景勝へ奉公の身となられ扨ぞ痛はしき鳴呼此の人の先祖斯波伊豫守家兼は足利修理大夫高經の弟にて始て奥州五十四郡の探題に補せられて下向せられしより是を大崎と號し武威を東鄙に振はれ扨に時來り運傾きて家兼より義隆の時に至りて陪臣の身となられ扨惡運の程こそ口惜しけれ

岩城常隆卒去之事

岩城左京大夫平常隆は幼少より武略の聞へ隣國迄隱れなし或時は相馬と一戰して武備を奪はれず又或時は田村と戰陣して數城を拔く其勇智謀東鄙無双なりしに太閤小田原追伐の砌常隆後榮を察し猪狩竹貫三坂上遠野植田等の宗徒の郎等召具し關東へ馳參られ扨が病腦終に身を責て天正十八年七月二十二日鎌倉の星ケ谷にて卒去せられ其家既に斷絶せんとしけるを一族なりし白土攝津守忠を專一に守りて佐竹常陸介義重の四男能化丸とて八歳になられけるを申こうて岩城忠次郎眞隆と名乘らせ太閤奥州御下向の時下野國宇都宮に於て增田右衞門尉長盛に便りて常隆か子なる由披露申けれは仔細なく常隆が家督安堵の御諚を蒙り岩城へ立歸りて居住す貞隆後に從五位下に叙し但馬守に任せられける慶長五年石田が亂出來て兄の佐竹義宣石田に與したる科により常州を沒收せられ羽州秋田へ移されし時岩城貞隆も領地殘らず改易有て暫く能登の國へ流れしが其後出羽の龜田の城へ移されて領地僅に二萬石をぞ下し賜りける

相馬義胤降參之事

相馬大膳亮平義胤は數年岩城石橋田村伊達の人々と拒み戰ひ爭ひしか共其勢微なるによりて大功を立る事も叶がたく只東安達並田村領の常盤塙ひ伊達郡の南を少々切取て一城中村へ手をさゝれざるを數代弓箭の規模として居られ扨に太閤小田原出陣と聞早速相州に至りて降參有しかば太閤も其家を重んじ玉ひ相違なく本領安堵すべき旨仰出され扨偖こそ今に

至りて相馬氏奥州中村を領し累代連綿として數十年武功を天下の人に知られ繋ぎ馬月に星の家の紋世に高く繁昌しける程こそ目出度けれ

太閤奥州御下向並蒲原氏郷會津恩賜之事

上方には羽柴筑前守秀吉と云卑賤より起りて惟任日向守光秀を討取て亡君信長公の讐を報じ武命を天下に播し威風四海に振ひて其身關白に任せられ四異八荒を併呑せんと其鋒先の強き事圓石を千仞の山より轉す如く積水を萬仞の谿に決するか如し智謀衆に抜武略至て世に越へたり是に依て中國の毛利陸奥守輝元九州の島津修理大夫義久四國の長曾我部土佐守元親北國の上杉越後守景勝迄悉く皆拜趨の臣と成り秀吉公既に天正十八年三月大軍を率し關東へ出馬有て相州小田原の城を取巻き給ふ東國第一の大名と聞へし北條左京大夫平氏政嫡子相模守氏直父子近々最亂近付ぬと聞へしかは遠島はどうの者迄も殘らず小田原へ參陣して秀吉公の御味方に屬し鬼奥州にも岩城左京大夫常隆を始として相馬大膳亮義胤津輕右京亮信南部大膳大夫信直以下出羽國には佐竹常陸介義重嫡子右京大夫義宣父子參陣せらる伊達左京大夫政宗は此四五年が間奥州仙道中を蔑の如にして悉く押領し會津蘆名の家を亡して黒川の城に移り上見ぬ鷲の振舞のみせられしが太閤小田原へ發向と聞參陣せずば叶ふまじ迚急ぎ相州へ打越されしに結局秀吉公より御咎有て底藏と云所へ押込られ會津其外仙道中を押領せし事共忽度御尋有鬼に政宗流石不敵第一の人なりければ兎角申なして陳謝せられしかば此の上は迚一命を助られ頃日押領したる會津四郡仙道領をば殘らず沒收せられて本領計り安堵の御沙汰有ければ政宗不思議に命助りて會津へ下だり七月十三日黒川の城を明て米澤へぞ移られ鬼爰に矢田野伊豆守と云者は元來須賀川二階堂遠江守盛義の郎臣なりしが須賀川落城の後政宗に從て會津に伺候し居たり秀吉公小田原へ發向と聞き會津を逃出關東へ參陣して佐竹常陸介義重を頼み彼の陣中に入鬼又矢田野か弟善九郎と云ふ者は會津に殘り居たり鬼が泉田將監明石田左馬介大里入道芳斎大河原伊豫守芳賀金内抔と云者を催して大里の城に楯籠り舊友地下人相集て二

階堂家を再興せんと義を宗として楯籠るを政宗いまだ黒川に居られたる時なれば石川大和守照光片倉小十郎盛重を両大將として大里の城を攻させらる矢田野善九郎嚴しく守て石川大和守數度追立てられて討るゝ者數を知らずやがて敗軍すべしと聞へしかば重ねて伊達藤五郎成實片倉と牒し合て寄たり梟に善九郎時分を見濟して寄手の陣へ返り討に夜討して寢おくれたる兵共片端よりなぎ伏て伊達の兵多く討取梟かゝるところに北條左京大夫氏政舍弟陸奥守氏照兄弟腹切て小田原落城しければ秀吉公其勢ひに五十萬の大軍を麾き奥州へ打下たり給へば政宗も長井へ引移られて大里の寄手も引拂ふ石川大和守照光伊達成實片倉盛重共に長井へ引退く三春の城もひらいて田村孫七郎宗顯同彈正入道月齋父子殘らず長井へ引退きければ秀吉公は黒川迄着御有て黒川の城に仙道七郡を添て蒲生飛驒守氏鄕に下されしかば須賀川三春二本松伊達信夫白石の城迄都合百二十萬石をぞ領せられ梟政宗には後に大崎郡を賜て仙臺へ移らる白河をば關長門守一政に下し給ふ是は元伊勢住人にて新三位中將平資盛の後胤安藝守盛信入道萬鐵齋と云人の嫡子なり蒲生飛驒守氏鄕の妹聟なり大崎左衞門督義隆の所領を沒倒し其跡八郡をば木村伊勢守に賜りかゝる如く奥州の掟悉く沙汰せられて太閤は高原越をして京都へ凱陣ましく梟いさましかり梟事共なり

奥陽仙道表鑑　巻之十一終

奥州仙道一覧記

一岩瀬四十四郷之郡用は須賀川の城主輝行と申候其刻今泉村の城主には家來本丸に矢部周防二元丸に取川佐左衛門其外寄騎三十四人今泉七郷を相加へ付置れ候其頃田村清顯と輝昭と不和に付今泉村へ田村より大勢を遣し攻申べき由輝行聞及ばれ須賀川の人數を引自身に馬を出たし今泉の後をまき陣を取候て田村勢と龍の木にて一戰致候得共田村方大勢に付き輝行叶はず其陣を引候に付田村勢付入て大久保のきりの林へ風を請火を掛け大久保を悉く燒拂ひ候得ば輝行の人數大勢討取られ輝行は漸く矢田野村へ落それより須賀川へ引籠り申され今泉の城主は其樣子を聞きおち其夜の內に城を明け長沼へ引退き申候今泉落城の後は清顯の下になり田村月齋を此城に差置れ候清顯のために月齋は伯父にて候なり

一右以後會津の城主盛高と田村清顯不通に成候に付佐竹人數並仙道勢も大方盛高と一同になり最前田村より須賀川の內切取られ候外にはかまへもなく田村の內御代田へ押寄きはどく攻候に付田村の和談には今泉七郷を切取候分は相返し申べく條先此度御代田を攻られ候儀差置れ候樣にとこんもう申候得ば輝行方承引申され候に付月齋今泉の城を田村へ引込候故則其跡へ須賀川より濱尾と申者を今泉へ差置れ候なり

一其後義弘も政宗と取合候時政宗は大方仙道切取候儀いきほひに恐れ濱尾は政宗へ手替り仕候得ば今泉を然るべくとの判を取候得共仙道殘らず政宗の手に入候に付濱尾には本領是有候迚仁井田村を遣はされ今泉には政宗折籠して治部大輔を差置れ候なり

一其頃須賀川城主盛義と田村清顯は古敵にて數度取合に及ばれ或は五十騎百騎計は討たれ勝負是なく候夫に就き佐竹義重は盤瀨盛重と緣者に候に付會津成高は岩瀨盛義がためには嫡子にて候に付加勢として大勢を催し田村の內御代田の城へ押寄數日取合候得共終に岩瀨盛義の手に入り申候其後須賀

川盛義は死去せられ夫より後家持にて佐竹を頼まれ罷有候其後家は政宗の伯母に是有候に付政宗より一味致され候様にと數度申され候得共伯母は一切承引是なく候に付天正十年の夏政宗大勢を催し須賀川へ押寄一戰致さるべく様子に是有候故岩城の植田但馬又佐竹には川井甲斐守もたかの城主左馬介を始め二百騎加勢に參られ候須賀川須田美濃守下知を以て町年寄遠藤雅樂頭濱尾金内箭内雅樂助同與治右衛門大沼石見守高林主水中村助七郎矢部李助大賀大學此者共先として竹貫中務須賀川の者共と一同に成り合戰致し候政宗年寄之内屋代勘解由兵衛長沼城主新國上總介兩手にて人數悉く追散らし三百餘人討取勝閧作り備を立暫く息を休め候處に須賀川年寄之内守谷筑後と申者逆心仕須賀川町中へ火を付城中迄燒拂ひ候に付案の外落城仕悉敗軍して政宗勢になで切に逢申候殘の者共は方々へ落行候頃は天正十年午六月七日の事にてあわれ共申べき様なきしだいなり

一白河郡關山へ籠城仕候は天正十一年未年佐竹義信馬を出たされ候砌野頭に薄葉畑中は人數二十計程持義信に攻られ候得共落城申さず候景勝出馬にて陣之割も河原田大膳中牧將監物頭にて地之侍新馬上鐵砲百挺を鄉の百姓ふもとに千人計り小屋を掛七月より明る年の三月迄關山に罷在候得共落城申さず其より何事なく引込申候

一石川郡の内淺川村城主は淺川治郎左衛門と申候此人は石川の城主と一とつに御座候前代よりの城主にて是有候佐竹衆仙道へ弓矢に出られ候時分淺川治郎左衛門儀佐竹衆は天正元年酉の年奉公仕候白河城主は會津盛氏に奉公仕候に付て白河の城主淺川へ寄城を攻られ候處に三の丸迄取られ候得共淺川城中の者共雜兵共に千人計にて一戰仕白河の侍大和田右近濱尾十郎兵衛白岩式部志田玄番と申歷々人を始として形の如く働く故三十五六騎程三の丸にて討取られ候に付白河勢皆々引退申候城中堅固に持ち候故加增小貫大和田杯と申在處を千石餘治郎左衛門に下され候其上度々譽れ是有候白河岩瀨の主より度々淺川の城を攻候得共手詰り申儀是なく候依て如何にも堅固に持居候會津盛氏盛高父子と田村清顯自身に出馬にて淺川地に十二三日程

兩家衆陣を取居られ候處に會津と田村衆と和談是有双方陣を引申され候に付何事なく候得ば彌治郎左衛門をひしき鳧

一政宗は會津と仙道迄討取り申され候刻は淺川治郎左衛門も政宗へ奉公仕候佐竹の主に敵を仕候故淺川へ度々取合候上御代田に罷成り一年前に佐竹の下に南郷の者寺山羽黒棚倉人數三百騎程にて淺川へ働申され候處に城中より百騎計にて討出候故南郷の人數退申處をしたひ參り羽黒城主石川右近を始として首數四十餘淺川方へ討取申候淺川の儀は上御代迄城を持詰申候上御代に罷成候ては蒲生飛驒守へ渡り家來關右衛門佐知行に罷成候治郎左衛門の儀は石川大和守と一所になり政宗へ參られ候領内角田に罷有候治郎左衛門の儀は佐竹へ奉公仕候刻佐竹の内玉里と申處にて取合之時功名致し佐竹義重より感狀給り今に取持仕り候よし

一石川の城主照光と申候味方は佐竹義重に是有候然る所に天正七年丗五月會津田村白河岩瀨より金屋内と申處へ押寄られ候處に矢吹筑後と申者は田村三澤彌右衛門と申者に鐵砲にて何の子細もなく打果され候取合やかて引退き候

一天正十年午八月に棚倉之内大寺と申處より人數引連石川の脇村湯江戸と申村迄打出候間石川よりも出合一戰候得ばかへって大寺迄追込み大寺修理之介を始三十餘人程石川へ討取り歸らるゝ

一先年石川の内山取と申所に小平村八郎兵衛草をふせ岩城の者共通路仕候處を討取申候に付此褒美として會津盛氏と田村清顯より兩永樂五百給り彼の八郎兵衛を豐後と名を改め遣はされけるとなり

一天正二年の頃會津盛氏と田村清顯と淺川の内郡山にて小平三郎衛門會津の方に成り田村方より首取申候大陣にて候得ば首二十程取候得共名も知れ申さず故褒美迚是なく候淺川の内小平村の城主は小平大膳と申候天正三年の頃清顯三千餘りにて此城を取まき朝より夕の七つ時分迄攻申し本丸計りに罷成り候處に取出候て城主大膳は石川へ立退申故小平は清顯下に十七八年成り候

一天正八辰年清顯と岩城の城主常隆と田村の内下枝村の城にて一戰是有候時岩城喜兵衛は田村の赤坂彌八郎と組討いたし則彌八郎が首を取申候常隆よ

り褒美として喜兵衛丹後となり候
一天正九巳年田村郡の内小野田原屋城主は中津川兵衛大夫と申候此人は中津川の城に居られ候長者に宗方右近と申者田原屋の城を預り居候其頃兵衛大夫岩城と同心申され三春へ敵と成へくと存候處を右近種々異見申され候得共一切合點之無き故腹立て右近四十三の時霜月二十三日に浪人仕候其様子を常隆聞及ばれ候哉常隆より田原屋の城に右近居られ候處を攻め申され候故落城す
一田村郡の内小野新井町の城主は田村右馬頭と申候是は清顯の一家に是有候小野六郷の者共を手に付られ候岩城より數度の働き是有候得共三春より加勢一人も請ず働き申候然る所に天正十二年申九月三日に岩城常隆新井町の内赤沼と申村へ働き申されきはとや申山にまといを立て右の赤沼村にて取合是有候時飯野村なんせんと申者斯如く働き仕候仁井町の林八郎右衛門と申者組討仕り首を取先手の討始を仕此外數人追散らし其陣互に引申候よしなり
一天正九年巳十月岩城のみやつさくと申所の原へまといを立申され候辻の内と申所へ三坂越前守竹貫先手に向ひ候時高貫の内水野彌五郎と申者名乗掛一廉の働き仕候
一田村大越村城主紀伊守と申候は清顯へ逆心仕候に付政宗馬を引請三重の取合候得共終に叶はず出城致され候岩城の主を頼み入のけ申候右紀伊守は岩城にて天正十七年五月切腹致され候由なり
一鹿股の城主は久四郎と申候政宗攻申さるべく候處に三春の侍猪狩下野と申者城を明候様にと扱申故久四郎天正十八年極月政宗へ奉公仕候
一田村郡常盤村の城主は石澤修理と申候清顯之内之人に候南の城を頼申候處に天正五巳年相馬より城を攻申時二之丸迄切取られ候得共本城より敵を追返し相馬方の首三十程討取申候故其陣引申され候
一常盤の内今泉に居住仕候石井豊前と申者安積郡の内成田村の城主田村より攻申時右の豊前十五に罷成其時甚四郎と申者の首一つ取申候次の年會津と田村と出陣の時大久保村と申所にて取合是有候甚七郎と申者は會津の主居られ候本陣へ乗込首五つ同手捕三人仕候首を生捕の者共に持たせ清顯に御

目に掛候其後甚七郎二十五の年鹽の松のかうやと申所の城を攻申處に敵の勢に掛りして先手を明兼申處に清顯仰られ候は甚七郎に餘り急き明させられ候樣にとの仰に付則甚七郎罷越鐵砲大將の富田右近と申者に急き明候樣にと申候得は則右近申樣は殊の外敵おい追ひかゝり候得ば早速に引申事ならずよし申候甚七郎申候樣は左候はゞ我等申通に致され候樣にと約束仕鐵砲を一度に放ち掛敵を打ちゞめ其煙の掛り申内に逃候樣にと申候得ば其通りに仕り候て漸く引申候其時清顯より椚山之内しにんしゆと云ふ在所を甚七郎知行に下たされ又鹽の松の内糠澤と申村にて大内彌右衞門と申覺の者の首を取清顯へ御目に掛候へは彌右衞門を討取候間則甚七郎を彌右衞門と改名なされ候事

一常盤村の内岩井澤に赤石澤美濃と申者是有候十七歳之節安積の内川田村の城を攻め申時首一つ又同郡なる田村の城にて首二つ久保田村にて四人討取り候得共首は二つ取申候又岩瀨の内狸森一戰に首一つ其後同郡より内高田島と申所にて首一つ同郡川内にて首一つ取申候其外度々手かゝり仕り候

一船引の城と大越の間は二里程是有り大越の城へ岩城之主相馬の主出られ船引へ六月二十七日に働き是有候夜明け申時分船引の者立栖と申處へ二里程も出られ候其所より人數共押し返され剩へ船引の畑を燒れ申候南北口三町横町三か所より押入れられ三人討取申候所よりも則押出してたかぬき方を四人討取申候船之者三十騎程是有候が仙石と申所の一戰に過半討死致し候

一田村清顯の代に會津盛氏と出合福原之間にて取合是有候清顯方片平邊迄二里餘程切付申候其時は富田備前福原内藏頭郡山太郎左衞門長屋豐前西荒井五郎左衞門高倉治部少輔二本松十郎左衞門熊田掃部富澤伊賀新館肥前三丁目主水蒲倉式部少輔芦澤治部大輔此者共は田村方にての一戰致されしが會津佐竹の主は岩城を賴申され候鹽の松二本松小野は清顯の爲には伯父に是有候處心替り申され候得ば田村計りに罷成候時に橋本刑部少輔折伏佐官青山藤兵衞厚美彌右衞門町中にて足輕共富田彦左衞門渡部宗右衞門橋本與左衞門郡司左馬刈合五郎左衞門中澤四郎右衞門此者共かくのごとく働き手傳

申候相馬の城主は清顯か爲には舅にて候清顯死去され候節は三春の城二の丸迄乘入れ申され候小野櫻雪右衞門大夫は心替りいたされ候清顯内方相馬へ同道して引込申候其時相馬より押へ申され候人は月齋橋本刑部少輔罷歸り候此人は政宗を賴み申され候

一田村郡の内石澤の城主は義太夫と申候清顯と一家にて是有然る處に政宗此城へ出馬石澤を取卷申され候得共何かと思召され候哉引返し何事も是なく候

一上宇津志村城主は田村宮内と申候此人は相馬の城主と不和に付相馬より移村へ押寄取合候得共落城申さず候

一百目木村の城主は石川彈正と申候清顯を賴み申され候

一宮森の城主は竹内備前と申候二本松の城主を賴み申され候處に百目木方人數二千程にて押寄せ二手に分け出合働き備州の人數三人討取申され候其時一手の組は才藤修理と申候百目木の城に馬上七十騎足輕千騎籠申候故落城申さず候

一鹽松の城主は石松久吉と申候其後に大内備前守上御代になりて蒲生古飛驒守知行にて家來蒲生忠右衞門罷在候備前守杯申時七年程打續き掛合晝夜に限らず是有候得共城堅固仕候得ば落申さず候其後は政宗の下に成り白石右衞門差置れ候

一清顯千騎計の勢にて鹽松へ取掛申候然る所に西新殿村と申迄田村方乘り掛候處に千石畑と申處へ出合六月十八日巳之刻より申之刻時分迄取合手をもきよと是有田村方掛負傷又下々に至迄首百六十程鹽松方へ討取られ引退き申候

一田村方鹽松向青石と申處へ取出寄居候處に鹽松より乘掛して田村方の首を五六十程鹽松へ討取申候事なり

一其後田村より鹽松向ふ初森と申處へ取出候樣に鹽松より乘掛小屋主富澤式部少輔を生捕其外首を三十程鹽松へ討取られける

一稻澤村の内滑津と申處へ鹽松より取出居申候田村方にては度々掛負終に和を得申儀是なく候得共無念に存せられ人數を催し田村より押寄候得ば鹽の松も出合一戰是有候得共其時も田村方敗軍致候成

田小屋と申迄一里程押くづし歴々の侍首共七十程鹽松へ討取申候

一千石森と申處に田村清顯自身に馬を出して新城を取立鹽の松の押へに仕る可き由に候得共大内備前も大事に存じ町人百姓迄も心を合せ千石森へ乗り掛りさく木迄もわり追崩結局清顯の弟田村善九郎を町人の鬼萬新右衛門と申者に討取られ其上首數八十程鹽の松へ討取られ度々面目なく候

一右之仕合に付き政宗は様子聞かれ清顯へ味方として兩主にて一度に鹽の松へ取掛是非の勝負を遂べし迚何者も一心に取掛り攻候故城主大内備前守は終に相叶はず天正十三年九月二十四日に城を明け會津へ引込申候然る間心の儘に輝宗政宗父子は鹽の松へ移仕置致され候

一輝宗父子二本松義繼同輩之二本松を旗下になし候儀偏に無念に候去り乍輝宗父子へ中途にても一戰は叶ひ難く候間斯の如く巧み申され候と内談にて義繼は鹽の松へ參り旗下に罷り成るへく由にて出仕致し其隙を窺ひ輝宗父子を討べく巧にて天正十三年酉十月八日に義繼は鹽の松へ來り右の旨を申達候へば政宗は他行にて輝宗承引にて則對面し御味方申請がいにて一途相濟夫より義繼は座を立れ候ところに輝宗も門送りにゑん迄出でられ候を義繼は同鹿子田和泉兩人にて輝宗を生捕かたに引掛刀を突掛取巻き平石村の内栗入すと申處迄一里半計り引取候輝宗の者共跡よりしたい來り候得共仕べく様是なき所へ政宗聞合追付輝宗共に討取申様にと嚴敷く下知是有候に付き義繼は輝宗を刺し殺し腹切り申候義繼の供一人も殘らず討取り申候夫より二本松へ押掛け攻め候得へば政宗も及ばず是非なく其陣引申候義繼並鹿子田の首は小濱の新町と申所へ獄門に掛られ候事

一二本松義繼と政宗父子には初には入魂に是有候相馬へ政宗出馬の節も二本松より馬上五十騎鉄砲百挺加勢として遣すべく鹽の松城主大内備前守娘を持れし故義繼子息義綱へ縁組致され候て備前守存せられ候は自然政宗鹽の松筋へ馬を出され候はゞ其時二本松より見次のために縁組申され候其様子政宗父子聞かせられ不和になりし事なり

一義繼家老に新庄新斉此兩人酉十月より明る七月十

五日迄城を持其後は會津へ引取申候籠城之内取合候儀酉十一月十五日政宗攻候得共手に入申さす鹽の松へ引込申され候明る戌三月十一日本宮の城迄遊座丹波氏家新兵衛二本松衆箕輪玄蕃遊坐源左衛門右四人の者其逆心を企て其外四五人は心替り片倉小十郎を箕輪館迄引込本町杉田町迄火を掛悉く燒拂ひ攻上り候時箕輪館迄乘り出し片倉小十郎方へ切入押し拂ひ散々に切立申候得共城中の者は討死に之無く候政宗人數十人計り討死申候夫より籠城いたし同七月に城を明け會津に引申候二本松城は政宗手に入家來重實に預け置候上御代になりては蒲生家へ渡り蒲生源左衛門居申候秀行代には梅か原彌左衛門居られ候

一本宮の城主二本松義繼下にて其時分に居候は遊座丹波鹿子田和泉式部と此四人にて持申候義繼は鹽の松にて討死申され候に付き鹿子田も供仕相果申候

一本宮の城も政宗下に罷成羽田右馬介と申人居られ候然る處に天正十五年亥三月十八日に安積郡の勢共會津方に罷成本宮の觀音堂の南向小橋を隔て政宗方と一戰はけましき體にて候其砌り石川彌兵衛次田小治郎新屋平左衛門此者共かたの如く働きにて候取合も其通にて互に引退申候天正二十年には氏鄕國入り申され城主は是なく候

一高倉之城主は畠山近江守と申候二本松下にて候天正十午年田村清顯人數を出し高倉の城際迄攻入候處に二本松本宮玉の井の城主より一味仕罷出候て田村勢を阿隈川に追入れ五十騎餘り討取候故田村方引退申され夫より何事なく近江守は天正十八年迄城持申候夫より上御代に成り猪苗代摺上原一戰之時政宗は近江守指圖を申付候て其通に思召され候會津方百騎討取候へば政宗も快氣に是有候

一日和田の城主は伊藤左衛門佐と申候天正十八年の頃迄は城を持ち申され候其後會津氏鄕入國に付浪人に成候此城の北際に安積沼と申處是有候延德の頃迄は此の沼に主是有候故安積三十三鄕之者共番廻りに美女を買求め三年に一度一人宛御供に備へ候何つの頃よりか其儀相止め申候由に候落城以後右の沼も埋り主もなく其跡田地と罷成候

一郡山城主は伊藤太郎左衛門と申候此人政宗の下に

罷成へき由申述置候然る所に天正十七年六月中旬より七月末迄に佐竹義重の子息義宣は會津義親石川昭光岩城岩瀬よりの人數を借り手勢へ加へ大勢にて郡山を二重三重に取巻き攻め申體に是有候政宗は郡山へ見次のためにして福原と申處に陣取居られ候其間一里の內之有候七月四日に郡山近所久保田村邊にて双方出合一戰是有候政宗手に首級二百二十七討取申候政宗の內伊藤肥前は討死に仕候富田備前は手負ひ申候彼是時刻仕內に岩城城主より取扱申され無事に罷成双方陣を引申され候其後に伊藤太郎左衞門は政宗へ奉公仕り候

一片平城主は伊藤大和守と申會津方に是有候會津と田村と一戰の時片平の城を明渡し申候間天正四年に鹽の松城主大內備前に田村より加勢に遣はされ候其子大內助右衞門と申八十四年片平の城に居られ候天正十九年より會津の下に成り候時會津と田村と取合罷成後に政宗の下に成り候上伊豆島村屋敷は伊東彌平左衞門と申是は前々より片平の端郷に成罷在候

一安子か島村城主は伊藤右衞門と申候天正十年に會津と田村取合に安子か島は田村の下に是有候處に田村方は會津方に掛負申候に付右衞門は籠城仕居候會津へ詫言申候て會津の下に參られ候然る所に天正十年政宗人數押寄攻られ候に付あやうき樣子になり候に付政宗內重實と申人右衞門扱候得ば執着にて引退政宗の下に成申候

一高玉城主は高玉太郎左衞門と申候政宗の下知に從ひ申さず故天正十七年十二月に政宗高玉へ押寄せ一時攻めにして城中殘らず男女共に撫切に逢ひ申候其上太郎左衞門首は政宗內の內藤と申人討取り申され候夫より政宗は猪苗代へ罷り越候

一猪苗代の城主は會津盛氏代には盛國と申候天正十六年に盛國五十歳の時惣領盛種へ城を渡し盛國は城の北に隱居城をこしらへ籠城仕り候處に子息盛種不行儀故同十八年五月八日に盛國在住致され留守居之者十二三人討取同十日に城を取返され候處に盛種無念に存じられ同十四日に城之東二里程隔金曲村と申所の城に盛國の家來大堀土佐秋屋平右衞門と申者居申候所を追寄雜兵共切取申候兩人の者も是非に及ばす城を明立退かれて盛種居城に致

され候を同十五日に盛國内矢田八郎左衞門廣瀬藤内遠藤太郎兵衞此三人足輕五六十人召連候處に金曲より中途へ罷出候と右之者共働き首二十一討取引込申候に付て方々の者共きおひ掛合首數百七十討取利を得申候其上盛國追寄籠城いたされ候を扱に罷成横澤村と申處へ盛種は退き申され其時分は會津義廣持申され盛國は義廣へ不足申され候得共天正十九年六月朔日に政宗を會津へ引込同五日に摺上原へ罷出政宗と義廣と一戰是有候廣瀬藤内は殊之外働候に付政宗の目に立豐後と名を替遣され候盛國は新橋川の案内能存じ瀨ごしに成候所を政宗へとくと申に付政宗は知略をめくらし歷々の侍五六騎に足輕を添へ新橋の向へ遣し義廣勢掛り候はゞ逃けのき橋を越へ大勢に候樣にと相圖いたし案の如く會津勢きほひかゝり橋を越し大勢引出候て跡より歸べく樣もならず大勢皆川へ押入られいかだを流すが如くにして雜兵共政宗方へ討取られ義廣は漸く引退き候政宗此一戰に勝ち同十一日會津の内黑川へ押入申され其翌年には上御代に成り蒲生飛驒守入部致され慶長三年より景勝會津へ入國致され候と也（終）

奥陽仙道表鑑　大尾

相生集

相生集卷之第十四稿目錄

墳墓類

郡山　曼陀羅碑　建治碑　建保碑　承元碑
役字碑　一丁佛塞墓石僧麟頂碑　禰宜壇白玉附
念佛碑　古塚
笹川　一丁佛
久保田　伊東肥前碑　久保太郎墓　德治碑
日和田　一丁佛　右衞門夫婦墓
高倉　近江夫婦墓
八丁目　長元碑　弘安碑　元享碑　助左衞門碑
八山田　花塚
横塚　古墳
荒井　大同碑　弘安碑　永仁碑　應長碑　安養寺碑　異婆墓
片平　釆女碑　四十壇　葛城王碑
長橋　古墓
富田　正安碑　正和碑　伊藤主稅碑　四十壇
前田澤　伊藤兵部碑
安子島　伊藤玄蕃碑　古塚
大槻　靜女墓　伊東高久墓　同高行墓
只野　石塚
山口　經塚　小六塚
川田　牛塔
成田　鼠塚
鍋山　鍋塚
富岡　久安碑　德治碑　須田氏碑
下守屋　比丘尼墓
本宮　一丁佛　正安碑　蛇塚　貞長碑
青田　功士壇　左月墓　彥次郎小三郎墓　八郎右衞門墓
木目田長者墓
苗代田　斃馬塚
高玉　高玉氏墓
糠澤　僧德一墓
高木　小幡氏碑
和田　元應碑
玉井　嘉元碑　鶴墓　太田氏墓
深堀　阿字石　斃馬塚

椚山　信常墓
上大江　二子墓
南杉田　遊佐左馬頭碑　同對馬墓　同掃部墓
同孫九郎墓　姬小松碑
上成田　卒都婆塔
油井　正和碑　兒ヶ墓　柳田氏墓　關右衞門墓
主水墓　千人塚

府下六町

若宮　畠山氏墓　勝親墓
本町　畠山女墓
竹田　加藤氏墓
根崎　首塚
鹽澤　鐵扇橋碑
上川崎　觀佛墳　若公墳　野六郎墓
小濱　孝子墓　截瘧松
小濱成田　養女墓　兒墓
西勝田　五輪墳
上太田　古碑
內木幡　古碑二基
南戶澤　友顯墓
杉澤　大將塚　柏塚
百目木　百目木墓
小手森　小形氏墓

通計百十二墓此卷に收む

相生集 卷之第拾四稿

外史　大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

墳墓類

郡山

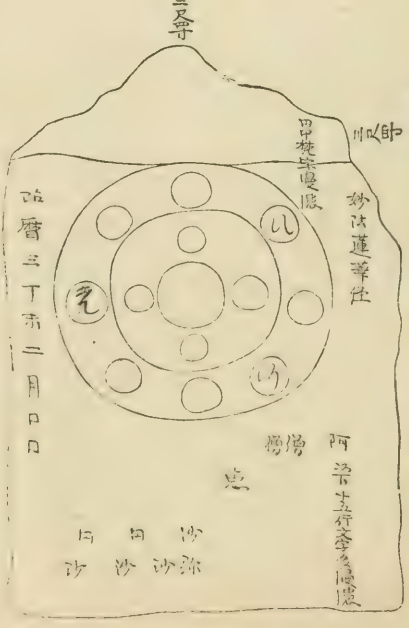
曼陀羅碑

大重院門前にあり俗に石曼陀羅といふ游東阪錄に天然の碑也とある是也由來は御靈宮の條に記しつさて此碑もと北町より横塚への道二ツ池といふ處にありけるをうつせる也と舊事考に見ゆさらば舊

捜古　高八尺　濶三尺五寸

傳あやまるに似たり深く尋ぬべし治暦三年は後冷泉院の御宇天保十年にいたる通計七百七十年なり碑銘わきて漫縷解がたし今捜古と集古十種に收めたるとを竝びあげて校攻の助とす

十種　義鳴いへらく此五文字はいかにすれども不見やう也



かく一ならぬは調方の精粗によりてなるべし其委は捜古にくはしければこゝに不抄

建治二年三月碑　在如實寺後宇多帝　五百六十三年

建保七年二月碑　同　土御門帝　六百二十年

東鄙草に此碑建保の年切附ありしといへども苔むして定かならずとあり元錄の頃定かならずといふ文字の今世鮮明に見ゆるはいかにぞやとは後世苔を引はなして文字を入れたるものゝありしにや

承元二年碑　同　帝　六百三十一年

始め如寶寺なる竈の額石となりて有りしに故ありて其石に文字あるを見出して土を去り汚を洗ひて見るに承元二年の文字ありし故境内の外へ建置たるを安部某是を此の地にうつして長く其碑を存せしむるといふ其碑　如此穿ちたるあとあるは竈の額に付たる故也と坊正今泉貞一の話也

沒字碑　同　一丁佛なるべし但右肩に文字あれともわからず

一丁佛　下町愛宕堂の邊にあり

一丁佛　同坊正今泉の宅地にあり

一丁佛は清衡が世に路程一丁限りに立たるもの也今も伊勢淺熊山中杯にも其設あり東鑑文治五年九月の條に清衡管領六郡之最初草創中尊寺先自白河關至于外濱二十餘日行程每一丁立笠卒都婆其面に圖繪金色阿彌陀像計云々とある是なり後鳥羽院六百五十一年

墓石

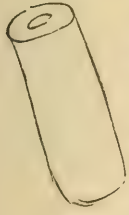
如寶寺の鄉葬の地にありて五輪也寺傳に郡山殿墓石といへりこはこゝの堡主伊東氏の標にはあらざるか

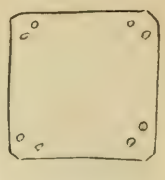
僧麟坂碑

善導寺院內にあり碑文は增上寺雲洞撰石書なりと舊事考にみゆ未考こは當山僧侶の墓碑なるべし

禰宜壇

元祿年中玉鎧曲玉鎧器磁器種々の古物を掘出せり是則國造比止禰命後裔の墓ならん伊東氏もこゝを墓所としたるやと大概記にみゆ舊事考に上世高貴の人を葬し所ならんされど貴族のこゝに住れしは考に據なし或は國造を葬し所なるか或は國守の墓かとあり未明さて掘得たる所のものは



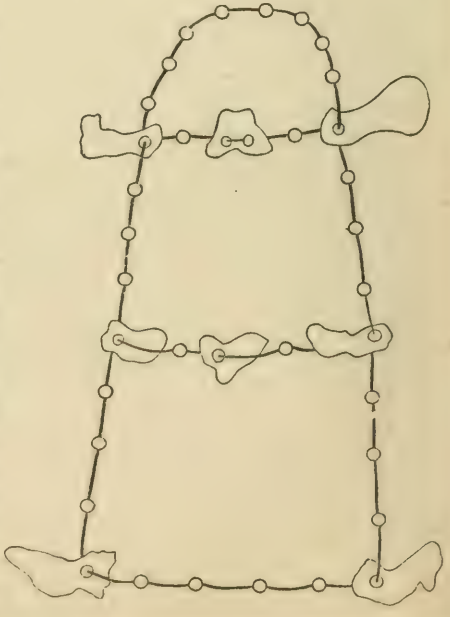


春日流の畫工泰隆古
いへらく過し頃江州坂元の家に藏する金岡の筆也といふ天女の像をみし事あり其像に玉鎧をかけたるありて佛畫ながら金岡の筆なりければより本朝製にかなひし由を識者もいひし也さて其玉鎧の中に

此形あるは角なるものにて上下の〇は糸の通ずる處也といへりさらば曲玉と同物なり義鳴淺見のいまだしらざる所也隆古は白河の產京師に游學す此頃本藩に來遊して予と友たり

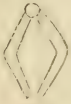
さて此玉は古事記には八坂瓊勾玉五百箇美須麻流（ヤサカニノマガタマノイホツミスマル）玉なり（又御統玉）日本紀に瑞八坂瓊曲玉抔ありて神代の古へより貴族はかならず此玉を糸もてつらぬきて頂に掛たるものなり所謂繫頂玉是なり（西土にても佩玉とて玉を腰間に帶る事故對馬國住吉神社神寶曲玉の略圖なりくはしくは別に收む）

其繫頂玉の形は



かゝるものなりといふ其のち古びたるを土中より得事所々にありて雲根志後編北越奇談抔に見えたるも其形少し異なれども

此二種のみにていまだ



如此なるを見ずこは何の料なりしをしらずこまれ貴族の帶たる玉のあるからは墳まさしく高貴人の墓なるべし

念佛壇　いまだ其故をしらず

古　塚

麓山權現の側にあまたあり是は往時罪あるものに課して一つづゝ築せたる塚なりと里人いへり按に芦名盛氏の頃土民にかぎらず罪あるものは官より其宅舍の燕止を取崩して恥辱をあたへし事四家合考に見えたり此塚も其折其形一つにてやありけん

笹　川

一丁佛　註前に同じ

久保田

伊東重信碑　在逢隈川水涯

重信は伊東紀伊守の男にて太郎右衛門の□□なり伊東政宗の名臣（政宗總軍配を原田休雪と肥前に預られし事弓矢の卷に見ゆ）にて天正十六年七月四日佐竹勢と交戰し其臣箭田の藤三郎がために逢隈川の南にて討死す元祿十二年の春其曾孫重長一基の碑を其地に建て永く英名を朽ざらしむ碑面に彫たる傳贊は則高泉のつくる所なり其銘館某考と舊事考に出づ。舊事考にいへらく僕しばゝ〳〵彼地に行き日まさに午を過ぎ未に向ふとして日光碑面を斜に照射する時に字々歷々としてよみ得たり餘時は決してよみ事を得ずと　亦曰

奥州義士伊東肥前月心信公傳贊

公諱重信號肥前出奥州伊東氏父紀伊祐重母某氏大職冠鎌足三十三世孫也其祖安積薩摩守祐長備前祐時皆有勳業於國公嘗領安積郡天正十三年佐竹義重與會津義廣等率三萬餘人將襲中村城大守伊達政宗公會公與仲綱政景等守高倉城或議曰今敵人經此城下欲出戰則寡不敵衆奈何公曰與其束手待戮孰若死戰遂領二千人衝軍大戰得勝而還十六年敵人又來攻城公誓不屈乃忿然單鎌入陣格鬪而死葬於窪田政宗公感其死難大息不已以其子重綱權爲桃生郡生孫重義鎭山野城事今大守羽林綱村公不幸早生元祿三年秋大守自武州還仙臺經其墓所謂其孫成澄曰汝高祖有大節於國恐後無聞幸有那大禪師在佛胡不乞一語以傳於後是其孫以大守之言向父重良與兄重榮令其僧弟靈松乞余文感大守義重道爲述此傳並係以贊

天生英傑義氣冲天　爲君爲國　失心弗遷
際時有難勁敵在前　奮威猛戰　得勝凱旋
由是偉望湖海奚博　及干再戰　身國難全
雖保其國其身竟捐　國人聞訃　莫不悲憐
緊公之志孰與齊肩　漢之關氏　或不間然
神威赫々耀後光先

元祿壬申十一年冬十二月佛成道前三日
支那國曇義道人敦高泉手書於黃檗方丈
仙臺居住曾孫伊東新左衞門重良其嗣新平
重榮同謹立

碑陰に僧靈松が重信の世系竝行業を錄せるあり甚不文其上磨滅多く讀がたし故に其大略を摘で爰に記す（館基考）

重信より十四世の祖薩摩守祐長は鎌倉賴經將軍に仕へ武功を以て奥州安積郡四十五邑を領す是より氏を安積と稱す代々安積に住し功業關東に顯る五世の祖備前守祐時の世に當て鎌倉持氏廢亡に依り伊達大膳大夫持宗の幕下に屬し重信に至る天正十六年七月會津佐竹岩城白河須賀川の大兵と政宗福原窪田の間に戰ひ其勢不競時に重信死を決し辭別し其阿呼の旗と五輪の塔の旗とを取換へ鏖戰して遂に窪田川の南に死す享年五十一と云々

義鳴いへらく重信の討死せし事は古館辨に七月四日（中略）長沼の城主新國上總介馬上五六騎徒武者百人計りにて郡山の南より東へ通り北の柴と久保田のやらひの間に突出しづ〳〵と進み來るを藤五郎場所の前故成實が兵打出上總介が兵と追つ返しつ相戰ければ佐竹勢是を見てあれうたすなつゞけやとて究竟の兵ども肩に日の丸の大旗を眞先にして其勢雲霞の如く馳加はる政宗も早々馳付らる味方には伊東肥前守重信眞先に懸て戰ける佐竹勢大勢故折り重りて終に肥前は討れけりとあり弓矢卷に此戰の事はあれども肥前が討死の事はなしいかなる事にやさて久保田村にてよく古事覺えたる老人あり此重信の討死も徒事にあらずそは政宗大敵に圍まれほと〳〵危うかりし時重信政宗の甲冑を着て自分政宗と名のり敵中に走り入りたるまゝ敵勢是を討んとて競ひかゝる暇に政宗からうじて逃のびられしと此わたりには傳へあへりぬと語りき是は醫員小柴紀太此老人に逢ひてくはしくきゝたるよしの話なり老人名は孫六といふとぞ是俚俗の說ながらまことに然るべき心地ぞするつら〳〵事の情をおもふに政宗重信の難に死したるをかなしみ其子孫を一郡に主とせられしとあれば其功績の大なるはいふをまたずさるを弓矢卷に露ばかりも其事を記さゞるはいとゝいぶかしまして此時の戰には討死したる者數多あると見え弓矢の卷に手負死人も多きよし政宗公不憫に思召るゝといふ文

あり青田原合戦に茂庭左月が討死したるも弓矢の巻左月が討死はのせたり死したるは皆ひとしかるべし今夫らを措て後世に至りても獨り重信が義死をいたまるゝをもて見る時は仙臺家は其實のつたはるまゝに綱村も其後孫に仰せて其碑をば建しめられしならん且はなみ〳〵の討死ならましかば政宗の指物と取かゆべき筋もさたあるべからず碑陰の文に政宗辭別し其阿呼の族と五輪の塔の族とを取換抔あるもなみならぬをおもふべし　かた〴〵をおもへば政宗にかはりて死したる事のまことなれば其隱忌をはゞかりて成實は弓矢の巻にもらしたるべし閭談巷記も取つきふしありと聞たるはかゝる事なるらん

久保田太郎碑

山王館より東二丁ばかり西覺寺の舊地にありといふ太郎が事は古館の條みるべし　すべて其人の傳を記さるゝは古館の條にありたれば也下皆同じ

日和田

一丁佛

右衞門夫婦墓碑　驛より八丁ほど西にあり

則伊東氏なり右は□□□□佐也　此外不見思ふに爲右衞門の四字ありしなるべし左は爲右衞門後室とみゆさて西方に其碑あり右衞門のは光照院清月道林居士慶長十四年酉年六月五日妻のは戒珠院鏡林妙徹大姉年月不明とあり碑名は後人の仕業と見えて慶長のものとは見えず土俗是を安積沼に身を沒したる菖蒲が夫婦のしるし也といへり可笑

高倉

近江守夫婦墓碑　在山清寺

みな五輪也法號月光禪定門應菊禪定尼是則富塚近江守のしるし也といふこゝにて死したるや未知

八丁目

長元三年碑　後一第條八百十年

弘安九年碑　後宇多院五百五十年

元享十二年碑　山中さいふ處にあり後醍醐帝五百二十年

碑面に涅槃經四句の偈あれども碑かげて一句も存せずといふ　同錄

助右衞門碑　鹿島神社の邊にあり

碑面に念の字抔二つばかり庚の字の如きもの其外文字多けれども分明ならず里人は昔助右衞門といへるものありて無間の鐘を撞たるもの也といへり　舊錄

八山田

花塚

寛永八年雄峯公逝去ましく〳〵たる時此村民いたみ悲奉るのあまり手毎に花を持て其靈を祭りしのち其花を埋めたる處也といふ公の恩澤よく下にいたりとゞきし事おもふべし

横塚

古墳

管玉勾玉を掘出せし事ありこゝも往古貴人を葬りたる處と見えたりと舊事考に見ゆ土人地名を塚壞（こわし）といへり是即横塚の名の起りたる故なるべし

荒井

大同年碑　平城天皇元年より一千三十三年封内第一の舊碑なり（大概此に見ゆ下三基並に同じ）

弘安十年碑　後宇多帝五百五十三年

永仁二年碑　伏見帝元年より五百四十八年

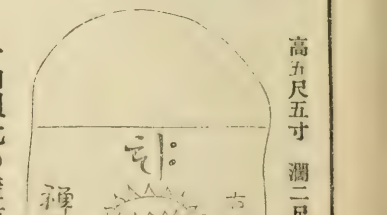
□長二年碑（應長なる）　花園帝五百二十九年

安養寺碑　廢寺の跡にあり

搜古にいへらく碑字

法極往來蘇の筆意に似たりおもふに其際元僧蘭溪

高五尺五寸　濶二尺五寸



古立婆意謂者先考和泉莊司

弘安六年癸未四月廿八日　藤原敬祐重白

禪門當百日忌辰奉寫成佛

一山祖元の輩航海して至るもの多ければ其輩の書する所ならんか祐重和泉庄司とも何人なるや未詳窪田村にある紀伊守重信が碑に父を紀伊祐重とあれども年代遙にへだゝりて此祐重にはあらず伊東系譜を見るに大和守祐時の孫に和泉守祐□と云ありて時代もやゝあたれば此和泉庄司にもあらんかと見ゆ積達故事談には安積郡に古碑多しといへども此碑は東鑑にのする薩摩新右衛門尉祐重の所立なり祐重は薩摩前司祐長の子と考らると有されども先考和泉とあるからは祐重の父なる事論なければ祐長は和泉前司とも稱したるか又は祐長晩年の子にて和泉守祐宗が養子となりたるか（祐時は祐長の兄也といへば其孫は則又姪也さて祐長安積を賜はりしは建保年中の事也といへば弘安年中迄に二十餘年也年代に於ては養子となりたりといふ）

もあたらざるにあらず　ふたゝび東史について祐重の世系をたゞすべし

異婆墓　我母神の條に其事をあげたり

片平

采女墳

采女が事は人物の跡にいふべし○塚のあたりに古櫻樹ありて人衣掛櫻と稱して采女がしるし也といへり是は南都猿澤池の岸に衣掛柳といふものありてそは其池に身をすて死したる采女が衣を掛たるなりとて今猶其名殘の柳ありこゝの衣掛櫻は正しくそれを擬したるならん奈良人は彼所にありて采女の名によりてこゝの安積郡をうつし此里人はこゝの采女の名にすがりて彼所の衣掛柳を捨てずかくて年月過ぎて行かばいかゝなるらんいともおぼつかなし

四十壇

何の塚なるをしらずといふ按に植田某か　田村郡細田村の人にて友颺翁に答へる也　細田村岩作村谷田村三村の間少々原有之此原の内に四十段と申塚御座候四十人は無之候へ共二十餘も可有之候俗説に申傳へば古昔討死せし人々の墓と申事に御座候とありこゝのも其部なるべし

葛城王碑　在山中の井邊

文化年中に建たるものにて後人の仕業なれば其文ははぶきぬ

長橋

古墓石

五輪也何人のなるをしらずと聞書に見ゆもしくは堡主伊藤孫次郎の墓なるにや

富岡

正安四年十一月碑　後伏見院五百三十八年

正和元年碑　花園帝五百二十九年

伊藤主膳墓　在西光寺

法號西光寺殿勇山大禪定門　便覽

四十壇

前田澤

伊藤兵部墓　寺坂にあり

五輪也といふ福田寺僧の話に兵部の子孫某侯に仕て往年こゝに來り祖先の墳墓あるべしとて村民にゆだねて彼所此所尋ねしかども見あたらざりしを

其後ゆくりなくこゝにて見出たり可惜事也といへり

安子島

伊藤玄番墓　在慈恩寺

法號東庵伊公大禪定門　一覽

古　塚

五輪にて田の中にあり安子島思五郎右衞門といふもの弓をもて射たるに石われたり今に存す　遊覽志　何人のしるし也しか

大　槻

靜女墓　既にいふ

伊東高久墓　在長泉寺

法號崇俊道麟大禪定門　永正六年四月十六日卒すといふ

同高行墓

法號未考　永祿五年卒すといふ

只　野

石　塚

事故未だつまびらかならず

山　口

經　塚

此塚三つありて一つに經一部づゝ埋めたるにて三部塚といふとぞ

小六塚

小六が事定かならず土俗は義經朝臣の妾靜が義經を慕ひて下りたる時供につれたる小六といふものの死したるを葬りたる也さて小六が持たる瓶子を捨たる所を瓶子沼といふ又靜が乳母の身を投たるを美女池といふ其袍を捨たるをかつが沼といふ今にあるといへりされど安達詣の評にては淨瑠璃なる玉藻小六の事に附會したる也とあればうけがたし又一本には關東小六といふもの此所にて賊に殺されたりといふ龜女といふ女小六を慕ひ來りけるは少し東にて死す其處を龜子沼といふとありさて關東小六といふもの何人なるや知りがたけれども柳亭種彥が戲作に關本小六昔舞臺と題するものありて小六は鎌倉の人勇猛手だれの武士にてしかも風流の美男なるよし書たり定めて據ありしなるらん前說龜子といふ女の慕來りしといふにも小六の美男なる事しるしければ當時名たる關本小六といふ名をとりてこゝに附會したるか

川田

牛塚

本邑正法寺の松本坊といふ牛二疋に經典を負せ來りしに其牛の死したるを埋めし處なりといふ按に信濃地名考筑波郡覺志驛の條に元享釋書弘仁六年信濃大山寺僧正□□上野國の藏經を駄し來て諏訪を過ぐ數里の嶮難四蹄なづみて行かずといふ今も堅石邑の東榛原村に牛伏寺ありと其故をいふとあるに其傳同じ

成田

鼠塚

土人鼠大内裏といふより一覽に見ゆ按るに東鑑奇談に陸奥栗駒山に蛇の内裏ありて山の猿皆蛇すめる洞也とありこゝも鼠の多くすみし所なる故名づけしならん

鍋山

鍋塚

古へ鍋を鑄たる具を埋めし所也便覽何の故ありて埋たるやいぶかし

富岡

文永二年八月朔日碑集古小種に入る　龜山帝五百七十四年

德治三年三月碑　後二條帝五百三十年

須田三郎兵衛墓　在西光寺

法號苔むして不見寺僧の傳に西光院明雲淨智居士文祿三年四月二十二日卒すとありと便覽

下守屋

比丘尼墓

妙見の神體を負あるきし比丘尼の墓也といふ

本宮

一丁佛　在觀音堂　說は既にいふ

正安三年碑　在驛南　後伏見院五百三十九年

是卽幸彥が石井泉の詫したるもの也そは既にいふ

青田

功士壇

天正十三年十一月政宗と芦名佐竹と合戰の伊達方茂庭左月討死したるを埋めたる壇五つあり何れか不可知と遊覽志に見ゆ按に左月は芦名方窪田十郎といふものにうたれたるなり今仙臺藩の茂庭周防は其末葉也と云さて名所說に幸次作るは誤也又山本が聞書には小牛壇として青田の圭此所にて小牛

丸といふを夜打したるといふ小牛丸は政宗の近臣也と記したりされども小牛丸といふもの弓矢巻を始めとして更に所見なし是は功士といふを假字ヨウシと書たるより牽強せしにはあらざるか但此時の伊達方討死は百餘人ありしといへば小牛丸も其中の一人なるや知らざれども近臣ならんには其姓名の諸記に見えたるはいぶかしき事ならずや退ていへらく義鳴洛に遊びし時本能寺に詣でしに境内に信長公の碑ありやがて其側に一基の碑ありしを嚮導の者は森蘭丸のしるし也といひき予石面に刻めるを見るに當山諸士亡靈とありされば彼時討死したる諸士の墓なれども蘭丸わけてすぐれたるより獨其名の稱せらるゝなるべし是にくらぶれば此功士墳も左月等と同じく討死したる百餘人の屍を埋めたる功ある士卒の墓なれば功士墳と呼たるを左月は其中の巨擘なればひとり其名の後世につたはりしならん

（義鳴いへらく弓矢巻にて左月が討死は十六日の事とす）

左月墓碑

面には茂庭左月藤原良直之墓背には天正十三年十一月十七日とあり文政十一戊子二月十一日左月の裔月訪某吉田郡松上の領主一萬三千石建る所也○左月討死の事奥陽軍秘錄に云左月は味方の勢を先にのかせ士卒に後れ追かゝる敵を乘りわけ退け士卒を下知してさしつかふ事猿猴の樹上にあそふか如く老年七十有餘にて甲を着得ず黄に染たる綿にて頭を包進退神變を得たるが如し敵是に目を驚かし他人に目なかけそ黄法師を討てと故らに叫でこゝかしこに攻よせ開き合す味方は左月を討せじとて引返し〳〵戰けれども多勢にて氣おくれず攻ければ左月うたれ其外歷々の者百餘人討死すとあり按るに弓矢巻に我等成實家來伊庭遠江守とて七十三になる大剛の者敵を追掛眞先に乘り入り敵二人に切付仕家來に首爲取申候略伊庭遠江守後敵を追ひ取て返し〳〵防ぎて味方を退かせ申候て引申候老後にて目見え不申候とて其日は冑着不申引候故敵つゞきて遠江守があたまを二太刀切り候間不叶とて引取申候とありて此條より少し前に茂庭左月を始め百餘人討死仕る左月終に敵にうたるとばかりにて働の事をのせずされば軍秘錄の說は此遠江守が事を混じて誤りしならん因にこゝに辨ず

彥次郎
小三郎　墓碑　左月の碑の側にあり
面には今野彥次郎景住二十三歳今野小三郎景治二十一歳左の脇に天正十三年十一月十七日戰死七代の後今野半兵衛英成建之右の脇に右景住景治は仙臺茂庭家來今野文五郎景安子也とあり天保午年に所建
八郎右衛門墓碑　前の碑の側にあり
面には舟生八郎右衛門厚茂墓背未詳　同錄にいへらく仰自然石にて大なる故面に倒し置たるが見るによしなし云々
木目田長者墓
草むらの中に此墓ありと聞書に見ゆ何所にて何人の墓なるをしらず
苗代田
饒馬塚　在愛宕山
鄉俗の傳に義經朝臣の乘たる大夫黑といふ馬は此所三つ石池といふ處より出たりさて其馬の死したるを埋たる處也と聞書に見ゆされども驛燈隨筆には此馬は仙臺街道廐世掛場といふ所より出たりと記しつ其出所はかく定ならぬをも死して埋たるはこゝにや未審

高玉
高玉源之丞墓
糠澤
俗德一墓　在觀音寺
五輪也さて德一は大同年間の則觀音寺及諸寺の開山也國師と稱せしといへりさて國師の稱何の世に始まりしや未だ考ざれども大同の頃は未だ其稱なかりしと覺ゆ　現齋隨筆には花園帝の正和年中に聖一國師と諡しるより始まるよし書たれども夫より前正應年中大明國師といふ稱ものも見えたれば聖一を始とするは誤なり　此頃岩城の地圖を見るに護摩壇　菊田郡　といふありて德一大師舊跡と見ゆ實なるべし此墓は其人のこゝにて遊化したるを葬しかまたは他邦にて死したれど開山の寺なるより遺骨をわかちて葬りし處なるか
僧文覺の墓　在高松山
文覺上人は人の知る如く源渡といふものゝ妻袈裟御前を殺してより發心薙髮したる也其東下せし事は定說を得ざれども發心のゝち靈區を巡歷せし事平家物語にみえたれば其便にこのわたりにも來りしならん何れ其實の墓は山城國高雄山神護國祚寺にある事和漢三才圖會抔にも見えたればこゝは後

人の追慕して墓を築て弔ひたる故なるべし聞老志に膽澤郡相去有文覺墓東行此地未詳其事實ともあれば上人の奥羽に來りし事は違ひあるべし

糠　塚　糠池の中にあり

土人は糠依姫の山陵と號す姫が事は糠澤の名義にいひたりさて此姫が事は既にも云し如く明らかならず按に上代玉依姫又水穗五百依比賣等の名あれば糠依も後世人の稱にはあらじとおもはる敏達帝の御子に糠依比賣命と申おはしき稱相似たりかしこけれども序にいふのみ　○富翁雜話に和泉國南青木村に禮拜塚とて塚の前を往來の人禮拜して通行する塚あり是をぬかとは禮拜といへる古語なりこれは此糠塚も昔は禮拜せる塚にてやありけむいぶかしといへり

高　木

小幡河內墓　在高太山

和　田

元應二年碑　在館岡

高四尺餘碑文字法猷美也といへり圖は十種と搜古とに出づ後醍醐帝五百二十一年

玉　井

嘉元三年碑　在龜山

高三尺餘橫三尺餘圖の搜古にみゆ後二條帝五百三十五年

鶴　塚

元祿年中山田金太夫一に月岡某と有といへるもの君命によりて名倉山にて鶴を打たるに其足に金の札あり札の面には賴の字をのこす外に磨滅して見えざりしとぞさて其鶴を埋めし所とて名倉山の上に塚ありて株の杉を標とす賴朝公の鶴をはなたれし事人口にありつれども東鑑抔に見えざれば年頃うたがひおもひしる此頃山崎氏の養雜記を見るに鎌倉由比か濱にて賴朝公の鶴を放給ふこと世にあまねくいひ傳ふれども吾妻鏡を始め正しき記錄に曾て見たるものなし予が管見にて本朝食鑑に源二品放鶴亦曾五六百年來往駿遠之田澤觀元者謂翼間有金札記年號支干云又南向亭茶話丸山の條に古老の物語に元祿年中此所の田畑へ鶴飛來り數日留り居申候事度々也今の鶴の足に金の小札あり賴朝公の被放鶴のよしに候此故に處の民に仰付鶴の留り居る內は番小屋をかけ晝夜守り候より故に今に至り鶴場

と呼れしよしと見えたり是等の事もしは後人の俗説にて傳言したるにやとおもはれて其實はいかにあらんと疑居りしに過し頃賴惟柔の此鶴を詠める詩を石田醒齋がもとにて見たり彦根候常射一鶴足有金牌認其年記源右大將所放候視而感悼瘁之湖北其邱有塔余聞此事爲作長句江州刺史田獲鶴々繫金牌在左脚題曰建久某々年刺史視之忽嗟愕爲營兆壙刻誌銘云々此詩によりて年來の疑一時にとけたり世人いひつたへたる事も故なきにあらずとみゆ是にてこゝの鶴塚の事も始めてまことゝすべし

太田采女墓

臺といふは今の玉泉寺の後の山也太田采女此所にて討死せしにや此近き所に采女塚といふ家ありしとなりと古館辨に見ゆ田間漫錄と聞書とには大河內日向守の墓とすまた何れが是なるをしらず碑面には梵字のみゆる迄にて法名は見えずといへり

深堀

阿字石　在西嶽

雲堂和尙阿字を書たる石を建て山祇を祭りしなりといふ

斃馬塚

義家朝臣の所乘の馬の斃たりしを埋めたるなりとて土俗は駒塚といへり其他今も馬の形に殘雪を留むと嶽東子が記及び驛燈隨筆に見ゆこはあやまりなり風俗の部にいふべし

椚山

信常墓

遊覽志に出づさて信常の卒せし所は考ざれども一度敵をさけて他邦へ行たる身のたとへ舊領なればとて再其敵地に入りて終を取るは尋常の人も惡むべき事なるを信常が忠臣義膽何ぞやおめ〳〵と其に天をいたゞかざる讎敵政宗が地に入りて死すべしやおもふに此墓は信常他邦にありて死したるを傳聞てこゝの村民其德を慕ひ墓を築て弔ひしなるらん

上大江

二兒塚

昔此所より二人の子の生れ出たる處なりといへりこは何人か双子の子の死したるを葬し所なるべし

南杉田

遊佐左馬頭墓　在十神在

同　對馬守墓　同

同　掃部頭墓　同

對馬守といふもの諸記に不見按るに掃部の父を左馬頭其父を筑後守と稱せしなれば此對馬守は筑後が後の名か

同孫九郎墓　菅田渡場の邊にあり

五輪なり按に掃部は會津にて死し孫九郎は義經に從て粟の巢にて討死したればこゝに墓あるべきにあらず既に前の二碑は寛永四年の號あるよし田間漫錄に見えたれば皆後人其碑を建て弔ひしなるらんさて掃部が二男權八のち池ノ入に住し遊佐が家老ども今は菅田の庶民となり渡邊十右衞門が子孫今にありと古館辨に見えたれば夫らが仕業なるにや權八は掃部が二男孫次郎が弟なるに孫九郎が討死は天正十三年にて寛永四年に先だつ事四十餘年なれば權八猶世にありて此碑を建たりといはんもとほかるべし

姫小松碑　本邑の橋邊田の中にあり

石面に梵字見ゆまた何の碑なるをしらず遊覽志に本邑に東夷征伐の時の首塚といふものありと記せしはもし此碑の事にや姫小松といふは地名也といへり

上成田

卒都婆塔　在二合田

昔此地往還なりし時奥筋の侍此所を通りしに雄鷗の居たるを半弓にて射たるに首を射きりたりさて翌年下りの節此所に雌鷗の居たりければ又半弓にて射る從者走よりて捕たるに羽の下に去年射切たる雄鷗の首ありしかば皆あはれにおもひて塚を築て卒都婆を建て供養せしよりいつしかソトハと唱へしを里人あやまりて今はソタントウといふ所名誌

按に和漢三才圖會に河内國讃良郡中野村雁卒都婆の條に昔有獵師射鳴雄雁得而其雁無頭又周回日於此射雁見之抱一鳥頭落于地恐此去所夫一頭也獵人感悲愛之情爲建卒都婆捨業出家すとあるに同じ

油井

正和四年碑　在元長谷堂

高七尺餘濶二尺餘圖は搜古の内花園帝五百二十六年

兒ケ墓
木曾義仲の末子此所へ下向の節鎌倉より討手來り討死し家臣柳田左衞門も死すといふ本文一本の說同じされどもいまだ定據なし古館辨に大炊田音坊の墓也といふは誤る

柳田左衞門墓　在驛西　前にいふ

關右衞門墓
村鑑に關右衞門といふものを殺して埋めし塚也とあり遊覽志には養季候塚と書て天正の頃戰死者の塚かとあり皆不明

圭水墓
谷地館に住せし增川入道の男澁川合戰の引口に福岡にてうたれたりといふ古館辨に大炊田音坊を討たる恨によりて音坊の父右衞門に討たれたりと書たるは誤り也といへり

千人塚
天正の頃戰死者の塚也といへり名所詮に城下の北に千人塚あり古戰場也と書しは是なるべし按に三州桶迫の向ひの山にも千人塚といふありて戰死のものを葬りし處也といへり其事同じ

府下六町

若宮

畠山義國墓
今の香泉寺後の山にありといふは非也郭內の部にいふべし

勝親墓　在龍泉寺
勝親は安房守勝春の實子也大概記　未知何人

本町

畠山義繼女墓　在稱念寺
世に夢想石といふもの是なり物異の部にくはしくいふ

竹田

加藤明利墓　在明法寺

根崎

首塚
古館辨に箕輪玄蕃逆心して片倉小十郎が兵を箕輪館へ引入し時城兵卽時に攻入り打破り打取る首三百餘級を東口の山端に梟せり里老傳て其地は今の治陸寺下宿の地也屋敷裏に墓あり枯骨雨に打出さるゝ時ありといへり此塚今は存せず下宿の地善性

寺と隣る今より二三代以前の善性寺下宿の裏畑をほり野菜を作りたる時枯骨或は甲冑の鐵ものを掘出せし事ありといふ　事跡考

鹽澤

鐵扇摺碑　既にいふ

上川崎

觀佛塘

下川崎大將內館にありし大井田觀佛坊謀反せしによりて畠山義國是を誅して其首を刎けるがさすがに一族の內なればとてこゝに葬りし處なれば觀佛塘といひしを今訛りてガンブツと稱して文字も含佛と書事となりにき

若公塘　在高國寺

午房が墓也といふ

野地六郎墓　在觀音堂

小濱

孝子墓　在櫻田耕地

大河內宗四郎の墓なり世に腹切石といふ則是なり

石面に左の文ありといふ　おや大河內佐一周忌辰道腹　永祿十二年三月十五日　大河內宗四郎二十二　うちしに申候

四本松傳記によるに此碑は宗四郎の伯父大內藏といふものゝ建たるなりくはしくは末にいふべし

截瘧松　西念寺の麓川涯にあり

畠山義繼の屍を磔にしたる松なり世に是捨松といへり道齋記に瘧を患ふるもの此松を削て呑めば忽ち癒るとある是なり義鳴嘗て墓碑に遠きは武藏國岡部村なり岡部六彌太が墓石近きは信夫郡左波野村なる佐藤次信兄弟の墓石も削て呑めば瘧疾を截といひて削り取りたる跡あり强勇の武士が靈魂の歸する處さもあるべき事なり

小濱成田

節女塚

世に婆石といふ遊覽志に小濱館主是は四本松傳に所載にて他に異也大河內備中が後家に石かゝといふあり其塚ならんとあり一覽に三川婆石として村內に凶事あらんとて此石像汗を流すといへりとみゆ何れにや明らかならねどもしばらく四本松傳記によりて其始末を概錄す

文祿十一年大河內備中　大岡事か謀反を企て備中は切腹せしを大河內宗四郎介錯して是も遂に死す其

父は大閑といひしが謀反人の父なりとて所領を没收せられければ翌年三月片倉川の向へ大石の狹間にて夫婦刺違ひて死すこゝに備中の弟大内藏は盲目にてありければ咎なしとありしに備中が事を無念におもひて其跡を弔はん心にや宗四郎討死せし處大閑夫婦が果し處の石へ切付させにけり又備中が妻は忘がたみの三歲になりける兒を懷き落行しを大內長門見付て無體にもぎとり揶殺したるを世人あはれみ町うらに埋め兒が墓といふ其母を大內備前さま〴〵口說けれども承引せず尼となりて町外に庵をしつらひ住けるを時の人石かゝと稱せしといふ

兒墓　前にいふ

五輪壇　在鏡石

大なる五輪なり俚俗は氏神と唱ふ毎年九月九日に幣を捧げ苞を供へて祭祀す何墓なるを詳にせず按に上館の近畔なれば古城主の墳墓にもあるやと水梨仲之助いへり　同錄

上太田

古碑　在古寺

兒淵の邊なれば兒が墓なるにや　同錄

內木幡

古碑二基　在木幡山

古色蒼然數百年を經たるものと見ゆ一基は梵字僅に見ゆ傳云賴義公義家公の墓なりと或は貞任兄弟の墓なりともいへり賴義公抔の墓ならんには後人其德を慕ひてものせしなるべし貞任抔の碑ならんには義家公彼等を追討の後其菩提のためものせしなるらん遊覽志には木幡館主の塚ならんかとあり

杉澤

大將塚　皆不詳

柏塚

百目木

百目木彈正墓　百目木と名目津の間川岸にあり

其子孫相馬にありて毎年七月に參詣して燈籠を捧ぐといふ　村鑑

小手森

小形源五兵衛墓

相生集卷之第十四稿　終

相生集卷之第十五稿目錄

土宜類

花我都美　吾田太郎眞弓　安達眞弓　眞菅
麻油美紙　安達絹　埋木
以上國書所載
郡山　箭鏃石
日和田　鳬氏　偏葉蘆
梅澤　籃　箵箕
横塚　斑竹
片平　貝石
河內　煙管石
安子島　蛙
大槻　禹餘糧　石英
只野　山椒魚
山口　磨砂
八幡　セノ木石
川田　空青
鍋山　大豆石
富岡　貝石
青田　紫蕈
羽瀨石　暦
石筵　木葉石　炭
高玉　石墨　櫻川石　方金砂
中山　蕨
臼岩　白岩石　寒水石
松澤　多葉粉
稻澤　菌　雲母　水晶
玉井　燧石　福壽草　雲母
深堀　硫黃　湯花　氷餅　石英
箕輪　太一禹糧
柄山　松茸
水杉田　榧　溫石
府下六町
龜谷　燧鐵　菓子
澁川　白石
鹽澤　辰砂　熊谷草　鷺草
上川崎　楮紙　席

沼袋　卷柏
小濱　蛭石
平石　士殷孽
内木幡　榧
田澤　璞
小木屋　五味子
上太田　香爐灰

總計六十四種此本に入る

相生集 卷之第拾五稿

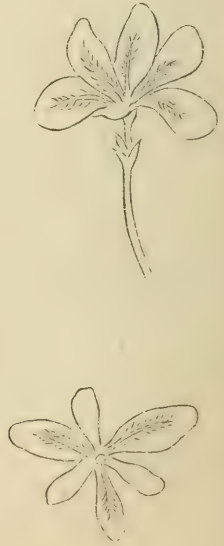
外史『大鐘彌兵衞藤原義鳴輯

土宜類

花我都美　菖蒲　杜若

安積沼に生る所なりさて此草に說あまたあり實方朝臣の五月五日にこゝの民々に仰て菖蒲に替て軒に葺かせられしかつみは菰の事也といひ四月頃に花さくは田宗草或は本草に所謂蘋といふもの也或は花形藻といふもの也抔いひて聚說いまだやまず其文いとも長ければそは暫く義鳴が別記花籠（カタミ）（こは勝見に係る言草を摘いるゝといふ意にてしかもかつみとかたみと音もかよへばとりて名としたる也）と名付し書も收め入たりこゝには世に土人等が花勝見といふものゝ形を記して同僻の覽に呈す

花の色はさながら菖蒲の如し葉はいや繁りにしげりて其末四面にたれ尋常のあやめ抔の生る姿には似つかず友鷗此花を評して花勝見歌あまたあれども大かた其花の艶なる色を見て語らひし女を戀たるしるべと見ゆればむしつけき菰の花にて似つかずかたばみはやさしき花にはあれどあまりにさゝやかにて花もはも僅に水を出るのみなれば目にとまりて戀情を起さんともおもはれず彼の安積沼に生るあやめの一種は色といひ姿といひ此花ぞ花かつみにあてゝ正當ならめとものにかゝれたり水戸わたりにも此花を猶花かつみといふよしなればこも其一種なる事うつなかるべし何れ此草は貞



丈が一名兩物といひたらん如く彼も是も花かつみと稱する事なるを一種にかたよせんとおもふが故にかへりて其說のとり〳〵になりたるならん士由も此頃しかいひき

國歌所詠

題しらず　よみ人しらず

陸奥の安積の沼の花かつみ
　かつみる人に戀やわたらむ

狹衣　飛

花かつみかつみるたにもあるものを
　あさかの沼にみつや絕なん

新古今部　衆勝四天王院障子に安積沼書たる所　雅經

野へはまた淺かの沼に刈草の
　かつみるまゝにしけるころかな

續古今戀　關白前大臣家百首に見戀　今上御製

笑をはあさかの沼とおもひはや
　かつみなからもそこのめるらむ

續千載戀　百首歌奉りける時沼螢　爲氏

かりてほす淺かの沼の草の上に
　かつみたるゝはほたるなりけり

同　戀　權中納言公雅

はなかつみかつみても猶たのまれす
　安積の沼のあさきこゝろは

元木　兵衛內侍

はなかつみかつみち絕る鴛鳥の
　安積の沼にみなれ初けむ

同　衆勝四天王院名所御障子　後鳥羽院

篠わけしあさかの沼のはなかつみ
　かつみる夢のあくるほとなき

同　風　信實朝臣

花かつみかつみたれ行沼風に
　露やあさかの名にかよふらん

建保百首　定衡

淺からぬあさかの沼の花かつみ
　かつみる色に出にけるかな

同　俊成女

笑とそあさかの沼の花かつみ
　かつみるいろに露そこほるゝ

同　忠定

つらきをもうきをもしらぬこゝろかな

安積の沼のかつみなからに　知家

同

こゝろさしさそふ淺かの沼に生る
かつみるほとにわれはわすれし　範宗

同

人心あさかの沼のかつみをも
あかぬや深きこゝろなるらむ　行宗

同

いかにせんあさかの沼のかつみをも
ぬるゝはそてのあらひなりけり

續後拾遺　村上の御時國々の名所を御屏風にゑがゝせ給ひてあさかの沼名こその關　源信明朝臣

はなかつみかつみる人のこゝろさへ
あさかの沼となるそかなしき

名所百首　順德院

人こゝろあさかの沼のうす氷
かつみなからにきえやはてなき

拾首懸草　定家

ふみしたりあさかの沼の夏葉に
かつみたれ飛ふかのふもしすり

家集　俊賴朝臣

春駒は淺かの沼にあさりして
かつみの下葉ふみしたくなり

永久百首　大進

いかゝせんあさかの沼のあさましや
かつみる人にあいぬこゝろは

袖中抄

陸奥の安積の沼の花かつみ
かつみる人の戀しきや河魚

千載

五月雨に淺香の沼のはなかつみ
かつよみなからしらぬなりけり

散木集

鴨のゐる玉江に生る花かつみ
夏はまたあさかの沼の花かつみ
かつみる花にうつる旅かな　慈鎭

東路や野澤のかつみけふはかり
あやめの名をもかりてけるかな

此外かつみ歌あまたあれども安積の沼によせなきはすてたり末のは野澤とのみなれどもこ

ゝの歌なる事しれければとりたり
以下異草をよみたるながら因に引たり

郁芳門院招合にあやめをよめる　藤原孝善

あやめ草引手もたゆく長き根の
　いかであさかの沼に生けん　　定家

まゝつらしあさかの沼の草の名の
　かりにも深き江には給はて　　賀茂道久

新續古今戀

契のみあさかの沼のあやめ草
　深き恨に名こそなかるれ　　定家

名所百首

いかにせん淺香の沼に生ふときく
　草葉につけて落る涙を　　家隆

同

根をふかし我そおもへこゝろ
　あさかの沼の春のわかくさ

建保三年名所御障子

あやめ草淺かの沼に風ふけは
　遠ちのさと人神かほるなり

貞應二年當座百首　名所菖蒲　民部卿孝家卿

あやめ草あさかの沼にましりても
　かつみにしるき夏蟲のかけ　　小大君

相遊歌集

くるしきに何もとむらむあやめ草
　朝香の沼に生ふとそきけ　　慈鎭

あやめとる賤か菅笠ならすめり
　安積の沼の雨のゆけくれ　　公實朝臣

はなかつみましりにさけるかきつはた
　誰かしめさして衣にはすらん

國首所載

花かつみ絕世の花かつみ（八雲御抄奥國安積の沼也）かつみ故事談

かつみ　龜葉集

かつみ能圓歌枕　かつみ（童蒙抄）花かつみ　綺語抄　花かつみ　袖中抄　花かつみ　藻鹽草　あやめ草（義經記にあさかの沼のあやめぐさ云々）

かつみなき（年中故事要言陸奥名積郡）花かつみ（道のしをり）花かつみ（秋の寢覺）

かつみ　吳竹集

かつみ　奥細道にかつみかる頃もやゝ近くなればいづれの草なれ花かつみといふぞと尋はべれど更に知人なし沼なとひかつみくゝと尋ありけるは山の端にかくりぬ云々

吾田多良眞弓　あたゝら山中にあり

往古此木もて良弓を製したりといへり次にいふべし

國歌所詠

萬葉七　奇弓

陸奥之吾田多良眞弓著絲而引者香人之吾乎事將成

譬喩哥

陸奥乃久能安多良末由美波自伎於伎低西良思馬伎那婆都良婆可馬可毛

國書所載

又白眞弓安達ケ原にあり

安達眞弓

是も古へ弓材にあてたる也眞淵が古今考眞弓は其國より弓ノ出ればよみし也とあり用明天皇二年聖德太子守屋大臣を誅給ひし時も此眞弓もて用とせられたり眞弓今は大和法隆寺に納むるより其寺の緣起に見ゆ聞老志に相傳此地往古出良弓而或備朝貢或用兵家且夫和哥者住々詠之托物比興之情可見於實方之哥則實見寄此物也但今不聞製之者尤可惜剩鄉絕無說其事事者可謂遺恨也一說曰古來稱之者非良弓之義原上有白檀枯槁已久如今化爲石猶存焉且古人直爲樹而讀來者亦多故末篇舉以備參考云又云吾田多良眞弓元同鄉所出也未熟是同書に又いへらく按白檀鄉老說如斯怪其妄誕若實然則光俊寺詠紅葉零落之句可謂非乎蓋曩昔之喬木化爲石乎外國亦多此類且夫詳哥句及實方辨內侍左近典侍等所言則眞爲鄉里所出丈良弓烏想夫白檀亦造弓之木乎未可知俟識者可辨之と見ゆさて紫檀の化して石となりしといふ俗說は其時ありもやしけん今はさる事もさる石もあらざればこは其時告ぐるものゝ漫言なるべし白眞弓といへるは眞弓の木の老ひたるは外皮の白けて見ゆるものなる故にしかいへるにて其實は眞弓也さて弓材としたるは俗にいふ錦木鏡衝矛草木無盡藏に衝矛品類多し眞弓抄に矢の羽あり此を矢筈錦木といふ一名マユミ是は山中にあり云々に似て別なり俗間是を大眞弓といふ備名未詳葉は衝矛に比すれば大にして木質はやゝ同じ勁突弓とするに堪たるものなり友陽翁此木もて試ニ作たる弓あり明ゆべし

今も安達郡山中に此木多し　安達原の大方水陸の二田をなしかば此木絕たり惜からずしてあらんさて安達語に重之朝臣の妹居たる館のほとりに白檀多く植られし故眞弓姬といひし也ありされども古今の歌に安達の眞弓とよみたるあれば重之の始てをなゝのゝひしにはあら

す是を以て製りたる弓を朝貢としたるは實處あるにあらぬとも古歌にもかた〳〵見えたればうたがふべきにあらず○檀の字をまゆみと訓し弓材にもあてたるは萬葉に外原見檀丘云々兵庫或小梓弓一張（長七尺六寸槻柘檀準也）續紀に但馬國檀弓百放杯ありて古代既に其例ありといへども本草家の說に是を非也といへり檀は草木無毒藏石和産不知キハキ一名コバンの木といふ冬は葉なしイホタの葉に似て形いびつにして長さ一寸ばかりあり小判の如く筋あり故に名づく葉間に二分計の花を開く紫にして臭氣甚しとみゆ大和本草には檀をタマツバキと訓て葉如拘杞而大也薄し秋冬落つ花はマユミの如し長大是マユミの別種かとあれどもマユミの訓なしされば其品類の同じき故にマユミをして壇にあやまりしなるべし毛詩多識俚解にも（服邊太方翁著）毛詩傳に彊勒の木とす正義曰檀材可以爲事故曰彊勒之木彊勒とするによりて眞弓と誤るかとあり何れ檀には品類多してしかも皆堅強の木なるよしなれば大まゆみも皆一種なるより混たるにはあらじか深く尋ぬべし

國歌所詠

弓をよめる

古今大歌所御歌

みちのくのあだちの眞弓我引かは
末さへよりてしのひ〳〵に
（小一條右大將におつき給とてよみてそなひはべる）　重之朝臣

みちのくのあだちの眞弓引やとて
君に我身をまかせつるかな

後拾遺　（語らひける人のもし陸奥よりの弓を遣すとて）　藤原實方朝臣

みちのくのあだちの眞弓君にこそ
思ひためたる事もかたらめ

續後拾遺

陸奥の安達の眞弓末遂に
あらぬかたにも引こゝろかな

風雅　戀

是や此あたちの眞弓今やこそ
思ひためたる事もかたらめ

新拾遺　（常明寺入道十首の歌合におなじ心を）　後堀河院式部卿典侍

人はいさあたちの眞弓押かへし
こゝろの末をいかゝたのまむ

新拾遺　中國肇門院但馬

今はたゝあたちの眞弓引手にも
かはる心のほどそしらるゝ
中國入道前太政大臣
我になひく契りなりともたのまれし
あたちの眞弓あたしこゝろは
衆勝四天王院名所御障子　家隆
狩人のあたちの眞弓末たはみ
よるや男鹿のあき風そふく
拾遺集　よみ人しらず
みちのくの安達の原の白眞弓
こゝろこはくもみゆる君かな
此歌兼盛集にいひわたれどもつれなき女に□
みちのくの安積の原の白眞弓心つよくも云々
とあり安達はもと安積の内なればいぶかしと
考證にみゆ
家隆
ものゝふのあたちか原の白眞弓
引手にやすくくるゝとしかな
忠定
安達野も雪ふりにけり狩人の
引かぬ眞弓の末たはむまて
正平十一年北畠大納言守親奥州國司に仕へ爰に於て白川
彈正少弼と合戰守親和歌を詠す
みちのくの安たちの眞弓取そめて
其まゝつかぬ名をなけきつゝ
樹をよめるは
宇治前太政大臣白河にて見行家といふ事を
詞花戀　堀河右大臣
關こゆる人にとはゞやみちのくの
あたちの眞弓紅葉しにきや
新拾遺冬
かひなしやはや七十にみちのくの
あたちの眞弓春にあふとも
續後拾遺集秋　贈從三位爲子
なこりなき安達か原の霜枯に
まゆみちり行頃のさひしさ
建保三年名所百首　正三位家衡
時雨行あたちの原の白眞弓
しらす此葉は散はてぬらん
新六法　光俊朝臣
朝きりのたな引みれはあたちのゝ
眞弓いろつくしくれさへふる

名所百首　定家

そなたより霞や下にいそくらん
あたちの眞弓春かとなりと

同　順德院

霞は今朝あたちのまゆみちりはてゝ
のこらぬ色を何たのむらん

家集　爲家

けふみれは安達の眞弓引替て
色つく秋になりにけるかな

鷹狩　中務卿宗良親王

季花集

眞弓ちる安達か原をふみわけて
鳥立尋ぬる野への狩人

此外白眞弓の歌あまた見えたれどこゝによせなきはすてたり

國書所載

眞弓藻鹽草　眞弓しら眞弓とも秋の寐覺

眞菅　あだちが原にあり

眞菅は只菅の事也眞といへるはほめていふ詞也眞清水眞木眞柴といふ類也さるを今の世に眞菅とて人のもてはやせるは只の菅にあらず其實は何といへるものにや義鳴がしらざるになればあまねく人に尋ぬれども亦しるものなし但大和本草に黄莎（キスケ）といふものをのせて葉は菅に似て花黄にして萱草に少し似て草葉也と解たり是此里人らが眞菅也といふものにいたく似たりてとおもへらく今の眞菅はこの黄莎なるを圖彙抔いふものに其形書てきすけと假字に書たるをききと草の手の似たるよりよみひがめて眞菅也とおもひしか又は其葉の菅に似て其花のめづべきさまなれば推あてに眞菅也といひ出せしものゝありしか錄して後人にゆだぬ

國歌所詠

生駒を　後德大寺

あたちのゝ野澤の眞菅崩にけり
いはゆる駒のけしきしるしも

惠慶法師

あたちのゝ野澤の氷とけにけり
眞菅にましる小芹つむなり

國書所載

菅社の寢覺

麻油美紙

是則みちのく紙也眞弓の皮もて作りたる故にまゆ
ゆ紙といふみちのくの名產なれば陸奥紙ともいひ
ける也今は檀の字を書てあまつさへダンシと音も
て呼なすからに大かたは其古へを心得ぬものゝ出
來しはあたらしき事ならずや邦內の川崎村杯には
昔より紙すく事を業とすれば彼所のあたりにも作
りしならんさて聞老志に是の當國所出檀紙古往稱
之陸奥國紙今俗曰之引合者是也と大和本草にも檀
紙昔奥州より出づ故みちのく紙といふ今の俗引合
といふ倭紙の上品なり或曰くユミ紙の事ならん貞
丈が庭訓諸抄大成扶翼にタンシ引合一物にあらず
タンシは今世大高といふもの也古は大高タンシ小
高タンシといふ大高小高は紙のたけの大小をいふ
也タンシは横シホありて厚し引合は今の絕たり今
城州にて杉原紙の如くにて立しほある紙をすき出
す品を引合といふ是も古は大引合小引合の品あり
し由舊記に見ゆとあり是にて明らか也

國歌所詠

國書所載

源氏擣花にみちのくに紙の厚紙たるにほひばか
りはふかく給へりいもやう書おほせたり玉かづ
らに少し年へてあつきは黃ばみたるに胡蝶にふ
くよりなにゝちのく紙云々此外あまたはぶけりみちの紙 物語に
おとゝの北のかた平にのぜ給ひしほどに云々北の方　みちのく
又みけるに釉ノ間にみちのく紙をひきやりて云々
紙宇治拾遺水干のあやしげなりけるほころびたえたるを云々ほこ
ろひはぬはてみちのく紙の文を其ほころびのもとにむすびつけ
て云はみちのく紙　枕草子

安達絹

むかしこの里にて織出したるもの也

國歌所詠

國書所載

安達絹 東鑑曰奥州磐井郡毛越寺本尊丈六藥師乃基衡乞支度於佛
工雲慶云々運功雲慶所謂金百兩鷲羽百尾絲七間半水豹皮
六十餘枚安達
絹四千云々

埋木

本里の所管あふくま川に產す霸臺翁之三代實錄に
貞觀十一年五月陸奥大地震海口哮吼驚濤沂流漲原
野道路總爲滄溟山林巨樹埋河とあればあふくま川
の埋木も其時のにやといへり義鳴三代實錄を見る
に同年同月二十六日癸未の下に陸奥國大震動流光
如晝隱映頃之人民叫呼伏不能起或屋外壓死或地裂
埋殪馬牛駭走或相昇踏或城郭倉庫門櫓墻壁落顚覆

不知其數海口哮吼聲似雷霆驚濤涌潮泝洄漲長忽至干城下去海數十里浩々不辨其涯涘原野道路忽爲滄溟乘船不遑登山難及溺死千計資産苗稼殆無了遺焉とあれども山林云々の文なしいかなる誤りにやいともいぶかし○埋木炭とて風流家の賞するは則是を燒たるもの也

國歌所詠

いなかに侍りける頃司めしを思やりて　重之

春ことに忘られにける埋木は

花のみやこをおもひこそやれ

衆勝四天王院障子に逢隈川出たる所　家隆

君の代にあふくま川の埋木も

氷の下に春をまちけり

藤原康光

ふかき秋あふくの川原しくるれと

いろこそみえね瀨々の埋木

義鳴いへらく重之朝臣の歌はあふくま川によせけれどもこゝにてよまれし歌なればすてがたくて

國書所載

埋木社の寢覺

郡山

箭鏃石　滴釜清水の邊にあり八幡駒屋川田峯亦產之

此名の生る處他邦にもたた〳〵あり因にこゝに錄しつ續日本後記承和六年十月乙丑の下に出羽國言八月二十九日管田川郡目解偁此郡西濱達府之程五十餘里本無石而從月三日霖雨無止雷電聞聲經十餘日乃見晴天時向海畔自然隕石其類不少或似鏃或白或黑或青凡蹶體銳皆向西董則向東詢于老所未曾見國司商量此濱沙地而經十之石自古無者共所進上兵家之石數十枚收之外記局云々三代實錄元慶八年九月二十九日丙戌の下に出羽國司言今年六月二十六日秋田雷雨晦冥雨石鏃二十三枚云々同七月二日飽海郡海濱雨石似鏃其鋒皆向南云々

和漢三才圖會出羽飽海郡大物黑袖の條に凡一年一度降鏃有暴風雷震天氣常異人以之爲之神軍後至于樹下尋求之有鏃降形鏑矢蟇段等數品而非鐵未知何物中略陸奥能登亦有降幾內及山陽之地則未曾有此物也云々聞老志に神鏃石在白石館腰地俗說曰山神相戰所射鏃也故曰神鏃云々

里人談に云常州鹿島にもあり佐渡國鹿伏明神毎年二月九日大雨風にして夜に入て大に荒れ明方よりしづまり翌十日極めて晴天なる事例年たがはず土俗其夜は神鬪ありといひつたへて戸出をせずこもれり明の日社頭にふしぎの矢の根あり尖矢かりまた鏑矢さま〴〵の形にして大さ常の矢の根の如し云々雲根志後編に紀州熊野海邊にて鯨を取る其鯨の皮肉の間鏃石あり又諸國にて大風雨の後崩抔したる山中にあり或は雷の落し跡にあり

北越奇談にいふ北越處々山中並古社地古城跡畑などにあり頸城郡に大光寺村山畑神田山三郡神には圓淨湖水の北京ケ入村渡部村長者岡竹森の村古き社地より雪中に土の中より飛放つて竹木にたつ事ありし蒲原郡には彌彦山下麓村の畑黒瀧の古城跡等也又朱山の西北土底海邊の間に池ありこの所甚だ多し又社地杯に地中より飛放て人にあたれる事もあれど敢て損傷に及ばず又信州境關山の中にて農家の婦戸外に出て浴湯したりけるに山中よりいづくともなく矢響して盥の中に飛入たり女おどろき立上りて是れを見れば大なる矢の根わたり七寸計なるもの也云々

義鳴いへらく他邦に產する鏃石は皆如此怪異の事によりて得る所とすれども我藩のはさるためしなし只東鄙草に鏃石八幡村といふ處にありこゝに昔神軍ありし時の矢の根化して石となるといひつたへ云々とあれども今其石を得る事しば〴〵にて是はいと小さくて鏃の用をなすべきものならずまたは往昔神軍ありし時の鏃の化したるにもあるべからずさて和漢三才圖繪には是を本草に所謂雷擊雷斧の類かといひ雲根志には自然のものといふ人あれどもしからず洛の松岡先生は蝦夷の人の鏃石を以て雁を射る其雁の羽につけて飛び來り此地に落す也と此說おだやかならずといへども本草綱目に石努肅愼國に出づと今考ふるに肅愼國は蝦夷也是を以矢工にあらざる事知るべし云々北越奇談には上古戰場の死氣凝結して不散一念を只鏃を磨き敵に對せんとす其氣石を穿ちて忽ち形をなす云々とあり皆うけがたしこは雪林か石譜に箭鏃石あるに同じと只一種の石なるを其形をとて名付たるはいふをま

たず大凡地中に生るもの木にまれ草にまれ陰陽の氣に蒸されて自然に其形をなすのみ何ぞや鏃石に限りてかゝる理あらんやそは誰も知る事なれば多くいはず又雷攢雷斧といへるものは其形異にして鏃石の同種とは見えざるもの也

日和田
鳧氏（イモジ）

同錄にいへらく此村鑄物師多し凡て他州には戸數定りありたとへば野州六戸江戸二十四戸抔の類なり日和田は定數なし故に或は增或は減ずるも珍しからずとの傳說にいふ聖武帝の御宇奈良東大寺の鐘を鑄る時諸州の鑄工あまたたび鑄損して遂にならず此節日和田の鑄工京師見物に上りしが此事を聞て吾輩術ありもし吾らに命じたまはゞ必ず成就すべしと此旨を吏に訴ふ吏試に彼等に命ず彼等內鎔に砂をもり其砂の量をもて銅の量を計り唯一鑄して鐘成るこゝを以て日本第一の稱あり其鐘の銘に陸奧國安積郡日和田の住人とのみありて姓名なしもしくは荒神にやありけんといへり其銘三四十年前も大槻村邊のもの見たりしなどいふ實否を糺すべしとあり義鳴が聞たるは此大佛の供鐘を鑄るやうを見る奇世の供鐘なりければ鑪鞴より流し入るゝ銅を呑めずして鎔破れたり又の日鑄形を作り替てものするに又前の如く人々術に盡て只あきれ居たるを彼の本邑の鑄匠等前の如く申こひてやがて鎔を作りいて其形のめぐりに池をうがち銅を流し入るゝに從て其池に水をそゝぎ入れしかば形にのみたる銅火の勢の減ずるが故に形を裂事あたはずして遂に其鐘を鑄成したり人々其巧なるを感じあへりとぞ今の鑄物師は其子孫なりといへり

偏葉葦　安積沼の舊地に產す

こは膽澤郡なる蚊蛇（ジヤガ）湖の故事をうつせしに似ておぼつかなし

梅澤
籃　筲箕（サル）

元祿の頃にははや作り出せりといへり田間漫錄

橫塚
斑竹

和名抄に一名淚竹波遲久とあり今姑く大和本草に從ふ

漳州府志に云節間有斑文似湘妃淚痕所余者云々

○大平村亦是を産す

片平

貝石　額取山にあり

義鳴過し頃土人をして此石をとらせたるに一は蛤一つは蝋に似て眞に迫れりさて備前土佐抔にも貝の生る山ありて貝原氏は混沌未分前の海なるべしといはれしかどいかがなるべき但おのれがもちたる二つの内蛤に似たるが其中は植土を含たるものゝ如しかゝれば彼所なるも是と同じき化石なりと見て海なるべしとはいひけるならん漁翁雜話に相應寺の什物なりとて數品見せ給へるに雀の蛤と成たる其數十九ケ見たり同遊のもの云く雀入海爲蛤と及聞ぬれども目に見るは初也と珍らしき事にもひしが此頃和漢三才圖會をよみたるに阿波讃岐に石蛤あり其狀は蛤に似て開けば土の如し亦相州足柄山にも此類ありといへりとみゆ此阿波抔の石蛤と云即おのれがもちたるに同じされば一種の貝石にて化石にはあらざるなるべし

河内

煙管石

醫員山下氏の藏するを見しに其形如此人作のやうにてしからず漢名あやしらず山口村亦產す

安子島

蛙

此わたりに產るゝものよのつねにあらず鳴く聲清くすずしく誠に鈴の如し按に無名抄に井手のかはづと申事ぞやうある事にてはべれよの人思ひてはべるは只かへる皆かはづといふぞとおもひてはべりそれもたがひはべらずされどかはづと申かへるは外には更にはべらず只此井手河にのみはべるなり色黑きやうにていとおほきにもあらず尋常のかへるのやうにてあらはに踊ありて事などもはへらず常には水にのみすみて夜深るほどに彼は鳴たるはいみじく心すみてものあはれなる聲にてなんはべるとあるものと全く同じ我歌垣委敏眞福抔是をとりて庭に放ち置たるに前にもいふ如く彼か鳴たるいみじうものあはれに聞えて心すみはべりし井手の外にはなしといひけるものゝこゝに產るゝもめづらしかならずや因にいふ横川の座主琳賢とい

いひしが井手のかはづをとりてかひけるに其かはづみまかりければ干てもたれける事續世繼物語にみゆ世にめでたきは是もしるべし
筑前續風土記に天山蝦蟆常のかへると形も聲もかはれり粕屋郡山田河内の上井野の山中にあり是井手の蛙に同じ其聲おもしろくて聞に堪えたりとみゆ河内國にもあるものと見えたり

金切石
北川の邊にありと便覽に見ゆいかなるものなるか

大　槻
禹餘糧
俗に按に石又燒飯石ともいふ黑褐色の石也其形餘糧を滑へし蒸餅抔のかけたるが如しと大和本草にあるに同じ

石　英
其形獸類の牙に似たれば土人鬼牙といへり鐘乳石とあるは非也山口村亦産す

只　野
鯢
五異櫃を越て半過ぎ下り少し平らなる水流れぬる處に山椒魚といへるものあり頭面は鮎に似て身は守宮の如し往來の人捕て痰火を消するよしにて生ながら呑たるを見はべる和漢三才圖會に鯢を山椒魚といへるよしにて本草を引て聞耳して有毒といへり
寅翁雜話
深堀村亦産す

山　口
磨　沙
八　幡
セノキ石。
化石なり
雲松志
此外所々に産す

川　田
空青（クンジョウ）
一名曾青といふ紺青は空青の最上なり
大和本草
天工開物には空青既取內質其膜升打爲曾青とあり則綠青の一種なり

福　山
大豆石　大豆塚にあり
雲根志後篇に大和國豆坂同國宇多山伊豆丹波等にありといふ豆砂の類なるべし

富　岡
貝　石
翁は昔時爲用郡時巡邑して本邑に至れり村民に半

衙といへる百姓先年奥山溪谷の間にて得一奇石其石衙螺蚌殻と語れり此所隔海邊數十里にして螺蚌の殻の附たる石の可有やうなし所謂桑田變海道太行而北崖之間往々衙螺蚌殻及石子如烏卵者損且石皆如常此乃昔之海濱今東距海已近千里所謂大陸者濁泥所謂耳といふ事をのせたり中華にもある事と見へたり富翁雜記

青田（ハツ）
紫萁（タク）

啓益按秋末生山野松樹下味耳美無毒可食其裏見綠青色者好此物性味輕而病人不忌志未知奈米須々幾初茸三種菌中之佳品也（卷懷食鏡）此外所々に產す

羽瀨石

曆

本邑の民橋本甚右衛門といふもの天和三年に作りし曆のちり□ひへしを見たり其順序今に異也彼は毎年作り出せしといふ（遊憩堂筆記）今其事すたれたり可惜さて此甚右衛門のち會津にうつりて住で今の會津曆といふものは其子孫の作り出す也と士由の話也其圖は

首に奥州安達郡二本松橋本甚右衛門正本と題し次に中段の解を書たり天和三年癸亥の曆也（吉書始室）正月大建甲寅とくらかまにあり

一日さのとたつ	廿八日	神參りくらびらきはがためはかまきよし
しやく 一日		
		めつ日
大しやし		
		もつ日
		上げん
		八つせん
		立春正月せつ
		五分半子の刻より同八刻迄 方々悪
		下げん

月蝕 ◑

天和二年十一月朔　吉成謹勘之

大略右の通也末に晝夜の短長を集てしるし上の表紙水火金木土の上り様の圖を顯し末の表紙は日本

輿地の圖を出せり其圖年代記等にある圖の如し

石　雄

木葉石

文理ある事木葉を壓たるものゝ如し雲根志には化石なるべしとあり大和本草には花紋石の類なるべしとあり高玉村亦產す

炭　外所々に產す

高　玉

石　墨

富翁雜話卷一に高玉村の小川流たるを渡りて高き山の腰に觀音の岩屋あり此所土に雜て薄板の如くなる墨を出せり里人取りて墨のかはりに用ゆるよし予此土を取りて試みるに黑く清潔にあらぬものをとり雜たる和墨の鄙げなるよりは勝れて覺はべる都山科より出せる品は見ぬ事なれども兩所とも觀音の淨地より石墨を出せるもふしぎなる是本草石墨の出せるもふしぎならずや是本草石墨の類なるべしとあり村鑑抔には牛頭天王の社後より出るとあり兩所より出づるなるべし山科觀音堂の後より石墨を出す事は大和本草雲根志等に見ゆれども不詳扨石墨を石炭といふものなるべしと書しものあれども似て別物也

櫻川石　荒戸澤より出る

硯に用るに品格高島に次ぐ　實驗雜話に山腰にあるものは無理色墨水滴れやすくして不佳すべて山腰より落て年久しく溪流に洗沒するもの最もよし　按に雲根志後編に櫻川石は奥州櫻川に產する處の石也輭にて黑く光澤あり白點豆粒の如き斑文あり硯に用ひて上品とすとある正しく是なるべしこゝのを櫻川石と呼なれし事は大概に見ゆ

方金砂　熱海溪流の側より產す

金色の小さく角なる石也方鮮石の類か　田宮漫錄

中　山

蕨

こゝと山木屋村とに產するものは則例歲幕府に獻らしめらるゝ也卷懷食鏡に主治去暴熱利水道令人眠補五臟不足壯經絡禁忌久眼令人目暗益壽髮落又冷氣人多腹張小兒食爲脚弱啓益按此物病人禁勿食瘡家金瘡痘疹後不可食云々此外所々に產す

白　岩

白岩石　嶽山にあり

其質燧石の如くにて甚だ白し漢名未考是則村名の起る處也（筑前風土記に云ふ右所山に白妙あり大石なるを銕槌を以て打碎て砂とす鮮白にして愛すべしとありこゝの白岩石といふも是も同類なるにや）

寒水石

水晶の如く鹽のにがりの如しすきてやはらか也其源は鹽の粉也藥店にて方解石とあやまる（雲根志前編）

松澤

相思草

多葉粉の說いと多し大槻氏が薦祿やゝ似りといふべし按に千種が記にみちのくのたはら仙東白石とてあり云々みゆ今も此わたりより出る米をも江戸にては概して仙臺米と稱するなれば白石といひしも此わたりより出るたはらも交りしなるらん外にも針道外木幡抔に多く產す

稻澤

菌

すべて此村菌多し此外所々に產す

雲母

本草云雲母（和名伎良々）五色貝謂之雲華多赤謂之雲珠多青謂之雲英多白謂之雲液多黃謂之雲沙（和名鰲）龜谷街切通し亦產す

水晶

邑人此村に水晶のあるを見付て掘ければ其色黑光り形は六角にて長一二尺計徑六寸餘もありなん是は烏水晶といふものなるべし（品翁雜話）水晶梵語に頗黎といへり天工開物に凡水晶出深山穴內瀑流石罅之中水經晶流出土晝夜不斷出洞門半里計其面尙如油珠滾沸凡水晶未離穴時如棉軟見風方堅硬琢工得冥者就山穴成粗坏然後持歸加功省力十倍云々とありさるものなるやしらず小濱針道等亦產す

玉井

燧石（番倉山より出る其外山木屋火打坂亦產す）

福壽草（在名倉山）

大和本草にフクツク草とも元日草ともいふとあり或書には漢名未詳本草家說に挂海志にのする例金盞といふものよくあたれりと禁中和歌題には報春菊とあるよし是又何によりて名附給ひしにやとあり近聞寓筆には季冬及初春開黃花種盆以爲節物列桂山醫官謂紀胸濼陽消夏錄所云雪蓮或是未知的否聞蝦夷地方此草極多又有紫花者未得致其種後閱西

域聞見錄雪山北路雪蓮最多雖不載形狀爲此草可想知矣とみゆ木幡山あたゝら山抔亦産之

深堀

硫黄　あたゝら山より出る

湯の花　同し

氷餅

幕府へ例年奉らしむるものは是地にて製する所也江戸の菓匠福島仁右衛門曾て菓子に製して試むるに他の及ぶ處にあらずとしば〳〵稱歎したりとぞ

石英

吾多々良山の谷中にありて長十丈餘周廻一丈五六尺あり人其上にのぼりて伸屈自在なるべしといへば往昔賤吏二人此山中に入りてたま〳〵見たりとも其折はさのみ心にもとどめざりしかば其所在を定かにせず土人も猶しらずといへり實は信夫郡の管下にやといふ人あり或はしからん金山家文集に六稜如削無小豐殺其色漆黑如漆直之兩山間未與峰齊實奇矣餘卽謂是黑石英極環瑋者也因何之道者卽上未聞其名當在鐵厓東北人不至之地亦不能强之觀止矣とある也とは金峩翁其石のあるをきゝて見ん事をおもひし時の記なり

箕輪

太一禹糧　三雄山にあり

其形圜子に似たりよりて土俗圜子石といふある人太一禹糧なるべしといへり太一禹糧は禹餘糧の一種なり

椚山

松蕈　象目田に産す

木綿布子に松茸の匂は嵯峨におとらずと京知りの小野川檢校も譽しぞかしと書たるはこゝのなをいひたるらん此外所々に産す養懷食鏡小松茸性平味無毒甚香美木茸中第一也云々

小杉田

榧實　光恩寺にあり

石榧といふものなりとぞ

溫石

品類他に比すれば大にまされり山東通志曰出掖縣色兼青白潤賦妹珠耳無毒可備藥物日本に溫石と云ものあり白くして青しやはらかなり是山東通志に

しるせし中華の溫石と同物なるべし冬は弓の弦折れ安し溫石の粉末を指につけて弦をしごくに柔靱なると夏日の如し是溫石の性熱なること可知溫石やいて鹽水をそゝぎ布に包み痛處を慰すに最よし又腹中の積滯を散ず大和本草

府下六町

龜谷燧鐵

菊を印するは此冶工の祖刀劍家菊一文字の弟子なりしによりてなりとぞさるを天保四年といふに嵯峨御所より菊の紋を勅許ありて毎歳冶工一人より燧鐵一つ宛貢ぐべきよしの宣旨を蒙るこは古代よりの名產にて木綿布子寶永七年の作といふ丹陽殿詣の往來する條に作藏が菊鐵燧のつかみとりするは此時なり此近鄉は更也與は松島迄其名高しとかやと書たり

菓子

玉屋近江正大椽俗稱茂兵衛製す味都下に次で四方の風客是を賞せざるはなし和原雅に今業說郭市肆記之中有菓子部多載於糖餅之類然則中華亦以糖餅之類槩稱之菓子乎云々○因にいふ松藩にて

如此形の糖を作りて賣るものなり東海談の中に京師濱松內膳が往古の菓子の圖に見えたり古雅なる事に思はべる富翁雜記

澁川白土

寶曆年中こゝの太郎土山といふ所より膏潤なる白土を產せり今に至て松藩城壘の屏壁をぬる事に用ゆ隨圖經に當山高縣房子城出白土細滑膏潤可以塗飾兼用之濯錦可致鮮潔といへり我藩の白土も衣服を洗ひこゝろみたきものなり富翁雜記

鹽澤辰砂　同下石に產す

石間より湧の如きもの流れ出す是石中に硃砂あるが故なるべしと官醫酒井氏の話也硃砂和名をイノウチノアカイシといふよし本草和解に見ゆ此硃石辰州より出るを良とす故に辰砂といふと大和本草にあり本名丹砂といふ別に美丹あり混ずべからず硃砂は石類也といふ

熊谷草　木の根坂にあり

葉は蕗の形にして小なりえひねの葉の如ししはあり葉に少し光あり葉の高さは九寸梢に花あり花の大さ鴨の卵を二に割たるより猶大にして形は蛤をふたつに開きたるが如し色白し或は黄也心ははまぐりの肉の如し青黄也花うるはしく見つべし深山にあり或曰敦盛草と一物也花の紫なるを敦盛とし花の淡白を熊谷となす共に枯やすしと大和本草にみえたる草也こは醫員酒井氏目のあたり見し事あり花は紫にして母衣掛たるか如しといへり紫ならんには敦盛草なるべし

鷺草

青白の二種あり此花他處へうつし植て翌年より花を不持といふ予試るに然り相模國の事書たる書に三浦濱にて鷺多く生じたりとありこゝのは右の傳は聞かず積達故事談

上川崎

楮紙

大奉中折小料紙皂角紙還魂紙（スキカヘシ）等の諸紙を製す皂角紙は紙魚を避んがため也富翁雜話に云香祖筆記に云宋王文憲家以皂莢末置書中以避蠹と是らにより てなるべし云々下川崎沼袋抔亦製す

席

木綿布子の跋に川崎盈居叫たるさすか〳〵云々平

石鈴石杯亦製す

沼袋（イヌ）

卷柏（ヒバ）

木草云卷柏和名伊波久美一に伊波古介和名抄西嶽亦産す

小濱

蛭石　鹽の松の邊にあり

喜泊といふものゝ如くにて火に投ずれば忽ち伸長して色も形も眞に生たる蛭の如し故に名あり漢名何といふにや此石他邦には稀也とみえて雲根志之編に出る所をのせたるは只同國三春のみ也

乾柿　大平村其外所々に出す

平石

土骨聲　高田津の邊に出づ

土中に產す其形山芋或は薑の如し亦直にして長きもあり中空虛なるあり實滿なるあり其色黄赤く竹の筒の如く大根牛蒡の形なるものもあり雲根前編此則

土脂液也生于土穴狀殷孽故名云々本草綱目

内木幡

榧　木綿布子に着そ初木幡の榧の喰つみ云々

田澤

璞　本村の錠番といへる役勤せし里右衛門といふものの母村中を流るゝ溪流のうち菅田と唱ふる摺の邊に旱天に足を冷して居たりしが水底に光りきらめきてかゞやけるものあり取りあげて見れば眞黒に水垢つきたる石にて光るともみえず水へひたせば光る事元の如し家に携てかへり井の中に投入しかば天澄月明かなる夜は水上に浮み出ると覺え曉にはとつしりと響て水底に沈む音したり後に姦商の爲にだまされて賤價にうりて口惜しき事したりと里右衛門に直に語れり其商買は郡山の萬藏院といふ修驗の還俗して持ありきて鬻しものなるが其玉を松公藏が元におこせしを見たりしに里右衛門がいへる如く水垢につゝまれて光あらはれず渾然たる黒石にて大さ握飯の如し能く見れば黒き内に無量の光を包めり水に移し日に映ずれば光かゞやきて目眩すべし今は何れに賣去りけん惜しき事也田澤の川筋には脫ケ玉とて間々違ひしものありと云傳るよし里正かたりき遊覽筆記

小木屋

五味子

蘇敬本草註云五味和名作稱加豆良波關甘酸核中辛苦都有鹹味故名五味也和名抄

上太田

香爐灰　會津領の時本城山より出す今其地畑となりて灰は絶たりとぞ本文

相生集卷之第十五稿終

相生集 卷之第十六稿目錄

人物類

補任
比止稱命　繼足　繼守　今繼　清吉　押麻呂
久麻直　大庭　山守　靜戶公　東麿　月麿
和歌
采女　恒忠女　高國
豪族
虎丸長者
文學
親盛　希夷　建達　實備　久敬　賴直
易學
利容
數學
吉德　附渡邊治右衞門
諸禮
實長
醫學
說夫　伯敬
俳人
尙茂
好書
敏義
武技
高就　貞家　重明　附門馬市右衞門　某附丹羽今右衞門

總て三拾三人此冊に收む

相生集 卷之第拾六稿

外史 大鐘彌兵衞藤原義鳴輯

人物類

補任

比止稱命

阿尺國造也志賀高穴穗朝御世阿岐國造同祖天湯津彦命十世孫比止稱命定賜國造舊事記捜古に日本紀にありとぜられしはあやまりなり

繼足

神護景雲三年三月辛巳安積郡人外從七位下丈部直繼阿倍安積臣云々

義鳴いへらく丈部の姓或は大部とよみ或は文字(こゝべ)を誤りて文部としたるものまゝあり姓氏錄によるハセツカベと訓べき也童蒙のためにいふ

繼守

寶龜三年六月丙申陸奥國安積郡人丈部繼守等十三人賜阿部安積臣云々

延曆十年九月辛亥授陸奥國安積郡大領外正八位上阿部安積臣繼守外從五位下以進軍粮也以上續日本記

今繼

清吉

貞觀十二年十二月丙戌安積郡人矢田部今繼丈部清吉等賜姓阿部陸奥臣三代實錄

押麻呂

承和十年十一月庚子安積郡百姓外初位下柏造子押麻呂戶一煙改姓爲陸奥安達連續日本記一烟とは俗に家一竈といふが如し其例此書に多くみゆ捜古に續日本記にありとしたるはあやまりなり

久麻直

信夫の國造也志賀高穴穗朝御世阿支國造同祖久志伊宇命孫久麻直定國造舊事紀

大庭

山守

神護景雲二年三月辛巳信夫郡外正六位上丈部大庭等阿部信夫臣信夫郡人外從八位下吉彌候部足山守等七人云々

靜戶公

同年同月信夫郡人吉彌候部廣國下毛野靜屈(コマ)云々

宣長が古事記傳に靜屈は靜戶(シヅヘ)公を誤る也安達郡

に靜戸郷あり信夫とは隣なる郡也云々

東麻呂

延暦元年五月乙酉陸奥國ノ外大初位下安倍信夫臣東麻呂等献軍粮並授從五位下以上續記

月麻呂

喜祥元年五月辛未陸奥信夫郡擬主大田部月麻呂賜阿部陸奥臣續後記

和歌

采女

安積山影副所見山井之淺心乎吾念莫國

・右歌傳云葛城王遣干陸奥之時國司祇承緩怠異於時王意不悦怒色顯面雖設飲食不肯宴樂於是有前采女風流娘子左手捧觴右手持水擊千陸いふ撃の誤か之王膝而詠其歌爾乃王意解脱樂飲終日は考による

契仲云此葛城王いづれにかあらん伊與風土記云湯郡天皇等於湯幸行降坐五度なり以上官聖德皇子爲一度及侍高麗惠慈葛城王等也天武記に云八年秋七月巳卯朔乙未四位葛城王卒次に左大臣橘朝臣諸兄卿を初葛城王と名づく此三人の中に天武記に見えたる葛城王なるべきか其故は風土記は文拙ければ信がたし橘朝臣は家持殊に知音なりと見ゆれば當時の葛城王の事にて右歌傳にいふにいふべからず第六に橘の姓を給ふ時の御製をのせ第八に左大臣橘家宴歌をのせたりもし左大臣のいまだ葛城王なりける時也とも左大臣の事也と注すべしといへり翁も稱德孝謙の間は卽諸兄卿也此歌其時代の事なれば葛城王と書すべからずこは天武記に八年四位にて卒すとあり葛城王なるべしといはれき又采女は續紀文武大寶二年四月壬子令命筑紫及び越後國簡點采女兵衛貢之但陸奥勿貢と見えて此御時より遙に前の采女なる事しりければかた〳〵諸兄卿にはあらす　萬葉略解の說

右歌傳云葛城王遣陸奥之時　班田使か又邊要の地なれば事ありて遣されしか　云々　前の文と大同小異なれば略しつ

采女は諸國の郡司以上の女姉妹などの中に選みて貢ぐ例にて參りしが今は變りて前のとはいふならんさる女なれば風流なるが所につけてめでたけれ

ば王の心も解給ひしなるべし只文武紀に大寶二年四月陸奥勿貢との制見ゆれば是は其前なりけん是をおもへば此葛城王は天武紀に八年秋七月葛城王卒すとある王の事ならん云々　新萬葉に見ゆ萬葉考の説に大同小異なれば不抄

○義鳴云らく親重の説に此采女片平の產とも必しがたし都より供奉したるなるべしといへり椅坂の高振　博學狂歌を好み義鳴安藤重綱が宅にて邂逅したり　といふものの説にも日本武尊東征の時其妃橘姫を伴ひたる如くこの采女も都より供奉させ給へるなるべし王の尊きいかで采女を從給はざらん此歌も采女が鄉國大和の山なるより思ひよせて作りしなるべしといへりこは强て安積山を彼所にありとせん故にてうけがたくさて采女は少領以上の姉妹處女のみめよきを召仕はるゝ事なれば年長にて故鄉へかへる事なるべしされば前の采女といひしならん當時正しき采女ならんには何ぞ前の字を象らすべしやは季吟が八代集抄古今序采女が歌の注に國々の郡司が女を都に召仕はれたるが六年過て國にかへりたれば前采女とはいふ也是則眞淵が説に同じ且はこゝに其塚もある處なれば彼は本邑の產にて都より伴はれたるにはあらざるこそうつなかるべし

古今集の序にあさか山の歌をばうねめのたはふれよりよみて云々傍註にかつらぎのおほぎみをみちのおくへつかはしたりける時に國の司事おろかなるとてまうけなどしたりければすさまじかりければうねめなりける女のはらけとりてよめる也是にはおほぎみの心とけにけり

あさか山影さへみゆる山の井の
　あさくは人おもふものかは

萬葉集に葛城王のみちの國へ下り給ふに或は國の祇衞の司まうけおろそかなりとて王心よからずこれによりて采女王の御膳をたゝきて此歌をうたふに王の御心とけて快なりぬ云々

詠歌本記曰日本武尊子伏曰高見國至恩生岡□國首等奉饗而爲軍疏大王不喜色欲物采女春姬知無爲而好乃進取奉觴奉上文酒調曲謠之天王解情致平均

淺香山影縢見苦爲岸之淺慶者人乎惟生物無只

安古來以此哥爲橘諸兄東行采女之所詠焉古今序亦依日是以來和哥者及天下後世無解其事實母其和哥也然今載之本紀而以日本武尊易葛城王以采女春姬

而爲奉觴女其事實其詠歌則同而其人其名則異於是蒙晴惟焉耳

義鳴いへらくそは聞老志に載て則洞岩の論なり實に此說の如し昔より葛城王の事とせしを何の故ありて日本武尊の事としたるにやいともいふかし是は惟生物歟只此かものてにをはとゝのはず知れたる如くかはとうふは反語にて則おもふものかはおもひはせぬものをといひたる也かくて本歌の心明らか也かもは疑の詞文哉と同じき意にも用ふれども反語とせし例曾てなしかくてにをはもとゝのはぬ歌も何そや歌の母とすべき是則後世無稽の說なることうつなき證ならずや大和物かたりに昔大納言のみむすめいたくうつしくてもち及べりけるを略うとゐりにて有けんか略ぬすみて馬にのせて陸奥へ夜ともいはず晝ともいはず逃ていにけりあさかの郡安積山といふ處にいほりを作りて御女をすゑて里にいでゝ物なともとめてくはせて年月を經にけり略此品物もとめにいでゝいにけるに四五日こざりけり待わびて立出山の井に影をうつしみればありしかたちにもあらず略いとおそろし樣なるをいとはづかしとおもひけるさてよみたりける

淺香山影さへみゆる山の井の
　淺くは人をおもふものかは

とよみて木に書つけて庵にかへりて死しにけり略

義鳴いへらくとは作り物語にてあかしとすべきにはあらねど序にいふのみ

恒忠女

大和物かたりに兼盛みちのくにて閑院のみのみこのむすめにありける人黑塚といふ處に住けり其むすめどもにおこせたりける

みちのくのあたちか原の黑塚に
　おにこもれりときくはまことか

といひたりけりかくて其むすめを得んといひければ親またいわけなくなんある今さるべからん折にもといひければ京にいくとて山吹に付て

花さかり過もやすると蛙なく
　井手の山吹うしろめたしも

といひけりかくて名所のみ湯といふ事を恒忠の君のむすめよみたりけるといふなん此黑塚のあるじ

也ける

おふそらの雲のかよひち見てしかな

とりのみゆけはあとはかもなし

となんよみたりけるを兼盛の大きみおなじ處を

鹽かまのうらには蜑やたえにけん

なとすなとりのみゆるときかな

となんよみける下略

義鳴いへらく兼盛朝臣は太宰少貳篤行の子にて天文二年八月駿河守に任し正暦元年十二月に卒せし人なりさるを陸奥にありしさまに書たるからは恒忠の君も又其君はなき人なるやおぼつかなしとまれこは作り物語なればすつべき例にあれどもいとをしまれて

高國

則畠山氏にて二本松城の開祖なり金葉抄に此人武勇に長ずるのみならず數島の道を好まれつゝその勅撰にも和歌の數多のせられたり風雅集を撰ばれける時は

春といへは昔たにこそ霞しか

花の袂にうつる月かけ

新續古今集勅撰の時も普光院殿の吟舉ありければ

富士の根に絕ぬはいつも煙にて

我身一つは消なはけぬつき

豪族

虎丸長者

何人にていつの頃こゝに住たるらん諸說とり〳〵ながら皆おぼろげにて更に信をとるべきなし暫く諸說をあけて後人の是正にゆだぬ

郡山古事考にいへらく虎丸てふは上野安魔佐伯兒麻呂大伴弟丸坏の名を誤れるか又は高の系字高を綸によみあやまりて東夷の酋長高丸なるべしや恒武帝の時代又文屋綿丸柏造子押麿を誤り唱ふるか是は耳の字を斗の字に謬て文屋耳樂麻呂を斗樂丸と唱ふるかともいふ或は虎丸は青龍白虎を表したる城にて景城の一方にありて又龍丸といひし處もありけんたとへば江都府城にある龍口御門虎御門坏の類ならめなど兎にも角にも虎丸の名に拘つらひて煩はし璞つら〳〵おもふに虎丸は讃岐の城名にして西

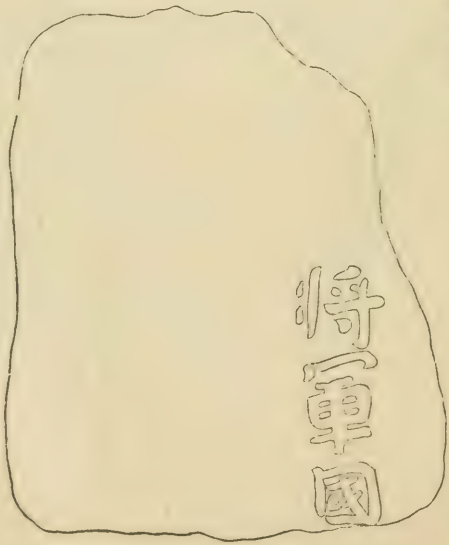
國太平記に讃岐虎丸の城主三好存保（マサヤス）てふ名も見えたり又往古大江匡房筑前守になり下向せし時太宰府に虎丸長者といふ人のありけるよし書るものゝ本にあり今も其長者の屋瓦は畑より出るといふ是も屋敷跡か何かはしらぬと虎丸長者てふ古談は古くより彼所にありけるを遠く聞傳へてこゝにも瓦の出れば是ぞ虎丸の屋瓦也抔いひしもまことしやかにもなりけるか或は云一條天皇延暦六年平維望藤原師任封境を爭ひ維望遂に師任を殺して自ら鎮守禦將軍となるとあり師任安積に住するより安積の師任ともいへば此所師任の居城ならんと疑ふ人あり然し此墟廣大にして師任如き小將の居るべしとも覺ず或は文治の年右幕下七道の軍勢を率て秀衡義經を大將として其子三人あつかし山に陣しける時秀衡方に安積兵衛といふあり又天正十二年田村隆顯郡山の城主伊東但馬守を追落すといふ事あり昔上臺に居りし此等の人かとうたがふ人あり又天正十二年田村清顯小濱の大内と戰ふ時郡山大藏少輔あり古へ上臺の城主ならめと疑ふ人あり古今同姓にて此城を守りし徴もなければ其祖や否か知るべからず又一事徴ともなるべきものは鄉の坊は皇貞一九世の祖道清なるもの享保十八年上臺より好瓦四枚を拾ひ得て尊岳山大悲閣に納む中に一瓦あり文字あり其瓦半所に唯將軍國のと字を見る然れば此所鎮守府の墟ならん皆いふ國は則其人の名惜らくは下の一字を缺くとまた謂らく天平勝寶四年陸奥庸者多賀城以北今輸黄金又延長八年前鎮守將軍平良望爲常陸大掾名國香或は伊達の庶兄錦戸太郎國衡はあつかし山の合戰にも右將軍國衡と見えたれば若は是らの人ならずや抔とも僕つら〳〵思に國庸は多賀城より北黄金を輸すといひ良望常陸の大掾にて名を國香とあらため國衡の安積に居る事見えざれば何れも確と帖妥（ツカウ）せず況て名を書て姓を記さぬ理なく且屋上に將軍の名を標すべき謂もなし只疑ふらくは將軍國府の文字ならんは天東寺の古瓦に東寺の文字ある四天に一寺の古瓦にも天王寺と記しあるをみても知べし其國府と稱する所諸國に多し然れば此地の古名は國府臺ならんかされごも安達の仁井田邊には上臺てふ村あり或は闕記に上臺寺といふ名氏もあれば妄に杜撰すべ

くもあらず然し野人は國府臺といはんも言むつかしう思ひて高き地なる故に常に上臺（カウノダイ）とのみ稱來るも幾百歳の星霜をへていつしか國府臺てふ名を呼ものゝなくなりしか抑此上臺は貞觀前後の遠からぬ鎭守府城跡なる事恐らくは然らん僕此地を鑒定して國府臺とし又鎭守府城跡とす確乎たる據なくして相いふは是ならんか非ならんかまづ暫く予が言に從て安せよ云々略抄

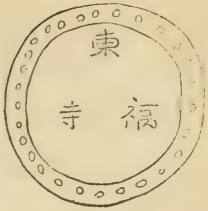
義鳴いへらく此考いとおもしろし苦心勞意するにあらざればいかでかはかゝるべきされども一枚の腐瓦によりて鎭守府城の跡とせんはいかゞなるべし且は長者といふをもておもへば只當時の豪族なりけん名義集に富商大賈積財鉅萬咸稱長者とある如く參州池田の長者坏を始として世に長者と稱するものはおのづから皆富商豪賈のみにてかりそめにも官邊の人をさしたるを見聞せず風說通に年春德芥事正に長人爲長者とあるは所謂源氏長者坏」類にてとは者の字音富者を長者といふ如きは者の字濁音にすべき例也是又おのづから其けぢめの ら脫か也　さりながら强て前說にまかせんとならば三代實錄に貞觀五年二月文屋朝臣耳藥麻呂爲陸奥介といふ文もあれは耳を斗にあやまりしといふはいぶかしくよしありげ也されどおのれは從はずさて其庵如寶寺の什寶となれるを過し頃揃えたり

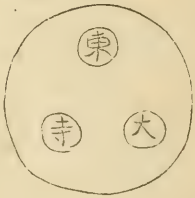
元本には眞圖あり

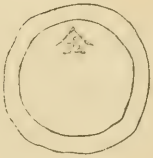
略圖



如此也さて古瓦譜を見るに東大寺東福寺坏の屋瓦には







金毛閣

かく小口に文字を彫たる也こゝのは平坦なる處に文字ありて前の例に類せず是は文字も纖小にて廣家の屋上に用ゆべき料としも見えず或人は文瓦を屋上に用ゆるは佛堂の外いかゞならんといへりされど好古小錄に閑院内裏の廢址修木の字ある先輩の說にいふは木は木工寮修は修理職の記也といふ例なれは妨なし　まして鎭守將軍の鎭所を鎭守府といひ國司の任所を國府といふべき例にて將軍國府と稱したる事未だ知ずかた〳〵におもへば前の說うけがたしつら〳〵按るに輶軒小錄に享保十三戊申の秋和州宇知郡の內大澤村の農家平右衞門の家に四五升ほど入る壺一つ竝びに瓦二枚掘出すと其中一枚文字を彫付朱を入あり瓦あつさ一寸八分一尺七寸長さ一尺九寸也其文に從五位下守右衞門督兼行中宮亮下道朝臣眞備葬亡妣揚貴氏墓天平十一年八月十二日記歲次己卯と四十七字づゝ一行にありと見ゆ是によつておもへば此瓦も死者の棺中に入たるものにはあらざるか强て言ば前說の中に引たる國衡の墓にて將軍國衡骨備中國東三成村といふ處の塚をほりて得たる鐵器には下道氏國勝國頼夫人骨とありてより是又輶軒小錄に見ゆ抔ありて國衡のこゝに住みて伊達の錦戸太郎の庶兄なりければ其地におりて住へき譯なきにあらん死したるを葬りし處なるらんさて其子孫も連綿とこゝにありしかど御代かはりて昇進除目の沙汰もなく漢土に所謂土着の人なれど許多の村邑を領しながら其名は正史にもれて其家の富豪なるまゝ世に虎丸前の說にいへる城の名長者と呼ける遂に通名となりたらんもしるべからず他日國衡のが系譜を明らめて其說を定むべし

東鄙草にいへらく虎丸長者召仕ふ下女に國といふて三國一の惡女ありけるによりて惡玉と異名を呼ぶ誰人も問よるものなければいかなる遠所の田畑へも男同姓に遣はしける略かゝる折ふし坂上苅田丸は東夷大武丸といふもの國見山にありて王命にそむき侍る故勅宣を蒙り討手に下り給ひ白川郡小野鄕矢田川村の院旨峰といふ山に御對陣ありしに毎日あやしき光陣中にさしけるに苅田丸不思議に

おもひ或日自ら光をしるべに尋行給へば木賊田村の清水に天女の如くなる美女一人はべりて根芹を摘り苅田丸の御目には類なき美女と見え給ふにより御陣中に伴給ふ云々

義鳴いへらく是は妖言怪語なるは人既に知るべし

同書又いへらく昔此所に朝日長者といふもの住せしが義家公東夷御征伐のため御下向ありし時國人盡く幕下に參したるに此長者ばかり連々したるによりて燒討にし給ふといへり一說には郡山の虎丸長者の別業の地なる故に郡山臺ともいふ虎丸郡山にて沒落の時一同こゝも敗北したるともいへり

義鳴いへらくこは杉田なるをさしたるにて世に行はるゝ說と大同小異也只朝日長者といひしは伊達郡小野の里に住みて今猶彼所に古跡あり信達風土記に見ゆいかゞ

大概記にいへらく安積の大領某郡山の內虎丸といふに殿作りして住たる故里人尊て俗稱をいはずして長右衞門殿又は虎丸殿と稱せり殿館燒失後杉田へうつり住せり數年ののち其館も亦燒失して郡山に再住せしといふ虎丸の名の傳はりし事は養元の頃より天喜康平の頃迄も其名あり云々

義鳴いへらく大領ならまじかは其名正史に見ゆべしなきときは例のうけがたし

仙道記にいへらく郡山館主伊東太郎此處にも住て虎丸といふ

義鳴いへらく杜撰の說なる事既にあきらけし

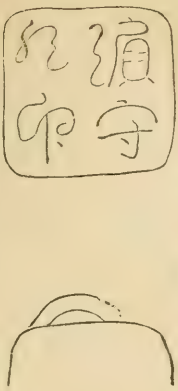
遊覽志にいへらく虎丸は建保七年の頃の人なり

義鳴いへらくこは郡山如寶寺觀音を建保七年虎丸が建立なりといふ說あれば夫を取りたるなるべし

名所詮にいへらく此長者義家朝臣の宿を請れしかども許し參らせざりければ燒討し給ひしと云々續諸國里人談菊圃采山には長者宮に長者ありて安倍貞任に與して義家朝臣のために燒れたり云々

義鳴いへらくかくとり〳〵にて例の定かならねども郡山杉田ともに其舊地なること歷然として杉田には礎の石さへ殘りて折々には玉つかへに用ひたらんとおもはるゝ管玉をも得たる事あり且は土中より燒米を得る事とありて大家の住た

るはうたがひなしさて年代の一ならぬはさる豪族の一代に限るにあらざめればこは代々つゝきて虎丸と稱したらんをもておもへば人名にはあらで殿舍の名也といふ説あたれるやう也又享和の頃杉田の古跡長者宮の畑中より金の印を得しことありそは



令に鄕印一寸とあるに大凡かなへり

如此して印文また明かならず里人談集にこは行字にて濱守邦印いふ然は長者の名と見ゆとあり田間漫錄には濱守繼なるべし繼の字然に作るは古體也常陸大掾國香の頃同國に濱豊後守といふものあり其後裔の此地に來りしなるべしとあり一説には鎭守府印ともいひ搜古に繼守印なるべし讀記に繼守等十三人賜安積臣以進軍粮也といふ事もあれば長者といへるも宜也とあり何れにや知りがたけれど濱守繼とよまんには字形に於ては允當なるべけれど其人明からならず繼守とよまんは正據ありて長者の名もふさはしけれど然の字はいかによむべきにや但こは假名のれと見たるにやとにかくに舊記に乏しければかゝる大方其實を得る事やすからずいかにをしき事ならずや義鳴此頃續日本後記を見に承和十年四月の條に陸奥鎭守府將軍從五位下明春朝臣濱主之とあり是もてたま〳〵おもへらく此印文も濱守の印にて則濱主の民族のこゝに住たるが用ひたるにはあらざるか（道風朝臣又は遠勢頭抔の法帖をみるに假字にても今の字に一此印を鑄たるは弘法のいろは作りたるかめづらしき程の事にて殊更にかなに書し且は誰某の印と之文字を入るゝは和漢通例なるをもしかゝらんには虎丸長者とは其系別なりけれど近説にありて共に當時の豪家なるまゝ嫁娶の太抔より遂に一族とはなりたるらんされど一顆の古印一枚の腐朽もて所證とせんはいとも好まざる筋なればしひてはいはず

文學

親盛

齋藤氏清三郎と號す最上の家にありて修理太夫家

親に昵近して諱の字給はりて親盛とは稱すといへり子秋盛喜泉は　萬治二年慈明公に仕奉る或書にいはく親盛及び秋盛も倶に孫吳の學に志深く親盛年若かりしより笈を負て四方に遊學しみづから抄錄する所の書數百卷今に子孫に傳けるとなり其後葉某彌兵衛に懇請して可笑記と題する書を閲する事を得たり其他未見其書のおもひき子孫の訓誨を旨とし神にまれ儒にまれ佛にまれ人に益ある無斷をあげて自己の見解を交ておもしろく書たるもの後世生學者の臆見誦末を論じて人を敎ふるものと日を同じうして語るべきにあらずさて其序に寛永十二年孟陽韓東海旅泊身如儡子綴草とありされども本文には正保以來の事もまじりたれば寛永十二年に筆を起してやう〳〵卷をなしたるならん（ある書に見えたる如く四方遊學の折見聞に隨而書たるものなるべし但跋には寛永六年の秋の心に思ひ初て拙き詞をつゞり初めかながきの女卷十册となりたるも其志ありかほ也云々萬治庚子孟陽中韓武心士峯居士跋書少く卷成りたるより漸々に出たるが拾卷とはなりたるらん）○親盛の父廣盛に最上家にありしが其家淨論の事起りて國除かれし後越後に赴き土井利勝に招れ其家にありて死し親盛は秋盛と共に本藩に來り後病を以て死す其墓は猶神藏寺にあり

希　蕓

岩井田氏字は子徽屠龍癯仙等の號あり俗稱舍人致仕して昨非と呼ぶ下野國人なりしが享保十九年八月儒業をもて天嶽公に召され司郡に擧られ又司元世子傅に累進し寶曆五年三月十四日五十七歲（或は六十）にて死す著はす所

甑嶽藏餘（詩文集）　四壽途說　大學和解

驛燈隨筆（松島紀行）

此外いまだしらず隨筆に此人の師東都秘書監桂山義樹君華文の序あり曰く巖子希夷穀於山東高才好奇其出之不翅亡也則庸人俗士所渠守者一蹴而盡之讀書涉藝必極秘藏云々此詞則此人の一二を知るに足るべし

建　達

木代氏通稱定右衛門竹禎虎嘯堂の號あり寶曆七年七月十七日死す著す處

仙道表鑑　霞城便覽　安達詣　東野俗讀義

双安勝志重編　小杉軍志奥書（作者未明けたし此人なるべし）

實　備

澤崎氏俗稱金左衛門致仕して朝倉霜臺と號し樂軒

と號す先鋒の隊將より御旗奉行にすゝみ安永八年八月二十四日六十六歳にして死す著す所

陸奥國史　國郡舊主記　補闕本朝錄　金華抄

久　敬

篠澤字子交通稱嘉藤太致仕して富納翁と號す縣令より市郡の正に轉し文化二年十月九日六十四歳にて死す著す所

富翁雜話　同雜記　五雜俎考　尚書考　論語考　國語考　武敎雜考　公案便識

此外稿を脫せざるもの若干士由いへらく此頭此翁の雜話を見るに其引し品正史實錄に論なし和漢の雜書稗史に至り世の事に益あるは上抄し且論ず其說皆活潑多く我より古を察して更に腐儒の見に出るものなし實に當世隨筆の冠たるもの也惜らくは梓してもて世に公にせざる事をといへり義鳴もまた此雜話に於てはしかいふ其外また目擊せざれば許すによしなし

賴　直

成田氏字伯溫俗に彌義右衞門と稱し致仕して嶋友鷗と號す確齋又遊藝堂の諸號あり郡山より市正司元府君を經て天保四年四月七十四歳にて死す著す處

東鑑要目類聚考　遊藝堂筆記　同次集　同續集　同三集　松藩輿志　同搜古　館基考　田間漫錄

曾て賴山陽井四明廣瀨象齋（松平樂翁公の儒官）小宮山楓軒（水府の市正）の名家に書通し交情舊識の如し類聚考の如きは樂翁侯見給ひて其說の美にして盡せるを感じ侍臣して模寫せしめ長く官庫に藏せらるゝよし象齋此書の跋を書たりこゝをもて其名世にしらる

易　學

利　容

上田氏俗名孫太夫復軒と號す（殷易を復するが故なりとぞ）近習の臣に列る事拾有餘年致仕して老を養ひ天明八年十月十三日齡六十八歳にて死す士由か殷易確斷卷の五にいふ殷易中興の祖復軒翁の事蹟略考ふるに頗る奇異高尙にして人意の表に出たる處なし鈴木右記老人云復軒翁少なりし時始て字彙を閱す一字の說を記憶すれば裂て咀みのち食ふ終に字彙一部喰ひ畢に至る又好で老子をよみ新古の註を點け刻苦して自ら義を下す事多かれど皆古人の糟糠を嘗ず

べて書典をよむに力めて古人の誤謬を訂し其語の錯亂轉倒を正すにあり異才といふべし故に易の如きも安藤重滿のいふ平生端座して唯前に一卦を畫し熟視沈吟する事數日意に得る所あれば他卦に易ふ又殷易の諸圖許多メメ木を觀るあらざれば成す事あたはず翁はメメ木を用ず只胸臆のうちにして立成すといへり著はす所

殷易素考　互卦圖（此二部既に刊行す）　天吉葛　國音符考

老子偶考

此外子孫訓誨の書多し今其子孫に傳ふといへり下略とみゆ井上金峨東遊の後都下に歸りて二本松にて一の奇人を見しとしば〳〵人にかたりしは此翁の事也とぞ索考の如きは寺坂の書林某が元に其板ありて其道を信ずるもの頗る多しとぞ士由もまた翁の子利愛より其術を傳て奥蘊を探りしより確斷をあらはして其餘を推たる也けり

數學

吉德

磯村氏俗に文藏と稱す初め鍋島孫平太が家人にて算法を吉田三好に學びのち一家をなして磯村流と稱す萬治元年七月慈明公に侍奉り作事及び賦役の奉行等を經て寶永五年致仕し同七年十二月死す著す所

算法闕疑抄（貞享元年上梓す）　小闕物語　東鄙草

東鄙草は東都より松島迄の紀行也其說猥雜也といへども義鳴其强識に服す○此人萬治年中公命を通して西嶽の淨泉（俗に大水門と云）を府下に呼ぶ水道二里ばかりの間に山星鋪して庸人の企べからざるを此人より其他はかり水勢にしたがひ或は西し或は東し遂に府下に達する事を得たりもと水勢にからかふ事なきが故に百年の今に至りて水道のそこなふ事なく數村の水田も皆其澤を受て實に大なる績ならずや序に錄して後に傳ふ

近頃死したる渡邊治右衞門藩士といふ人あり最上流の算術を會田某算右衞門に學びて其名一世に高し彼の塾生にては一門人と稱して俗名をもて著す寫算法書あり義鳴見し事ありしが標題をわすれたり後に錄すべし

諸禮

實長

星野氏俗に忠兵衛と稱す是則武藝小傳に所載星野味庵が子也（味庵代々會津芦名家につかへのち蒲生氏に從ふ）味庵會津にありし時小笠原大膳太夫長時を己が家に請うて參らせたる折長時朝臣其熱志を愛して其家の禮式秘訣のこりなく味庵に授らる（味庵のち蒲生忠郷朝臣に從て江戸に赴きし時小笠原秀政が見參し長崎より授かりし秘訣等かへし參らせんと申さるゝにも故ありて其事果さゞる內秀政御父子大阪の役にて討死ありしかば其上は其まゝ味庵が家に傳へしとなん）寛永十二年傑俊公に仕奉り慶長四年五月致仕し承應二年十月十一日死す子孫今猶本藩にありて其書をつたふ

醫學

說夫

遠藤氏俗稱雲澤寛永元年十二月醫業をもて大洞公に仕奉る著す所

麻疹一哈　刊本

其病の流行する時には今猶都下の書林此書をひさぎて世に行はるゝといへり

伯敬

中野氏元興と通號す雄峯公の側醫たり著す所

醫言漫錄　刊本

俳人

尙我

日野氏平五郎と通名す元祿三年故ありて番頭の職をすべり道輝と號し風流の道に從事すわきて俳諧を好みて文車と稱し百花堂と扁す著す所

花藪（ハナカヤブ）

とは白炭の忠知按翁季吟嵐雪其角を始として我封內の俳人又は自分の句をも撰びて元祿八年二月上木す自句の中目にとゞまりしは

若菜

若菜つむ都女や雪蹈かけ

白魚

白魚や瀝あけたる京のみつ

蝶

雨の日や一枚になる蝶のはね

初のまゝならぬ方をおしはかる

花の山幕にかけたる袴あり

人は花みる我は其花みる人を見やりて

かつき行櫻のあゆむ木の間かな

新　樹

蜘の圍にほくれかねたる若葉かな

百　合

袖ふれて染るは憎し百合の藥

早　苗

束ねてそ投る早苗のすはりやう

納　涼

鼻聲になるまてすゝむ河邊哉

封内の人々は

二本松

鑑水　籠義　梅月　倫笑　一八　如毛　包抄

泉壺　八角　嘉林　惟底　文下　泰水　車牛

一狂子永知　白蟻　林元　被髦　九雪　友春

古牛　蟻髭　秋夕　一雨　其柳　東水　夢水

文八　我笑　梅流　塵言　如醉　之也　玉泉

庵月氏澤　少加　文下妻

郡　山

闇夕　雪窓

日和田

等芳

日出山

一葉

○此書は四季上下二巻としたるものと見ゆれば闕本となりていまだ下巻を見ずうらむべし

好　書

敏　義

渡邊氏字處天俗名岡右衛門と稱す致仕ののち樂坊と號したり大日付より郡代を經て文化年中七十餘歳にて死す霞城新語に云處天有書僻嗜直藩府因書師蛇足山水圖展卷數四嘆曰直名手也已就寢中夜忽起採蠟觀之不復覺達且云々今時稀に其手を存す書工鬻涯下野人評して大家堂の氣韻ありといへり

新語に此人政事と德行の美事をあげたりしか不抄其他同書所載數十人またはぶきつ

武　技

高　就或は後に豫詮とあらためしといふ

大橋氏常の名を長藏と申す　何國の人なりやしらず或は尾州の産也ともいへり是を大橋長右衛門と呼て書名有今も江府にて大橋流と稱するは此人を祖とする也とぞ高就また書をよくし品格氣類舍兄にまさりしかども射藝に蔽はれて其名聞えずといへり　本性弓射る事を好みて糟谷武成とともに宮崎旅七郎に學び後には伴道雪を師として皆とも高弟の弟子也さるをもて年いまだ二十一歲といふに伊豫の國守蒲生秀行　初會津の城主に召されて五百石の祿給はりしとなんさて寬永年中三度迄京師なる蓮華書院にて數條の矢を射通しければ世に大射手と稱して其名天が下にしられたり　是皆廿六歲以前の事也と○武藝小傳曰大橋長藏某が二十六人調堂前大射手或は稱京人云々　蒲生氏の亡びし後は都に出て射術を敎ふるを業としてありけるを慈明公其美名を聞し召されしと彼につきて學び給はんとて承應二年五月十日といふに櫻田なる御館の內に召呼れて十五間の候道（ヤミチ）に八寸の的を掛て其技を試み給はんとす高就從容として是を射るに甲矢をそこねて乙矢をたゝ中に射あてたり公猶あきたらずおぼされて御前に侍る桑原景次にはかり給て武庫に秘おかれし飛可　外國人ともいふものゝ削たる强弓をとり出て見せ給ふ　とは藤堂高虎朝鮮に得て先公に贈れしものなり　高就つら〳〵打見てこは二なき寶にてはべり但舊主蒲生氏の持給ひし飛備の弓と大かた似たり蓋其徒飛可の削る處なるべしと申き景次答てまことしか也此弓背戻してあたし人は弦をだにはきかねつれば今足下にてものせさせ給はんとおほさるゝ也といへり高就固くいなみて人々の能し給はざるをおのれまたせんすべなしとてうけひかざりしを强てせめたりければさらばとて柱にもたせて事もなげに弦たゞけて空引（スビキ）する事三度なりしかば人々稱嘆やまざりけりとなん公ます〳〵したひおぼして五百石の祿給はりて遂に從下に召給へり是におきて諸士其門に就て學ぶものいと多し一日諸士をして鐵板を射さしめ給ふに是を穿つもの一人だもあらざりければ公御心よからして高就を呼て射の軍旅に益なき事かばかりにやと問せ給ふ高就かしこみて是は射

の罪に候はず其術のまだしければなりと答奉るさらば汝射て見よと仰ければ高就則多が中にもいとよわ弓とりて射たりけるに羽を呑ばかり射ぬきしとぞ（此外妙ありし事こゝにはぶきつ）是より寵遇もいよ〳〵厚かりしを萬治元年九月二十三日病にかゝり身まかりぬ今年五十二歳（或は五十八歳にて寛文四年五月四日に死したりとも）妙法山蓮華寺に葬り日健と號す子なければ家絶たり傳ていへらく墓の側に大石ありしに日健の二字をゑりて標とし門人折々塵きよめして其祭も怠る事なかりしを年ふるまゝに其人々もやう〳〵世になくなりて遂に其墓を知ものもなく天明二年ある人の墓碑つくせりし時石工より心なく其石を碎取りたる處より墓も知られずなりしとぞ（其事跡の湮滅せん事をかなしみ儒者三谷氏同志の人と力を合して其碑をたてんとて此頃碑銘を撰たるを異譯して兒童のたよりとす）

貞家

村越氏久太夫と稱す御弓箭の事を司り貞享元年十一月二十一日死す強弓の手たれ也或時備前松平伊豫守樣へ御振廻にて御出被成候處御馳走に御家來へ的をと仰付被召連候御家中之內好の者有候はゝ可被仰付哉之旨御挨拶御座候よし幸ひ其日村越久太夫御供仕候間此ものを指被仰出候處弓矢御手に合候を御用ひられ候とて數挺出しそ久太夫素引致候ていづれもよわく拙て手に合不申射料と弓矢取寄致旨申けるに人を遣し取寄候處モツコ棒と名付候強弓持參り是にて射申し候處流石備前の御家中衆も膽を潰し候由久太夫は無類の強弓にて矢の篦は筒竹ほど御座候右之モツコ棒竝矢も御家中に今以所持のもの御座候至而不調法なる田舍まく旨申傳候（雄藩雜話）

義鳴いへらく畚棒とは弓銘にあらず久太夫歿後此弓或家傳はりしを其家の前庭へ山を築んとて土を入て運びたる折試に其弓もて擔たるに少しも撓む事なく枴の料に堪たりしとなん是より字して畚棒と名付たりと聞へしさもあるべし此外

水門にて蝮蛇を射たる話抔くさ〴〵あれどもは
ぶきつ

重　明

根來氏八九郎と通稱す伊藤忠世の門に遊びて一刀流の達人武藝小傳忠世の傳に有根來八九郎重明は忠雄之弟而目從忠也得其宗始仕二本松侍從丹羽長次後致仕改名獨身大鳴天和二壬戌年八月十八日享年七十有八而死云々とある是也さて本藩の書に見えたるは重明は累代の先祖紀伊國住人父を右京重賢といひ兄を平右衞門忠雄弟を與右衞門某將軍家慶下の與力衆なりといふ兄弟伊藤忠世に就て學ぶ事年を重ねしかば先師の印可悉く授られ添くも右大臣家家光公忠雄及び重明の兵法御覽に備ふべきよし仰下されしに幾ほどもなく隱れさせ給ひしかば其事は止にけり此後忠雄は甲府殿に召仕はれ重明は萬治元年九月慈明公に仕參らせ公の御師範として兵法を傳奉りしかば御信敬淺からず恩遇竝ぶ人なしかくて重明寬文三年の頃致仕して再び江府に住すれど元の如く御師範に召され月俸數多給はりぬ此時名をも改て獨身と號し名譽ます〴〵盛にして履を取て隨ふもの尤少からず修練の功積しのち其心を取て其形を變し古流に紛れざらん樣に一家の刀法を草創して天心獨明流俗に新流といふ名づけ此流今に諸州に分傳て美名を千歲に輝し古今獨歩の人なりき年積て六十一歲天和二年八月十八日病に依て空くなる其子八九郎重次箕裘の業を繼ぎ龜井龜右衞門と申て久世廣之大和守が許にあり貞享三年十月其業を以て興國公に仕參らせ正德三年十二月十九日六十二歲にて死す云々とありされば重明は慈明公に仕奉り子の重次は興國院長矢に奉仕せし也武藝小傳は□して誤りし也○數代ののち根來傳右衞門の弟子に門馬市右衞門といひしものあり藩に付て徒士衆たり故ありて退糧し江都に住し松川新右衞門と更名す此人本藩にありし時當流の劒法を尊信して

其術を學ばんと欲すれども志し猶ひるまずして毎日道場の外にイて擊刀の音を聞く事一月餘也かくて傳右衞門其志の熱切なるをあはれみ遂にゆるして弟子とす市右衞門大に悅び細身粉骨是を學ぶこと歲ありて小太刀の術を授らる平右術門こゝに至つて我劒法是にて足りぬべしとてやみたりとぞ書は飯田義右衞門に學びて本目流の能書也しといふ此人東都にて永澤源右衞門といへるものと爭論のあまり源右衞門を殺害し其身も腹切て死す其時の遺狀今猶根來家に秘藏するを見るまゝこゝに附す其文左の如し

望死期啓上仕候倍御安全被成御座候段兼而承知仕珍重之義奉存候就者私義去る十五日之夜口論申むすび無禮之詮義申募互に拔合勝負を爭し處私得勝利薄手一ケ所も不負帷子の裾へ少々所々米粒程ののり付候而已にて存分に勝申候先方は町同心松平壹岐守殿御組永澤源右衞門と申鈴木流と申劍術者尤剛力自慢之荒者に而御座候中々私抔生得の器量にて得勝利可申とは不被存候事に御座候處數年得指南候小太刀此度用立候私者一尺五寸之小脇指先者二尺三寸の大脇指にて切むすひたが申しを中々打合不申私は小太刀の拂ひを仕候時の樣に兩手をぶらさげつか〳〵と參候處先より陰に待右之大脇指を直に打込參候を一足すかし候得ば向の太刀行過候を踏込先之左之首と存打込候へば耳脇より左へかけ先し右之口脇迄切込候而引退候へば夫よりめつたなぐりになぐりかゝり候間位を見引退き候が間有之候ては人見付候ては如何と存立留候ば又々打込申候又前之通り引はづし此度は先の右の方より首と存ほんかくより切る樣に打拂候得ば倒れ申候間私はき居候足駄を取り面へ打付候得ば太刀を放し踏張申候間とゞめをさし立上候得ば後に士立罷在拙者兩の手を取候間もちはなし是又肩先

よりあばらへ掛打拂夫より立退候處一家共へ御かゝり候故不及是非今晩右之場所へ私方より罷出切腹仕候始終致方町奉行へ書置等遠州樣御かゝり候間手傳を以御寫取御一覽可被下候少も卑怯なる働き不仕候扨て御蔭故武士の面目と申大悅不過之候常は御無沙汰のみ仕罷在候へ共最早今晩に限候命故右荒增爲御知御暇乞ながらと存一箇指上申候無調法を働御無沙汰仕候得共乍憚御師弟にて御座候間八月十八日思召被出候はゞ御回向奉願候

一乍憚齋藤半人殿丹羽今右衞門中村彌平太殿林彥之丞殿高橋次郎右衞門殿松井彥之丞殿黑川市右衞門殿丹羽小太郎殿澤井新兵衞殿渡邊治右衞門殿右之御方は私共御地に罷在候節何れも御不便被有被下候條御序に御暇乞被仰渡可被下候右之內別紙を以申上候御方多御座候得共最早晝七時に及候へば暮時切腹と存候故心いそがしく相成候故貴君樣乍憚願奉上候

おろかなる口よりして御はづかしく候へ共心指迄に

おのづから散るも嵐にちるも花

跡はいろなき昔なりけり

染て入る御法の舟の水清く

むくひも罪も跡はしらなみ

生も不生死も不死善も不善惡も不惡

生死は只空花水月の如し非可驚非可斂斂上成佛心得て可也

右之仕合具なるは町奉行へ上候書付具に御座候定て飯田義右衞門抔遠州御用人に弟子も御座候間寫取一箇見可申候間御覽可被下候夫共に出申間敷被存得候共老父へ御かゝり被參候間罷出申傳の道と存候へば少も苦心と不存候働之節私落付候樣子小太刀の取廻懸御目度候へき是のみ心外に奉存候

恐惶謹言

九月十八日　　門馬市右衛門事
松川新右衛門

傳右衛門樣　名は保眞實暦四年家を繼天明七年に死す本文は此人の時也といへり

段之介樣　系圖に見えず保眞の兄に傳八郎といふ人あり其幼名あり

八之進樣　名は保政實は保眞の嫡也養嗣とす

拜上

某

猪目氏小七郎と稱す或書に云ふ小七郎は猪目與次右衛門某と申が子也與次右衛門は陸奥國仙臺の人移りて松府に住し馬を馭する事を以業とす小七郎いとけなきより此業を嗜み志學の比ほひ會津に住せし此道の名譽四方にかゞやき笹輪平太夫といへる人に就て奥旨を極め又當時馭法の達人ありと聞は遠近を論ぜず寒暑をいとはず行て隨學ぶ事年を重ねしかば遂に不測の妙法をさとり名譽四隣に隱なく來り學ぶもの多かりき泰雲公の御時召仕はれしが元より行ひ恣にしてさせる恩賞にもあづからず縻の月俸給はりて過しかば長男今泉丈助貞景は

今泉利右衛門馭者が家を繼せけりとあり義鳴いへらく此人死に臨で卒然と立上り子の貞景を呼手綱をもたせ其端をしかと引て貞景是こゝ也といひて息絶しとぞ彼の東都愛宕の石階を乘上げて馭法の譽をあらはしたる八郎右衛門丹羽氏といひしは則此人の弟子なりしとかや八郎右衛門或書に見えたるは

八郎右衛門源昌明は庄兵衛太夫重明が三男也貞享四年十月新に所領を給ひ中略寶永元年十二月長柄奉行になり伊東流槍術の師範を仰蒙る享保元年三月先鋒の隊將にすゝみ同十七年罪有て職を奪はれ寛保二年五月十九日七十七歳にして死す此人武術に達せしのみならず馭法にも凡慮の不及名譽世にかくれなかりき嚴松公東叡山防火仰蒙らせ給ひし時山のあたり失火あり公も御馬出させ給ひしに道路塞りて通うせ給ふ事叶べからず其時昌明を召して此より防火の官吏に火事

場見廻り告よと仰ければ昌明頓て馬乘出し大勢の中を推分〳〵進む程に三枚橋（山下にあり）焼落ぬさて纒（人數の目印也）を自ら荷ひ一鞭當てゑいやと飛越官吏にかくと告申たりき官吏の衆驚き三枚橋焼落たるにいかゞして是迄は來りけると尋ねしに馬にて飛越したりと申ければ感ずる事淺からず將軍家の耳に達すべし姓名を誰ぞと申ぞと問はれしに昌明姓名を名乘りてこそは歸りけれ云々

義鳴いへらく猪目氏は泰雲公の御時召仕はれしと云に此人夫より先巖松公（泰雲公の御父）の時此事ありしをもてみれば猪目氏の弟子なりといふは口碑の誤りにや返て考ふるに昌明寛保二年七十七にて死したらんには寛文九年の生にて泰雲公の御家督ありし元祿十四年は昌明三十三歳の時なれば夫より後猶猪目氏に及ばざるをもて從ひ學びたる故始より弟子の如く世にいひしなるべし（案に昌明は元祿二年廿一歳にて御小姓に召出され同四年より六年迄御帳著の事をかねたる人也されば本文の事ありしは巖松公に從奉して東部に在りし時の事にて則此二役にありし折なるべし廿一歳より廿六歳迄の内なる事しられたり實に當世の名取といふべし）

相生集　卷之第十六稿　終

相生集　卷之第十七稿目錄

人物類

曉勇
三勇士　附城田政闌　城田喜成
怪力
銀右衛門
義勇
賴之
孝子
喜兵衛
貞婦
阿波留
奇人
貞柳　某　附安齋元喜
すべて拾貳人

風俗類

吾妻結　カサトリ　まさる風車
招簡　雫　染千盃
我都美葺　追虫　三束稻
墨面　播梁僧　夷田
福内鬼外　河東不架矼　尿　蛙
鞦　遷　帝晴娘
すへて拾八事　以上此冊に載たり

相生集　卷之第十七稿

外史　大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

人物類

驍勇

某

安井氏要五郎といふ泰雲公の時三勇士と稱せし一人也三勇とは安田源太兵衛依包源兵衛安井要五郎也共に水魚の交を結びて飛道具だになからんには府城の四門（追手搦手松尾西谷）三人守り固めて敵をば通さじと誇あひけるとなん要五郎は二男なりければ御家を出て松平隱岐侯に仕へて徒士衆たり元より骨柄逞しかりければ侯も賴もしうおもはれけるにや寵愛の侍童に要五郎をつけおかれけるある日其侍童を伴ひて彼所其所打めぐりたるに人立いとしげきにまぎれて侍童を見失ひたり要五郎いたく悔憤りて侯に申て百日をかぎり侍童を尋出んとて其家出けるが神明に丹誠して百日が程に侍童を尋得ることなからんには神明を汚奉るべしと誓ひて昨日は東今日は西日に〳〵其方替て尋しかど更に行方のしれざりけるに或日芝日蔭町なる骨董肆にて侍童が公より給はりて常に持たりし印籠を見つけたり要五郎おもひけらく是はまさしく惡ものゝ侍童を殺して衣服や何や奪ひ取りたるを賣たるならん今はかひなき事也とおもひながらなげかれありし折目黑不動の院地にて舊友（隱岐侯の藩士）に行逢たり其人たま〳〵土地のものと爭論を仕出し死力を盡くして戰ひしかど多勢のために打倒されほと〳〵危かりければ要五郎ふり捨て行かんは義にあらずと手にあふかぎり切ふせたり其事大かたならざれば市の正よりそくばくの捕手指向られ要五郎を搦んとす要五郎猶ひるまず狂虎怒獅の勢していたく戰ければさすがの多勢も近よりがたくやおもひつらん竹もて作りたる楷子を要五郎の首にかけて押倒さんとて人あまた取つきたるを要五郎呵々と笑ひながら其楷子取て打ふるに取付たるものどもはいはゆる將棊倒れに倒れけるとなんかくて時うつるばか

り戦ひしかど終に要五郎を捕へ得ずいひかひもなく逃失しかば捕手をのがれたるはさきに倒されたる舊此人壹人なりしとぞ友を助け起し脊に負て山のあたりまで逃のびたるに今はやすしとて息つきて刀を納めんとするに激戦の折鋒三四寸折れたり要五郎大に驚き其まゝに打捨置かんは丈夫の恥る所也こゝは彼所と數里を隔てたるに日さへも暮たれば追手の來らん心づかひはあるべからずと舊友を置てふたゝび目黒に至りて鋒を求め得て舊友は事なく藩に伴ひかへりしとなんしかりし後も彼の侍童を尋ねしかどえあはざりければ今は是迄也と誓し如く神樂堂にて腹切て腸をそこゝに打ちらして死したりとぞ彼地に神樂堂のすたれしは此時より藩の城田喜成といひしは要五郎とわの事なりしとぞ けて親かりしが折しも江戸にありてはやう此事を聞しかば息ある内にとてあえぎ〳〵行たるに三島町あたりにも其うめく聲の聞えたれど其地に行つきたる折は息絶てかひなかりしとなん喜成が二男常敞は篠澤家を嗣たるゆかりによりて此事のあらましも篠澤家につたはりしなり友人忠敬のかたりしなり　さて安田と依包とはあらはれたる手柄なけれど要五郎にくらべては力も業も立まさりたる人なりしといへば其の

強勇はおもひやるべし實に本朝の義秀金時漢土の張飛樊噲にもおさ〳〵おとるまじき勇士となんありけり昇平の御代にあひたるは此人にして中々なる不幸なるべし○因にいふ或人の筆記に城太夫初は源右衛門といふ隱居して喜成と稱す勇猛の人にて正德元年九月一書に七月とあるは公命ありし後也とぞ朝鮮聘使來朝の節も選人にて次男ながら御使蒙りぬこれは各國の諸侯に命じて骨柄よきを選び給ひし也とぞ其美名人の知る處なり所帶の短長刀人を斬殺さざれば快とせず故に人をきる百幾人といふを知らず刀劒を試るために鍬を懐にして郭外山寺に至り新葬の死骨を發堀し試物にせしに行逢ふ人鍬を懐にしてゐるを心付かざりしといふ獨身にて六丁屋敷に居りし時公事により歸り召仕の僕に食の遲きを責めて奥に入りしに僕持たる擂木にて背より敲まねせしに日影の差入たるに影りて見えければ反顧して指たる刀石堂是一の作にて擂木かけて大袈裟に切て落すとみしが僕は疾走し出けるに驚きあとより追掛たりしに園に躓て多段となりしとぞ此外奇談多し云々と見ゆ案に喜成が父源五右衛門政闌は將軍家の御家人城田仁兵衛成久が事也政闌年頃

稲富伊賀入道が砲術を得其譽れ隠れなかりしかば承應二年六月慈眼公に召されて祿給はりし人也

怪力

銀右衛門

小林氏作事方の賤吏たり膂力五六人を兼ね長次公の天和三年の事也とか二荒山の神廟修補の課役を蒙らせ給ひし時江口正倫等を遣さる其折正倫此銀右衛門を奉行したりさて銀右衛門重さ数十斤の俗にいふ鐵手木といふものを持行たるに各國の諸侯も同じ役を奉りて夫々の官吏あまたつどひたるに其鐵手木を見て爪はじきして丹羽侯には何の料にし給ふらんかゝる具をもちて擧動するものやはあるまことに無用の長物所謂鬼着板といふものなりと笑けりしがいふごとく此具を用ふべき折なく徒に數日を送りたるにとある方に打かさなりたる大石ありて我衆吏是を除かんとてとさまかくさまかたらひはかるを聞て銀右衛門小踊してかかる折の料にぞと彼の鐵手木を輕げに引提力を極めて打たりけるにさしも巍々たる大磐石はたやすく碎けたり其音谷にひゞき山につたへて百千の霹雷の落たらんやうにて群りし人々耳をふさぎて驚き走りしとなんさて碎たる石を多の人して荷ひもて退けゝればいたく人力を勞さずして其事成しとかやされば始め罵り笑し人も只あきれにあきれて彼人は悪鬼にやあらん羅刹にやあらんあはれ丹羽侯にはいとよき力士持給ふとて今はとり〳〵にほめたゝへしとぞ今猶其具作る方につたはりあるを究竟の若者は折にふれて試るに三四人ならでは動し得ずといへり此外本町谷茶亭御修築の折にも手柄ありし事聞たれどもはぶきぬ

義勇

頼之

高玉氏浦右衛門と稱す天正年中伊達家と戰て死したる高玉太郎右衛門常頼が玄孫にて則本邑に住す遊藝堂筆記にいへらく延寶九年の夏佐々木喜三郎殿堀源兵衛殿保田甚兵衛殿飯田傳右衛門殿御巡見として封内巡行ありて喜三郎殿苗代田の長右衛門が宅に宿られし砌頼之いまだ十二三歳にて酌取り

に出しを喜三郎殿所望致され小姓にして江戸へ携られける其後喜三郎殿秋山十兵衛といへる御旗本と意趣ありて（將軍家の御養女松姫君御迎の爭にて喧嘩なりといふ）打果されし時（元祿十一年四月四日）浦右衛門も供して廣小路十兵衛宅へ切入秋山家來數人の爲深手負主人深手に罷在候此處へ駈入喜三郎を肩にかけ秋山屋敷を退き久保町松平甚三郎屋敷へ相越し其趣申述べ其身も深手にて遂に死去す（時に年三十八歳）其時長右衛門が先祖へ贈りたる一通の書札あり勇敢義烈紙上にあらはれて覺ゆ

旦那義不意に同役と被及口論今日果に被參私幼少之節よりみなしみ故知らせ被申上候儀天道に相叶大慶仕候赦免無之候得共志難供仕候無是非仕合御察可被下吉之助義高端奉願候則大國吉之助方へ遣し候借金も御座候へ共拂ふ事切米取候金貳兩三分有之候是に道具して替きよ有給候富岡平兵衛堀源兵衛佐藤二郎兵衛佐藤仲右衛門賴置し御殘多得候具に可得御意候へ共急に承候間無之候間早々申殘候首尾能供仕度急願此事に候恐惶謹言

四月四日　　高玉浦右衛門賴之花押

伊藤勘右衛門樣

同　長右衛門樣

同　與市樣

此浦右衛門が墓は駒込吉祥寺にありといふ

孝子

喜兵衛

小濱村の土民水野世以氏とす御年譜長次公の元祿十三年秋七月の條に小濱の里に土民水野喜兵衛といふものあり質直に父母に仕て至孝也聖賢の教は聞事なけれども父母の志を養ふを本として其孝心倭漢の二十四孝にも敢て恥る事なしと人は感ずれば面をあからめて父母に孝行の覺なしと大息して涙をこぼしぬ其始は貧しかりき壯年の頃より家富て貧賤孤獨をあはれみ救ふ事世人の所知也是等の趣大隱君（慈明公也）御聞に達し六月十六日御前に召出され御感ありて面をあげよ顏色を御覽あらんとの給ひ且黃金を賜はり御次にて酒給ひさせよと仰あり誠に古今稀有の御仁慈也美肴を調ひ御酒を給はり

難有さのあまり涙拭へあへず御殿を退きぬ父が一周忌に當り家に歸りて此事を父母の靈に告て天を仰ぎ地に俯し哭泣悲痛食をわすれ心の如く追善を終りぬと

貞婦

阿波留

鹽澤村の農夫長三郎といふものゝ婦也此頃其傳を得しまゝこゝに錄す

農婦波留傳

波留は奥州安達郡鹽澤村大蛇沼といへる處の農民長三郎が婦也長三郎正德五年の頃より眼を病て瞽となり就中六七年以來癩病の樣に煩彌々廢人となりて稼穡もならざりし故生產日々に窘しく母妻子をはこくみかたくなり行ければ或時長三郎波留へいひけるは獨りある母年老我惡疾にあへり汝年いまだ壯りなれば緣を切て行て一生の生產をなすべしさあらば稚子はいづかたへなりとも遣し持參りし田地をうりて老母を養の助とし我は如何樣ともなりなんと語りければ波留答ていへるは我此家に來りて只に此難儀にあへるも又前世の宿業たるべし然るに夫の言に任せて我去なば老母七十に及給へる人なれば誰か又朝夕をも營なん我今の如くなりなは夫はいふに及ばず老母も心易し稚子も長なりて父祖以來つたべし田地もゆづりあたふべしさなくして田地を失はん事いと悔しき事なるべし我いまだ三十にも及ばざれば女の身なりとも自ら艱難辛苦して產業に精力を盡さばなどか一家を育ざる事あるべからず必ず憂給ふべからずと云て終に其言に從はず又親族をはじめ近隣の者迄も彼が貧窮せるを見て田地を賣却して一日を送らん事をすゝむといへどもいくへにも本意ならぬ事を說て肯はず然はあれど持參りし田畑六石餘あれば壹人して作る事ならず元より貧しければ人傭するも叶はざりければ二ツに分て其半は人に借し其半を殘し置ぬ扨て夙に起て食事を調男子の粧に改め終日耕耘種獲し夜も又月を帶て畑をかへし其力作他に異し故賦課等は滯る事なけれども尙衣食足らざりしかば農業の暇には山林に入て自ら斧を取り木を伐りて薪となし置き日毎に其薪を馬に負せて稚子

に牽せ其身も荷ひあるき又獨活わらび木の芽馬草など取て郭内市廛に來りて是をうり其價を以て米或は穀物の助となるべき品をもとめかへり姑夫の飢ざる樣にいとなみ又は茶酒抔買ひ來りて是をすゝめて其喜を盡しぬすべて一年の過る間一日として自分休居る事なく雨を冒し雪を踏て艱苦を受るを憂とせず夫は人に惡み嫌はるゝ疾也けれども昔にかはらぬ情を通し姑をもいと念ろに孝養して安々と暮居らしむ扨商に出し折も波留が勤をしれるものは其志を感じ薪の價彼がいへるまゝにもとめ又米錢食物抔あたへぬれば悦かへりてのちは其家に再來りて商ふことをせず特に情あつかりし人へは木の芽抔持參禮を述其かへり事も聞かずして速に去りぬ又女の身として耕作することを憐て奴僕を遣し其勞を助くる人あれば何となく取置し薪を負せ返しぬ是等の事は皆所以なくして人の惠をうけん事をはゞかる心なるべし如此の勤同し時里の者はいふに及ばず隣境の人まで皆見及びし事故其村吏和田又右衞門享保の十二年丁未のとし波留が數年のおこたらぬ勤を具に記說して申上ければ上にも殊勝なる志をほめんと思召て同二月廿九日役所へ波留を召して其勤を褒美し米を下し給はりぬ噫波留が行を見るに卑しき賤の女にして人倫のつとめなる道をしるべきにしもあらねども自然に姑につかへ夫にしたがふ道を知れり世の中の人を見るに父の家富貴なれば夫の家におごり父の家貧しく窮すれば能く仕へるは古よりの情也況や夫の家おとろひて歸るべき所あるは多年の馴習をわすれ恩愛の子をすて離別し去らん事をはかるもの多し然るに彼は兄同じ村に住てかへるべき家あれども彼の窮困をさけずして能是に處し殊に夫家相傳の田畑を失はん事を憤り自ら受勵惕□て怠らずすべて其道を正しくして其利を謀らざるは誠にありがたき志にて大義を知れる婦といふべし故に其至れる誠神明の冥慮に叶ひ善行速にあらわれてはかりざりし公恩を蒙れり是全く一人の餘慶のみにあらず今此政教に依て興起する人ある時は又大ならずや昔陳孝婦といふ者は夫に代りて姑を青み宋人の女は夫惡疾あるをしらずして始終其志を變ざる輩竹帛にのせて千萬世の鑑ともなりぬ彼も又勤おこ

ろへざる時は孝婦といひ善婦といひ女丈夫といふとも豈恥べけんやこゝに致命ありて此事のあらましを記さしむ當閭境四民をして弘くしらしめんとの盛意なるべし實に是政教の一助なんと云

享保十二年五月上旬　　松井直治撰

義鳴いへらく藩政曾て坊長村首に仰て村民の親に孝なり夫に貞なり其外すぐれたる行業あるものは能く其事情を探らしめ書ごとに其者を官廳に召されてほと〳〵の錄給ふ事にて前の二人如きもの實多し其姓名事實は官の記冊にありて既に過し頃其記を柳營の覽にそなひし事のありけるよしされどみだりにうかゝひ見るべきものにあらねばこゝにのするによしなし夫孝子節婦の如きは錄給はりて其行業を閭巷に表し將來を贐る事和漢聖代の政なるは彼是の史にのせて明らか也我公松井氏をして此記を作らしめ只今も猶春毎ほと〳〵に褒美あるは閭門に表するより大なるべし宜哉我邦内孝子貞女義男の多かる事政教の然らしむるにあらずして何ぞや

歌人

貞立

荒井氏幼名喜八黄庭山人又積山人と號す安積郡荒井村の産なり傳に云ふ（女鳴集錄）貞立拾五歳の春木元清（シン）樾翁（エツ）の許に來て其兒輩の手習ふ相手をし又弓射る時の矢取を業としてありつるが我儘にして其事にも堪す凡ての事懶惰にて則にのぼれば手を洗る事なし夫を呵れば不潔を抓るもあらず紙もてするに何の穢はしき事あらんといふ只朝夕好む處は物かく事と書よむ斗也き朝夕の臥床にも唐詩など暗誦し又よく近松が作などを謠へり物かく事は手習ふ草紙のみにあらず戸壁も是が爲めに餘白なきに至る主翁もさばかりの人なれば其腕白を許して慈愛も殊に深ふせられければ辛じて一年を通じたり翌年小川氏（良仙をいふ）の許に至て醫業抔學びたりしに史記を讀て其難字を問しに小川氏も亦知らず且常に木元氏の遇の如くならざるを憤れるにや一通の書を木元氏の許に遣して亡命す此時十六歳也其書

小川良仙老假君にして無理非道に候仍今退候

喜八事

橘　女律

木元市右衛門殿（竹翁の家兄也）

夫より水府に赴しかど醫業なるべき年にもあらず又面貌も猿の如く僂仗抔つとむべき人品にもあらず奴僕の業もなし得されば誰雇ふものもなく頻に饑餓に逼りて橘女律此樹の下に餓死すと紙にしたゝめ樹幹に粘して一大樹の下に端坐してありしを府下の人通り合せて連行世に聞ゆる碩儒安積澹泊齋の許に托したり故に後迄も澹泊齋の門人と誇稱せり其のち如何して水府を出けん東都の藩に來て隆元佐藤氏の許にあり隆元紹介して官醫德順氏（苗字を失す）の門に入り覇府の小侯内藤越前殿の侍醫となり五人扶持十兩の俸に在付けり玆にある事五六年寵遇厚かりけるを嫉ものありけん後宮の婢に艶書を通しと讒せられて俸を奪て追出さる竹翁窮して都邸に番上せし時渠を越前侯の邸に訪ひし事ありつるに鷄の畵に清樾翁の和歌を寫せし掛軸を床上にかけて茶菓抔樣のもの供し置ぬ清樾翁の舊恩忘れずして毎月忌日に懸る事也と實に殊勝なる事也

又越前侯を出てのちは藩の封内へもどり上太田といへる村の里正（遠藤儀右衛門さいふものか）が元に養れて年を送り例の腕白止さる上に粹狂さへ加りて動もすれば腰の短刀ひらめかし物狂はしき事度々に及へども里正より撫愛して親み父子の如くなりけり彼も又其恩を感じ里正か家に病疾事故あれば己が身に在る如く心力を盡せしさいふ其後又江戸に遊びて金峨井純抔に周旋し詩文の事も頗る心得たり固より體裁などいふ事もなく筆にまかせて綴りなせる詩文なれども造語の奇抜なる詩句の俊逸なきにあらず

遊大華山（あたゝら山也）記事に望絲瀑則東天半割而千尋之白絲如落下界公和（中野順菅子保錦兒讓伯將近之譬是如母之立井端而晒日布其子弄之さいひ又舟社の詩

怪石擁天疑是雲漢母織女何處在只見晩霞浮

さいふの類也都下に再遊の時往時渠が奉藁抔せし越前侯の姫君逝去し給ふと聞て御墓に詣で一首の和歌を短冊に寫せしを墓樹に掛置たるを見る人ありて越前侯に呈せしかば渠が都下に出しことを知りたまひ其志を感じ給ひしにや其意を明したまひふたゝひ召されて時々盃酌の坐に列りて其姻族久

世三四君抔へも交り大に覇府の士中に愛せられたり渠高貴の人を見る事儕輩に同じく少も謙遜の狀なけれども却て其歡を得たり昔都下に在りし時源師道に從て運筆を學べり師道は烏石に刻意せしが渠は放縱腕白の書法を造立し尤夜學に妙を得たり老て後彼上太田の里正に遣骨を高野山に籠りて萬恩を報ぜん事を發起して回國頭蛇となりて六十餘州を經歷せしが別に貯ふる路費に乏しければ一大筆を携て聯額樣の物を書て行く先々の衣食の資とす壇浦に至りし時は唐人どもの需に應じて數拾紙を書したり吾書は西土迄もいたれりと自贊したり五六年を經て歸り來りし時安積郡日和田の里に一大碑を建て筆墨紙硯の恩に報ず四神の碑と篆書もて題し其文は金峨の徒なる厚公邊仲藏の撰し書する處也是ぞ渠が不朽とはなりぬ渠六十餘州を經歷して終に越羽佐渡の三國を殘せしとて立出しが齡も既に六十を越ぬれば道路に死せん事を覺悟して彼が尤したしき本宮驛糠澤某が元に我繪像也とて一幅を殘し上途の日を以て忌日として一遍の香花をも供し給はれとて出立せしが果して其行方しられずなりぬ越羽の間にて死せしといふ齡は笠翁と同年のよしなれば今茲古稀の年になりぬらん糠澤か許に殘せし繪像祐淸か筆なる宗祇法師の像なるよし吾繪像といひしも狂狷の彼法師にも恥さる心なるべし云々（遊覽堂筆續集に見ゆ）

義鳴いへらく此外高橋笠翁が書たる補傳及び金峨文集彩虹瀑の條下に黃庭何等狂を愈狂故態益發瞋目攘臂罵坐中人呼純鄕呼廣爲欲拔劍之狀云々とある抔くはしく不抄但補傳の中に彼が國字もて西遊の記に書し勝事多かりしかと今何方に放在せしや可惜と書たるは實に渴望にたへず渠が奇狀の話を別に二ツ三ツ聞たれども前傳に顚末を盡したれば不贅さて積山の書本藩に殘るものいとまれなりたま〳〵姻家山路氏の匾此生の筆也則ち茲に影寫して同僻にしめす（小杉田村市川里右衛門貞柳の書二枚持たり一匾はにて養極の二字あり一ば法帖にて唐の張繼の詩月落烏啼の全首を書たるもの也頗を厭てこゝにはぶきぬ）

以文會友の約語なるべし蓋懐素を學書たるならん

某

似雲法師が書の明灰に云享保十六年四月十三日二本松安西元無老隱を問ふ此所の里中龜谷と云て坂ありそこに阿部川流のもちひを製して世のたつきとする人あり此家のあるじと此隱者ゆかりありしとてこゝに身をよせてすめればあふかたに家の俗事

をもいとはず時々は打交りてともに其仕業をいとなみ抔せられけれど靜に心底を汲み試るに泥中の蓮の濁にそまず其さま閑雅にして名利のきつなにつながれはべらす誠に市中の大隱ともいひなまし此所に十日斗とゝめられ夜晝となくかたらひければ此人の心に引かれて口かたしき胸中に少しは清まる心地ぞする

義鳴いへらく是迄は元喜の事也さて此元喜は赤坂館の越後守眞行が後裔龜水町の坊正義平治恒

○の男也案に双安畸人錄に阿倍川元喜は略家事は家内にまかせ書齋をしつらひ年中雜談の人に逢ず家は極めてまづしく家内は往來の人に茶を賣るを業とす略ある時あてやかなる人ふたり略一夜の宿かりたきよしいとねもころに云しかば略一室内の内へ案内して略元喜罷出そも御身は何人にて何のために旅におもむき給ふと問ふ我々は都のものなるが歌枕見んとはる〳〵下向したりと仰給ふ元喜我いやしき匹夫なれども和歌を心掛候との思召もあらば御添削いたゞき度よし申上略歌の草を持出るに略ねんごろに御筆削下しおかれ夫より元喜は力を得いよ〳〵上達せしとぞ跡にて承り候へば日野卿の御連枝なるよし御歸館のゝち御染筆の御芳書到來元喜直さま京都へ登り御殿へもしばらく逗留ありてかへりしとぞ元喜の名も神道御傳授の砌吉田殿より拜領の名也しとかや似雲法師に別るゝ時

元　喜

あぶくまの名ともおもはゝ都人
　立歸る波をかけてまづみん

又富翁雜話餘稿に阿倍川元鬼が歌に

　おもかけのかはらぬはなどいかにせん
　　かはりてさへもをしき命を

此人京師にしる人ありて此歌を見給ひて當時にすぐれたるよしいはれければ此歌を其人に便りて帝の御覽に入けるとなん聞けり鄙人のよみしを雲の上人まで聞えけるは殊に和歌の德といふべきにやとあり又寛保二年君命に依りて封内の名所を詩に歌に作りたる人と昨非翁惣載にて三十三人そは太夫を始として歷々の落士也只元喜のみ中に交へらるる歌は

　世のめぐみあさからぬ春の安積山
　　花やうれしき色に出らし

といふ也當時名譽の人なる事しられたり彼の古館辨は則ち此壯年の撰也といへり（彦喜と書ものゝあるに喜の同きより誤るなり）さる折しも此家の向なる小屋に晩より念佛となひうたひ或時はかたはらなる稚き童とひとしくたはむれ舞かなつるものありつゝ打見聞時は狂のやうにはべれどさすがにさもおもはれず□おかしく拍子取ふし今てやうの言ながら露ばかりも淫聲なら

ず只心の内えもいはれぬたのしみ有て玆に□して手の舞足の踏處をしらず聞えはべれば是たゝ事にあらずと此主にいかなるものぞと問聞てはべりしにあるじのいへるはあの男はめづらしき異人天が下の樂人なりとぞ其異人樂人とはいかなるとと問ければしか〳〵の事ありと聞つるにより彼樂人を問けるに見入隈なきあばらやにあ□□ろのやうに繩もてくめる收こたといふわら莚めくものを奥に敷て庭をうがちてさながらいろりとしすゝけたる釜を自在かぎにかけたり其はしつかたに足をのべ指に繩をはさみてわら沓を造りながら歌うたふさま尋常のものならず下略

義鳴いへらく此異人は何ものなりしやいまた考へず

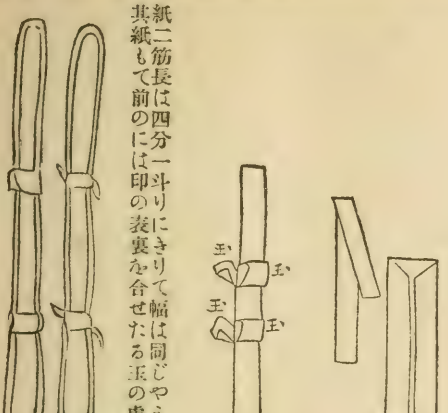
風俗類

吾妻結

今は昔安積縣にて男女のよする求るに草結といふものせしとなん名所歌集に安積の近郷にては眞菰石菖蒲抔の草にて玉結ひてふもの抔て是をおもふ女したふ印におくりしなりと又萬葉略解に春海云みちのくにて男女のけさうするに玉つさといふものをかたみに送ることあり殊に桃生郡玉造郡抔の山さとにては常にする事にて厚き紙を折てむすぶさま五十種ばかりあり其結やうにて事の故よしを知ると其國人のかたるを聞けりといへりと見ゆ吾安積郡にても後は紙もてものすることになりしとぞ

其やうは

其結やうは



今も郡山のわたりにては婚姻の日婦女子のつどひて結ひたわむるゝといへり又是を玉結ものといふ土由か花經悲話草說の條に東武より出る俗に錢陰といふものゝ中に中山踊舞の圖といふもの見るに老若男女僧士民くさ〴〵の容にて踊舞するかたを書き上に中山踊の唄を記せり其中に十七日かけて手拭いつくの染屋て誰た染たまはしはしのぶ細道中を緣兒の草結といふあり又洛の森田吟夕が宇津山小蝶物語第五巻賤しからざる爪の取やうに云姫君も戀の浮橋踏しめて引かへさし梓弓念力の矢の一筋に通り過たる御心中誰か夫と向板のあたらしき箱をしつらひ草結よりの文ともを折目も誰か違ひへき云々とも見ゆ此草結といふ言は和俗男女婚姻の約をいへり本邦俚諺四に云草結和俗男女婚姻の約をなすを草結と唱ふ古傳云魏顆文武子有嬖妾武子疾曰云々又見搜神記冥報錄勸徵記等眞觀政要云預代結草之誠是らをもつて見れば恩を報ずる事をいふ可也男女の緣結をのみいふは不可也おもふに魏顆が父の妾を嫁せし事によりてあやまり唱ふるもの也といへるは何事ぞや吾邦の俗の言豈彼邦

の故事に拘はらんや例の儒者の僻見也こは魏顆の結草の事にもあらず吾邦の古事の殘れる也萬葉集第一皇女命往于紀伊湯泉之時御歌云
君之齒母吾邦毛可知哉磐代乃岡之草根乎去來結手
名略解に云取要磐代は紀伊日高郡ヨハヨハヒ也いはしろの名に依て其岡の草を結ひてヨハヒを契る也などありてよはひを契り行末を賀事にも又吾身の幸あらんことをいはふにも木草を結ぶことは古への習はし也今も神社或は路傍の木枾紙を結ひて縁結びといふと其古事の殘れる事也中略吾みちのくに安積郡郡山わたりにて今もする事也中略同じ郡に和田の驛の修驗者備峯院可堅がいひしには三十とせまり昔此わたりにて聟せし事也婚姻の時聟の家より嫁の家へ向ひ衣服と呼て聟と嫁との料の衣服と帶と贈れをの家におくる同じ事也又親取には女の家より聟　其嫁の方にて衣服は其前と前との向合ふやうにして女のを下にし男のを上にし袖などかへすにも習あり帶は玉結と呼て男女の帶を右の吾妻結びの形にむすび合せて聟の家へかへす事也其業たやすからす殊に其わきも□□既に若きものには傳はらずたま〳〵七□

□□□□の老人に知れる人僅にありて其老婆ども
をやとひて結ばしむる事也しか今はたゝ衣服と帶
とを贈れる事はあれども其玉結枾いふさまは更に
しる人なくて其名さへ傳はらざるそいとも〳〵情
しき事也といひき安藤重滿が筆記中安積郡吾妻結
の說にいふ移り行世のありさまほどはかなきもの
あらじ錦の木のをかしきふしも菅菰のまめなる言
葉もたゞ一の塚と浦の名にのみ殘しけるおのれ稚
き時女子の玉結てふものして贈をいかなるものと
もおもひよらず年月を經しにある翁の物語りにこ
は安積縣にて男女のよするもとむる媒こせしもの
にしあれど今の世はなべて鳥の跡ふみ見る習となり
てかくの古き傳も絶はつるなりと語るを聞く其
玉結はいかはかりにしてつくるものぞと問ひつ
るに年はやすきし事にて其處の紙もて造り見せ
給ひやがて其故よしを聞しまゝに書付はべる也此
玉結は吾妻結といふて思ふ人の方へつかはす時に
よく玉と玉とを合て人傳にても手つからにてもた
よりにつけてやれはおもふ人うけひけは其儘にし
て返しまたうけひからぬ時は玉と玉とを引はなし

返す也とまた重満いつしか聞し事有安積縣にて無下の人は木の葉をものに包みて思ふ人にやるにうけひけは外の木の葉をつゝみて返り若しうけひかねばもとの葉を返すとなり手にだにふれぬといふ古事も思出られてをかし仙臺人大屋士由か物語りには吾仙臺あたり昔の習に五十あまり二ほどありて今霄はとみに來ませ又はさはる事のありて今霄は逢がたし抔いろ〳〵契り結ひさまのあるものぞと語りき中略此事玉勝間はさら也中山踊のにも見え俚諺などにものせたるを見れば古くは吾みちのくにのみにもあらずいづれの國にもありし事にて其古事の言魂のたすけにありて今にほろびず猶婚姻の事にはいふなるべし然るを唐國の故事にあはぬをもてちかつた事なりといへるは無稽甚しといふべきのみ此事に引たる書あまたあれどもはぶきつゝすへて此應話は事と物と古今の據あるをあけて論したるもの也考證如此盛なるは未見

カサトリ

此際の風にて正月十四日の夜賤き男女おのかさま〴〵粧して喝々（カッ）といひて家々戸々を打めぐりて物請ふ事とす是をカサトリかまたカセトリともいふさて其ものいふ事のあれば水をあぶせ掛てこらす事也何の意にて何の時に權輿せしをしらず正月十四日又十五日の夜にも者あるをもて思へば彼の踏歌の舞に擬したるにて歌踐踊といふべきを略してカセトリといふにはあらじかせとさと音かよへば又はカサトリともいふるべし又踏歌には歌人の舞まふ事なればやがて歌仙踊といへしか士由が考には會津官府につたはる貞享二年の大沼郡高田組風說古例帳といふを見しに正月の事にいふカサトリは正月十五日の夜男衰笠を着農具を紙にゑがき錢さしを添て餘力あるもの丶家へ指行聲を出さず其家の門口をたゝき其時内より出持來る物を取りかふたる笠の上にかけ錢なりとも米なりとも少し取らせ候農業の時煩ものカセトリをすれば不煩といふて如此す以上とありて此組のみにあらず封内なへての事也と見え若松沼下抔にさへ今猶ある事也吾仙臺村にもカセトリとくさ〴〵の姿に扮して舞踊してあるくなり各國に異ありといへども同じ吾奥州の風俗にて同じ物なるべし士由名義を強て按するに彼目なしとぢをめなしとりともいふ類にてイキシチニヒミエイの連聲なれば

カサトリは笠どちにて顔を覆ふより出たる名にもあるべきやといへりさもあるにや

頭書　踏歌に二ツあり十五日の夜ものするは男踏歌十六日にものするは女踏歌なり公事根元に十五日十六日八月の頃なれば京中の男女の聲よく物うたふをめつうつうひて年始の祝詞をつくりて舞をまはせ抔せられはへりし故に踏歌とは申也天武帝三年正月に大極殿に渡御なりて男女わる事なく闇夜踏歌の事ありと見えたりしされば月の頃ならでもぬは玉の闇の夜にもありしにやまさる風車

安積郡一郡すべて人々七種を囃す事なし只此日七日堂と稱し郡山の驛如法寺の馬頭觀音に詣るのみ老男若女蟻集して大に賑ふ此日及び初市の日まさると風車を市中に多く賣る參詣のもの此品を必ず買各家門戸に挿む是去年に增りて身代くりまはし吉といふ俗説僻也と云蓋郡山の市人は買ふもの更になし只鄉村の農民どもの俗例也此兩品をうること此驛のみにあらず安達郡本宮岩瀬郡須賀川田村郡三春治下の初市皆是をうる三春にては去年にまさるてくりまはしよく御目出たいとて兩品ともに麻をうるといふさて其まさるをうり買事亡父大槻蘭齋か郡山舊事考の中に彼邦の故事によりて馬猿ならんといひしは恐らくは附會なるべし其故は此物を賣事は田村郡三春にもありて其日は何かなりしや不知其形は此地の俳士の摺ものゝ書にも出また彼地にて予も見し事あり又信夫郡福島治下にては正月十四日夜より十五日一日信夫山羽黒權現の社の境内にて此まさるを削かけ花をうり參詣のもの此品を買ふ事也又年の市に羽子板と共に店に出して賣る事もありされば郡山馬頭觀音の緣日に限りて是をうるにあらず又正月七日に限れるものにあらず只俗説の如く增るといふ祝歌なる事うたがひあるべからず年のはじめにかうやうの祝歌を取る事俗例の常也同條

招簡

郡山あたりにて冠婚葬祭杯客を招くべき折には前日に招簡（ヨビフダ）をやるたそは大奉といふ紙杯を四ツか六ツ位に剪りて招べき旨を書て配る也富翁雜話に此事を記し初め招き來るべき書翰を遣し其日にいた

り再び來るべき旨人を遣す事あり客人かならず此再使の來を待ざれば集らざる事古よりの習はし也といへり

齋家心寶要の冠禮の條に前三日告賓友使來成禮曰戒前一日遣子弟致書宿之曰宿賓といふ事見ゆ宿之と使進之義也邊鄙には自然と古禮に叶たる事も有也と見ゆ

雩

郡山わたりにて藁にて龍を作り數人にて是を舁ぎ且水を桶に入て若ものらが篠をもて其水を四面にそゝぎ雨タンボユウワウよと囃ながら市中をわたり是は古よりの習俗也舊事考に此はやうは古き詞のなくりならめ或人の言タンホは田畝の事にてユウワウは祝の義也雨ふりて田畝を濕さは家々に悦て萬歳を祝ふべしとなり璞おもふにタンホはタンモの訛りにてユウワウは龍王の訛ならん雨をたもれ龍王と唱ひもて龍神に雨を乞ふ也本朝俗諺志に伊賀國山田郡玻玻村てふ處にて雩するに村人寺より俊乘坊長源の木像を舁いたし雨たもれスンジャウ坊とはやしもて行とあり又古川辰が西遊雜記に肥後の水股にて雩するに草人を作りて太皷をたゝき衆人高聲同音にて龍神龍王末の神に申す浪風しつめて聞めれ姫は神代の姫にて祭り雨をたもれ〳〵雨かふらぬは草木も枯るゝ人は跡もたえがたもれ〳〵姫をましよ〳〵と唱ふるとあり是らも更に古代の詞也是にて見れば龍王に雨をたもれの義照々と明らか也とありさもあるべし

染千盃

郡山の驛外に虎丸長者が屋宅の蹟といふ處あり此所に染千盃朱千杯黄金千兩旭さし夕日かゞやきたんほほの木の下にありといふ碑ありしか今はなし蓋此遙の謎に一里七りたんほゝ又一たんほゝと言て栗林と解けばたんほゝの木は栗の木ならんといふ傳あり（義鳴いへらくほゞは栗の木にはあらすこゝの謎に一り七り又一りといふは則九となれば栗たんほゝは皷の音にて則舞曲のはやしを表せし也されば林といふ意にて事也よておもへはたんほゝの木といふは只林の下といふ意なるべし）又郡山舊事考上臺の條にも朝日さし夕日輝く皷の木の下に染千盃朱千盃金千枚てふ野人の諺は信夫郡鯖野村なる醫王寺にもあるを我が村の如寶にも是ありと古くより傳ふ（是は虎丸長者の埋置といひつたふる也）とみえ安達郡西勝田村上ふ地といふ處にも古染千盃□を

埋め置けるといふ里老の傳說あり又大平村明主内
といふ處にも同じ傳說あり既に五七年前尾州尾島
の博士の占を信じて數十金を費して其地を堀りし
事ありとぞ吾邦内盤井郡平泉は淸衡基衡秀衡三代
の舊跡也此三代の時の榮輝富貴は東鑑等の說にて
もしるべし今此を鄕村老の傳にいふ昔時秀衡あら
かじめ子孫の滅亡を知りて黃金若干染許多一樹の
下に埋め作歌をのこしていふ旭さし夕日輝く木の
下に染萬盃金口々など其外越後會津杯にも此事あ
りていふしかければ虛說なる事疑なし遊話略說

我都奥詩

日和田のあたりには古へ五月五日にかつみを伐て
詩たる事と見ゆそは續世繼物語十卷に曰陸奥守橘爲
仲と申かの國にまかり下りて五月四日館に聽官と
いふもの年老たる出來てあやめふかするを見れば
例の菖蒲にはあらぬ草ふきけるを見てけふはあや
めをそふくるにてあるに是はいかなるものをふく
ぞと問はせければ傳承るは昔五月五日とてあやめ
ふく事も傳はらざりけるに實方中將のみたちの御
時今日はあやめふくものをいかにさる事もなきに
やとの給ひければさる事侍らすと申けるをさみだ
れの頃など軒の雫もめやめによてそいま少し見る
にも心すひことなればはやふけとの給ひけれと是
國にはさるものおひ侍らぬ也と申ければさるとて
もいかゝなくてやはあらんあさかの沼の花かつみ
と云ものありそれふけとの給ひけるよりともと申
ものをなんふき傳るとむさしの入道隆資と申がか
たり侍りけるもし然らば引手もたゆき手き根とい
ふ歌おほつかなくはへり云々

義鳴いへらくこは日和田の事とも極めかたけれ
ど安積の沼のたよりにしかおもひしや

追虫

正月十四日には日和田村の俗にて十歲以下の男子
ある家にて必五色の紙もて采配を作りて其子にあ
たふ其子ら左の手に羽子板を持右の手に采配をも
ちて同日の夜其采配をもて羽子板をたゝきていと
かたひすして口かに言あり五色の虫と悪の虫かあ
るならば佐渡島へ追てやれ佐渡島に席なくばとう
〳〵島へ按に唐土の島追てやれとう〳〵島もせきなくば
からこ島へおひてやれからこ島にもせきなくば八

丁目の助右衛門殿の堂のうしろへ追てやれと唱ふ是を虫追と名づけて同日には男子もたか家には午時の頃より此調度を作りあたふる事なりしが二十餘年以來其業たゆるのみか其名をしるものさへなしと土人の話也同錄助右衛門が碑は墳墓の部に云

三束稻

日和田わたりにては坤の方より起れる雨雲を三把稻と名づくこは俚俗の傳に此村の坤の空よりおこる雲は甚しき驟雨にて雲起るより稻三把刈り終りざるに降來る事速か也よてかく名付と然るを近時に至りてさる事あらずと鄉民のいひし同錄

黑面（クロメン）

正月十四日本宮の風習にて新婚の男女をさらひ其顏面に墨をぬるをもて祝とす是を墨ぬりといふ何の意なるをしらず東遊奇談に伊達郡築館といふ處にも同月日の墨塗といふを祝事とする事をのせたるが其さまこゝのに同じ此書の作者南谿子は諸國を巡經して其中にめづらしきおもへるを記したればかゝる祝事も世に多からぬものと見ゆおもふに是は浴水（ユアミセ）といふ事の長したるなるへし

播梁僧（アハマキニウトウ）

本宮驛の俳人萬象伊藤氏稱太一が吾田良山の記の中に新葉かくりの時鳥しのべる頃殘の邊の自らものゝ形なせる一入をかし里人いひならはせる粟蒔入道とかやを始め駒かた八の字あるば布引家一鳥なと日かけに其かたのかはり行そこよなくあはれなる云々又冥々が粟蒔集の序に北山山本氏が書ける四山殘雪春後皆消冬獨吾田多良巖間有餘白雪形如一浮圖立播梁粟者抔ありてかく名付たるは初夏の頃殘邊おのづから浮屠氏の形するを見て鄉民おの〳〵粟を蒔く事とするが故也駒形ハの字抔いへるも皆其形によりての名のみ也さるを義家公の乘給ひて馬の死したるをうづめたる故に殘邊も其形をなすといへるは例の誣說なり按に富士山の中にもかゝる殘邊のあるを時として土人穀種をまくといふ事里人諺に見えたれば高山にはさる事ありと見ゆこは靑陽をさゝふかものあるによりてさる形をなすものな愚民ん氏らのあやしみおもひるは常の事也

夷　曲

此わたりの村落いづくにまれ、賀宴の折にはかな

らずさんさ時雨が萱のゝ雨がおりもせてきてぬれかゝるションカイナと云ふ謡を唄ふ事とす曲節はいと古雅なるもの也土由いへらく此さんさ時雨は小々時雨にてさゝと降る時雨也そはさゝ波さゝれ石さゝ蟹杯のさにやさゝやかなる義即ち些少也然るにさんさいへるは彼催馬樂に我家をわいへんといひのちの謡曲にも殘邊の淺香潟をのこんの雪のあさけんかたとこたへる驛のうたひものゝ呼法中略音使なるべし此童謡の意はさゝと降來る時雨なれば音なきは元よりこて萱に降れる雨も木と竹と葉びろなものにふれる雨よりはしめやかにて又音なきものなるによりて夫を思ふ男の音なくてひそかに忍び來れるにたとへ又みそかの事を後の世にぬれこと云いへるに上の時雨はたこたといへるをうけてぬれかゝるとはいへるなるべしさらずばいかで音も無く忍び來りてかくぬれかゝり給ふべきと稚き心にいひたるがいとめでたく古雅なるもの也其男女のならひを作りめる唄なるからに嫁娵杯のめてたき事の折には字とうたへる皇國の古ふりなるべしされどもいづれの時何事によりて作るちふ事のもとは知るよしなしといへり義鳴いへらく萬葉集にうまくだのねろの笹葉の露霜のぬれて我來なば汝は戀ふはそもうまくたといふ山の峯の笹葉におきたる露霜に我がぬれて來りしならば吾ぬしも戀しうおもうなるべしといふ意にて此謡歌をさ〳〵其邊かなへり古雅なる事おもふさて安達詣の評にふりたる雨はかやのゝ雨か音もせで來てぬれかゝるといふはやり歌は享保の末に奥へはやり來る也此唱歌は龍達といふ僧の口語より出たりといふことありさらば其實は我邦のものにあらずとみゆれば今となりて久しく借してかへさゞる類なるべし龍達とは一蝶か小歌の句に隆達が破れ菅笠しか〳〵此隆達の事にや

福内鬼外

追儺の夜に煎豆を散らし福は内鬼は外と唱ふるは陰を退け陽を迎る意なりとて此事普通の恒典也さるを我藩邸にて福は内鬼は外に唱ふる事とす是則鬼はといひては國姓の丹羽のひゝきあればかしこみてさくる也とぞ九鬼侯にて此夜鬼は内といふ類なるべし

河東不架矼

逢隈川の東を土俗私に東安達と號すさて此川東は石橋家の食邑たりしによりて今も石橋をわたす事なしといへり是則上杉家の土民杉を等閑にせぬ類なるべし

尿　蛙

舊童のたはふれに蛙を打殺して其上に茉苡（ヲヽバコ）といふ草を覆ひて又其上に溺すれば蛙忽ち蘇生する也是もふるき事に見て蝮蛤日記下の卷の終に其意をよみたる歌あり抄しもらしたり

八道行成（ヤサスカリ）

惡少年等の地上へ蜘の圍の如きものを畫き夫を的にして錢を投て優劣をあらそふ是を六道とやらんいふ事也何の故なるを知らざりしに和名抄に八道行成内典云拍毬（中略）八道行成（讃夜佐須加利）一切の戲笑悉不觀作とあり是を略して六道といふにや

鞦　韆

又たはふれに高き所より繩をたれて其場をわが手で夫にまたがりて人の突に任せて彼方此方へ旋ふ事也警にはどりつきと云是則古に所謂ゆだはりの事也和名抄に古今藝術圖に云繩戲也山戒以習輕轎也と東波の春夜の詩に……院落夜沈々といふ句あり則此遺風なるべし

帚晴娘（テルヽヽホウシ）

又のたはむれに雨のふりやらぬ樣に紙もて人形を作り面には一目を當て倒に軒端などにつりて明日をいのる事あり（又速木やうの物を作る事もあり）富翁雜話餘稿に此事のせて柳巷談苑に引明列洞帝城景物略云凡雨久以白紙作婦人首剪線紙衣之以莒蒂苗縛小帚令携之竿曰帚晴娘または神異經に南方有人長二三尺祖身而目在項上交行如風名曰魃所見之國大旱すといへり然れば其事は景物略によりて形は神異經を用て作りたるものなるべし

義鳴いへらくのちの四條はこゝに限りたる事にはあらねとおもひよりしまゝを書たる也其外いと多けれどそは後集にあぐべし

相生集卷之第十七稿　終

相生集　巻之第十八稿目錄

風俗類

年中行事
七種　虫追　奥淨瑠璃　正月
出替　二月
雛祭　櫻狩　三月
牝丹見　四月
粽　五月
氷　六月
魂祭　七月
鎮守祭禮　八月
菊見　九月
御命講　十月
追鳥　十一月
川ひたり餅　年市　羽子板の圖　十二月

方言

おほなさら、おつかない、ごみ、はな、手あいまち、さす、さらば、いなだくなづき、やい火、だるい、せゝなぎ、いかい事、きいれ、ほつとり、ゆくちなし、げ、もい、足のむいた方へいく、馬は馬づれ牛は牛つれ、めそり〳〵、めんこ、のら、やかましい、おそ、結句、居久根、はんなたかまち、きつちやぼふ、おたち、ぐちら、

附錄

元祿年中人名

物異類

隻目兒
黒塚鬼婆
積沼怪

通計貳拾事三拾三首此巻に收む

相生集　卷之第十八稿

外史　大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

風俗類

義鳴いへらく寶永廿年（天保十年に至る凡百三十年）藩士某が錄たる木綿布子と題する小冊あり之は四時十二月の行事を戯言もて書たるにてよく其時の形勢を見てしかも今に證とすべきもの也今主要なるを抄して傳古の一助とす

正月

七種の若菜は町裏より摘よせて摺木音の强弱壁越に男女がしれぬ

義鳴いへらく七種の羹を食する事は人日和菜羹遁一歳病患とある本文によりたるにて宇多帝の寛平二年に始まりし也さて七種といふは芹薺鼠（セリナツナゴ）麹草（キヨウハコベ）蘩蔞（ラホトケノザ）佛坐（スズナ）菘蘿蔔（スヾシロ）をもて式とす（又十二種の若葉を用ゆる事もありとぞ）是を俎にのせてたゝくは細かにきらんとの意なれば庖丁もてもすべ事なるを大かた擂木にて打事とするはいとも近き世の仕業にやと思ひたるに本文によれば既に此頃よりしかりしと見ゆ因にいふ其折の囃詞に唐土の鳥が日本の土地に立といふめるは七草冊子といふものに須彌の南にはくか鳥といふ鳥あり彼鳥長生せる事千年也此鳥春の始毎に七包の草を集めて服する故に長生をする也はくか鳥の命を汝が親の命に轉じかへてとらせん七色の草をあつめて柳の木の板にのせて玉椿の枝にて正月六日の酉の時より始てこの草をうつべしとあり是にてしるべし鹽尻には枕草子なる鵜の祭殿うつりの事を引て歷々の館を建られ段々新殿へうつる事有今霄は年越の夜也いざ物はやしせんとは唱けるは唐土の富や日本の富やと唱ひて貴くも富めらるや日本第一の富にぞあれといふ事なるを今誤りて若菜をはやすとも唐土の鳥といふ事ならんと云へりさてこの擂木にて打事は前說にいはゆる玉椿の枝よりうつりし事にや

一十四日の黃昏にむくつけき下部の長虫追ふ〳〵

とのしり心なき樹木になる也いかなるまいかと鉈にてこはすも所風なればする事ぞかし

義鳴いへらく此日に蛇を追ふこと未考樹木に傷る事は其脂をいだせんため也脂を出すはよく實らしめんがため也と老農のかたりし也さる事ならんこは農業全書に正月十五日李の木の股に石瓦を取かけ置けば多く實るものなりとある類なるべし

二月

二日は出替りとて小もの仲間黒髭を虎に作り送り酒新參振舞も過て今參七十五日の奉公ぶりをたしなむ云々

義鳴いへらく奴婢の出替り江戸を始め大かたは三月を用ふといへり新著聞集勢州龜山敵討の條に半藏は吉助と名をあらためありつき翌年三月の出替りにたつて暇をとり云々などありこゝに二月を用ふるは是より古き事なりと或人いへり

三月

三日は娘の子の會津ひいな袖つゝはりたまゝ床の上に立ならべ蓬餅に葱膾常になき白酒の看板も町屋に見ゆ暦の娵とりの日を消たき頃の娘はおもしろからぬ遊ぞ云々

義鳴いへらく此日に蓬餅を用ゆる事はいまだしらず又雛祭の事は朝廷の式にあらざれば公事根元を始として年中行事の書にもある事なし何時より始まりしにや未詳鹽尻に三月三日兒女の飲食を具しひなの人形を秡ものゝ代也といふ説あれど男女の姿作りて祭る躰なれば身の代にあらず是は幸の神にてはへる男女顔を作る事は扶桑略記に見え烏帽子着たる頃に作る事は著聞集に據はへるされば幸の神は男女幸ある樣にと處女の祝し祭日なるべしと見ゆ源氏物語紅葉賀にことしたにおとなひさせ給へ十にあまりぬる人は雛遊を忌みはへるものを云々とあり本文に春情のつきたる娘子はおもしろからぬ遊はとあるはいとよく〳〵かなへり

下の七八月の頃鹽澤の花盛り宮の下のしたり櫻中略杉田岩角初瀬堂へ一群の乘ものは左ながら女自まんは帽子なし風戸風とやらん根ほその島田も交りのちにうしろ帶も見ゆる云々

義鳴いへらく婦女子の道行に被をかぶるは古の俗なり其遺風にて此頃迄も大かた帽子を冠りしとみゆ女の前帯にする事式書に義鳴が隨筆濱の眞砂に抄し置たりとに書名な遺したり　明暦萬治の頃より起る京祇園清水の茶屋女參詣あまたあるとき帯の解たへるを結に後廻す際なく前にて結たるまゝ茶酒の給仕したる一人より二人にうつりていつとなく島原の傾城或は茶屋女前にて結ぶ町女又田舍に至りて世間一統に此風を學は大なる略義也今以御所方或は武家の奥方にて老少共に前帯する事曾てなしといへりと見ゆ本の頃は其略の深染して大かた前帯にせしものとしえたり今世も町在の婦四十にも至りぬれば必ず前帯にする事なるは猶其名殘なるべし

四　月

漸牡丹のさかり花の下にて廿日へぬべき好士とも繻子肌練肌の紅白くらべしろ實子實の吟味して駿河籠竹筒に生て三春迄のやりとり隨說白は土藏の脇に埋れてあり云々

義鳴いへらく牡丹の一名富貴草花の富貴なるといふもの　花王などいひて漢人のいたくめてたるもの也本邦には櫻をもて花王として牡丹をいたく稱したるはいまだ見あたらずされども牡丹屋敷などいひて此花を多く植て遊觀所とする事も國々にあるといへれば本文の頃も夫らの流行なるべし

五　月

五月雨に紙幟の辨慶も朝比奈も內に寢かし置き略松柏のたとへの柏餅はなくて蘆の葉の粽風呂敷かけて女使のやりとり云々

義鳴いへらく紙幟を用ひしにも當時の節儉おもひやるべしさて此日粽を用ふる事は高辛氏の惡子の事より起りたるよし公事根元抔に見えて今も朝廷の式なり今世は柏餅を專らとして粽を用ふるはいとまれなり本文の頃迄も舊式は傳はりし事と見るべし且婦人を使とするはまた古風也

六　月

朔日は嶽の氷を近乎も役人の外は引かず云々

義鳴いへらく今の世は戶毎に配りありく事なれども此頃しからずと見ゆさて此事は正しう氷室の遺制なるべし其氷室と云は仁德天皇の六十二

年五月に額田大中彦皇子獵于闕鷄時自山上望之膽野中有物其形如廬仍遣使者令視還來之曰窟也因喚闕鷄稻置大山主問之曰有其野中者何窟矣啓曰氷室也云々と日本記に見ゆ是を始て毎歳春分の頃に至りて奉献せしめ給ひし也後に四月朔日より九月盡日迄奉らしめらるゝ事となしとぞさて東國旅行談に丹波國桑田郡氷室山に昔より氷室明神まし〳〵て氷のいさぎよきを愛し給ふとかや毎年六月朔日禁裡に氷を献奉る事古例也と風土記に見えたり今も將軍家へ氷ある國々より六月朔日に氷献上し奉る茲に奥州二本松にては城下其外在町を七月朔日に氷を商ひたりあり〳〵其姿山中の人とみゆ小さき籠に入て西山の氷〳〵といふ予話の種とおもひ錢三文あたへければちいさき鋸にて一寸五分四方に長五寸はかり挽切くれけるを持てみるに手さき冷々としてみるから寒中の心地ぞしける氷をわらにてくゝり提けて行けるに一里半ほどの所に茶屋ありけるこゝにて氷とけしまひしが誠にかたき氷にてありける六月朔日にもうる事ゝらん其事は問はずして別れぬとある由也

七　月

七日逢の飯の紐とけば濁に染まぬ匂ひして楊貴妃のむつ言の地またあらばとさし鯖の比翼の魚妹脊祝て七夕の手向しらねば町々の軒に枝笹乃色短冊もなし云々

義鳴いへらく此日には二星を祭らんがために乞巧奠をもうけくさ〳〵の供物又は竿頭に五色の糸をかくる事もと漢土の風にて皇朝にても恒典とし給へりさて短冊をそなふるは正式ならざれども猶五色絲の遺制にてまた古よりの俗禮なり本文の頃は其事なかりしと見ゆ

魂祭には門火焚つゞけたる町在火見せの乘馬行違ふ間に童どもの轢(アカリ)とれと飛こゆるも寒國のしるしにぞ云々

義鳴いへらく此日に門火をたく事は陽をもて陰を迎ふる義なるべしさるをあかゝりといふは明光の約語なるべきを轢(アカリ)としたるは作者の滑稽おもしろしさて火見せる馬を乘る事は今もまゝあり則此頃よりの餘風なる事しられたり

八　月

鎭守熊野の祭踊の所定まりて棧敷しつらひ家々の幕江戸簾に細工繪して掛ならん云々

義鳴いへらく徒然草にさやうの人の祭見しさまいとめつらか也中略棧敷には人をおきたれはわたりさふらふといふ時にはしりのほりて簾はり出て云々とあり本文棧敷をかまひすたれ掛たるいとよく似たり

辰の刻はかり本町の幟先達てねり出す踊子共の寺住居はなまめかし中略根崎町の唐人踊おもしろからねどめつらし放免のつけ物は何やらしらす云々

義鳴いへらく四季物語葵祭の下に花つみの秀岡かたみの童いた〳〵にきようを盡し放免ふりをかしきものつけておのが心にいてたつ云々是又本文のさまたり古風のうしなはれさるをおもふへし放免とは新野問答につれ〳〵くさの三箇の大事とやらん申て世間にいろ〳〵申候より可笑候此事平家物語文學流水の巻に伊豆の國へいてまかるに放免兩三人をそ付られける是等が申けるは廳の下部の習かやうの事につきてそ自ら依沽も候へとも有之候此文段放免の任に候檢非違使の下部を放免と申候也とありこゝに放免といひしはなそらひしのみつけものとは草花やうのもの作りて衣のうしろに付るをいふとは只祭日の晴にものする也といへり是等の事今はなし

九　月

節句の赤飯蒸燗は箕輪門より目の下に御覽の賑ひ古への百菊今は三百菊もめつる也出來よきものは□さへめたときにいかす漸さかりになればかなたこなた花見ありき鼻紙袋の金さし當て壹分貳分のりんを拜ふ

義鳴いへらく公事根元に九月九日は云々群臣に菊酒を給はり中略御前に菊瓶をおろし云々四季物語にてんやくのかみ略藥とゝのひ菊をつみてかよふに御酒に入ておく云々又五月の藥玉や抔の根殘りたるをとりかひてすくにしみたるも取すてゝ菊にかゆるもおかしく云々又當時年中行事にも御菊綿をおかる南殿に菊を植抔ありて漢土にも此日菊をもてあそぶ事通例也本文菊をもてはやすもいとなつかしきさま也

十月

十三日は法華宗の御めい講に他の人とうふも油あげに買きうれとかく佛法と色には飢饉のなき世ぞ義鳴いへらく日蓮上人弘安五年九月八日身延山を出で武藏國千束郷池上へ着池上右衛門尉家長の家にて同十三日遷化したる也夫より其月日を命講と呼て檀方打よりて追善を修する事也

十一月

中の五日は追鳥雉子討ての引率群て物抔をあらそひ取梅の枝なくて棒に付て出すも田舍也

義鳴いへらく是則幕府に奉らん料にしてものさせ給ふなりさてこは何の時に始るを知らず按に天正十二年八月會津の青木修理亮といへるもの伊達方に内應せんとて大内備前が股肱のものへ子をたふらはして迎入たる時の書札に此邊ははや追鳥狩をもすべき頃にて常よりも興あるべければ來ぬかといひやりし事四家合考にみゆ若是ら遺言なるにや富翁雜話には此事五六百年に至れりとあり何の據有しにや但今の如く冬至の入りてよりものせらるゝは何の頃より始りたるか知らず又いはく紅梅の作枝高七尺なるに雌雄の雉子を藤もて結付るは大嘗會献物の一ツ也本文梅の枝ならぬ云々とあるは夫をいひたるなるべし

十二月

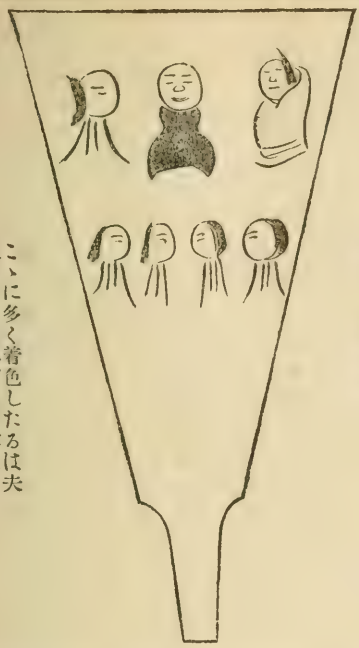
朔日明六ツの鐘に久保町の御門あくるとひとしく川ひたりとやらん餅はく〳〵とのゝしるに朝はせられず云々

義鳴いへらく此川ひたり餅の事何の義なるをしらず強ていはゞ一説ありそは朝廷十二月朔日の式に供忌火御飯といふ事ありこは六月朔日にもものせらるゝ事にて火を忌はふ淨の火を打かふるをいふ也さるを愍なるものゝ彼の寒食の暮祭に爲子推斷食三日といふの意にて川水にひたりたるもちなりとて鬻そめたるより始るにあらざるかされども例歳の恒典にせらるゝ事かゝる空言より起りしにはあらじなれどもおをひ得たればいふなり士由がいへるは登米郡のわたりにては今日も六月秡のやうなる事をものすれば川ひたりといふ名もておもへば猶夫らの變風にはあ

らんやといひし此説おだやかなり

市日例ならず人群立節買のおとなりしに錢袋かつかせ銀粉紋の會津椀に折敷のとち糸に蒲櫻の皮多く用たるはいと愛なしはまやはご板に雜煮の子の午房にんちんかろくり買ゆく

義鳴いへらく今の世にも年の市にうる事にする羽子板ありそは古來のもの也といへければ正しう本文の頃のものなるべしその羽子板は



松板もていかにも事ぞきく作りたるにかやうなる形の畵あり（裏はなつ）さて兒童の口號に此人形の事をトノサマ。カミサマ。サイシヨウサマ。エンカラオチタオチノヒト。といへり中なるは殿樣右なるは（髪を下たりさやかに見ゆれば女なるべし）上樣（伊勢氏か四季草に殿き人の妻を稱しいふ也古とはたがへり古は貴人の妻をカミサマといひし也字は上樣と書よしみゆかゝればカミサマといふ詞も古きよりのものなるこゝ（サイシヨウサマといふ約語なるべし）なるべしさて階をへたてゝ下なるは緣から落た落の人にて所謂殿下の義にて下官の人をいふにやとおもはるゝ其さま是も女とみゆれば緣から落たといふ緣語にて則乳母（オチノヒト）といふ事なるらんこは誰もしる事ながら古雅なるものにおぼゆれば僅に記しおくのみこは女の童の翫はく其畵にかかる形書たるは則雛祭と其心ひとしきにや

方言

○義鳴いへらく萬そこなはれづして古のまゝにつたはるは人の心素直にて露かばりもおのれが意もてものする事のなきが故也されば舊時の言の葉もおのづから夷中にはつたはりて殘れる事

ぞ多かりける今郷民らの方言にも片言ながら古言の変りたるはさすがに淳朴の風氣うしなはれざるが故ならん一ッ二ッをいはゞ

おほなさら

永田村山入邊のものらわざ〳〵といふべきをかくいへりこは伊勢物語にあふなくおもひはすべしなそひなく高きいやしきくるしかりけりとあるを契沖が□の□にあふな〳〵といふ詞は源氏物語に見ゆ是遠にもせぬ人のふとものをいへる心と見えたり又未通女胡蝶抔よおほな〳〵をね人ころなる心とも又つゝしみたる心とも註したれば下略とありさて此おほなはねんころなる意さらは殊更抔の更なるべしされば合せてものゝわきてわととりたる意にいひ習しなるべし

おつかない

物の凄くおそろしきをいふすべて此わたりの方言也こは萬葉何の巻なりしにやわすれたり　に奥虎不知云しとありて奥底のしれぬ事也鄙俗おつかないといへるは其意なるべしと千蔭いへり解

ごみ

塵芥の事也こも又萬葉に霖雨也始水逝縁木積云々今俗ごみといふ此語の略也と同氏いへり

はな

茶の煮ばな又寝はな抔いふも前にてしるべし

手あいまち

手あやまちの訛也平家物語に大阪越の段に高松の在家り火出來たりとてひしめきけり晝の事にて候へば手あやまちよも候はしとある是也

さす

驛家抔の人を役するに誰か其處彼は彼所へ行けといふを里俗さすといふ秋齋閑話に軍防令に凡差兵士とあれば古き事にやとあり

さらば

人にわかるゝ時いふ也後選集前の頭に伊勢

さらばよと別れし時にいはたせば
我も泪におほゝれなまし

とあり邦俗おさらばといへるはこの音便なるべしいなだく

義鳴宮の事によりて小手森里正の許に宿りし事のありける折郷民等が打つゞひて宴するを見て

一人の老夫がさしたる杯を一人かうけていなたき申といひけりこはなまりたるならんとおもひ居しを萬葉三市原王の歌に曰伊奈太吉爾伎須賣留王者云々此伊奈太吉は項の事なるよし諸註に見ゆこも亦さながらの古語也

なづき

和名抄に腦說文曰腦作膝（和名奈豆岐）頭中髓腦也今頭痛のするかいふべきをなづきがいたい抔いふもことはりはかなへり

やい火

炎火（ホノヲ）の意なるべしこは則やいとうのうつりたるならん本居翁の漫筆に文覺法師が正治二年に鎌倉頼家朝臣の返り事に贈りたる書にいはくあつきやいとうを念してやけは病癒ゆといへる事ありやいとうといへる事めつらしとみゆ

だるい

手足のゆきをいふ同書に伊勢抔にてはかいたるいといふ（此言曾丹集に我妹が今朝の朝菜に引されてせなさへあまりかいたゆきかな）又伊勢が集に

夜もすから物おもふ時の頬杖は
かひなたゆさも知られさりけり

此歌天木集には三四の句手枕はかひたるさぞとあり云々則此言なるべし理齋隨筆に懈惰の字なるべしとあり

せゝなき

せゝらきの轉也同書に小溝をいふ菅家萬葉集下巻に

もみちばの流てをけり山川の
淺きせらきも秋はふかきを

いかい事

源氏物語葵の巻にうつゝにも似すたけりいかき云々湖抄に猛（タケノカキ）辛いからしき躰也いかきはいかめしき也とあり邦俗はものゝ多きをいかいといふ是にもいかめしき意なるべし

まゐれ

民間茶まゐりしよツといふにまゐりませの訛也同巻にいとたゆけもおほしためればこそとてみゆまゐれ抔さへあつかひ聞え給ふとあり則古き語也

ほつとり

ほと〳〵の轉訛也紅葉の賀に女吾君〳〵とむかひて手をするにほと〳〵笑ぬべし湖月抄に殆(ホトント)也やう〳〵などいふ心也また花の宴に翁もほと〳〵舞出ぬべきこゝちなんし侍りて抄にほと〳〵はまさにといふ義也とありこゝにほつとりといふは殆の義也○是らの外源氏には證とすべき言葉多かれどそは皆後にものすべし

ゆくぢなし

いくぢなしといふの訛なり承久記に壹岐判官と申すイクチナシカスヽメニツカセ玉ヒテ院中に兵被召云々とあり

げ

さらたげんだ抔いふも左言の餘波也よげに老るげに雪のふる中に抔いふ歌にも文にもいくらもあり

も へ

人を呼ぶ時にいふ言也こはもしといふへき訛にて申すの略其實もの申すといふべき也旋頭歌に

打わたす遠かた人に物申す
われそのそこに向くさけるは何花たも

とあり古き物語文或は軍書等にいでや誰に物申さん抔あるも同じ事也

足の向へた方へ往く

相知れる人の道にて行逢たる時など何方へ行くにやと問はるゝにたはぶれに答へる詞也大和物語に大京太夫むねゆき口にあたりける人は博奕をして親兄弟にも憎まれければ足のむかんかたへゆかんとて他の國へ行きけるとあり

馬は馬づれ牛は牛づれ

其黨をわかたんとていふ言也按るに神功記熊之凝(コリ)といふ人忍熊王の先鋒となりて己が軍をすゝめんとて高聲にとなひたる歌の中に宇麻比(ウマヒ)等破(トハ)于摩譬(ウマヒ)苫奴(トトチ)知野(ヤイ)伊徒姑(トコ)播茂(ハモ)伊徒姑(イトコ)奴池(ドチ)といひたる事あり是則貴人は貴人同士奴は奴とちといふ事今の諺によくかなへり

めそり〳〵

小兒のともすれば泣いさちてはかなきをめそり〳〵泣といふ事ありこはめり〳〵の轉なるべし竹取物語に火鼠の皮衣めり〳〵と燒たる事あり則其衣のもろ〳〵はかなき事なれば正しき此遺言なるべし

めんこ
小兒をあかれがりていふ意也こは愛子といふの訛なり愛子の詞諸書にいつ又めんごいめんげい抔言ふも共にうつりたる也家持卿の歌に妻子見者愛（メグシ）といふ詞ありめんこは抔いふは此なまりしともいふべし

のら
閑田耕筆にいなかにて田畑の事をのらといふ萬葉集に大のら荒のら古今集に秋のゝらとあり此古言殘りてうつりたる也とありこゝの意にてのらといふは則野原の事にて田畑をいふにあらずされば秋ののら抔いふよくあへり

やかましい
異説區々にやは發語かましき也かまとは今のやかましき也源氏にみゆとあり義鳴いへらくかましきをあながまあながま夜半のきり〳〵すなどゝいひし例源氏のみならずやは前説の如し發語なるべし

おそ
おそきたないおそおつかない抔いふ奥州に東俗の語きたなぎをいふとありもといみにくむ心なれば則きたなきをいへるといふ

結句
うつりてはけつかといふものあり結句はもと詩の結句といふより出たるにて結句は則としめの句の事なれば終りはといふ義なり東鑑朝比奈義秀が水練の條下に結句入海底暫不見と事ありしは終にの意にてよくかなへり郷民等が却てといふへきに結句といへるはあたらず

居久根
富翁雜話に農家の廻りを居久根といふ和歌者流の説及垣はかきる意にて方言くねといふと也居廻の垣の内といへる義なるへし云々とは古語にも證あるにあらねとわきて耳とまるを序にいふ也下同じ

はんなた
村によりて虚言の事をいふ也何の義なるやしりがたしいみしき強言ながら一ツありこは縹（ハナタ）といふの轉りたるにはあらざるか縹は青白の色とありて色水といふものゝよくあたれり或は青黄色ともありてもえきとよみし例もみゆれど多くは青白の色をいふ也あせやすき事の例に月草の花紫の類也又想に月くさする事なれば其言の浮虚なるをいはんとて縹をいふといひたるがうつりしにや今も輕薄なる事業をするものを淺

黄にするといふにもおもひくらふべし士由が說に我は仙臺の封內鄕村の方言には糞をもいひ又虛言をもいふ事也こは空言をにくみて糞に比したる言なるべしわが糞をもいふ義いかにも知りかたし强ていはゝはりは張にて自張まるの意かされと其形を山刃に取りたるにも物遠きやう也道のへ抔に此ものゝあるをそこになたあり足切りなどたはふれいふもいとをかし吾封內にかぎれる方言にぞと思ひしに此わたりにも空言をさいふ事はありし也同錄

かまち

池沼の堤の長き方を云ふこはもと障子より出たる事なりとぞ障子の製縱の緣にカマチを用ふるなり夫にかたとりしなりといふおもひの外なる事もあるものにぞ

きつちやぽふ

土地の高く岨たるやうなるをかくいふも何の意なるや知りがたし此頃此集を稿する折何村の枝村なりしや急斜（キツシヤ）といふ處有是にておもへば急斜原の轉じたるにはあらざるが原をほらといふも鄕民の言便也漆原をウルシホウといふ類也

おたち

飮食を强る事をいふ是も明らかならず高久靄下野白人畫工こは平將門無禮構をもうけ諸臣に飮食を給はり各飽みちたる折しば〳〵强られて猶あたはずば自ら置きすゝむべしとて座をたゝんとせしに君が御立に候はゞいかでかはやみてへらんとて喰けるより起りたる也と物しり人の語りしといへりさる事にやあらん

ぐちら

たとはゞ酒入たる小竹筒抔を小竹筒くぢら給はれといふは小竹筒ともいふ事也こもまた何の謂をしらずよくおもへばこはがての言にやぐちらとかで音りかよへりかてゝは且の宮にて一ッある上に又一ッあるをいふなれば酒ある上に小竹筒あるも其義かなへり○かてゝも又古言也

古今集躬恒の歌

我宿の花見かてらに來る人は
ちりなん後ぞ戀しかるへき

何かてゝといふも古言なる事みるべし

附錄

探索の序元祿年中の戸口藉を見しに人名いとめづらしき多ければ左に附錄して昔時のありさまをしらしむ

元祿二年人別帳（郡山鄕士安藤某所藏遊藝堂筆記之集に入る）

權兵衛母うしなと　彌三郎母さるま　萬藏院下女なは
金右衛門妻ふく松　與兵衛娘めと　與平母うのま
文左衛門妻おいろのすけ　與三郎妻かふてう　丹平妻いせしゆ
彌三郎妻うし松　長右衛門妻ちよま　卯之助妻いせよ
萬藏院子やろう　孫三母よれま
次右衛門下女小ゆき小うん一たま

元祿年中類族改帳

男名　こいせ　くらし　牛ま　さんまい　西ま　女の名　めこ松　うの松　いせこ　おたこ　めこ　こなへ　れまゝ　松　ふく　きく松

義鳴いへらく此頃は百五六十年昔なるを今に異なる事おとろく斗なり但此名にて思へば當時文飾なく質實一偏なる俗習推はかられたりさて近年壽をもて官府より賀稱ありし老婆に村はわすれたり ちよろといふものありしされば昔時の氣風すたれはてたるにもあるべからず按に上代は置て年山紀聞に伴決齋宮寮頭藤原相通といひしものゝ妻を小忌古曾といひけるよし小右記に見へたり水戸城下吉田社の文書の中に字男といふ女の名あり假名にはあたをとこと書たり今の世にはをかしき名なるべしと又新著聞集に伊勢國何氏の娘に犬といへるものあり抔みゆかゝればいづくにも昔時はさる名ありしと見えたり此外もありとおぼゆれどもいたづらに見過したれは坐右の書のみ引置しのみ（終）

物異類

隻目兒

日本紀略に云醍醐天皇寛平九年大七月廿二日乙未陸奥言安積郡所産小兒額上生一角亦有一目

義鳴いへらく續日本後記承和十三年二月の下に伊勢國言鈴鹿郡略茂麿妻略産男其體自胸以上兩頭分裂二人相對四手相備顔美麗髮甚黑自腹以下同共一體生而一日死焉といふ事あれば本文の異産あやしむべからず

黒塚鬼婆

安達原に一ツ家あり老婆住たるに夜なく燈火を高く付くといへり是は横竪千筋が道の見當なるべし主は女なり略道行人を止めなんかしそれか中には貯の多からんものゝ財寶をむさぼり又は打殺し衣をうはひなんとし其屍はものゝかけに隱しおきぬれども其頃は公庭へ遠ければ糺ものもなくて年月や經ぬらん聖武天皇の時神龜三年の秋八月熊野の奈智の東光坊の阿闍梨祐慶といへるもの彼家にさまり折しも夜寒の折なれは近きあたりの眞柴を折り焚火にあて參らせんと主の女出けるにあやしくおもひ物のひまよりよく見れば軒端にとゝく屍の朱に染たるあはれさを今更に我身に引請て逃退んと立出ぬ主かへりて客僧居ざりければ一間を見しや後立やとて追かけぬるに誠に鬼なん姿とやみん祐慶も今は叶はじと神佛に祈誓をかけ禱りしつめて遂に殺しぬとぞ其頭を埋めて塚をつき黒塚となん名付し云々名所誌の説也土人の僧もまた如此但弘誓山の縁記に記す處是に異なりそは既にいふ

義鳴いへらくこはまたく淨瑠理本より出たる事なるらんとおもひしに諸國里人傳に黒塚は武藏國足立郡大宮驛の森の中にあり又奥州安達郡にもありされども東光坊鬼女退散の地は武藏の國の足立郡を本所といへり則東光坊開基の寺といふあり今は曹洞宗紀州奈智の記錄にも武藏國足立郡の悪鬼退散とありて奥州の事は不見と又江戸名所圖會大宮山東光禪寺の條にも開山は紀州奈智山の東光坊阿闍梨祐慶也烏羽院の御宇關東に下向し法力を以て一宇を開て熊野の威光を關東にかゞやかすといへる意によりて寺を東光寺と號する足立が原に古塚あり黒塚と名づく塚に鬼

あり窟を宅とす慶師道力を勵是を伏す云々又黒塚の條に大宮驛氷川社より四町あまりあり東方森の中にあり往古東光坊阿闍梨祐慶惡鬼退治の地也昔は足立が原と唱ふとありさらば彼所にありし古事を同名なるまゝにこゝの事としたるにや古館辨には武藏國足立郡の黒塚は藤九郎盛長彼地賜りしのち二本松の黒塚を移すとありいかん　さりながら兼盛朝臣の歌に鬼こもれりとあるによりいよ〳〵鬼のこもりし處也と耳學の法はおもふらんかしいでや是をあかさん拾遺集此歌の詞書に黒塚といふ處に重之の妹あまたありと聞ていひ遣しはしけるとあり又大和物語には兼盛みちの國にて閑然のみのみこの女にありける人黒塚ともいふ處にはへりける其始共におこせたりけるをて此歌ありされば此詞の鬼と云は七面八臂などの恐ろしき鬼類をさしたるあらずこは只女の事也其例源氏物語箒木の巻藤式部といふものさる女にあひたるくたりにいつこにさる女があるべきおいらかに鬼とそ向ひ居たりけめむくつけき事と爪はじきをして云々此外あまたある也又伊勢物語に葎生てあれたる宿のうれたるはかり鬼のむたくも也けりこは鬼このみなる男長岡といふ所に住たるに女ごもあつまりて入り來りければ此男逃て奥にかくれたる時荒にけり言と女共のよみたる歌のかへしにて又女の事也さて此男のおにといひたる詞にし眞淵が決語古意前の葎の歌を醜女の出入（スダリ）義鳴いへらく眞淵伊勢物語亦かくの如しと書てかく荒たる宿居うれはしさはかりそめにも鬼ごもの取得て集るいと彼の女とものむれ來るをたとへてにくみたはふれていへりおにとは童ともか化ものてふ如きものをいへり古本に醜女と書しは神代記に黄泉醜女とあるによりてかの女どもをのゝしる意を書けりとあり是にてあきらけし退ていへらく決語古意前の歌の傍註に眞淵のいふある説に拾遺集兼盛の歌の詞のおふといふは外面似菩内心如羅刹てふ意也といへるはいかにぞや羅刹の如くとて女を見といはゝ重之の妹を戀ふる意になるべきやこは只黒塚に鬼のこもりたりし物語のありけんをたとへて女のあまり此人のもとにこもりあるよしゆかしく覺ゆるをいふのみにて只こは異也とありければたゞに鬼のすみたるとい

はんもさる事なりともおはるれど義鳴つら〳〵思惟するに重之の妹あるなしさせる婿契もなくてありけるを心にくゝもゆるしうと覺えてたはぶれの様にみたるらんそは中々に戀情の切なるが意外にあらはるゝ心地ぞする（一々話に重之の條に兼盛が歌に鬼こもるとは女をわざと鬼といひなして重之が妹あるかたこもりてあるよしを聞てゆかしうおぼゆる心をたぶれていひやりたる也此兼盛が歌によりて謡曲の安達原は作りたるものにて誠の鬼にあやなす也といへり義鳴が心にいとよくかなへりさるを羅刹の如しとて鬼といはゝ妹を戀ふが意とならしとはいはゝ昔かたりの鬼によそ人とよみたりとて亦何ぞ戀ふ意あるべきやこに眞淵がおもひあやまりしなるべし）長岡の鬼のすたゝといひたるも眞心にいまはしとおもひたるにはあらでたゝ打興したるのみされば此黒塚に鬼のこもりしといひしもまた兼盛がたはふれより出て古傳のあかしによりたるにはあらじとぞおもはる識者是が上をときあきらめて義鳴が惑をとくべし

積沼怪

昔時安積白川二郡の管領に淺香左衛門尉忠繁と申たる人ありいまだ嗣子なくあやめといへる女子一人あり美女他に越たれば長臣淺香玄蕃時郷といふもの主家に嗣子なきを悦び彼姫を妻とし家を押領せんとおもひたび〳〵口説けれどもなびかざれば力なし一日忠繁を我亭に招きたはかりて是を害し後には姫をも沼に投入たり夫より毎夜沼の中嵐おこり雷電頻にして百丈斗の靈蛇あらはれ時郷が屋宇を巻沼の中へ引落し一族盡く亡しぬされども其靈やまざれば沼の岸に假屋を作り祭りけるに水中に聲ありて郷八村は時郷が親属なれば其恨いかでかはれん今より後三月廿四日と限りまだ嫁せざる二八の女子をひとみ御供に備なば我たゝりをなさじといひしより其如くしたるに卅三番目に片平村賀太夫といふ富貴のものゝ娘其闔にあたりけり太夫是をなげきて妻にはかり人買に出坪坂（大和國）の郷に松浦金任長者といふものゝ娘佐世姫といふものを買得て身替にそなへける則ち棚に登りて身を供す棚木櫻とて今にあり少時あつて沼の中震動して百丈餘の大蛇水上にあらはれ姫をのまんす姫おそるゝ色なく提婆達經をよみけるに靈蛇も石上に頭をのせ是を聞く蛇冠石とて今にありかくて大蛇沼の中に浮み死したれば里人悦事甚し暫あつて二八斗の神女珠をさゝげて姫の前に來り御經の功德に

て蛇形の苦をまぬかれたり今西方に飛去て越後國にては蛇王權現とあらわれ近江國にては竹生島の辨天と跡をたれ汝が行末を守るべし汝死骨を以地藏芥の尊像を彫刻し給はるべしとて姫が傍に死骨をとゝめて消失ぬ夫より五寸五分の芥を彫刻し奉る時に養老七年也姫誓願して後代此里毒蛇の害ある事なかれとて淺香の二字を安積と改め滿日忽然として神女あらはれ姫を脊に負とおもへば大和國猿澤池の邊におりし神女は暇乞して飛さりぬ其ゆかりにや奈良の都に淺香山の井ありさて佐世姫は大友の狹手彦が妻となり狹彦入唐の折松浦ひれふり山に慕夫石の名を殘し松浦觀音とあらはれひとみ御供のため死したるものゝ三十二の塚の神は佐世姫と合せて卅三所の觀音とあがめ權勘太夫は慶（コロコヒ）の宮といふ心をとり喜宮明神と尊敬せられ喜宮精進とて今にあり云々（假石略談の主處）

義鳴いへらく怪語妄譚なるは誰もしる事ながら義兒のために是をとくまつ○蛇王權現云々其實は考ざれども其名よりて附會したるなるべし○竹生島辨天宮神社（ヤ）啓蒙に辨天竹生島の神社は宇賀魂神在近江國淺井郡都久夫須麻（ツクブスマ）神とありて祭神宇賀御魂なる事見るべし○淺香を安積とあらたむ云々始め阿尺と書たるを安積とあらためしも也そは卷之壹に云し如く也○大和國猿澤の邊におろし云々は平城天皇の寵おとろひて猿澤池に身を投てみまかりし采女が事を取出たる○彼地に安積山抔あるは後人の業なる事安積山の下に論ずるが如し○佐世姫は狹手彦の妻となり云々大伴狹手彦は宣化天皇の二年遣唐使に行たる人にて佐世姫が頭巾ふりてしたひたるは則其時の事にて養老七年に先づ事百八拾四年○喜宮明神云々片平の紀宮の條を見ておもふべし

俚諺に佐世姫實は觀音の權化にて曾て此毒蛇を解脫せんために松浦が女となり彼を解脫せりのちは竹生島へ乘跡し辨財天とあがめらる然るに權賀太夫姓としたるを恨み八鄕八村のものとも竹生島に詣ずれば必風波の難にあへり其事實にためしありて違ふことなし云々

義鳴いへらく觀音佛毒蛇を解脫せんとて假りに長者の女となりたらんには惟にそなへられしよ

り解脫せし迄も其本願にあらずやさるを何ぞや恨み憤て祟をなすの理あらん笑ふべく退て和漢三才圖會を按に竹生島辨天の條に祭神稻倉魂命鎭坐辨財天は千手觀音にて聖武天皇天平三年竹生島神大內に現し給ふにより行基に詔して竹生島に行幸あり天女の寶殿並忍穗耳尊大己貴命三社を作りて是を祭給ふまた阿彌陀觀音の金像を作りてもて本地とす其のち承和元年に慈覺大師眼病久しくいえす時に化人枕頭にあらはれ靈藥をあたへて曰我は是竹生島辨天也是を服すべし且修法護神とならん因て我本形をのこすと見て夢さめたり傍をみるに辨天の小像あり則大師感歎して彼藥を服せしに眼病立處に癒たりのち是を竹生島に送り奉る今のあする處の像也と云々かゝれば松浦女が竹生島へ出現したるなどいへるは此說よりつくり出しけん行基が枕頭に化人のあらはれ側に本形を遺したる也いとよく似たりさて義鳴過し頃四月朔日の日本邑を通りしとき人あまた地藏堂へ詣するをあやしみて何故ぞやと問たるに五六十年前に失はれたる地藏尊の古像寺中にてゆくりなく見出たる故それ拜見せんとてかくむれ立て詣する也といふさらばとておれも其像を見しに新しきと古きと二軀あり古は正しく石と見えて其形も定かならず新しきは其さまも明らかにて瘡疾に驗ありといひつたへしとて背を削りたる跡をみるに骨にはあらで鹿の角やうのもの也そはとまれ其像のあたらしきをいぶかりて向なる茶店の主に聞たゞす彼こたへていへらくそは四五年前須賀川に移轉して遷化したる先住謙堂とかやいひし僧の名石衛門といふものをして密に作らせて寺內に籠置たるを此頃見出したるにてはへる也實の像は我幼き頃見し事ありしに其色白く少し青を帶たるが木ならず石ならず誠に骨の曝たるが如く也しとかたりき其後雲根志を見るに蛇骨といふものをのせて其註に蛇骨の化したるものといふは誤り也土中に產して白く骨に似たる石也昔は日本にあることをしらず唐物を用ゆ今の世見出して澤山に出す尤効驗劣らす大和國大峯山相摸國箱根山にあり土俗切疵に用ゆよく血をとゞむ此石至てそ

はらか也又近江美濃よりも出すと見えたり義鳴是に至りて拍手しておもひらく此地藏の像も實は此蛇骨石もて刻せしを當時の人其石の日本にあることをしらざりしより何ものかを蛇骨といふに膽澤郡なる古傳を引合て佐世姫の事を作り出したるが誠しげになりたるにはあらざるかさて膽澤郡の事は開老志に心月寺在上葉場村號稻荷山往昔者富家掃部介其妻貪婪且頗多嫉妬遂生化鬼物死乃葬寺中後掃部亦死寺東北有古墓存とまた蝮蛇湖在北葉場村掃部介妻一ぱ飲此池水而變鬼物忽入池中死爲蝮蛇而棲于此鄉人怖之自是每歲以婦人而爲牲とまた四柱址者有都鳥村去池畔不遠一鄉村落以女備牲而爲例鴈軍次兵衛實者當其備仍買一女子其名曰小夜設架于四柳樹饌之犧而俟蛇出女子信觀音日讀大悲經此時轉讀數回以其功德而蛇蝎解戰苦脫畜身忽得佛果女子亦脫死而無恙後人稱設架地曰之四柱址土人曰小夜乃古稱松浦佐世者義實買之筑紫而葬茲邦者其所經過志田郡稻葉村有偏葉廬者按佐世姫中略非奥州事蓋彼義實所買女子小夜適與此合故附會于此とあり義鳴も曾て小夜といひし名より牽合したるにやとおもひしを洞岩氏の説暗にかなへりさて其傳の大同小異のみならずこゝにて片葉の蘆も生ずるなどいふをおもへば彼の地の古傳をこゝにもうつしたるが又こゝの舊説を彼地へ引あてしかいづれ二説皆信がたし又同錄に膽澤郡水澤の開老志にたがへり佐用姫が事日和田の説にいさゝかもたがはざるをもておもひは何れも附會の説なる事知るべしされども所々に此佐用姫の事あるはけだし故あり續日本後紀嘉祥二年播摩國佐用郡佐用津姫神預宮杜又峯相記に曰松浦佐與媛大伴佐提彦が妻也佐提彦渡唐遂不歸而死佐與媛悲嘆之餘來于此死地故祭爲神今案松浦郡亦有佐用嬉嗣安遊とあるによれば佐用媛を神に祭りて處々にあり筆とと見ゆこは佐提彦及佐用媛の後裔或は肥及播摩國より奥州に轉居せしもの抔の此社を建立せしが所々に存したるに後人附會の説をなしたるが自然傳説にもなりしならん又古より作り物語あるは小説などいふを作る事あれば彼傳説の如く作り設し事抔もありけるを其地に此社のある

にまかせて其説を實事の如くに傳たる故に同説の兩所につたはりたるにもあるべきにや又南部末の松山波打峠を北に蝦夷谷を南にみる所（地の名は忘れたり）其より西北の方に行道に追分ありて松浦佐夜姫堂あり同道の者云仙臺に此堂あり又此地にもありしといひしが不用の事なれば委しくは問はざりしと郡山の一仙老人（仙臺屋幸助）の話也其同道の者の云しは前の水澤村の事なるべしされば かやうの俘説世に多くあるものなるべしと見ゆ

國家萬葉記（刊本）に日和田村に昔永代淵といふありて青龍住て人をなやましたるに弘法大師是をいましめたり云々

義鳴いへらく安積沼の内に永代淵と稱する處ありしにやとまれ弘法大師の事抔別つに不聞説也又東國旅行談にも此沼のいけにゑの事あり取べきにあらねばこゝにはぶきつ

相生集卷之第十八稿　終

相生集　卷之第十九稿目錄

物異類

鬼火　妖鼠　木精　老猫怪
龍燈　龍入于天門　蛇塚　佛潜于樹幹
狐玉　鼷鼠　異僧　古墳靈
水府　來迎　靈狐愛牡丹　猿堀
姑獲鳥　雲堂封鬼　雲堂封蛙　大嶽祈雨
闘蛙　矢口氏怪　石橋氏怪　吠鳴石
枯竹生枝葉　天狗爪　老樹怪　白蝶怪

通計二十八事此本に取む

相生集　卷之第十九稿

外史　大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

物異類

鬼火

郡山驛東三軒屋と稱する處に雨夜の折に陰火燃るといふこは正しく燐といふものなるべし燐とは野血化成燐と云て人畜の血臟土中に深く染たるが濕氣に感じて火を發するをいふなり和漢古今其例ありて先達の說に往々あり

妖鼠

横塚村福藏の社あり其あたりに往古鼠の內裏と號せしものありて怪鼠の住たるといふ話を過し頃聞たるがおろ〳〵思ひ出るまゝ兒輩の談抔にとてかくなん　今はむかし福藏の社中に雌雄の鼠すめりしに雄鼠一とせ病に臥たる折鴨てふ鳥を喰はん事を欲す雌鼠其意を得て外に出たるに前栽の中に鴨一羽降り居て求食するを幸とししのびよりて咽喉のあたりに喰付たるに鳥はこともなげに鼠を掻き抓んで空の彼方に飛び去りぬ然てあるとき同じ陸奥人伊勢詣の歸るさにある路の傍に憂らしき鼠伏し居りしを男そゞろにあはれがりて懷に抱きとりて右左いたわりつゝ日をふるほどにいつかすが〳〵しうなんなりにけるあるよの夢に鼠男に告ていへらく吾儕は安積郡横塚といふ里に住はべりしをしか〳〵の事によりてゆくりなくこゝに來りやがて死ぬべかりしを御身が厚き情によりてながらひはべるぞうれしけれ我鄉國に率て行給はらんには此上なき情なるべしとかき口說と見て覺たり男奇異の思していよ〳〵其鼠をあつかひつゝ今日過ぎ明日と暮てやう〳〵横塚の里にぞ至りぬ鼠うれしげなるおもゝちしてこは吾儕が家路にてはべりぬ此頃の厚き御報ひまいらすべき事のはべれば猶もろともに行き給へ行給はんには家族等くさ〳〵の財參らすべけれと皆辭て聞耳といふものをほしがり給へとをしへていでや目をふさぎ給へといふ男目をとぢてたゞり行たるに今は目を開き給へといふ男又目をひらくにおのずから一ツの家あり鼠

又いへらくこれなん我儕が家にてはべるしばし相待ち給へと内に入りぬ男其家を見るに屋宇玲瓏珊瑚を柱とし梁とし玉しく庭も清らけく龍の都にありといふ金殿玉楼もかくにはあらじとおもひ居し鼠はやがて男を迎ひ入れて上座に据たるに氏族打つどひて何くれとまかなひつゝさていふやう此程の御情は海に山にたとゑんがたなふうれしくおもふゆへ参らすべきものゝはべりぬをいかゞはせんこは露ばかりとて七寶とやらんを持出て男の前置きたるに男は前の教へによりて聞耳といふを請たるにぞそは世に二なきものながら君が爲めにいかでかいとはべらんとて黄金もてかざりたる手箱の中よりとりて是をかぶり給はんには鳥といふ鳥の啼かたを明らかにしりておのづから世の富は御心のまゝにおはすべければゆめ奢侈のおもひをなさゞおこし給へぞ然あらんには此聞耳失はれはべるべしとねんごろにいましめて前の財に替てとらせぬ男其聞耳を見るに世に曰ふ頭巾やうのものにていたくあかつきけがれたるは見るだにいまはしとの前の財にくらぶれば立ならふべくもあらざれば益なき事してけりとおもふものからすべなくてやみければ時うつりぬとて鼠また前のごとくもとの處に送りいでゝ又の日をちぎりてわかれたりぬ男はうしろめたき業ながら其聞耳を打かぶりて行〳〵鳥の啼を聞けば皆いたづら事ならずおのがさま〴〵語りあはするなり或日烏のむらがりて啼くを聞しが一羽の烏いへらく虎丸長者の處女いたづきに臥したるが今はこゝろの月を經たれどおこたりさまの見えざるはいかなる故にやといふ一羽の烏答へに彼の長者先つ頃ある御社の門を營みたる折工人を情なく責使ひし故彼等は腹立て調伏のためにとて蛇と蟆と蛞蝓との三虫を櫃のもとに突入たるに其なやみ苦む一念彼か子に取付て病となりたるなりされば其處をあばきて三虫を放ちやらずば癒べからずといふ男聞て打うなづき長者がたへ音信て其故よしを告たるに長者はかつ驚きかつ怪しみて従者して其處をほらしむるに果して其言の如くなりければさすがにそらおそろしうて彼方此方へ放ちやりぬかくて幾程もなく娘の病も忘るゝばかり癒たりければさすがに長者はいみじう喜び

て男に金あまたとらせぬしかりしてより後はあまたたび幸ありてほと〳〵家も富むべかりしを身のあたゝまれば睡眠を増すといふ本文の如くやう〳〵前の戒も打忘れて奢侈の心付たりければ聞耳もいづ地へ行けん見えずなりけると語り傳へけるとなむ

義鳴いへらく漢土の公冶長白龜年の徒が鳥語を解たる事五雜俎に見えたれは鳥も空しく鳴くにはあらず亦是をきゝあきらめたる例ありとしるべし

木精

明和四年夏出村にて欅の大樹を伐りたるに幹中に骨節あり醫員中野氏の猴骨の記に夏出村隷陸奥國安積郡里正某宅有双大樹不知幾百年物延享元年甲子遭風而仆明和四年丁亥伐而爲板於中得若骨節者從其顔面至手臂間爲斧所破骨節亦摧碎不可得而辨其齒牙與指爪猶歴々可辨其最可明辨者脛骨長五寸周一寸五分趺上三寸五分足指一寸七分爪全具膝上五寸三分周一寸八分其色微赤於象宛然彫刻不啻惜哉不得視其全形里人傳稱猴骨家語云木石之怪夔蜩蜽白澤圖に云木之精曰彭候狀如狗無尾可煮食千歳之木有精曰賈船如狙案家語所謂夔蜩蜽白澤圖搜神記所載之彭候也此骨入共類矣盖以其形里人指爲骨抑有心也骨今藏里正之家云寛文癸丑秋八月撰とあり尤詳なり又友鷗の遊藝堂筆記卷の一には明和四年の春藏右衛門升平といふものに伐らせしに中に於て骨節の如きものを得たり云々とあり里正の云此木は欅にて烈風のために倒れたりしを其儘にて二十四年捨て置たり然るに隣家の小童の手習に入り其机を製する料に乞はれける時始て斧を加へたり中より骨節多く出づ工人小兒骨出たりとて積雪中にすてたりしを程經て吾祖父是を聞て雪の底より拾ひ出て篋中に藏めたりもし疾く是を知らば全體も有けむを犬烏やうのものなどいかにもせしにやあらん只欲損したる顔面と隻脛の膝より折たると齒牙指爪を疑血數枚あるのみといへりさて其骨皆微赤にして木膚の如く頗る橿に似たり脛骨のみあるは韋照の説の如くもとより獨足なるものなるべし顔面脛骨皆獼猴に似たるを人面猴身といへる甚協へり全體なきものは散逸したるにはあらで又

身體全備せぬものなるべし身體全備せばいかでか二十餘年仆たる樹中に在て徒に死せんや全く備はらざる時仆れたるを以て樹外に脫し去る事能ず卒に樹中に終るなるべし安藤重滿云安積郡郡山驛如寶寺にて古樹を伐りける時同じく猴骨の如きものと鴉首の如きもの方士由按に淮南子向注に所講畢其狀如鳥とある類なるべし と貳つ出たる事ありと是又頭首のみ以下まだ備はらざるにて年を經るを待て全體具足するなるべし 士由が花經樵話四十一樹神の條の說也和漢書數十部を引て是を證したれど勞を厭てはぶきつ

老猫怪

只野の山奥に猫又の怪折々ありて既に昔年藩士南部氏權之丞某其山中にて棺の新きに犢鼻褌のみ入りたるを見し事あり人爲にはあらじと見えたれば猫又といふものゝ死者を取さりて此二ツを殘せしなるべしと云へり今其あたりにクハシヤ坂といふ地あるにもさる事によりての名なるべし土人も云へり按に徒然草に奥山に猫またといふものありて人をくらふなる云々參考に猫まのたけといふ心にて猫またといふなるべし又和名抄猫音禰古麻善捕鼠也

燈龍

下守屋村妙見山に夜〳〵龍燈を點ずといへりさて此龍燈の名は五嶽符に五岳各有神夜龍女捧燈火慰とあるより起りたるにやされどこは神代の卷に天孫彦火出見尊海神の宮に趣き給ひ海神の女豐玉姬を娶らせ給ひたる事あれば夫等を本として海神の都とて洋中波底に金樓玉殿ありと思へるなるべけれど此龍岡といふは琉球の 俗說辨又琉球狀中山聰使略畧本朝怪談話故事事古文通 なり抔いひて先人皆洋中にあるにはあらざる事を明かせりさらば龍燈もまた海神のさゝぐるにあらざる事知るべきなり委は義鳴が別記芃蘭集に收めたればこゝにははぶきつ

龍入于天門

松藩野田日閑といへる老士の語られける中年の頃秋冬の間安積郡に行ける日片平富田二村を過て徘徊するに暴風俄に吹起り面を向べきやうもなかりければ主從二人地に匍匐して息つきあへり須更ありて頭を仰ぎ空を望見しに南の方久保田村にあたりて青天なるに龍の形をあらはしたり長さ壹里斗りもあるやらん只黑き一屯腹腰とおぼしき處にま

とへるばかりにて首尾ともに横さばかり也にありさま書にかけるに少しも違ふなくそのたくましき事二度目も見る事あたはず漸々に行ともなく居ともなく匍匐して乃至壹里ばかりも來りてまた空を仰ぎ視しに其時はや龍は雲中に入たりと覺しくて黒雲天にわたり風は猶強く吹て暴雨頻に降ぬべきやうにてありけるといへり秋評新語に乾隆乙未夏五月二十六日是に似たる事あり其類なるべし（雜記の略抄）他邦にもかやうの事あるよし諸書にみゆこゝには不抄

蛇塚

本宮明神の境内にあり由來に曰く當社の末社蛇宮は青龍大權現といはひ奉れり傳を承るにいつの世にかありけん怪しき女出來て幸あらん家にはよき事教へ惡しき事あらん家にはあしき事を敎ければ彼女を怪き事におもひて行方を求め見るに蛇塚といひつたへたる塚の中へ入りしと見えけるとぞ傳ける新異聞集といへる書には陸奥國鹽田郡宮本に蛇塚なると記してふる事にものせられたりこは本宮鄕鹽田といふべきを撰者の聞あやまりしなるべし次に二本松のふる事を記したれば　その小祠より五六丁こゝの本宮なることあきらけし

西南の方に其塚ありしを（今鹽田といふ處は僅にありしが昔はこのわたりすべて鹽田といひつらん　寶永の頃とかや黒川盛氏といへる人（名は又右衛門今の黒川の先なり）今の祠の所へ其塚を移して一宇を再興して神助を祈りしかば殊なる奇瑞も多かりけりとなん傳はりける蛇塚の名のみ稀にして人あはれともいはれある事を知る人なし心あらん人は古を忍ひて蛇塚に祈らば今とても其幸あらん云々士由按にこは實にさる事にて宮本は本宮のあやまりなるべしかにも鹽田とてふ處は本宮南街の西の丘山にて同じ街鹽田量平が祖先よりの墳墓ありて今尚鹽田の丘といふ此量平が家居いと古き家にて其先は此地に住せし由なりとぞ（同錄）

義鴉新著聞集を見るに奥州二本松領鹽田郡宮本といふ處の明神の前にてある人三四尺ばかりの蛇殺しける夫より蛇群り來りおのれと腹を咬破り凡一萬ばかりいやが上に重り死しけるこれを只事にあらずとて築き込蛇塚とて今にあり彼殺せしものは程なく一家ことごとく亡びけりいかなる故にかはべりけんとあり本文に全文をあげ

ざればこゝに補ふ

佛潜子樹幹

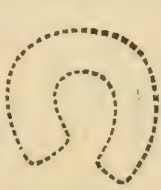
苗代田村切柳といふ處にて松の木の股に壹尺斗の石の地藏尊を載置しが松の育に從ひて漸々に喰ひ入て去年迄は其頭のみ僅に見えしが今文政五年に至りて全く見えずなりぬと大江村里正安部祐之介の話なりもし數十年の後此松を伐る事あらば此地藏必ず出づべく里俗奇異の事として妖人賣僧などのために欺かれいかなる事あり計るべからず古代よりいひつたへたる靈異の事にも又此類多かるべし（同錄）

狐玉

竹田町巴屋傳兵衞といへるもの會津へ所用あつて往とて中山村に一宿し翌朝峠の麓にさしかゝりしに毛毬の如きもの風につれて前に至りしを杖頭にて抑留し取上見れば指渡一寸五分の毛毬にて此毛は馬腹下の柔毛の如くやはらかにていろは惣體白く甲の眞中斗灰色なり毬中に肉あり掌上に置は濕々として生氣あり取得てより十餘月過れども溫柔もとの如し某藩士の狐を追し時狐の落せし毛玉と

いふもの是に同じと聞く故に乞て見合たるに全く同じ只形少しく大ぶりにて赤白毛の二毬なりと傳兵衞語る其取得し毛毬もたらし來る

其圖如此



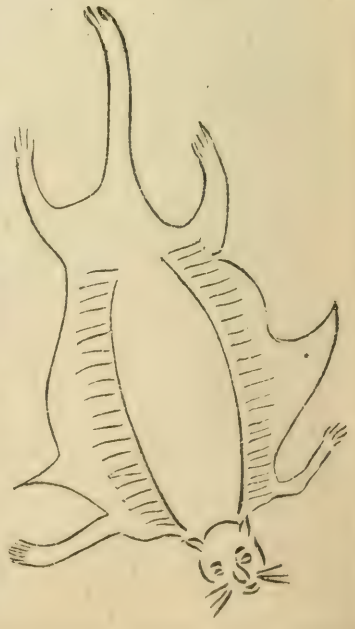
夜中人靜りしのち出し置時蠕動して遊行の氣味ありといふ諏訪藩の堀内元愷が信濃奇談を聞るに我藩士岡田某秋の末網もて三峯川の邊を行きけるに白き狐のあこがれて右に左にはふるゝを見てためらひよりて網打かけゝれば驚きあはてゝ逃去りし跡に光あるものあり拾ひ得て見れば白き毛もて作れるやうの玉なり今に其家に秘おきぬ又吉田氏にも狐玉あり其得やうも岡田に同じ猶他州にも是に類せる事ありとなん其圖も出せり全くこゝに圖するが如く（遊藝堂灾筆）

義鳴いへらく雲根志後編里人談に記せし元祿二年上京の人川東にて得たる狐玉も此奇談の說と大同小異なりこゝには不抄此頃我府下の町人某休石の原にて得たるといふも亦同じきものなりさればかゝるためしまゝある事と見へたり或人

是をイサラバサラといふは獣の鮮善の事にて此玉とは異なり

鼯鼠

文化丙子の二月封内只野村といへる村の山中地獄澤といふ處にて大木を伐りたるに其木の空竅より異獣を得たりマモウといふよし言罵りしかば政廳へ出すべき旨申達せし程に本月十四日にもたらして來るを見るに左の圖の如し具原翁の大和本草にある處の口鼠又鼯鼠といへるものなるべし和名ムサヽビ。バンノトリ。ソバヲシキ。モヽグハ。モヽガ和名抄にもあり皆一物なり本草肉翅四足連尾飛不能上狀如蝙蝠如小狐山中有之晴夜行飛南人見之以爲怪皮毛取産婦に持すれば産易しと云々大さ頭より尾迄一尺なり幅肉翅をひろげたる所五寸斗毛至て柔にして色蒼芥色尾毛少しく長く樺色なり前足は四爪後は五爪なり腹毛は白し一名五指鼠又飛鼠ともいふより明徐禎卿曉發盧山詩に下山鼯鼠鳴竹樹使人迷頓阿法師月か猶高まだ山の梢より曉落るムサヽビの聲抔ありて深山幽谷の内に栖て曉方啼ものと見ゆ聲は小兒の啼が如しといへり



いかゝにや同僚中澤鼎氏時の歌ムサヽビの聲だにきかぬ里人のけふみるからにおどろかれぬる國書義鳴いへらく荀子に梧五枝窮また詩經に心鼠々々勿食我苗抔ありと覺ゆるもの皆是なり爾雅に形大如鼠頭似鬼尾青黃色好田中食粟豆關西呼爲鼯鼠見廣雅云々また本草原禽獸類云口鼠釋名鼯鼠本經鼯鼠翼雅鼯耳鼠山海經鵸禽經飛生鳥弘景云々また萬葉集六卷十一年己卯天皇遊口高圓野之時小獸泄士之堵里之中於是適値勇士生而見獲即以此獸献上御在所副哥一首獸名俗曰牟佐毗（マスラヲノカマトヤマニセヲタレバサトニテリクル）丈夫之高圓山爾迫有者里爾下來流牟射佐毗曾此

右一首大伴坂上郎女作之なり但未逕奏而小獸死斃因此献歌停之

略解に云大和國添上郡高圓和名抄鼯鼠一名鼯鼠毛美俗云無佐佐比云々今下野二荒山の邊には樹山を多くかけるとぞ俗づスマといふものなりとまた七の卷寄獸

三國山木未爾住歷武佐左妣乃此待鳥如吾俟將瘦（ミクニヤマコスレニスマフムサヘヒノトマツカコトワヲマチヤセン）

此歌によれば小鳥をとるものとみゆ只野村のものゝママウといひしはマミの訛りなるべし

異僧

舟形山善應寺に殘夢といへる僧すみたり實は常陸坊海存なりけれども世人是を知るものなかりしを一日遍照尊寺の住僧雲堂彼と碁を圍たるに雲堂碁子を出しながら汝は海存にはあらずやといひしに彼僧其のち何地行けん知らずなりしといへりさて是は其身の實を知られたる故に跡を滅したるならんといへりさて負あるきし笈も近き頃迄傳はりしに寺僧のこゝろなきか打毀て種々の箸に作り替しぞ可惜眞蹟は今につたはりて一年古筆の鑑定者に見せて眞蹟にまかふべくもあらねど紙の新らしきをいかゞせんといひしとなり抑此海存は義經公と共に東下し其後跡を沒して定かに知る人なけれども彼は地仙の術を得てひたふるに世にありしといふ說ありて聞老志にも神社考曰奥州殘夢者自字曰呼自又自禰秋風道人略時々與人語以元曆文治之曆而言其時義經爲何□辨慶爲其事略殆始親見之者人怪之曰紱盖常陸坊耶海聞而喜之云々平泉有異人號淸悅其人同而其傳異乎とあれはさる傳も世に行はれしなるべしさて里老の傳に殘夢始め會津に住し後こゝに移りしなりといへり案に四家合考附錄に天正三年乙亥九月廿六日實相寺桃林奬語和尙示寂一名殘夢又秋風道人或は醉月云々會津風土記には契語禪師所々住持なす雲岩寺亦三住天文年中來住于此とありさて此僧雲堂と碁を圍みたらんには寬文年中の頃こゝに住たるならんさらば天正年中實相寺にて寂せしといふに叶はんうたがふべし此僧に奇談あり一人の小童此僧に從て書を學ぶものあり一とせ六月半といふに僧此兒を呼て明日は京都の祇園會なり汝見んとおもへるやいかにといはれければ願はしき事にぞと答たり其時童子を法衣の袖に入れ行く一瞬の中に其地に至り著き祭事を見

る事終日にして歸らんとするとき菓子一箱を買得て童にあたへ其夜の中にもとの寺内へかへりしとなん其童子己が家にかへり祇園會の見し事始め終りを物語るに祭事の式何くれの事まで露たがふ事なく且菓子の箱を見るに京何通某製すといふ箱を置たるを見て人皆奇異の思してけりと語りつたへたるに北越奇談蒲原郡瀧谷村慈光寺の童子をともなひて祇園會の祭事に行きたるより菓子を求めてかへりし迄こゝの傳に同じ事をのせたりまた天狗名義考刊本にも何國なりしやわすれたりとも此二ツの話に同じ傳をのせたると覺ゆされば外にもかゝることゝ昔語はありと見ゆれば異僧の事もいと〳〵いぶかしき事なり

古墳墓

新著聞集に奥州二本松藥研屋久心といふもの庭を造りて同所の正念寺の山に苔生古びたる石塔を見立て踏石にしけるが其頃より恐ろしき夢見る事度々なりしある時晝寢せしに若き女いみしき姿にて來り我久しく住なれし處を引放ち是へは何とて連來れるやと怒れる眼さしのすさまじきに胸うち擾ぎ只忙然としてやゝあつて人心になりぬるにある老人の曰く誰彼に語りけるにある老人のいはく此踏石は八十三年以前に畠山重次といひし人の娘十七八にてみまかりけるを葬りし石塔なりとつたへ聞しかどかゝる凶夢は其祟にてはべりなん早く元の處に歸されよとありしまゝ其訓にせしより夢止し延寶年中の事なり

義鳴いへらく金承抄には此石は本町大内休庵といへるものゝ築山の立石に用ひたるよし今に夢想石とて二松山の什物となれり（其事は大同小異なれば不抄）本文の久心は久安より誤りしならんさて畠山家に重次といひし人不見つら〳〵おもふに此夢は延寶年中の事とし幽鬼は八十年前に死したる娘の事なりといふによればこは畠山義繼の誤りにや（義繼は天正五十三年討死なれば延寶元年迄八十九年にて大凡あたれり）されども金華抄に誰娘といふ事もなく大内休庵といへるもの町年寄にて元和八年御巡見使書上の記文の末に大内休庵七十三歳とあるは則此者なりと見ゆかゝれば延寶年中の事とするはたがへり何れにか誤あるべし

水府

三浦文骨話云吾が治下より一里十丁ばかり東に下太田といふ村有其村を流るゝ河を嚊川といふ閑流は即ち會隈川に入る其末流より二丁斗上流に彌太郎淵といふ處あり村老傳て水府なりといふ又同じ村に彌太郎といへる豪家あり頗る村里中の舊家なり古より其家に藏せる器財の類はあらかじめ前日に借約の一書を認て水中に投ずれば翌日早旦に必請ふ處の器財石上にあり取來て用度となし事終れば又石上に持行て置けば忽ち見えず厨中の雜器文房の彌財等何によらずかくの如し其故を知るものなし今より四世の封君の入らせ給ひし折迄は用度の器水府に借しもの多かりしに近き頃は絶て其事なしこは其器財の中もし誤て破損する事あれば其罪を告て器をかへしけるに一年厨器を破損し其罪を謝せずして返しけるより請といへども器を出さずといふ夫よりして其家漸々に衰ひて今は其名殘さへ知るものなく予が祖母など幼稚の時親しく見聞せしより語られきといへり士由案に此類の說諸國に間々あり本朝俗諺志卷の二楠御前椀借の條にいふ駿遠の界大井川の川上島田宿より一里ばかりの笹が窪といふ村あり此處の澤に楠茂りたる一森の內に楠御前といふ小祠あり此社へ願て膳椀を借る事あり入用の前日社に詣明日膳椀何人前貸し下さるべしと祈るに翌朝來の家具皆そろて宮の前なる岩の上に出してあり云々又信州奇談卷の下龍ケ五塚の條にいふ松島玉の塚の東にさゝやかなる塚ありて石を覆へり龍宮塚といふ其石の下に昔は穴ありて此里人客人塚ありて得まほしき調度膳椀やうの品々を書付て穴に入置けば其夜の內に塚の前に出し置く事古より近き頃迄龍がありと云々（花經蕉話四ノ卷略）義鳴いへらく東國旅行談にのせたる伊勢國安濃田といふ處なる椀久塚傳のも大かた本文の事に同じ爰に不抄

來迎

戊午七年十日吾藩青木平左衞門といへる士平石村赤石といふ處あり大ゐ川の中島へ出て釣をたれける時折しも日輪扶桑の上に發して朝霧の時開きける內に忽然として阿彌陀觀音勢至の三尊の形あらはれ其間口をくりて三尊日輪の三ツ並びたる內

に在て光明を放ちたるさま其長さ人長ほどに見へたり暫くして風と共に消失たりと語れり此事同家中村喜中右衛門の聞て語りけるは予も弱年の頃大くま川救世の渡場にて入り日の三佛尊體を見たりしと右の如くなりけるとなり大くま川の邊にはかゝる事のまゝある處と見えたり富翁雜記

義鳴いへらく南嶺子に富士の嶺の來迎を評して云曾て富士に上る夜既に明けて日正に出んとする時先達の曰是れ來迎よと予一心に拜するに五色の雲のやうなるものゝ中に佛の如きものあり然るにうなづけば彼佛もうなづき予靜にすれば彼佛も靜なり仍豁然として是自身の影なる事を知るといへり突花談叢に此說を引てなるほど尤なり實に自身の顏法師のみ異國にも同樣なることありとて白川燕談の說をあげたり此外諸書に見えたるは皆苑圃集に收めたり實に自身の顏なる事うたがふべからず

靈狐愛牡丹

北戶澤村の內にかや姬明神といふあり此山に牡丹多し是を外へ移すことならざるよし既に先年嶺光院三郎右衛門殿江口氏此牡丹を屋敷へ移し植候へばいつともなく三郎右衛門〳〵とほのかに毎夜〳〵呼聲聞え候よしあまり不審なるまゝに兼て目をかけ御召仕候草取角藏といふものへしか〳〵の趣を咄候へば角藏申候は夫は先日かや姬明神の山より牡丹を御屋敷へ御移被成し故の事なるべし早々本の山へ返し被成丹候はゞ可然よし申に付元の株より增して返し植し處其夜より三郎右衛門と名を呼事やめ候と申傳尤此山は世俗呼て牡丹がへりと唱ならし申候ゆかや姬明神は白狐なりと申候よし同村名主武藤作藏といふもの信武廻村の砌御咄し候由矢島氏の話

猿　堀

邊部に「かまいたち」と云事ありつむぢ風吹そふ時目に見えざるもの來て人に疵付るありて血も流れず痛も甚しからず只刃物にてくぢり取樣なり王城近き處又土官或は一藝を治めたる人にはなしといへり吾藩西新殿村の西泉寺といふ寺の廊下に鎌いたち穴と云て松樣の破れたる處あり是へ足を踏入るゝものあれば忽ち創付事なり直に見たる人の物

語を聞けり和漢三方圖繪には極寒の陰毒なりもし鎌いたちの害にあふものは蒺藜の汁をつくれば即ち癒ゆ相州の鎌風とは似て同じからずといへり廣大和本草猿堀和名カマイタチ引廣州方物記云猿堀因風騰躍甚捷越巖過樹如飛空中人張鈹網得之見人則如羞叩頭爲乞憐之態人憫擊之倏然死矣以口向風須臾復活惟碎其骨其腦一々云刀斫不入火焚不燒打之如皮薦雖鈹擊其頭風起惟石嵩蒲寒其鼻即死耳不活嶺南人呼曰風狸即此獸也本邦にて能州に多し傷られたるものは嵩蒲にて急にあらひ又煎じ呑て佳なり舊曆黑燒を附も妙なりといへり雜話異妙

鬪蛙

義鳴甘年ばかりの古へ櫻谷の南なる田で貳反ばかりが間に鬪蛙を見し事あり今其形勢をおもふに仙臺藩士洲藤子溫が聞見隨筆に記せし鬪蛙の條につゆもたがふ事なければこゝに出して予が勞をはぶく其書いへらく鬪蛙は所々にて見たり元祿中東都護國寺の門前の道を隔て東西の田に陣を張りて戰ひしは數萬の蛙南北六七丁に充滿して蟾蜍は蟾蜍金線は金線種類を以て隊を作り南陣相對し啼聲如雷一蛙東陣より路にのぼれば西陣にまた一蛙登りて戰ふ傷られて走る時は我陣の蛙を取來りてほつて逐る戰死すれば是を含て我陣に入る終には西陣亂て戰ふ死傷數を知ず西陣破れ走れば東陣是を追ふ事畔を越えず我陣に歸る東陣破るゝ時も如此云々とあり義鳴按に前漢書武帝の元狩五年に蝦蟇の鬪ありし事をのせたる彼國にも古くよりあやしき事とせしと見ゆ

矢口

寬政元年吾藩備後屋敷といふ處に矢口里右衞門といへるものあり壬六月十三四日の頃なるに家の內の草履不圖失けるを始めは外より來るものゝ違ひたるやらんと彼方此方とたつねけるに次第に草履ども多くうせけるは能々見れば目にも不見ものゝ來りて取行さまなり後には衣類釜又は鍋蓋杓も失ける狐狸の類古鏡古劒を恐れぬよしにて古鏡を立置けるに是も幾程もなく失せける又古劒をも恐れず又犬のたくましきを蓄置けれども犬の傍にありしものも取行きけるとなり予も此怪物の書たりとて筆跡二紙をもち來りて見せはべる人あり誠に幽

明有異なるにや至極の草字の如くにて或可讀して不可讀處も多く見え傳るなり按るに千年を經たる狐狸は古劒古鏡も不恐犬もはゞかる事なく只千年の枯木を焚く是を照せば形見ゆると聞けり晉張華が燕照王墓處の華表の木を燈して狐の形を顯したる搜神記に見ゆ云々雜話

石橋氏怪

同じき二年の頃代官町石橋氏に怪物の出たりしも始は前件の如くなりしが後にはくさ〳〵の戲れ又はものゝ音など調子おもしろくものせしとなん今も人口に殘りたればくはしく不記按るに里人談ふ享保の始武州相州の境信濃坂に毎夜囃ものゝ音あり笛太皷の音杯四五人の聲して中に老人の聲ありけるを近在又は江戸抔より是を聞に行人多し方十町に響きて始は其處しれざりしが次第に近く聞つけて其村の産生神の森の中なり折りとしては箇を焚く事あり翌朝みれば青松葉の枝燃さして境内にあり或は又青竹の大なるか長一尺あまり節をとめてきりたるか森の中に捨ありける是は彼の皷にてあるべしと里人いへり只囃のみして何の禍もなし月を經て止ぬ夏の頃より秋冬かけて此事あり次第〳〵に間遠になり三日五日の間夫より七日十日の間をへだゝり始めの程は聞く人も多くありて何のこゝろもなかりけるのち〳〵は自然とおそろしくなりて翌年春の頃囃のある夜は里人も門戸を閉て戸出をせず物音も高くせざりしとなり春の末つかたいつとなく止けりとあり是ほゞ石橋氏の怪に似たりこは世にいふ天狗抔の仕業にやあるらん

吠鳴石

香泉寺舊地郭内新町にあり此石夜々ごナリければ世に吠鳴石と名付て兒女抔は新丁の夜の道はやみにけり金華堂

雲堂對鬼

輿山集云雲堂の弟子彦祥編二本松府上有魅鬼爲祟宅地時々現禿童形露茂草際弄池中水夜喚起人竈下吹晩來就人肩又同吹或持火炬先行欲追捕忽亡壓咀夜寢種々爲怪事春夏多顯秋冬稀見人皆曰河伯宅千二相易數回方今醫生佐藤宗佐請以修築居直按今伊藤伴翁宅也因就予累乞彼得脫於是修秘護摩供兩日時寒子適從江東干我傍初曰偈曰云々亦略遊藝堂次筆

雲堂對蛙

遍照尊寺の境内なる池の蛙喧しとて雲堂呪咀して是をとゝめしとて今猶聲を張る事なし按に出羽落伏の永泉寺の住持は源翁和尚なりけるが呪咀によりて境内なる池中の蛙鳴聲せずと和漢三方圖繪に見へ大阪朝生寺超譽は鹽町に閑居の庵を占しに庭中の蛙群鳴て喧しかりければ十念を授て停止せられしに生涯の中は曾て鳴ざりしとぞ新著聞集幷東國旅行談にあるも同日の談なり

大嶽祈雨

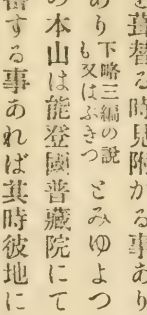
傳にいふ昔時大に旱せし時國公大嶽に仰せて雨を祈せられたり其時官某警固の命を受て其處にありしを僧のいへらく汝たちは雨の具をもち給ひしにや我れもし祈らんには雨はたちまちふりはべるべきをとてしばらく祈念したるに果して其言の如く洪雨頻にふりしかば官人等ひたぬれにぬれたりとかや此事いぶかしくおもひ大嶽禪師語錄といふものに

謂雨拈香拙語七月九日啓建道場期五日而祈應到十二日之暮大雨洪水太有驗

這寶水　阿耨達池沈水槎　當陽拈起露滋　天公惜雨多無施
人主節財省費時　含識羅炎熱患　謹焚一片禱牟尼
龍王受佛威神力　必倒江河灌羅
索訶世界南贍浮洲大日本國奥州路安達郡二本松神
龍山松岡禪寺住比丘祖清寛文八年秋七月丁旱魃之
辰爲報國恩救蒼生啓建請雨道場而拈香讀佛仍集清
衆課誦經咒累曰祈靈應仰冀
本師大覺世尊一切諸佛一切諸菩薩
初祖圓覺大師臨濟惠禪
本省圓成佛心覺照國師
三國傳燈歷代祖神　祠山張大帝
護法諸天仙兎大龍王五方雷神地界水界
一切明靈日本大小神祇鑑斯丹懇休徵速錫
雨澤相隨
方今恒賜爲之災　天下悉望鳴鶴
惟時文地纔兎濕　田間猶如折龜
村々勞抱甕之役
處々愁破之塊遲
恭以
本師大覺世尊

欝曇祥瑞
耳露如來
正法雲　覆沙界而燮鏈
定惠水　湛靈臺而淋漓
上根下機普蒙鴻澤
三草二木皆浴大悲
憐窮子之渴飢　與醍醐於靈鷲嶺
蘇小士之枯稿　說般若於白鷺池
敎化昔已滿
感應今何虧伏願
勅龍王逞挐雲之勢
令雷師靈奔電之威
滂沱洪潤園圃
潢潦忽滿藩籬
稻粱洒々
禾黍離々
萬民耽豊樂
四海遂無爲
佛之鄙詞也更有一字之請雨陀羅尼其源出自滹河流傳
到山野血脈不斷今爲國家驀口唱出四海龍王五方雷師
聞之々々喝
謝雨頌　七月十三日之朝
祈雨道場新得應　又▷寶木謝龍王
黎民從此休霓望　大地深沾盡十方
とあればうたがふべきにあらず
枯竹生枝葉
享和年中の事なるに蓮華寺なる淺尾某の墳墓に去年七月斫て建たる竹の花立の翌年正月に至り枝葉生じたる事あり太平廣記に采郭仲產爲南郡從事元嘉末以竹爲柄竹漸生枝葉云々唐王智興所持箒墳墓の地立置たるに一日に枝葉叢生たる事あり其後智興位至方伯云淺尾氏も一兩年過て番師の職に任ぜられたり雜話群稿
天狗爪
龍泉寺什寶の內に天狗の爪といふものありさて天狗といふもの諸家の說紛々四紙五管の盡すべきにあらずそは皆濱廼眞砂中に收めたり此爪といふも眞物なりや知りがらけれども雲根志後編にのせたる天狗爪石といふものなるべし其形は

本府鍋谷町金藏といへるもの、持たるを義鳴見し事のありけるに其形、是と大に同じ



如此解にいふ長さ一二寸先尖り根に肉つきあり色黒紫雨端鋸齒の如く實に似たり雷の落し跡或は古き屋根を葺替る時見附かる事あり能登國七尾近所に稀にあり下略三編の說も又はぶきつ　とみゆよつて竊に思へらく龍泉寺の本山は能登國普藏院にてこゝの僧折々彼寺に輪番する事あれば其時彼地にて得たるを持かへりて寺の什寶に供ひしにはあらざるか

老樹怪

信夫郡八丁目の驛西に西光寺と稱する地ありこは今驛裏にある處の西光寺の本地なり故に此名稱あり其地に無量壽佛の堂ありて其側に老松三本あり千歲を經たりとて大さ牛を隱すべし因て此地を三本松とも呼べり然るに文化二乙丑の年春西光寺の現住某僧一時の窮を脫せんが爲に棟梁の材に是を賣る終に柚に命じ卯月初めの四日是を伐るべきに定まりしに三日の薄暮○き少童三人相携て號泣し走り去りしを其わたりの農夫聞たりといへる流說

もあり殊に奇なりしは同じき夜乞丐夫婦小兒を携て此木の下に舍りしに既夜央ならんと欲する頃ほひ一陣の冷風俄然として吹來れる音に驚き倶に眼を開きてみれば中央には上下着たる壯麗の壯士座し左右に補襠姿の窈窕たる佳人二人侍す乞丐夫婦何人にて何地より來り給へるぞと再四問けれども默然として答なし只悒々慇々として愁るが如く傷めるが如く座するに物すさまじく畏ろしけにて肝消へ魂飛び身の毛皆立て顔をあぐるあたはず袖うちかへきて打ち伏したり暫時ありて頭を上げて見ればさるもの更に在る事なし彌畏ろしくたへがたく相携て逃去り伏拜みといふ村端の杉の下に舍りし乞丐者の許に行てしか〳〵のよしを告げ乞丐其狀を見るに面色皆土の如く股栗してやまず然れども此深更に及びて舍れる處を逃來れるはもしよからぬ業をもなして飾言を爲せるも斗しがたしと思惟して夫婦を己が舍りし處に臥さしめ拂曉に此驛に至りて動止を聞んと欲し驛中最第一の早起利三といへるもの例の如く起出で門頭にありしにしか〳〵の由を告ぐ利三聞て昨夜驛中異事あることを

聞ず飾言にはあるべからず彼の舎りし彌陀堂の杉は年を知る者なく古老も千年や經ぬらんといへり無情の草木と雖ども老物は靈あるものなるを此頃聞に寺主賣りて材となし然るを今日伐倒す由なれば其精靈是を悲みて顯はれ出たるものなるべしと示して乞丐をばかへしぬ此日加藤紫明（通稱忠兵衛）婦翁笛聲老人の卒哭忌なれば衆と供に其墓に詣たるに利三其中にありて此事を話す紫明元より善を好む人なりければ嘆息してやまず頓て買受せんの意あり衆に說ていふ禮にも不伐塚木といへりいかに況んや堂社の木をや凡俗みだりに利に走て是等の老樹を伐たふす事年々枚擧に遑あらず實に痛惜にたへたり殊にかくばかり靈を顯はして伐られん事を悲しめるを何とて救はであるべきやとて丁寧反復して說けるに人本石にあらざれば衆皆側隱の心を生じ立處に合意して數金に至る時既に午に近かりければまつとく救ずんばあるべからずといふに義に勇む壯年二人拂衣して田圃渠溝をいはず直に疾走り其樹を伐る事なかれと揚言して忽ちに至るに杣も斧を止めて云吾今日に至るまで許多の樹を伐り試に老樹は必ず水を發すされども此木の如くある事なし一斧あつるとひとしく激水飛ちる事四五尺餘更に面を向ることあたはず甚怪しむ處なりと云ひ止て卒倒し更に人事をしらず戸板にのせて其家に送るに頓て人事をしらざる事七日晝夜漸八日といふあした始めて粥を啜事を得數日を經て元に復し辛き命を助かりしとぞすべて此事を賣りし時言加へたるもの大人地主を始（寺僧にあらず加藤氏某なり先祖此地を西光寺に寄し附せなり）として其月の中におの〳〵難死急死にて失たりとなん是疑もなく其杉靈のいたす所なり蓋其杉中央は雄左右は雌なるに左側に立る雌木は彼杣が既に斧を加たるものにて鋸もて挽ける事貳尺有餘なれば惜むべし終に枯果たり其餘の双樹は今に存在してます〳〵繁茂す夫よりして四月四日を祭りとして蟻集して至り茶餅何くれを供する事今に怠らずと紫明の話なり（撫話廿五卷）

白蝶怪

奥州二本松の家士のもとに夜毎に白蝶來て其あるじにさはる忽ち身節痛み苦むある夜廣間に磐石落るばかりの音す見れば長五尺もあるべき白蝶立て

人のあゆむが如くに入來りすはやと太刀おつとり切にたゞすく〳〵とはく抔の飛やうに吹飛て更に正體なし夫よりのち遂に來らすあるじ病もやみにける其後東武に出て語りけるとなり刊本虚實雜談集

相生集　卷之第十九稿　終

相生集　卷之第二十稿目錄

雜類

古驛傳考　古官道　移鎌倉地名
小濱交戰　仙道七郡　仙道七家
蔗名食邑　二將入二本松城　河東河西
鄉名隔田　某內　貢弓馬
開府　置縣令里長　分村伍
水帳　酒帚　里程
水戶侯狂歌　仙臺侯和歌　高泉詩
古印　古磬　古錢
欹器

惣計廿五條此冊に收む

相生集　卷之第二十稿

外史　大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

雜類

古驛傳　和名抄所載

安積郡　入野　佐戸　芳賀　小野

丸子　小川　葦屋　安積

安達郡　小倉　日理（日は亘の誤）　鍬山　靜戸

伊達　安岐　驛家

同延喜式所載

蘆屋　安達　湯日　岑越　伊達

小野（各十匹）　安積（各五匹）

通考

小倉友鷗翁いふ今信夫郡小倉路村あり其地にや親重は是はこうくらと訓じたるより變じて高倉（コウクラ）と書き又うつりて「たかくら」となりしにや

亘理同翁い福城下近く亘理村あり則其地なるを混じたるにや親重は和田かと

芳賀今の郡山なる事諸記に見ゆ

小川親重いふ小川（サ）とよみ替たるにや今の笹川なるべし

安積友鷗翁いふ今の片平にやといふ説もあれど永享十一年氏祐が八幡村八幡の幢料に寄附したる文書に見へたり村名の順次もておもへば今の日和田なるべし

鍬山同翁いふ山木屋に桑山といふ所あり其地にや

葦屋親重いふ今の高倉村の管下萱沼の地か

安岐同いふ郡山の内に國造を祭りたる阿賀岐といふ處あり往古は人里もありしといへば則其地にやあかはあをのべたるなり

伊達同云ふ館が友鷗翁は今の伊達郡の舊名かと

岑越同云ふ二本松か

靜戸廣海云ふ宣長翁の説に云々此靜戸は信夫郡に近き處と見ゆれば今の油井村の内證據屋敷といふあり則靜戸とよみひかめたるより文字をも書替たるにや

湯日士由いふ今の油井か

義鳴いへらく諸子の説如此し今是を取捨し己れが僻案をもまじへて其地をもらさずとはもとより推て試にいふのみ識者杜撰をとかむべからず

入野今の只野其地にて葦屋に入る方の野を開きしよりの名なりしを徒野の意となりしにはあらざるか

佐戸安達荒井の内に古戸といふありこは左戸と書たるを字形の似たるより古戸となりしか且其邊を流るゝ川を瀬戸川といふも則さとうつりたるにてかたゞ〳〵佐戸の地なるべしとおもはる

芳賀郡山の舊名なる事うたがひなし

小野今の大槻は古官道にありて驛路なりといひ且今も小山などいふ地もあれば小野は則今の大槻邊にありしか按に白河古事考に今田村小野新町あり昔は白河郡の内にて古の小野なるべしといへり或人是を安積の小野と心得たれどもこは和名抄白河管下小野の考にてこゝとは別地なり

丸子西新殿村の内に丸久保といふ地ありクホの反こなれは則古への丸にはあらざりしか

小川笹川は御所滿真の居住の地にて古は著邑なりしとみゆれば親重の説とるべし

葦屋親重の説とるべきに似たれども退ておもふに片平只野抔も古への官道にてありしといへり今の萱峠は則其名殘にて葦屋は彼地の邊にありしにはあらざるか萱と葦とともに同種なれば呼替たるならん

安積今の日和田なる事違ひあるべからず

小倉友鷗翁の説取るべきに似たれども今現に上伊豆島と長橋とに小倉といふ地あり蓋其地なるべし（此村は相ならひたる村なれば古へ小倉とひし時は一村なりしをのち兩村にわかれし折名も二ツにのこりしならん）二

亘理伊達郡は安達信夫より出たる上に和名抄信夫伊達との驛をのせざれば彼地にありしを混じたるにて友鷗翁のいはれし如く今の亘理村にやとおもふと深く尋ぬるに片平の管下に渡戸といふ地ありこの地はあふせ川の上流と今一ツの小川をわたりて行地なれば是今の地形にていふ事なれどもあふせ川は名所なりければ古流なるもと論なし（信濃地名考亘理の條）其邊を渡といひしを亘理と書たるにやに水南北亘理清水二驛を置たるべしと見ゆ是も水邊によしある故しかいひたるなり戸は則門の意にて渡門ともいひしなるらん江戸水戸も寛は門なり片平も古の道路なる事知るけれどもかく云のみ（因にいふ前にあけたる古戸といふも五百川と瀬戸川との中間にある

地なれば是を小渡又狭門といはんもふさはしき所なり奇といふべし五百川も又古流なり

鍬山友鴎翁の説に従ふべし

静戸證據屋敷は古へ大村にてしかも往還の地なりしといへば廣海が考にまかすべし續記に信夫に静戸上と稱せし人あり是則其地のをくつゝきたるより其名を負たるなるべしされば静戸は今の證據屋敷なる事明らかならんこゝちす

伊達前にいひし如く信夫安達より出たり郡なれば友鴎翁の言にまかすべし尚次にいふを見よ

安岐親重が考至當なるべしとおもひしかどつら〳〵按に田澤村の内に明内といふ地あり是則安岐なるを其わたりには河内とはいふ地多ければ夫にならひて内といふを添たるにやかくあらんには桑山への道程に便よければしかおもふのみされて親重の考も拾かたければ二ツながら存して學者の批評にゆたぬ

岑越おもふに石筵も古の官道にて夫より嶽山の腰を過て信夫の方へ出しといへば石筵の邊則岑越の舊地にはあらざりしが岑は小峯なりともありて石筵の地形とふさはし石筵とは義家朝臣石山に息つれしよりの名なりといへり其時既に村落ありしことは著しされば前名岑越といひけんもしるべからず

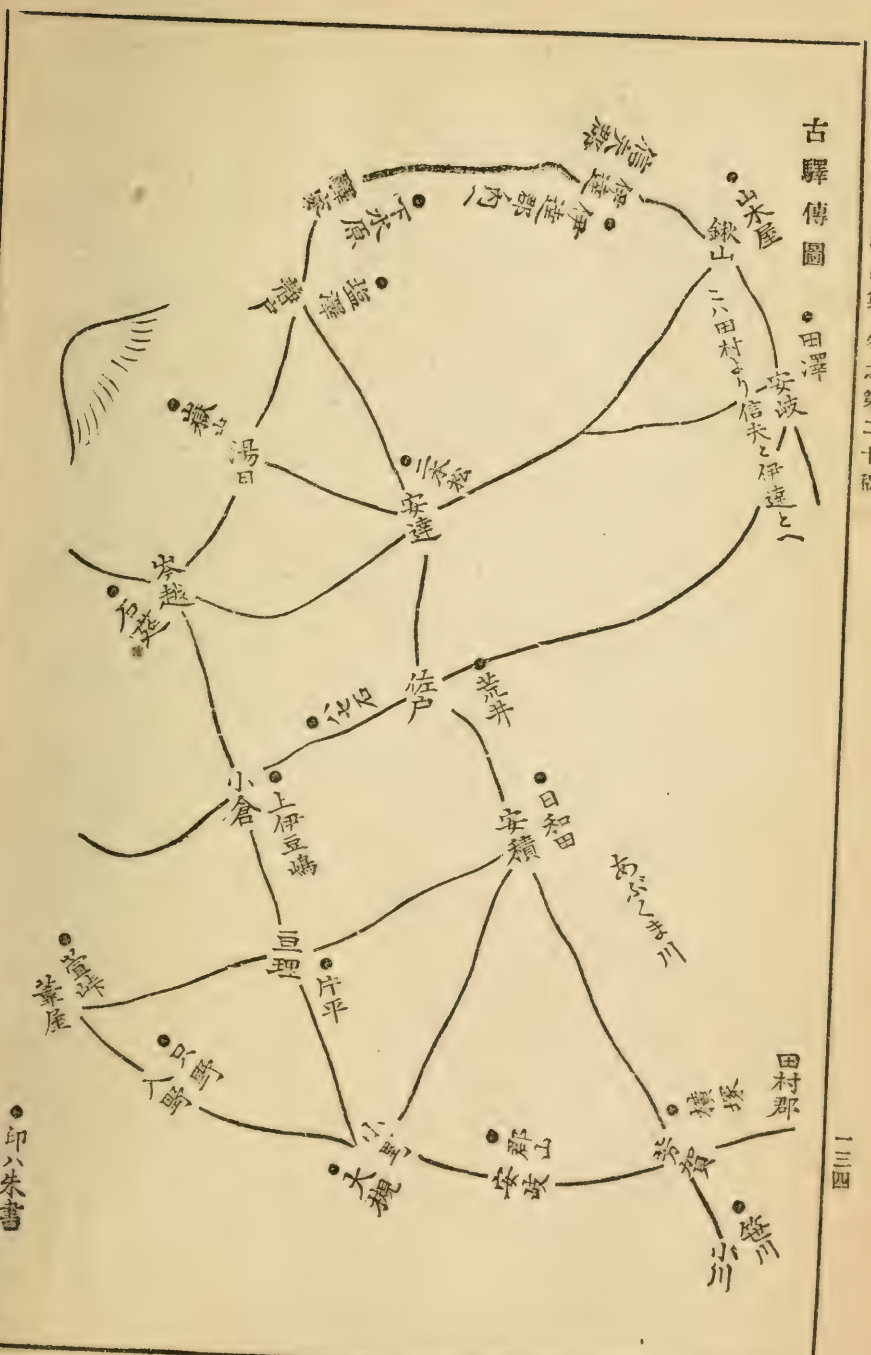
驛家駒屋村其地にやと思はるれど是は八幡の神馬のあ厩りしの名なりと云ば此には取べからずよつて深く求るに下水原村の郡内に驛小屋といふ地あり是正しく驛家の名の一轉したるならんかゝれば静戸より通路もいとたよりありて地脈もやゝ續たれば疑なき驛家の舊地なるべしとおもはる信夫郡の内なれど前にもかたくいひたる如く和名抄に信夫の驛家をのせざれはこゝに混じて彼を漏したるものなら〇誰やらは此驛家といふは一區の地名にはあらでこは某々の地は皆驛家なりと結ひならんといへりされども和名抄に驛家と書たるもの他國にも多けれども或は白河郡小野驛家松戸抔中間にて名記し又はふつに其名の見えざる處もあれば前の地名を拾ひて以上は驛家なりといふ意とは見えず依て從がはず江戸名所圖會にも驛家をも今の地にあてゝ考たる處ありしやら知らざるも郡の内なりと覺ゆ

安達此地今によるべき方なし強ておもふに二本松は高國の時に至りて開けしなるべけれどもかはかりの地古へとても人煙なきにはあらざるべし是則今の龍泉寺は高國東下の前元應二年猶彼地にありしといふにもおもひあはすべし高國に其村落を取立て市店をも開くなるらんさて二本松は安達原近くありて安達といはんもふさはしき地なれば舊地なるべくおもはる

伊達は式の驛傳も見えたれどそほたしかに郡名を分ちたるにあらぬはこは今の伊達郡の地なりしを和名抄に混じたるならんか且式には安達と伊達とを載たるに和名抄には安達を漏して伊達のみ書たるは如何思ふに伊達の本訓いたち又いたてとあたちと訓相近し字形もやに似たれば和名抄には錯亂したるとおもはる（安積郡に安積あるが如く紫田郡に紫田名取郡に名取ある抔大かな皆しからざるを安達郡なる安達を除きて伊達入るべきいはれなしされば伊達は安達のあやまりなる事推てしるべし）

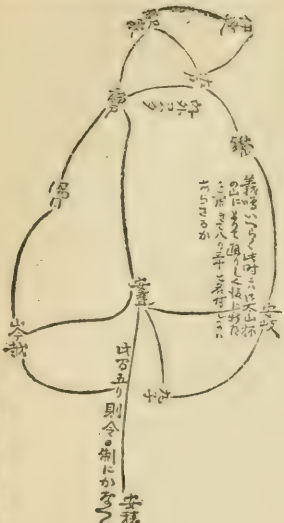
湯日士由が考近きに似たれど油井は後世に至りて鎌倉をうつせし名なりといふはうけがたし（油井のみならず其地なる長谷堂を始めとして鎌倉をうつせし地多ければ油井も尙其一ツなる事うたがふべからず）且式に安達湯日とのせたるも郡名をわかちたるにあらず和名抄にものせざる處なればこは他邦の地名なるにやとおもはるれど強て古へは嶽山の腰につきて通路ありしといふにすかりておもふに今の龍馬場又は大德場稻場抔のあたりに驛ありて（龍ヶ馬場は義家親の通り給ひし事古跡にありたるが如く二本松の兵粮を送りし時會津より猿鼻をまはりし事は末に記すが如しかた〳〵彼地官道なりし事しるべし）湯日と呼たるにはあらざるか（是則湯日温泉の縁によりて）今の荒山中にさばかりの人里あるべしとは思ひよらねど圓東寺彼地にありし事論なければ必しも今をもて臆斷すべからず（古へを考究する事かならず今に拘はらまじきより白石先生もいはれし）○厩牧令に凡諸道須置驛者毎卅里置一驛若地勢阻險及無水草處隨使安置不限里數とあり此卅里は今の五里なりさて前件の驛傳すべて拾六區なるを只一條の官道に至たらんにはその程甚だ近くして今の制にかなはずたとへ此わたりは地勢阻險なればとて二里三里は隔てたるゝんさればこは彼地此地にありて四通五達せしものなるべし（今の相馬三春會津抔へ通行するにもおもふべし）よつて今試に小圖を製して是を知らしむ（こはいたづらにせしにはあらず古への官道なりしといふに合せて其便よからん方を求めたるなり）

古驛傳圖


信夫郡
伊達
伊達郡内
山木屋
鍬山
田澤
二ハ田村より信夫と伊達とへ
安岐
下水原
醴家
温澤
藉戸
湯日
三本松
安達
岑越
石筵
佐戸
荒井
小倉
上伊豆嶋
日和田
安積
あぶくま川
豆理
片平
菅岸
葉屋
只野
人野
小野
大槻
郡山
安岐
芳賀
横塚
田村郡
笹川
小川
印八朱書

義鳴いへらくかくて今に三十里毎に驛を置といふにくらべては其間猶近けれども芳賀よりは小野へ達し安岐よりは入野へ達し又小野より蘆屋へ達せんには程よかるべし今もさる例多きを見るべし

又一わたり深く考るに外木幡村に佐戸ほといふ地あり是則古への佐戸なるを邦俗佐戸と唱たるよりうつりしか又内木幡に佐彌戸といふ處あり是則佐戸と稱せしより今の名となりしにやおもふに内外の木幡は隣れる村なれば佐戸ほと佐彌戸も實は一ツの佐戸なりしを小倉の如く二ツに其名の殘りしにはあらざるか



全圖は前の圖によるべし

古官道

瀧川村里老の傳に往古の往還は八丁目町下より東を通り羽黒山の西臼石といふ所から柳川を渡り夫より油井の谷地東へ出供中川端通り下成田一文字石へ出しよし其のちは臼石よりたるい谷地といへるへかゝり上人壇を通り今の二本柳町東大柳のある邊より町端を横ぎり北の方へ出て油井町端一盃館の西長谷觀音山の前を通り飯出へ出て代官町通り二ノ町へ出しといふ思ふに天正の戰ある頃は未まだ油井の谷地東より供中へ出て川に沿ふて上りし道なるべし油井一盃館より飯出へかゝり代官町へ出しは御治世に也加藤家の時の道と思はる（館基考）下の馬場通りへ折まして代官町より鹽澤の繩手を筋違に宮下の御殿の前を山王堂の少し北の方に其時の古道あり其以前は瀧澤通り居蛇沼通り殿地丘へ通りしとかや又其昔は永田をへて横道通りとて往還せしなり或はあぶくま川に添て往還の時もありしとかや

玉井村の内森屋矢澤の原頼義父子下向の節通り給ふ地なり（安達話）

承和年中圓仁油井村といふを通り給ひ賴義父子も亦此地を通り給ふ云々同書

嶽の湯より下り今のとひ道は四十年來山腰を通ず天文元年より指たるなれば元祿六年の事なり昔の道は上にあり夫より下りて

龍ケ馬場こゝは義家公奥州御下向のとき御通りありしあづみ道云々嶽東隣人嶽山洞

會澤より沼尻湯本にかゝつて嶽を廻り猿ケ鼻より出て田地ケ岡國司の館にかゝり云々奥州茶話會津より二本松へ兵粮を送りし條

石筵より嶽山の腰を過て信夫へ出る里人の傳

下成田村二合田は昔往還の地云々名處詮

天正以前は大槻より日和田へ出て石筵村へ行く云々里傳

同じき頃郡山今の古海道といふ處より梅澤八丁目を過て高倉山に出づ云々里傳

片平村額取山の半腹に古道の跡あり里傳

三森峠に大伴家持卿の休息ありし石あり里傳艮齋文略

田村麿東征の時郡山阿賀山を過ぐ云々

北杉田村關山のあたり下町と字する處より舟形石東まで古への往來にもありしならん云々里傳

信夫郡八丁目往來は天正十九年卯年に開きたり往古の道は同所宿地より稻荷館の北よりカサネ石豊石よりナラ梨子牛坂の臺次の宮より片平宿東蓮寺坂より永井宿畑より光白の西兒墓夫より福島へ出る信夫名所記

此外郭內に屬する古宮道は後にものすべし

移鎌倉地名

鎌倉の谷七郷を移す事西谷水谷本町谷道場谷放生谷龜谷櫻谷なりと金花抄に見ゆ道濟記にも鎌倉の地名を移せし事をのせて二本松の地形も鎌倉に似たりとあり其外は若宮松岡油井長谷堂極樂橋五瀨川瀧澤等なり○櫻谷は昔は櫻の並木ありて鎌倉花ケ谷に準せられしを後は足輕町となりて櫻木皆絕たりと諸說錄に見ゆ江戶行程記にサクナタリの轉言なるべしとあるは誤なり

さて長橋東の側に梅谷といふ坂あり是も梅ケ谷をうつせしに似たりいかゞにや

國府公廨

弘仁格に以信夫郡以南租稅充國府之公廨以苅田以北稻穀充鎭守之兵粮云々

義鳴いへらく是にて見れば積達の二郡抔よりも

公廨の米を出せしと見ゆさらば親重か高倉もて租税の藏ありしなるべしといひ宜吉倉ありし處なるべしといひしもよしなきにあらず

小濱交戰

義繼政宗と講和前後の接戰并金峨(文集錄)する處此際の實記によりしと見えて其旨皆取るべし桂原瑜(桂館漫筆)が記す處何等の書に基たるや其說信ずべきものなし

仙道七郡

合類節用集に奥州山本七郡白河石川磐瀨安達安積伊達信夫とあり四家合考には石川をのぞき田村を加て七郡とす藩翰譜には田村石川白川(西項)安達磐瀨岩城を七郡とし友鷗翁は岩城をのぞき安積を加へて七郡とす姑く是にしたがふべし○仙道とは白川より仙臺南部に至る迄をいふべきよし搜古に見ゆ千種日記に仙道白石たばこといふ事あれば搜古の說とるべし

仙道七家

合類節用集に結城義親田村清顯二階堂盛親二本松義繼岩城親隆大內定綱石川昭光とあり未考

蘆名食邑

蘆名盛氏武鑑佐原氏蘆名黨領地村名の辨猪苗代氏領地の事の中に安積郡半領(半領は伊達薩摩守領)之又盛氏の代に至り押領郡地の事合拾五郡とある中に安積三部分一安達半領とあり未考

二將入二本松城

天正十八年豐公最上へ下られし時政宗當城にて對謁せられし事弓矢卷に見え慶長六年神君佐竹上杉を御征伐の役淺野長政の當地に屯せし事落穗集にあり是則地理の便なり當時の名城なるとによられしなるべし

河東河西

邦俗私に曰川東川西と稱するは其地あぶくま川の東西にあるが故なり漢土の昔時河西河東といひし例あれどそは置て今の平安城にも賀茂川より東を河東といひ河より西を河西とよべりこゝの俗稱おのづからかなへり

鄉名隔田

土由いへらく二本松治下より南方日出山に至て必ず一驛を隔て田をもて名付し地稱あるは甚だ奇し

なり　二本松　杉田　本宮　仁井田　高倉　日和田　福原　久保田　郡山　小原田　日出山

某　内

郡内に何内々々と稱する地多し是則管内部内垣抔いふ例をもてしるべしさて其名は古事記孝元帝の記にはやう河内といふ名みえたれどそはなちて出雲風土記に古老傳に云所造天下神太令殖笑給處故云矢内ともありて古代より習なり

貢弓馬

弓馬は武器の最第一なること我郷より二ツながら舊代より貢たるは國柄のよろしきあかしとすべし

甲斐信濃抔にも古へ良弓駿馬を出せし事舊史に見ゆ是則良弓ある地良馬あるに似たり

按に積達二郡の部下にありて歌の名所すべて拾あまり九區いぶかしきを置て正しう拾あまり五區なりあかれ名勝の饒き如此なる地はあらじ國にもけだし稀なるならんこも亦處からの宜敷故にて封内の面目といふべし友鷗翁安積もて樞要の地といはれしはさる事ならん猶あかぬこゝちぞする

關　府

本府はもと小侯居住の地なるを以て慈明院光重公大に郭店を招き給へり本町谷の記に府城者原據嶮崖孔狹隘故不堪藏納乎數千兵器數萬石粮米等於此奏諸官家而草擴之又郭店其地甚迫約同夷山野塡田沼四方締構十一第一方闢修市屋聿令萬々黔首以寧居又鏟平岡阜剪揆棘拓蹊路於四陲傳通遐邇之往來此營略計之率十餘易裘葛其費用夫又幾計是以率一成寛饒之府矣とあり實に正保三年より十有年にして落成すといふ

御年譜雜話〇一覽に正保元年より慶安二年まで七年にて成就すと有右は誤なり世には概して慶安の町割といへり

置縣令里長

封初の頃は一組に縣令二人ツゝなりしとぞ又里正は村によりて壹人或は二人と定められしは何の時なりしやまた未考

〇里長は漢名本朝に所謂スクリなり是を名主といふは閑田耕筆に阿波にて祖谷山の邊深山幽谷に村里多し村といふを名といふ其處にて然るべきものを名主といふ下の民を名子といふ東大寺の古文書に村を名といふ事あるにかなへりと又庭訓抄大成扶翼には貞丈云或書云鎌倉邊にて田地に二名といふは拾三石なり是を丸名といふ半分持たるを一名

持といひ皆持たるをば丸名持たるといふなり又或
人云一名とは村高によりて高定のなり是を以考る
に丸名持たる主をば名主といふべしとあり祖谷山
の邊にて村を名といふも是より起りたるならん

分村伍

組々を分かたれしは寛延年中に始るよしなり其中
郡山大槻片平杉田國井瀧川宮守は今に同じ其餘は
のちにあらためられしにやとおもはる八丁目組を
おかれしは天保五年の事なりといふ

水帳

村里の田積を記せしを水帳といふ群書一覽に云按
に日本春秋巻の五に云孝徳天皇丙午大化二年春三
月新定國郡境造圖牒僧顯曰今民間稱田積簿曰水帳
蓋御圖牒之訛也と見ゆ富翁雜話にも水帳は中華の
水經に基きたるやうにて雅名にもあらず人あり是
はもと圖帳と書しを中頃文字を記あやまりたるよ
しなりといへりさあるべし

酒帘

藩制酒を釀するものに板もて酒瓶の形に作り面へ
官府の焼印を點し背に造酒者の名と村名とを記し
たるを渡しおかるゝを酒帘といふ富翁雜話に口は
字書に口音廉酒家の幟なりとありされどもハウキ
と唱ふる事何の謂なるやと考ふるに事文類聚引容
齋隨筆云郡城及群縣酒務凡釀酒之肆皆揭大帘於外
以青白數幅爲徽隨其高卑小大村店或掛瓶瓢標帘抔
といへり宋の時分は郡會の地にて青布白布抔を旗
の如くに掛て酒を賣るものゝ記とし村里にては酒
かめふくべ又は葉にて掛たるほうきを用たりと見
ゆ水滸傳にも艸帝兒と書たるやうに覺ゆ是酒瓶の
形に作りほうきと唱ふるは彼是を混じたる事と見
えたりとありさもあるべし

里程

國によりて六丁又は三十六丁。四十八丁、五十丁、
七十二丁。をもて一里とすれども我封境は四街八
衢皆三十六丁を用て他の制なし東遊雜記にも二本
松領は三十六丁を一里として指て延びちゞみもな
しといへり　三十六丁をもて一里とする事は織田右大臣の頃と
いひ又は慶長九年よりの事とすれども伊勢氏の
漫筆に織田右大臣の世よりの事といふはたがへり堯孝僧都の富
士の道記に津の宿を都より十三里といひ美濃のタルキを津より
十四里抔いへりすべて今の世の定めと同じさみゆ此堯
孝は足利義滿の頃の人なれば其時既に其制ありしなり
ふ一里塚漢土に土城と
いふ是なり　を置く事落穗集に慶長九年二

月四日江戸より諸方への道筋に一里塚を築しめたり大久保石見守是を奉行す同年五月下旬悉く出來す大久保石見守一里塚の上に何にても木を植させてはと相伺候へば一段可然との仰付何木を植させ可申と重て相伺へばよい木を植させ候樣にと仰を石見守榎を植よとの仰と聞違口を出して榎を爲植候なりと見ゆ一本には織田氏の時さし木を植るも奉行人塚の上には松を植候はんかと伺候に餘の木を植よと仰ありしを間違ひとなりとあり　封内のも其時のものなるべし

水戸黄門　狂歌

深堀村近平とゆふものゝ家に水戸光圀公の詩歌を藏す。

安達嶽の湯守にあたふ　風外

山の奥にかゝる男をみちのくの
二本松なら又も近平

臥雲室

夕臥白雲合　朝起白雲開
惟有心長在　不隨雲去來

戊寅夷則採毫於安達山中風外老衲

右唐紙二枚なり水府西山公上下四五人にて此温泉に入浴し給ふ最初は懐紙に書れたるを西山公なるよしを密に近平知り得て佳紙に書給はん事を請けるまゝ唐紙に書給ふ印章を願ければ携來らず强て望ならんには國へ來れと仰らる因て領主丹羽侯へうかゞひければ其事はとゞめられけるよし聞えたりと同錄に見ゆ義鳴威義二公年譜を按に光圀公は寛永五年に生れ給ひて元祿十三年に逝去ありしなりさて其間戊寅にあたりし年二ツあり一ツは寛永十三年にて拾壹歳の時一は元祿十一年にて七十一歳の時なりさればこゝに參り給ひしは元祿の戊寅なるべし夷則は七月の異名なり

仙臺羽林中郎將和歌

家相續して陸奥守になり始めて陸奥の國に下りはべりける時道のかたはらに天正の頃ほひ高祖父政宗と佐竹義重蘆名義廣との戰場ありこゝに窪田川といへる細き流の河岸に高祖父にしたがひて其たゝかひに討死せし伊東肥前重行が塚あり此處に立よりて所のものにくはしく尋ねける序に

吉村

身を捨てつかへし道の誠をも
こゝにのこせるあとのあはれを

右掛物は郡山驛仙臺屋の飛脚宿仙臺屋某が家につたふ傳にいふ當時彼が祖先案内者たりし時書て給はる處なりとぞ今故ありて仙臺屋藤次衞門といふものゝ家に藏すると同錄に見ゆ按るに此歌は寶永五年五月の事にて其時重信の後孫伊東新右衞門といふもの郡山善導寺へ香花料を供して追善を修したる事伊抔達公事物語といふ小錄に見ゆ舊事考に元祿三年の事とするはあやまりなり

高泉詩

登玉峯居雲林別館

仙人遊處非凡境　別有雲林聳太清
掩映亭臺千樹密　吐呑日月兩池平
空中點綴山意多　屋裏紆曲路有情
野衲試從高處望　喜聞天外鶴聲鄭

義鳴いへらくこは松府詞藻に出たれども雲林館いまだ其地を考ざればこゝに出しつ但兩池平の句もみゆれば宮下の別館なるにや高泉名は性曉佛國と號す明僧隱元の弟子則ち明人なり承應年中歸化す

古印

鈕は

文政二年の頃安積郡八幡村の土民畑中より古印一顆を堀出せりのち本藩秀敏丹羽氏是を購得て珍藏す其印

鈕は

如此にて銅印なり文は清の左文字なるべしされて同じき五六年の頃同郡郡山驛なる皿沼と稱する池の側是又畑中より一少童の古印一顆を拾ひ得たり則彼所の某購得て秘藏しけるを義鳴厚く請て机上の珍とす其印

鈕は

これも銅印にて文は政清の古文字（政に銅のみ左文字）なるべ

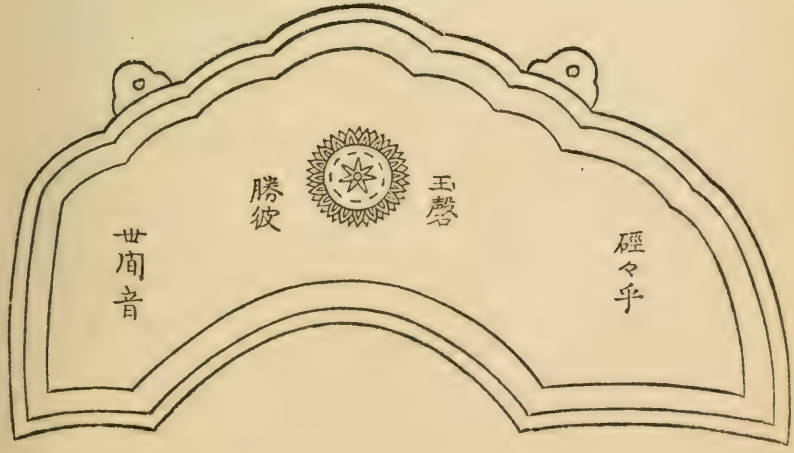
し其銅質の同じきと清文字の大さと字形の相似たる全く同年に成りたるものゝ如し康平永久の頃押字に左文を用たる事好古小録に擧たれば此印も後世のものにはあらざるべしされど何人の用ひたるにや知りがたし退て三代實録を見るに貞觀十一年十二月安積郡丈部清吉に阿部陸奥臣を賜りし事あり是則清吉のこゝに住たる事うつなければ此印もし清吉の子孫康平の頃に存在し臣何或は政清抔號したるが用たる印なりけんおぼつかなし（のちに秀敏五六園隨筆と題するものをみるに前の印章と其考亦予の說と暗合しなり）とにかくに同郡におきて同じさまなる古印二顆を得たる事千歳の奇遇といふべし

古磬

日和田修驗仙峯院古磬をもちたりそは背に至和乙未仲秋日とあり按るに至和乙未は宋の仁宗の年號にて二年の事なり殆八百年のものなり

古錢

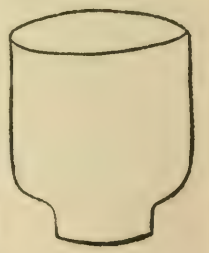
小見山正休が杉田溫石山藥師の緣記に延寶丁己年正月二日邑民太郎右衞門といふもの夢の告ありて地を穿ちて古劒一鰐口大一觀通寶若干を得たり其



靈佛の如きはいまだ得る事あらず太郎日夜鎭守八幡に祈り四月六日神教によりて地を穿ちて靈佛の金色なると大觀通寶とを得たりといふ事あり士由按に靑木敦書の草庵雜話に大觀通寶四家合考にいふ永正元年天下飢饉して會津米價一升百錢此時の錢は大觀通寶なりと按に會津にて一升百錢なるは實大飢饉なるべし西土の錢をつかひし事は諸書に見えたれども此頃奥州にて大觀通寶斗つかひし事が他書にて見あたらず故にこゝに記すと見えたれども此溫石山より堀出たるをもて見れば合考の說の如く此錢杉田邊にても今猶通錢に混せしをたま〳〵得る事ありといふ同錄

欹器

往來逢瀨の岸崖よりあやしき磁器を堀得たりとて久保田村の某秘置たるを竹田街の壽史義三が見し事ありとて圖にものして語りぬそは赤土もて作りたるかやうなるものなり其さま茶碗に似て茶碗の用なくいかなるものにや知ずといへり義鳴いへらく欹器の形に概似たるものなり其欹器といふは中に入たる水の滿れば器覆へり程よければ正しく空



しければ傾くものといへり此磁器いかならん試にしといひしに義三點頭して其折水を入れて試せしにいはるゝ如くにてはべりしされば茶碗の用なしとは申はべりと答へぬかゝれば欹器なる事遠ひあるべからず孔子家語三恕の章に孔子觀於魯桓公之廟有欹器焉夫子問於守廟者曰此謂何器對曰此蓋爲宥坐之器增註文子曰三皇五帝有勸戒之器名侑座注曰欹器也孔子曰吾聞宥坐之器靈則欹中則正滿則覆明君以爲至誡云々さて眞の欹器は

かゝるものなりといへり（こは松平築翁公文晁に命じて正欽覆の三器を圖せしめ室に掛て戒とせられしを或人其圖をうつしたるを見しなり）未た前の如き製あるを知らざれども何人か作りて座右などに置たるものならんか何れ其器を見まほしきものなり

相生集巻之第二十稿　終

相生集後序

近世には風土記やうのふみつくれるわざいたく行はれてもろ國のすぐれ人ごち文の海に玉藻の思ひをこらし詞の林に水莖の花を競はしめ錦なす腸を傾け今年なす言の葉をつらぬてめでたきふみいと多かれど三か一ツは皇國の道をうまく得ざるすたごもの仕はせなれば偶殘れりし古き世の手ふりあらば地名などかゝさまに說ひかめあるは神ぞ佛は何くれのくはしき事あるは口づからいひ繼たるごとなどにくみいましめてあらましきよしにあけつらいあるは省きすてゝ只自らの識見を書つゞけて風土記のさまを失へる少なからずたゞ他の境にあくる名くはしき所をもあかしをまけて我くちにいれもて行く天が下に同じ所の幾所もいでき更に世の惑ひをなせるは中々に此文なきにはしかじてふ類なるべしさるを我友大鐘義鳴は相生集よ大和魂から學び倶にまつりたごへる才もて物しぬれば皇國ふりにてよからんかそかまに〳〵からさだにてよからんもそかまに〳〵にて高きごなく拙ごなく其傳へを失はず只古き世ふりのここしへに亡びさん事を宗ごしかつありしの正

しからざるはわかくぬちのもひこの説にゆづりあるは古き文はさらなり近きほどの物かきのみたりかきしたるみやひたるさひたるにも拘はらずなべて他の説をむねこしてやむことを得すでみづからのあけつらひをなれば彼樵老牧童のいひけんさゝやきの橋さゝやかなるをも逢隈川のくるもおちず埋木の埋れし事も里塚のくらきかたなくものしつれは全志良藉こたゝへたらんも強たるはあらしかじされどおのれがあだし根の手引こゝも淺香の沼の淺はかなる考もさはにかはりぬれば忍ふの岡のをかしこおふふしぐ〳〵も岩井の清水いかでかいはんたゞいろをもかもしる人のまに〳〵こぞまをすべけれ

天保辛丑孟秋

仙臺隱士大屋士由

相生集 大尾

會津双櫻記

會津双櫻記總目錄

一浦生家繁昌堀江町遊里の事
　幷石部高影兩家發端の事
一一箕山八幡宮花祭の事
　幷高影彈五郎小雪に戀慕の事
一高影彈五郎小雪を妻に娶らんと仲人を頼む事
　幷石部刑部彈五郎をいやしめる事
一石部主稅家人大村半藏を連立愛宕參詣の事
　幷兩人堀江町の廓に至る事
一石部主稅錦太夫と深く馴染る事
　幷高影彈五郎錦に心を寄る事
一石部主稅大阪勤番用意の事
　幷錦太夫主稅に身の上を談り賴む事
一石部主稅大阪へ發足の事
　幷湯本街道古跡の事
一錦太夫瀧澤山花見の事
　幷高影彈五郎錦を殺害する事
一高影彈五郎石部刑部を討て逐電する事

幷京屋善藏訴人の事
一石部主悅へ國元より飛脚到來の事
幷主稅御暇を給はり會津へ歸國の事
一石部兄妹敵討を願ふ事
幷石部主稅下野の國へ赴く事
一横瀨七之助會津へ心ざし下る事
幷七之助武藏野の原にて敵の在家を知る事
一横瀨七之助石部主稅に面會の事
幷石部主稅七之助に委細物語る事
一高影彈五郎津川にて召捕るゝ事
幷宇都宮へ會津より飛脚到來の事
一石部主稅幷横瀨七之助敵高影彈五郎を討つ事
幷双櫻の由來石部横瀨出世の事

總目錄終

會津双櫻記　卷之一

蒲生家繁昌堀江町遊里の事
幷石部高影兩家發端の事

孝子節婦の鏡を後世に照し二本の梢に名譽を殘したる石部衛太夫衛の昔を尋るに蒲生飛驒守氏鄕卿と申せしは往昔下野の國主佐藤太秀鄕の後胤にして世々の武功隱れなく天正の頃太閤秀吉公に屬し奥州の探題として會津に居城し給ふ會津四郡幷仙道迄切隨ひて百二拾萬石の大守として益武威さかんなり此時に小田山の城に天守を建城下を若松と改め政事日々に新にして四民萬歳を唱ふ所々の城代幷老職の面々は若松に屋敷を構ひ其構美を盡し瓦の光り天に輝き白壁街を照し恰も星の如くきらめき商家鶴ケ城の四方に充滿し東は山際西は湯川なり南北數丁の間軒を並ぶ諸國の通路よくして奥州と越後の國産此地に會集して後國々に著く依て會津と號す其の繁昌此の如く賑ふ中に若松の北一廓の遊里在則堀江町と言唱る數軒ならびて其賑ひたとふるに物なし貴賤入來青樓には晝夜音曲の絶間なく大門口は四つ手籠の透間なし唱家數有中に其頃廓一と聞へしは京屋の錦とて容色玉をあざむき性質柔和にしてなさけ深く茶の湯糸竹の業に闇からず其數島の道にかしこく全盛ならびなき遊女なり世人其名を唱へずたゞ太夫と稱しける爰に又蒲生家の藩中に石部刑部定行とて武道はいふもさら也和漢の書にくらからず忠心深く篤實秀才の士あり則千三百石を給て家に二人の子あり兄を主稅とて氏鄕卿の小姓をつとめ才智諸人にすぐれ容顔百人に越美男の聞有生得柔和にして遊山酒色をこのまず神儒佛の三道を學び朋友同輩のまじわり睦じく猥に無益の舌を動さず勤仕の隙には學問を樂しみ歳月を送る妹を小雪とて容色うるはしく唐の楊黄妃我朝の小町も恥べき美女也其上數島の道にかしこく管弦の業にもたへなるのみか父の敎に隨ひ和漢の書をも一通り習しける爰に又同家中に高影彈五郎とて邪智姦佞の青年あり元來常州土浦の家中船岡直理といふ者なりしが傍輩横瀨七郎兵衛と云ふ者を討て逐電し會津へ來り高影彈五郎と改名し北路と言處に借宅し

て浪人を立募しける元より俊辯のものなれば手寄を求め當時大老職蒲生民部正が屋敷へ出入し辯舌を以へつらひければ民部正大老職と言どもさのみ賢明英智の器量にあらざれば彈五郎を厚く賞翫し折々兵學劍術の相手に取り折を得當家へめし出されんと思ひけり民部正或日登城し氏鄕卿へ申上げるは當時浪人に罷在る高影彈五郎と申者折々私屋敷へ出入仕候得者其器量をためし見るに天晴のもの也其上兵學劍術の達人に御座候如斯の士を捨置は武家の本意に無御座候御抱へ有之可然旨言上しければ氏鄕卿聞し召れ大老の詞といひ誠に此節大公の武威に依る天下過治るといふとも諸大名をも安堵の枕にふし給はず武備さかんの時節なれば早速彈五郎を召れ三百石を下され家中兵學指南を仰付ける然るに門人も次第に出來て內證富貴の身となり今は何不足なく諸人の尊敬に隨ひ驕りつのりて美女を抱晝夜遊酒に耽りあまつさへ堀江町の遊里へ通ひ或は神社佛閣の賑ふ處に遊び日夜遊樂に過しける扨又天正の頃は若松に三芝居あり所謂赤井町に村松座北小路に近江座六日町に坂東座列して評判よく當りければ或日村松座の芝居は宣敷とて棧敷へ毛せんなどしき見物しける扨又右部刑部の娘小雪も隣棧敷に見物しけるが彈五郎小雪を見るより魂容に飛んで忽然と見とれさても美しき婦人哉周の褒似衣通姫といふともいかで是にまさるべきと獨心に賞美して芝居も餘處になり何者の娘ぞと頻りに見とれけるが日も夕陽に傾き狂言果ければ我屋敷へぞ歸りける

一箕山八幡宮花祭の事
幷高影彈五郎小雪に戀慕の事

光陰をとゞむるに關守なく其年も暫て明れば文錄三年となり頃は彌生の半ば四方山の花咲みだれいとのどか成折ふし一箕山八幡宮の花祭りとて貴賤群集して參詣しけるそも〳〵此八幡宮と申奉るは往昔瀧澤の山際に有て小社也陸奥守義家公奥州攻の時かの山際に陣を取小宮ある所の者に尋ね給へば八幡宮のよし言上す義家公聞し召て武運の利得祈誓し給ひ終に貞任宗任の逆賊を亡し勝利の得給ふ是に依て大塚山の麓に惣勢一人前一箕宛の土を運び山となし八幡宮を安置し給ふ是に依る一箕山と號す則瀧澤寺とも

いふ高影彈五郎も弓矢の神なれば參詣せんと僕をも連ず只一人深編笠に面をかくし博勞町に差かゝりける扨又石部が娘小雪も八幡へ參詣し夫より瀧澤の下屋敷なる櫻を眺めんと母諸共に下女やはしたにかしつかれ色薄きはつさくら花ものいわぬ愛敬に大振袖も花麗に群集の中を通りしありさま鷄の中に鶴の立しごとく行かふ人足をとゞめ振向て見る人こそはなかりける彈五郎深編笠の内より小雪を見て心喜び過し頃芝居にて見染し女也今日はからずも出合ぞまさしく八幡宮の導びき給ふならんと下山して東に行き七八町瀧澤の北なる萱葺のやしきへ入にける彈五郎門番に向ひ申けるは是は何れの御屋敷只今入給ふ婦人は何れより來り給ひしやと門番答て言樣是は石部刑部殿下屋敷也扨又只今の女中は刑部殿の娘なり八幡參詣ながら當屋敷の櫻を眺めんと入給ふなりと語ける彈五郎は始終を聞て禮を述べ日も西山に沈とし給へば心を跡に殘しつゝ屋敷さして歸りける

高影彈五郎小雪を妻に娶らんと仲人を賴む事

幷石部刑部彈五郎をいやしめる事

賢王聖主も迷ひやすきは色情なり況てや色欲深き彈五郎小雪が容色に迷ひほんのふおさへがたくあけくれ思ひに絶へず打過けるが或腹心の門弟猪俣重太郎といふ者來りて四方山の物語終りて後彈五郎言樣それがし殿の厚恩によりて浪人より立身し多分の祿を受て今は門弟も其數既に三百人に滿たり金銀心の儘にして何一つ心に任せずと言事なし然といへども未だ定まる妻もなし起伏し是を不足に思ふと雖も是と思ふ女なし然に石部刑部が娘の美麗なる事を見たり何幸彼娘を娶りて一生を花の元に送らん事を願ふ貴邊手寄は候わずやと談りければ重太郎答て言樣先生の望給ふ事安き事也幸御門弟水島軍藏は名ある内役也彼を賴み言入給へ刑部とても先生の懇望承引するは必定也と言ければ高影是を聞て大きに悦び翌朝水島の方へ申遣しけるは御目に掛り御賴申度旨有之候へば御在宅に候はゞ御出被下度段言遣りければ軍藏は何用ならんと急ぎ高影が屋敷に至り案内して内に入りければ彈五郎悦び常に替りて丁寧にもてなし

早速御入來の段大慶不過之候と酒肴を出して馳走し偖て貴殿へ御賴申事別儀にあらず御存知の通り下拙事浪人より身を起し今は何に不足なし然といへども日頃妻なきを嘆くなり承候へば石部刑部が娘の美女成事を聞たりあはれ某妻に申受度思ふなり御邊御同役の義なれば御才力を以て願ひを叶へ給はゞ百金に替へて御禮申べくと賴みければ生得欲深き軍藏なれば心に思ふ樣此事成就なさば彈五郎は富貴のもの也多分の禮金をなさん事必定なりと早速承引し言樣先生の御賴み心安し刑部事は同役といひ交厚し某しが身に替へ御取持仕らん追付吉左右待給へとて高影が屋敷を出て直に石部が屋敷に至り案內して廣間に通りける則刑部出でゝ時候の禮終り軍藏刑部に向ひ言けるは某今日參上仕候事別儀にあらず御存知も候わん一家中兵學の師範高影彈五郎御息女を妻に申請度頻りに懇望いたし某を賴み仲人致可呉旨申候へば態と推參いたし候誠に彈五郎は殿の御意にも叶ひ家中の尊敬大方ならず貴殿の聟とし給ふとも恥しからず御得心被下候はゞ某に於ても大慶なりといひければ列部此由を聞答へて言樣何事の御入來かと存るの處數ならぬ娘の事御心にかけられ御執持被下候段御深切忝存候也去ながら彈五郎は當家累代の士ならず然といへども時世に叶へもとや申さん殿の御意に入らせ給へ剩さへ御家中譜代の諸士浪人の成り上りを師とうやまい先生と尊ひし事他家へ聞へ會津に士はなきかといわれん事口惜しく存る也斯く武功隱なき大家に兵學劍術の達人なき樣に筋もなき浪人ものを抱へ師範を言付尊敬し給ふ事なげきても餘たらず是を諫言して退る老臣のなきは御家の不幸といわん其身不肖成といへども殿へ諫げんし奉り彈五郎を退け他の嘲を除かんと存也いかで女行者の妻に嫁せんや貴殿の御深切忝しといへども彈五郎は御用捨被下べく外に御心當も在之候節は御願候也扨又御咄しは御懇意まゝ腹中を打明御物語申せし也彈五郎は勿論御他言決して御無用なり御返答宜しく賴み入候と酒肴を出してもてなして歸しける軍藏は辯舌を以て刑部に得心させ多分の禮金を請むと思ひしに案の外成石部の返答再應言出すべき詞もなくそこ〳〵に挨拶して歸りけるが金子を得ざる事殘念に思ひ彈五郎方に來り刑部が言し事も不殘告げれば元より強惡の高影大

きに立腹し某が望を得心せざるのみか浪人の成上りなどゝ賤しめ殿の御意に叶ひ家中の諸士尊敬するをねたみ妨げ我を退げんと計る佞人憎き老惚が過言なり其の儘捨て置は終に身の災ひとならん事必定なり某より汝を先へ退け我身の惡魔を際かんしからずば枕を高く休まれじと是より惡巧みをなし石部をなきものにせんと計りける實に口は禍の門とむべなる哉刑部忠義の心より水島軍藏に物談りし事後の患となりにけり

石部主税家人大村半藏を連立愛宕參詣の事 幷兩人堀江町の廓に至る事

爰に又石部主税は晝夜學問に心を傾け氣の勞けるにや何となく勞咳の如く見へければ兩親深くなげき若し病の重らば萬金に替へがたし潜に譜代の家人大村半藏を呼びて言樣兼々汝も知るごとく主税事日夜讀書に傾き山川遊里に遊ぶ事を好まず氣うつ〳〵としてやまひおこらんとす今保養なさでは後日病成て悔むとも詮なし其方が計ひを以主税をすゝめ何地へ成とも連行心のまゝ樂しませよ金銀と雖どもいかで子にこふべきやと多分の金子を渡しければ半藏かしこまり其意を察しやがて刑部が前を立て主税が部屋に至りけるに主税は餘念なく讀書して居たり半藏側近く寄て言樣若殿には晝夜學問に心を傾け給ひ斯の勞出折ふし引籠り居給ふ事甚敷御身の毒也をよそ人間と申すも氣力限りのあるものにて折々保養なくては病の發る事抔有もの也若し病にてもをこり給ふ事候はゞ御兩親の御歎きいか計ならん御不孝の甚しきと申べし學問し給ふ事も忠孝をしらんためならずや得と御賢慮有て折々御保養可然と奉存候と言ければ主税是を聞て言いわず暫く過て答て言樣汝が申條其理ありといへども其の諺にも好きには身をやつせとかや又傳へ聞く唐土には學問の爲に股に錐をさし或は頭に繩を付て心體を苦しめ或は螢雪の光りをかりて書を讀み心を勞す如此傾きて學ぶといへども病に臥したるためしを聞ず我は是又家富何に一として不足なし好んで學問するに豈病の起らんやかさねてたのしみをすゝむる事なかれ半藏これを聞て又言樣若

殿仰給ふ處夫は尤なりといへども請越にまれ成聖人なり御身いか程學び給ふとも其蠹と日を同ふすべからず某たゞ御家のため御身のためと存じ御諫言申すといへども御得心なきにおゐては是非に及ばず然といへども己が病の發りを知る者なし嚴然の病と成悔ひ給ふとも詮なし愚存の申上條御聞届可然と再應いさめければ主税は心に進まずといふとも半藏の忠諫もたしがたく納得したる體にて言やうわれ學問に傾き身の勞れをしらずといへども汝が申條又尤也しからばいかやうにして保養と成樂しみと成や半藏是を聞て悦び某申條御聞届ぞ恐悦也幸明日は愛宕山の大會に野郎のすゞみ又御保養に候得ば參詣し給へといひければ主税これに隨ひ明れば六月廿三日父母に暇を願ひ半藏一人供して兩人同樣の支度に出立愛宕山へと參詣しぬ名にし逢ふ大會の事なれば貴賤雲の如く群集して境内には芝居輕業の音曲拍子をそろへ豆藏或は女淨瑠璃いわんかたなし又山上より廣大なる若松の城下目の下に見渡したりき家に上り見れば煙たつの御製も思ひ出てはるかに西を見わたせば大川の流は麻を引るごとく其絶景眺むるにあきたらず彼方をながめ此方を見て遊びける程に思はず時を移し日は柳津山にしづまんとし給ふ故下山して桂山より近道を行堀江町のかたへと志しける折節大龍寺の晩鐘聞へて吹おろす嵐にあつさを忘れて蛙の聲さへ面白くおぼへてこまをはやめておのが家々に歸る賤の歌も珍しく兩人は堀江町の御門口にぞ至りける主税は思はずも廓に來り驚きけるが兩側の軒端に提し提灯は星の如く家々の銀燭ひるの如く照して美女色を爭ひて引く三味線は雲にひゞき桂山のまつかせ琴の音にかよふ木を見るもあれば文もかくも有あるいはきせるをたゝくもあればかんざしにて頭をかくも有おのがさまざまにして吉野山に遊ぶがごとく兩人そこの格子此店と見物する間にむかふより步來る八文字あり提灯を見れば五三の桐の紋所上に錦と書したり側なるものに問へば京屋の錦太夫なりと答ふ兩人なを側近く寄て見ればその容色玉の如く紅のもすそをひるがへしてさながら天人の界に遊ぶかと疑はる實に久米の仙人は脛の白きを見て通を失ひしも宜成哉主税程の學問に心傾けて丈夫の男も太夫の容色に心を奪はれ步む事を忘れて只茫然と見とて居たり

鬼神も和らげ勇士のたましいを奪ふ事美婦よりも甚しきはなしとは此事ならんか故に賢聖の君子いん欲に迷ひ國家を亡し身を失ふとの和漢にすくなからず愼むべき第一なり

石部主稅錦太夫と深く馴染る事
幷高影彈五郎錦に心を寄る事

斯て石部錦を見しより岩木にあらねば心忽ち客に飛で世に斯る美婦も有けるかと見とれたる體なれば半藏悦び主稅に向ひ言樣若殿今宵は爰に遊給へと言ければ主稅答て我も疾より左樣思ふなれ然しながら貧かたき兩親の今宵の歸り遲くは惡しかるべし是のみ心に任せず半藏又言樣御心遣は去事ながらたま〳〵御保養に出給ひ夜明て歸り給ふとも苦しからず若尋給はゞ湯本へ湯治せしと答へ給へ其上は深く尋給ふ事もあるまじといひければ主稅しからばとて其意に隨ひ京屋へ至り彼錦太夫を呼びにける兩人は二階に在て待居たり程なく太夫は新造禿にかしづかれ座に直りしその風情武藏野の月影にひと夜のしら雪芳野の花をあつめて眺る心地也斯て其座も賑々敷糸竹の音をたへさず錦自分琴をしらべ其音妙なり主稅は殊の外おもしろく興を催しける錦は主稅が風俗を見るに容顏よのつねにして麁はしく威有て猛からず人品大樣にして無益の舌を動さず柔和にして愛敬ありまた茶の湯歌道の道何一つとして闇からねば初會より眞實にもてなしける又主稅も錦が情有風情に心解けて互に深き中と成きしやうちかひしは數しらず生ては室を共にし死ては穴を同ふせんと越王別絶が繕ひ二世三世とは伊勢のなだ千尋百尋床のうみ深き契りも度かさなり今は學問の事はさら〳〵打捨て公務さへ徐所になり雪のあした雨の夕邊のいとひなく太夫が元に通ひける扨又過し頃小雪を深く懇望したる高影彈五郎刑部に賤しめられし事を無念に思ひ刑部を無きものにせんと折を窺ふといへども誠忠實直の石部なれば少しも落度なくむなしく過けるが此程は高影も堀江町へ入來り錦に心を寄せ金銀をまきちらして戀したふといへども邪まなるもの天地愛せずのたとへ太夫は彈五郎を嫌ひ一夜の枕さへかわさずれば高影無念に思ふといへども力及ばず徒らに月日を過しけるが世上の物語を聞に錦は主稅にかくな

れ染て徐處の客に逢ざるよし風聞然らば彈五郎しきりに怒りて我多くの金銀を遣ひ通ふといへどもつれなく振りすてゝ歸せしは畢竟主稅ある故也父と言子といひ重々某しに妨げある石部親子いかでか安穩に置べきと惡賊己れが邪を顧みず石部父子を恨み日夜惡事をぞ思案しける

石部主稅大阪勤番用意の事
幷錦主稅に身の上を語り賴む事

光陰押うつり文錄四年此節蒲生氏鄕卿は大阪在府なり石部主稅大阪勤番に當りしかば近日發足せんとて其用意しきり也主稅ある夜太夫がもとへ來りていふ樣それがし此度大阪勤番に登るなり長々そもじに別るゝ事をなげくといへども君に仕へる身なれば是非に及ばず又病といつわり登らずしてそもじの元へ通ひ來りては諸人の嘲を請る事口惜し譬萬里をへだつともたがひの心替なきこそ此上なし御身の無事こそ專要也今宵物語もしばらくの別れなりと言ければ錦聞て袖をぬらし扨悲しき事を承り候われ御身に別れ何をたのしみに月日を送り候わん魚の水をはなれ朝顏の垣なきが如し然といへども公務とゞめまいらする事叶わずたとへ病と僞り來り給ふとも君たのしみになり給はずおん身の禍となるべし此節に至りてなげくとも詮なし唯御無災に勤め給ひ追付歸國し給ふ事專要なれど譬へ難波津に咲梅が元の色增花のある迚も御心を移して我を捨給ふ事なかれ扨又大事を打明し御賴奉る事候也恥しながら私事今はかく賤しき身に落果候へ共元は匹夫下賤の子にもあらず父は常州土浦の家中橫瀨七郎兵衞とて三百石を賜り劍術師範に候しが同家中船岡日理といふものに討れ給ひ母は先だつて世を去り我は十四歲弟七之助といふは十三のとしはしなくも家斷絕して兄弟住馴し土浦を立退き何地にたよるべきかたもあらざれば城下の御邊り深澤と言處に纔の小家を借り住居せしが家財を賣し金銀も次第に盡てほそき煙さへ立かねけれ ば七日〳〵や百ケ日の追善供養さへなりがたく心計の香花を手向淚とともに一とせ徐り過せしが次第に詰り苦きに弟は松原に出て落葉をかきて少のあたへとなし妾は野に出て菜芹をつみてうり漸々命ばかりはつなげども千々の思は深澤の水さへ絕ゆる詫住居

さすがに春秋は立替れ共袖に涙を沖のいしのかわくまもなき兄弟の憂き年月はかわれども君父のあだには共に天を戴す一旦武士の家に生れ徒らに月日を送らん事の本意ならぬば乞食非人と成とも敵討理を尋出し父の英靈に手向んと思ひ立兄弟順禮に身をやつし一先常陸を尋ねんと一錢二錢の奉錢をうけ邪慳の門にたつときは棒よ杖よと追立られ又あわれみの戸に立ときは食事や錢のなさけを受け夜は軒端いの下石の枕に草の床斯る憂目を見るよりもいつそ死んと思ひしが死は一旦に遂げやすし命は少しも惜からぬとも今兄弟の果ぬれば非業の最後の父上の仇をば誰が恨まんと孝と愛の二筋を步み兼たる兄弟が常陸を尋るといへども亡理が行衛さらにしれず陸奥のかたへ志し會津は聞及し繁昌の地なればひとまず彼處を尋んと若松に足を留め人立多き宮寺には諏訪の社西光寺或は蠶養八角の宮愛宕住吉石塚と數日賑ふ參詣の其人ごとに氣を附て心を配るといへども亡理と思ふ人もなし月日を過す其内に弟七之助風の心地に打伏しゝが病苦次第に募りけれども藥を用ゆる事さへ叶はず心計の看病なれば已に危くみへければ何卒命助たく佛神を祈るといへども其印なければ我々つら〳〵と案じけるは是迄辛勞して惜しからぬ命をながらへしも唯々父の仇を報はんため也今病に命を失なはゞ是迄の願望空しくなる也豈此身を淨川竹に沈めて成とも弟が病を療治せんと武士の子のあるべきにあらね共命さへ全たからば本望達する時節もあらん是も父への孝道なりまた弟がためなれば恥しからぬと終に五拾兩にて此里へ身を沈め其金子にてあらゆる醫療を盡しければ未だ露の命の盡ざるか但し天道我々が心を憐み助け給ひしにや次第〳〵に快く身體すこやかに全快せし也是に依て暫くも猶豫すべきにあらずとて又上方へ志し尋ね登り今大阪に居るよしほのかに承りぬ遠國を隔て候へば明暮なつかしく何卒七之助を尋ね給ひ我無事をも知らせ父弟が安否をも文にてなりとしらせ給はん事返〳〵も願なり誠に賴みなきは人の身と秋の空に待るものをと涙をながして物語るに主稅是を聞て共に袖をうるをし始て御身の上を聞驚入候也又幼き時より兄弟の孝心かんずるに餘り如此孝子天道いかでかすて給はん本意を達し給ふ事遠かるまじ古より君父の仇を報わんと欲す

るもの一人として其志空しからず皆本意を達す是強勇柔弱の美にあらず天道善を助け惡を憎み給ふ處也必ず心を安じ給へ某大阪に着早速七之助殿を尋ね御身の無事を通じ又弟の安否をもしらすべし只々其後つゝがなく歸國を待ち給はり候へと互に名殘を惜みつゝそでや袂をしぼりけるいとゞさへ春の短夜に長物語に時を移し早くも五更の天明んとして寺々の明の鐘しのゝめつぐるからすの聲と共に是ぞ此世の別れとは神ならざれば知らずして主稅は屋敷に歸りけり

石部主稅大阪へ發足の事
幷湯本街道古跡の事

去程に春三月上旬主稅大阪發足とて譜代の家人大村半藏其外供廻り美々敷出起主稅は兩親幷小雪其外親類等夫々に暇乞して屋敷を打立天寧寺御門より野郎が前に差かゝり院内村石上松など打越湯本にかゝり羽黒山を伏し拜み脊あふり峠うち過て吾妻路のかたへと赴ける蒲生家居城の時分は往還今の湯本街道にて瀧澤通りは加藤明氏の代に至てひらけぬ扨てかの野郎が前と言は天寧寺のふもとにして昔小店一軒ありて田樂といふを燒て商ふ往來の貴賤是を野郎が前田樂と稱して名物となれり今は茶店數軒と成道端を湯川流れ向ふは遠々たる原也故に若松の人春は野に出て若菜をつみ夏は涼みに來りて螢をかり秋は天寧寺山のもみじを眺め冬は湯本にかよふ貴賤此茶店に立寄寒雪を凌ぐ故に繁昌也又石上ケ森といふは至て古木也むかし城下の御邊柳原といふ處に一人の女有りて名を藤見と呼ぶ此女しとふ男有て數夜不動尊へ祈りて夫婦とならん事を願ふ然るに或夜夢ともなく不動明王出給ひ一の石をさづけて宣く麓成坂に森の古木有彼木の傍に此石を打上て緣有無を試みべし此石傍にとゞまりなば汝が願叶と知るべし又上り得ず落るにおゐては願望成就せずと示し給ひて夢覺たり則側に小石あり藤見おしいたゞき急ぎ山を下りて彼森の木に至りて打上げしに忽ち落ちてとゞまらず藤見ます〳〵氣狂ひ遂に立終に其下なる湯川の瀧壺に身を投げて死す是に依て藤見が瀧と言後世に至り伏見が瀧と言は誤なるべし扨又石を上し森を石上げ森と名付後世に至ても石をあげて緣の有無を試る扨

又湯本を天寧寺の湯と言事其謂ありむかしいまだ霧ケ城なく湯本村などなかりし頃天寧寺は禪寺の大伽藍にして諸國の僧集て法を編す則江湖と言客僧退屈の徐四五人連立東の山奥に入事凡七八丁谷に下り峯に登り小松を拔てつゝぢを折り日終迄たのしみ歸らんとする時一つの山湯を見當りける彼所へ印を立天寧寺に歸りて斯くとつぐる則天寧寺より人夫をかけて一壺の湯をひらき小屋を立諸人此湯に入て病氣悉く治す是に依て天寧寺の湯と名げけて其後人家を建壺の數をひらき湯宿を定め湯女など出て諸國の人聞傳へて湯治す其効能有馬草津の湯にならぶべし扨又石部主稅は關東を過ぎ日を經て大阪に着にけり即ち土佐堀の上屋敷に在て勤仕の隙には府内を廻り錦太夫に賴れし横瀨七之助を尋ぬるといへども名にし負ふ廣き難波のことなれば即時にしれがたく本意なくも月日をすごしける

錦太夫瀧澤山花見の事
幷高影彈五郎錦を殺害する事

斯て錦太夫は主稅に別れてより明暮なげき病氣と也客をとらず起臥弟を案じ主稅を戀慕ひしかば今は實の病と成既に床に臥さんとしければ太夫思ふやう我如此病と成吾命を損する時は七之助力を落し本意達する妨げとならんたとひ流れの身にて心に任せずといへども命さへつゝがなくば臨時の助と成ぼし本望達するまでは大切の身なり兩人の事たとへいか程案ずるとも甲斐もなしとかく保養して快氣せんこそ專要也と心を取直し亭主の前に出て願ひけるは妾事病も少し心能覺候へば保養のため瀧澤山の櫻最中のよし參りて眺めたく存候なりと願ひければ亭主早速得心し定めて病ひの勞れあらん駕にて參るべしといひければ錦答て言樣重々の御心遣ひありがたく候へども駕は反て保養少し程遠き道にも候はねば心靜にあゆみ參るべしと男一人連立うす化粧に髮もかざらず日頃の病に面ざしやせをとろへけれども名に負ふ美女なれば往來の女中幷ものなかりけり彼は山を志ざし頃しも彌生の最中にて風も梢もこへなさすいとのどけき四方の氣色錦は男にむかひ東にたかき山は何れと言ふ男答て言樣鷲梯山とて當國第一の名山也右のいたゞきに殘りて雪を庵無僧雪とて又左の谷に

殘りしを蛇雪などと申候也又古今集に會津山と讀しは此山也とぞ承る也左に並びし高山を猫間ヶ嶽と申麓に本寺と言寺あり昔は三千僧ありしと言其頃は會津に大守なく此本寺並に高寺これも三千坊有之此寺にて領せしよし也又摺鉢をふせしごとき山を會津小富士と唱へ定家西行の歌抔も候也錦また言樣西北に當て雪しろたへせし山は何と言ぞ男答てかの山は飯豐山とて不言不聞の禁山なり其尊き事羽州三殿山にならぶ終年雪の盡る事なし當國の民五穀成就を祈りて此山に上る別當を蓮華寺といふ又東に高き山を羽黑山と言遠く見へ候は愛宕山遙に往來の見ゆるは湯本道此方の森は大藏寺かなたの森は桂山といふなど物語しつゝ歩む程に瀧澤山に至りける木々の櫻は雪の如く咲亂れ鶯の聲さへいとゞ面白く古歌にも鶯のこゑなかりせば雪消へぬ抔おもへ出らるゝ雪國のふかく積れるさへ消果て櫻と替り老若花の本に集りて詩を賦し歌を詠し或はいきだけに興を催し毛せんの赤きも是も花かと疑われ舞もあれば踊るも有或は高き梢の花を折とらんとするも有樂おのがさまざまにしてことばに盡しがたし又其中に古木有是を種蒔櫻と言農家此花の咲を見て耕作の種を蒔く故に名付たり錦はあなた此方と眺め花の本に歸らん事を忘るゝとは古人の詞は宜成哉咲みだれたる花に心を移し春の日も既に西山に傾きける程にいざ歸らんと山を出て瀧澤の村中まで來りしに病中の事なれば足勞れ歩みがたければ休息せんと茶てんに腰打かけて休む內に日は暮て妙園山の初夜の鐘聞へ貴賤の男女殘なくおのが家にぞ歸りける錦は少し勞れ除きければ茶店を立出て瀧澤の南山山際を通りしに折節宵月空の半に照り給ひ恰も晝のごとく山をろし身にしみてたゞ蛙の聲のみにて兩人の外往來もなく錦は男に向ひ言樣今日一日の保養に千歲を延る心地せり我病氣も最早心よし病と言ながら客をともぬは旦那や御身達の前もか遣ひなり最早出勤するも近きに有といひければ男答て言樣をいらんの心遣ひ無益也誰しも同じ病の事なんの旦那や我々の氣遣ひに及べき無理成出勤し給はず心置なく保養し給へと話最中に思ひもよらず深編笠に面隱し仁王の如き大の男錦が前に立ふさがり大音にていかに太夫能處にて出合たり覺もあらん汝に心を寄莫大の金を費し剩へ一度の枕さへか

わさず闇み〳〵と振捨られし高影彈五郎也汝が花見に來りしよしを聞及に來て窺ふと丁度夜中歸るぞ某が幸ひ汝が運の盡なれ日頃のうらみおもひ知れと氷のごとくなる刀を拔て側に寄れば錦はたちまち氣をうしなひ大地へ倒れふしたりけり男を是を見より震出し跡をも見ずして逃去ける高影側近く寄て既に刺殺さんとせしが月影にすかし見れば其姿たをやかにして揚柳〻雨に逢ごとく花のしほれし風情なりければ殺す事を得ず側が川より水を含み錦が口へ入漸々生氣と成ければ彈五郎は詞をやわらげ我日頃の恨みによりて今御身を刺殺さんとせしが餘りの不憐さに命を助べし其命の替りとおもひ我心に隨ふべし若し背くにおゐては刺殺なり生死の二つ御身の返答にありやいかに〳〵と責ければ錦苦しき事なり毒蛇の口に入ごとく劍の山を渡るがごとし暫く答もせざりしが心におもふやう本望達せざるまでは命おしくまたかゝる惡人の心に隨わんも殘念なり隨はざれば命なしいかがせんと苦しみけるが所詮逃れぬ處と覺悟を究め死し父上の靈魂へ言わけせんとむつくと起上り芙蓉の目に角を立おのれ彈五郎の畜生十汝がごとき惡逆無道の者にいかではだ身を汚さんやたとひ此身は劍にかゝり果るとも死を恐れ不義非道の汝に隨ふべきやすみやかに道をひらき通すべしとのゝしりければ高影今はこらへかねたゞ一打と切てかゝる錦は懷劍にてはつしと請とめ女なりといへども流石は劍術の師たる横瀨七郎兵衛が娘なればしばし働といへども病中と言殊に懷劍なれば心に任せず壯勇の彈五郎に何かは以て及べき脇腹より刺通され其儘たをれて死せしぞ無ざんなる哉廓一と呼れたる錦太夫やう〳〵二十の花の最中と言もおろかなり嗚呼如何なる前世の業緣にや父の敵成事しらず處こそ替れ共親子ともに同じ劍に命を落す事誠に惡緣と言べし

高影彈五郎石部刑部を討て逐電する事
幷京屋善藏訴人の事

斯て高影彈五郎より日題戀の意恨成錦を殺し恨をはらすと言へども下男を逃せしこそ後の禍ひなれ彼者我惡事を訴んは必定なり屋敷へ戻り罪を待より何

國へ成共立退身を忍んと心を定め所詮當處を立退へ上は過し頃我を賤しめ恥辱をあたへし石部刑部此次手に恨をはらさんと三日町御門を入て石部が屋敷の處に至るとき御城の太鼓聞へければ指を折て數ふるに九つ也時分はよしいかにして門内に入らんと窺ふ處に辻番より日雇いの番人提灯持と何にか物語りて來る樣子なれば見咎められじと往來のものゝ振して番人の跡より隨ひ行しに彼番人提灯持し男に言樣石部樣は垣越さまと何れへ行給ふかいまだ歸り給はず提灯持し男答て垣越樣は何れへ行給ふかしらず石部樣は御仲より寄合にて三ノ町長篠勘ケ由樣へ行給ふなり番人また言樣我今夜は折あしく當番也いつも九つ迄廻り其後は不構寢る也今夜は旦那がたの歸り給はぬうちに寢る事ならず迷惑也明日は給金請取殊にわらじ閙敷ければ晝寢もならず乍然給金請取ならば堀江町をおごろふかただし湯本と出かけやうか夫より安物の行人町紅葉御吸物もよかろふと是を思へば一夜計寢ずとも勤は難有と當座抱の番人なれば己が分際相應の物語りして悦び石部刑部長篠が屋敷へ行しこそ幸ひなり歸りを待受日頃の恨みをはらさんと鯉口くつろげ待居たり斯とは知らず石部は唯一人の供に提灯もたせ高砂の曲を手鼓に拍子を取り十八公の粧ひ千秋のみとりをならすと謠ひながら屋敷間近く來りしに思ひもよらぬ塀の下より彈五郎踊り出て後より大げさに切込たり刑部は老人といへ深手に拔合事さへ叶わず六十二歳を一期として其まゝ倒れて死しにけり下男は提灯打捨逃る處を彈五郎すかさず背より腹迄刺通し跡をも見ずして越後街道の方へとにげ去ける夜中の事なれば此騒動しるものなし程なく八つの太鼓鳴て彼辻番又廻りけるが是を見付て驚き側近く寄て見れば刑部也ます〳〵仰天して石部が屋敷へかくと告る石部が家來共さわぎたち曲者を尋るといへども其行方知ず是を聞て刑部が妻幷小雪なげくこと氣絶るがごとく主税折ふし大阪留守なれば詮方なく檢使のあらため終り翌日なく〳〵葬送をいとなみ菩提所館の成願寺へぞ葬りける斯て七日〳〵の佛事をいとなみ涙のかわく間もなく此事主税にしらせんと大阪に飛脚を立ける扨又石部が討れし翌日堀江町京屋善藏と言者訴へけるは私かゝへの錦と申者昨夜高影彈五郎殿に討れ相果候則證據人下男吉助

と申ものに候御穿鑿奉願候と訴へければ即時に物頭篠山三兵衛を彈五郎召捕として差向給ふ處彈五郎出奔して行方しらず趣これは右部を殺したるも彈五郎に相違なしと所々へ觸者を出し高影が行方を尋給ふ扱又此事飛脚以て大阪おもてへさし立蒲生公へ上達しける

右部主稅へ國元より飛脚到來の事
幷主稅御暇を給り會津へ歸國の事

爰に右部主稅は大阪に有て横瀬七之助が在家しれざる事を本意なく思ふといへども詮方なく委細を文にしたゝめ太夫が元に下しけるが其返事さへなく打過ければ錦をあんじまた兩親の事抔思ひ出し何となく案じけるがある日本院に出て四方を眺め居たるに三羽のからす來りて主稅が前を飛あるく事頻りに啼ければ主稅不思議に思ひ怪しみ餘念なく眺め居たる處へ同役の親友吉野隼人と言者來主稅とは懇意にて心安く出入しければ案内もなく眺め居たりし樣子なりければ隼人側近く寄て御身にはなにを眺め給ふぞと聲かくれば主稅うち振向みれば隼人なり主稅言樣今日は朝番にて唯今御殿を下り退屈のあまり本院に出で空の氣色を眺め居たり貴殿の御出こそ幸ひなれいざくつろぎて物語りし給ふべしと言隼人つく〳〵主稅が面ざしを見るに色土のごとく心苦しく心苦しめる體なれば尋言樣御身何ぞ御心苦にても候や顏色常に替りて候主稅答て言樣貴殿の御察の通り隱す事せず思ひ内にあれば色外に顯るとの道理我此頃兩親を案ずる事しきりにて忘るゝ隙もなし然るに今日本院に出て空のけしきを眺むるに三羽のからす來て我前を飛あるく事幾度にして鳴事常に替り烏は凶事をつぐる烏也と承る國元を案ずる也隼人其を聞て貴殿退屈のあまり無益の氣勞し給ふこと氣の迷ひといわん凡そからすは氣質いやしき烏にて少しの餌を見付る時は軒端などに提げ置物をくらわんと啼あるき飛ちごふもの也豈凶事を告る烏ならん哉斯くからす啼を心にかけ夢見のあしき抔氣にさゝゆる事下賤の爺にして武士の用べき事にあらず少しも心を勞し給ふ事なかれといひければ主稅も少しはこゝろ落着安堵したる體なれば酒肴を出し日終まで軍書を論じ基を打てたのしみ夜に入ければ隼人は己が長家へ歸りけ

る主税も休息せんと寢處に入しに門を叩くものあり半藏出で戸をひらき見れば御國元よりの飛脚也と狀箱を出す半藏受取て主税が前に出しける何事やらんと封押切て讀下け見れば去んぬる夜人しらず父を討て立退き候段々吟味致候は高影彈五郎の仕業なるよし抔始終悉く記したり主税是を見て大に驚き半藏諸ともに歎く事甚し主税はよふ〳〵顏を上げて言樣我日頃の案せしこと自然とむしの知せたりと言ふべし又今日のからすもまさしく是をつぐるものならん今いか程なげく共甲斐なしたゞ憎むべきは高影彈五郎也と或はいかり又ばなげき夜の明るをこそ待きりける斯て翌日に成りければ右の始終氏鄕卿へ上達しけるに殿樣聞せ給ひて忝なくも御落涙有て主税を御側近く召て此度父の非業の最期こそ殘念に思ふべしわれ愚昧短才にして浪人高影彈五郎の邪智姦曲をしらずして抱ひ剩へ他の嘲をかへりみず一家中の師範を申付けし事家に士なきに似たり我此頃心付て後悔なし國元へ差遣し高影を退ぞけんと欲する處彼是延引に及かゝる凶事を引出し譜代忠義の賢臣を失ひたり悔むべき事我不明にくむべきは彈五郎也國元より飛脚到來して委細を聞けり其方へ暇申付る間少しもはやく本國へ下り母を介抱すべし迚御懇の御言を蒙り主税は難有御禮申上半藏其外供廻りそこ〳〵に旅支度して大阪を發足し道中をいそぎ日をかさねて故鄕若松へぞ着にけり

石部兄弟敵討を願ふ事
幷石部主税下野の國へ趣事

斯て石部主税は若松のやしきに着母妹に對面したゞなげくのみにて外に言ふべき事なく日を過しけるが毎日菩提所成願寺へ墓參りなし七日〳〵の佛事もすみて涙の中にも錦を思ひいたし人をもつて尋ければ是も父と同夜彈五郎に殺されし由なりければ尙々涙を添て哀にこそは思ひけり或日主税は母に向ひて言樣御歎は去る事ながら今は何程なげき給ふ共甲斐なし是皆宿世とあきらめ不幸と申べし此上は御身上こそ大切也歎きの餘り心を勞し給ふ事なかれ追付高影を討て父上の靈魂へ備へ母君の御心を慰め候也某は一日も早く御暇を願ひ敵の行方を尋べし小雪幷半藏は家に殘りて母の御養育賴む也と言ひければ小雪

是を聞立上り楊柳の風になびく勢ひにて主稅に向ひ兄上のお言葉とも思へず情なくも宣ふものかな女なりといへども親の仇をもむくひず本望をとげずして父上の悦び給ふべきや我また何の面目あつて生ながらひ候べき命を捨て義を取の理に候へばたとへ女の小腕かへり討に逢ふて命を落すともいとわず候もし神佛三寶のかごを以首尾能本望を達しなば大幸此上なし是非に連立給ふべしといきみ立て言ける主稅は其志を感じ二人一同に尋ね廻りて仇を報はんと得心し扨て又母上のことは半藏一人に頼也と言ひければ半藏聞きて涙を流し誠に御孝心亡君も黄泉の下にて悦び給ふべし又某は御當家に幼少より召仕われし大日那の御厚恩山の如く海のごとしいつの世にかは報奉らせん常に身命を捧て御奉公仕し處此度不慮の御最期此由聞より涙の淵に沈と候へども其甲斐もなし身不肖なりとも責ては御兄弟の本望を達し給ふかた腕ともならんと日頃存せし處思はずも母君の御養育の仰を蒙り心外至極に存るといへども是又辭し難し御母君の御養育も一段事也是は私弟半之助に被仰付被下度私は是非御供仕らんと申ける半藏が忠義を感じ半之助召出し母君の御養育致べしと申付既に其議に定りければ母に此の由を告げければ刑部殿には死別れ又兄弟の子には生別れふたゝび逢ふ事も定めがたしなげきいやまし終に此世のいとまごひ黄泉の旅路に赴き兄弟は不幸の重りなげく事晝夜をわかたず涙の雨のはるゝ間もなく暮しけるがいかが程なげきても甲斐なければ此上は少しも早く高影を討て父の靈魂をやすめんと半藏諸とも其用意をなし先願書を以暫くの御いとま被下度旨家老中迄達しける即老職の面々會所において評議有たるに當時大老職五萬八千石白石の城代蒲生民部正申けるは右部兄弟の願尤成といへども大守は大阪御在府也稀成大事なれば一應大阪表へ申上主君の上意次第申付しかるべし我々が所存を以計ふべき事にあらず大阪より上意あるまで差控へ罷在候旨申付然るべし各々いかゞ愚存候哉と言ければ大老の詞とは言殊に舊例もなき事なれば誰一人違背の者もなく既に評議定まらんとせし處末席に有し當時濱崎の城代二萬八千石石川内藏之助と言者當年三十六歳若年寄を勤めけるが進出て申けるは民部正殿御詞儀當然の理なりと雖も夫は時により時

に應すべし今兄弟が願ふ處暫くも延引すべきにあらず臨機應變の計ひ遣さんこそ老臣の職ならずや我々が所存を以て願にまかせ候とも如此孝子主君にもいかで御咎めあるべき哉若後日君の御賢慮に違ひ御咎ある時は此内藏之助一人罪を申請屆十文字にかき切らん左候はゞ別にしさいなし某が命に替へ申付候を少く御別意あるまじと大音にて申ければ流石大老の事なれ共返すことばなく一同尤也とけつ着し兄弟願の通り御暇取仰付ける若部兄弟難有く御請申上退出して旅立の用意をなし召仕の男女夫々に暇を出し半藏諸ともに住馴し若松を打立關東のかたへと志し湯本の峠打越て小雪はならはぬ旅の空さかりの花もとぼ〳〵ときのふけふとは替り行く定めなき世を恨みつゝ歩みいたはる主從が心細くも竹の杖涙にぬるゝ旅衣力をそへて半藏が面てい流石いさめども胸の蓮花もちる心地原の宿近つきぬれば東は近き湖水うたかたき行衞はしら波の男波に父を思ひ出し女波に母を思ひやり谷のながれやふちと瀨に替り浮世や飛鳥川にごりがちなるうき身ぞとかこち涙は松原の露諸ともにをちこちの峯にさまこふきじの聲いとゞ淋しき山坂ののぼりをりの赤津の驛に着にけり日も南に照り給へば晝の支度して又立出であゆむ程に福良の驛にいたりける小雪半藏に向ひ言樣南に見ゆる山は珍敷平山也名は何と言半藏答てあれは布引山とも吉歌にもいへる

布引や更に山家の旅衣ふし染ていつか來て見んと讀み殊にこの歌はけふ立染てまた歸るとの心なれば本望達し再び歸國し給はん吉左右也立初よしと物語り歩む程に三代に着ぬ日も夕陽に傾き給ふ主從爰にやどりて翌日は白川の城下に着にけり則白川の城は會津領にして城代田丸中務大夫が居す浦生源隨一の高知行して九萬七千石を領す彼處に主從三日逗留し又下野の方へ志し大日原喜連川抔打過て野州宇都宮に足を留め旅籠町武藏屋といふ宿屋をかり逗留して日毎に出て高影を尋ね半藏は按摩と成りて旅人に心を付半年計り過しけり

橫瀨七之助會津へ志し下る事　幷七之助武藏野の原にて敵の在處を知る事

石部が事わけは扨置爰に又七年以前常州土浦にて父を船岡亘理に討れし横瀬七之助（私曰此本は大夫石部双櫻を專らとしてはべれば横瀬の事は錦が物語せしのみにてくわしくかゝず）會津にて姉に別れしより上方へと尋登り大阪に暫く足をとゞめ船岡亘理をねらふといへども更にしれず是に依て大阪を發足し四國は言に及ばず九州薩摩肥前の果まで尋ね過るといへども其行衛しれざれば七之助深くなげひて思ひけるは我數年心勞して尋ねるといへども亘理が影だにみへず此上は一先奥州に至り過し頃別れし姉に對面し其上思案もあらんとまた陸奥の方へ志し急ぎける程に中國を去東海道を打過て武藏國まで下りける頃は卯月初め成けるが既に品川と言處にて日暮ぬ急ぎの旅の事なれば千住まで越して泊らんと提灯をさげ心細くも武藏野の原に差かゝりけるに月は空のなかばに照りわたり武藏野の月と讀しもげにや理也と思ひ出て往來の人もなく只虫のなく聲のみに夜風身にしみ渡り原の半にも至る頃後より聲かくる者あり七之助怪しみて振向て見れば飛脚體の男なり彼男七之助に向ひ言樣先程より御身の提灯目掛け何卒御道連になられんと急ぎ候處漸く追つき候也定めて千住へお越に候はん御同道奉願候也某事は大阪より飛脚として常州土浦に參る者也怪しき者には是なしと言ことば常陸に相違なく聞へければ七之助容しらぬ振して言樣某事も急用有之奥州の方へ志すもの也然る處此原にて日暮ぬといへどもやどるべき人家もなし心細くも行處に御身と道連と成るは幸ひなれ此道中不馴の者に候ふ故御同道望處也と互に心安く四方山の物語して歩む程に月の光りに森みへて淺草の近所に至りければ男言樣御覽被成最早淺草の里に候へば千住へは間近し左の森は淺草寺とて觀世音の靈場也往古推古天皇の御宇漁人の網にかゝりて上り給ふ則尊敬して此處に堂を建屋上を草にて葺き安置す依之淺草と號す其後武將源の賴朝又御建立有て淺草寺を開興し給ふ其後足利家御建立の靈場也右の森は待乳山と申也七之助又向ひていわく土浦の御家中に候ては定めて船岡亘理殿を御存知にて候はん男しばらく案じ成程存候也然る處六七年以前横瀬某とかいふ人を討て行衛しれずなりしが今は會津に仕官し高影彈五郎と改名し兵學師範して繁昌に暮候也七之助心得なほも眞僞をためし見んと又向ていわく御身常陸奥州と國を

へだてていかにして亘理會津に居る事知り給ふぞ男答ていわく某事飛脚組をつとめ申也然に去秋蒲生家へ飛脚として會津へ參りし處驚入たる繁昌の地也奥州は中に不及近國にはまた有まじき城下也殊に某逗留の折節は八月大鎮守の祭りにて近國よりも貴賤群集して其賑ひ老若男女阡陌にみち〳〵て夥し屋臺人形綺羅行列美麗結構目を驚かしぬ其群集の内に過し頃土浦を逐電せし船岡亘理也いかゞして斯立派の姿ならんとそば成人に向て誰殿と申人成と承り候へば高影彈五郎と言人成と答ふ其趣意懇に聞ひ候へば彼人語りて言樣元は浪人にて北小路といへる處に居られしが近頃御抱有て三百石賜り兵學の師範をせられしが連よき人也生國は土浦のよし當家中多き中に浪人より身を立師範と敬れ給ふ事誠仕合人也と語る是に依て船岡亘理也今は高影彈五郎と改名して會津に居し事を知り候也と委細に語りければ七之助益悦び心中に天地を拜し敵會津に有事を聞くこと本望達する時節至れり天にもあがる心地して飛脚の男に相應に挨拶して急ぎける程に千住の大橋に至りけり掃部の宿打越て千住の宿中に成ければ飛脚の男言樣最早此宿より常陸へのみちに候へば是より御別れ申也實に旅は道連とかや貴殿の御陰を以て心安く參り也是も他生の緣とかや申べし若し土浦へ御出の節も候はゞ必御尋被下べし同心町にて間瀨又兵衛と申者也と言ければ七之助言樣某こそ不調の道殊に夜中とはいへ貴殿の御同道にならずんばいか計心勞なるん御禮言葉に盡し難し御緣も候はゞ再會を期し候半と互ひに禮謝して常陸奥州街道へぞ別れける

横瀨七之助石部主従に面會の事　幷石部主税七之助に委細を物語る事

扨も横瀨七之助は敵の在所を聞出し是佛神の導給ひしならんと千住に泊らず一刻も早く會津へ急がんと行ける程に杉戸と言宿に至る時夜はほの〳〵と明にける彼宿にて支度し又急ぎける程に武藏下總を打すぎて下野國宇都宮にぞ着にける夕陽に傾き長々の旅に足勞れければ今夜は此宿に泊り少し勞れを休んと武藏屋と言宿屋に至り洗足して座敷へ通り按摩とらせ旅の勞れを休めける茲に過し頃此武藏屋と言に

逗留してかたきを狙ふ石部主從心を盡し尋るといへども更にしれず空しく月日を過しけるが此夜半藏七之助かたへ來て按摩を取り物語りしける私事渡世の業をならいしより此方年月泊り客衆幾百と言數もかぎらず咄合候へば誠に西は九州薩摩より東は松前蝦夷の果迄も名前或は國々の風俗承らぬ處なし世の諺にも歌人は居ながら名所を知ると申候が按摩は居ながら諸國を知り候抔と笑ひを催し扨又言樣御主さまは何れの御家中何國より何方へ御出成候やと言ければ七之助答て某は土浦の家中横瀨七之助と言ふものなり少々の用事有て會津へ罷下る也と言ければ半藏は是を聞て暫く思案して横瀨七之助と言は大阪にて若殿の尋給ふ名也若し夫ならんと主稅が座敷に歸りて頻に告げれば主稅對面して眞僞をたゞし相違なくば錦太夫の最後を物語らんと衣服をあらため脇差刀を手にさげて七之助が座敷へ至り見るに日頃旅勞れにや心能眠り居たり主稅そばによりて見るに年十七八歳と見へ面ざし錦太夫に其儘なりければそは錦が弟にうたがひなしと聲高く起しければ七之助目を覺し主稅を見てむつくと起上り側成刀をつ取つて何者なれば某が座敷へ無案内に不禮なりと咎めければ主稅は是を聞て天晴勇氣の者也と心に感じ七之助に向ひて御主の咎め給ふ事なかれ怪敷ものにあらず某事は會津家中石部主稅と申者也直々御尋申度旨有之無禮も不顧御座敷迄推參仕候願くば不禮の罪を御用捨被下べし七之助是を聞て座に直り某旅の勞れ甚し心ならず過言粗忽の至り御捨免にあづからば大慶に存候也扨て御尋相成筋とは如何樣成事に候や主稅問て言樣御身錦どのと言婦人は御存に候や七之助驚き錦と申女も數有べく候へども某が姉も錦と申候也其外不存候主稅是を聞いて相違なしと又言樣然らば御身は錦殿の弟七之助殿といひ給ふらん七之助答て仰の通り錦の弟七之助にて候いかゞして某が身上を能御存知候や主稅言樣然らば御物語仕らんと錦太夫になれ染しはじめより錦にたのまれ大阪を尋し事又其御身の上かたきを尋ね給ふ由を聞し事錦太夫彈五郎に討れし事又父刑部を討れし事彈五郎逐電せし事主從三人敵を狙ふに付當國に逗留したる事始終をくわしく語りければ七之助是を聞て驚かざらんや姉の最期をなげき落涙數行に及びて扨顏をあげ姉に別れ

てより西國を尋廻りし事會津へ志し敵の行衛を聞し事船岡立理高影彈五郎と改名せし事詳に語り或は怒り或はなげき最早彈五郎逐電せし事なれば會津へ下るべき用事なし天地廣しといへども彈五郎に恨みある事貴殿も某も同じ事なれば是より心を合し高影彈五郎を尋出し本望を達せんと懇談數刻に及びけり主稅は小雪半藏を出し對面させ四人互ひに力を得たとへ高影天を翔り地をくゞるとも尋出し敵を報わんと其夜は酒酌汲替し皆々其夜は休みけり

高影彈五郎津川にて召捕らるゝ事
幷宇都宮へ會津より飛脚到來
の事

去程に高影彈五郎は石部刑部幷錦太夫を討て若松を逐電して同國津川と言ふ處に隱れ居たりけるが天の道いかで如此强惡を洩し給ふべき當處に彈五郎が惡事をしる者あつて城代蒲生玄蕃方へ訴へ出ければ早速人數を差向け彈五郎を召捕へ此趣若松へ注進をありければ請取の警固として物頭瀧口大學殿仰付組子を引連津川に至り則玄蕃より彈五郎を請取網乘り物に前後左右を警固して若松へ着廓内にきびしく牢をしつらひ數多の番人を附置日毎に拷問し給ひければ錦を討し事又石部刑部を闇討せし事殘らず自白に及びける扨又石部が兄弟が在家を尋給ひけるに今は野州宇都宮に居趣なりなければ飛脚を以宇都宮の領主へ御願在ける石部主稅と申者父の仇高影彈五郎と申者を相尋御城下に罷在候由承る然處いづれに住候や居所不詳候高影彈五郎儀は當國津川に於て召捕候へば歸國致候樣其領内御尋の上御仰付被下度段申遣されければ宇都宮領主よりかしこまり候趣御返答にて町々へ高札を立られたり其文に曰

一會津家中主稅と申者父のあだを尋當所に罷在候由敵高影彈五郎と申者會津にて御召捕候間早々歸國致べき旨申來候右の者有之候はゞ町奉行山口九郎右衛門役所へ可申出者也

月　日　町　役　所

右の高札を町々に建られければ宇都宮の人民誠に珍敷高札也と語り合ける扨又石部主稅は明神に參詣して敵の手がゝりまた身の無事をも祈らんと武藏屋と言ふを立出旅籠町をすぎて程無神明に詣で歸る道通

り町のかたへ出ける大橋に大勢集りし體遠くより見付人立繁き處に氣を付る身なればまめざふ手品の類ならんと讀下せば己が事也かたき彈五郎會津にて召捕候へば早々歸國と讀終り夢かと疑ひ現かとあやしみ再三讀返し讀で喜しき事飛立おもい此事少も早く三人のものに物語せんと急ぎ武藏屋に戻り小雪七之助半藏に告げれば皆々悦ぶ事限りなし主稅は衣服をあらため町奉行九郎右衛門方へ申出ける即ち九郎右衛門對面して蒲生家よりの書狀を見せ又其孝心を感じ銀三枚出し是は領主よりの心付也路金と可被致と差出しければ主稅其恩を謝して難有頂戴し御主君樣へ宜樣御禮奉願候と山口が屋敷を退き武藏屋へ歸り四人旅の用意をなし亭主に長々の逗留の禮をなし宇都宮を發足して國を出る足元に事替り勇み進で急ぎける程に三日を經て故郷若松に着年月を經し事なれば塀破れ草茂りし屋敷に入て蒲生公へ歸國の旨を御届しければ翌日登城致べき旨申來りしかば石部主稅かしこまり即刻登城しければ氏鄕卿御目見え仰付長々心勞を稱し給ひてまたつゝがなきを御祝て仰けるは高影彈五郎汝が父錦とやらんを討て若松を立去といへども天罰のがれがたく當國を去り得ず津川に隱れ住み召捕へたり敵討申付候間用意可仕旨定日は追て可致仰付と有ければ主稅難有重々の厚恩を謝し重ねて申上げるは常州土浦の家中横瀨七之助と申者是は父を彈五郎に討れ幷御當地におゐて討れし錦と申は彼れが姉に御座候得ば重々の恨有者に御座候七之助を尋ね諸國を廻り某宇都宮にて面會し則當地へ同道仕候御慈悲を以一同仇討の儀御免被下度段願ければ氏鄕卿聞し召れ則七之助に御目見致仰付願の通一同に敵討致べき旨被仰付七之助大に悦び退出して石部兄弟共其用意をなし定日をこそ待にけり

石部主稅幷横瀨七之助高影彈五郎を討事

幷双櫻の由來石部横瀨出世の事

頃は慶長元年春三月廿五日を敵討の定日と御出されければ四人孝子勇み立て其用意をなし天寧寺河原に矢來を結び既に日限に成ければ近國より聞傳へ貴賤老若山の如く矢來の外に群集して見物す見届の爲同家老猪苗代城代蒲生主水之助若年寄に熟臘の城代

佐伯采女番頭吉津藏人警固物頭頭六人澤田半兵衛横山左膳牧野連藏石原左馬之進志田藤之進深溝忠衛各組を隨ひ嚴重に固たり御大目付には藏堂伊右衛門横目役須目八之進林兵衛徒目付役郡仙藏門奈磯右衛門醫師本道安積陸庵外科出破了祐その外仲間小者東西に別れ並居たり相圖には太皷と定め其設け嚴重なり扨又主稅七之助同樣の支度に立出下には白練の袷上にはあさ黄の袷をかさね同色の股引白鉢卷に白綾のたすきをかけ主稅は來國次の二尺五寸あるを帶し十文字の槍を引さげたり七之助は重代三條宗近が打たる刀を帶し手裏劍小脇に差はさみ勇々敷出立小雪は淺黄むくを下着となし上には紫袷を重紅のたすき白綾の鉢まき長刀小脇にかひかぶつて立出たり半藏は淺黄の袷を二つ重鼠色の股引に白鉢卷に同じ襷三尺一寸の大太刀を横たへて立出たり其有樣勇々敷も又あさましかりける次第也扨又高影彈五郎は淺黄袷を一つ着し白木綿を襷とし三尺餘りの刀をたいし出立たり既に相圖の太皷鳴りければ主稅一番に是より日頃の恨み思ひしれと切てかゝり彈五郎心得たりと拔合戰ひけるが劒術の達人なる高影彈五郎なれば飛鳥の如く働けれは主稅請太刀と成てすでに危く見へければ七之助是より主稅殿休み給ひと言まゝに切てかゝる其隙に主稅は少し退きて見物す七之助雷妻の如秘術を盡して働くといへども小腕の事なれば壯勇の高影に切まくられ段々後へ寄其隙に七之助退て休息す小雪半藏七之助を救はんと左右より切てかゝる彈五郎兩人を事ともせず前に顯れ後へぬけ千變萬化して戰ふ有樣天晴無双人げんわざとは見へず暫く勝負も見へざりけるが小雪何とかしたりけん彈五郎が前に轉びければ高影一打と駈寄る處へ主稅かけ寄りてさゝへければ其隙に起上り退て息をつく主稅半藏▽をせんどゝ切立ければ早業無双の高影成といへども大勢立替り入替り戰ひければ力疲れて太刀先次第によはる處へ七之助兼て用意の手裏劒を高影目がけて打ければあやまたず彈五郎の眉間にはつしとあたりければ忽ち眼くらんでたゞよふ處を主稅すかさずかけ寄て肩先より胸えかけて切込たり半藏七之助小雪聲をかけみじんになれと切殺しぬ實に因果的面の理多年の積惡此時に亡び失たり四人の歡びいか計ならんおし計るべし見物の譽聲山岳に響き暫くは鳴も

止ざりけり惣司を始肇固の人々四人の孝勇を感じ給ひ四人の者共御目見え仰付忝も御盃被下皆々面目を施し孝名を四海に輝しぬ扨又石部主税は二百石御加増被下都合千五百石と成番頭仰付蒲生主水之助が娘を妻とし彌々忠勤をはげみける後に錦太夫が殺されし瀧澤の南塚の印として一樹の櫻を植へけるが今は彼櫻四本と成世の人太夫櫻と呼びて春は若松の貴賤群集して花を眺め詩を賦し歌を讀て枝に短冊をさげ賞翫しぬ石部が下屋敷に有し庭のさくら今は瀧澤の北に有て石部櫻と名は一双の春の眺めとなりぬ扨又横瀬七之助は氏鄕卿の御意に依て小雪を妻とし本國土浦に歸參し八百石の領知を被下繁昌に榮ひけり次に大村半藏が忠義を感じ給ひ直參になし徒役に被仰付られけるかゝる盛榮な蒲生家も惜ひ哉下野守忠鄕卿の代に及で御家斷絶せり故に石部が子孫も其行衛をしらず

今の世にかたみと殘る櫻木の
幾千代經ても花のかわらん

會津双櫻記 卷之一終

文化甲子年撰風土記書

文化元甲子年撰風土記書 上

岩瀬郡川中郷牛袋庄
須賀川四ケ町

一、府城の子丑に當り行程六里二十四丁並南北家は東西兩側に連り南入口より北出口まで十五丁五十間
一、表通筋井六ケ所本町の内一ケ所仲町の内五ケ所
一、御制札場仲町の内南向所の方角行程同所より梨の積り
一、本町表通筋南入口升形より境まで七丁四十四間
徐町幅平均五間東側四百六十三間四尺家數は十軒
西側四百六十三間半家數は十軒
一、中町道城町表通筋南町入會本町境より北町境まで三十四軒七間町幅平均七間東側道城町境にて百六十七間半家數四十軒仲町西側北町境まで二百三十二間半家數四十七軒
一、道城町東側北町境より仲町境まで五十五間家數十八軒
一、北町表通筋西仲町東道城町境より北出口黒門まで四丁十九間町幅平均五間東側二百六十二間家數四十九軒西側二百五十六間家數五十二軒
一、御制札場より南升形迄九丁三十五間午に當南黒門まで六丁四十一間半未に當本町仲町境まで一丁五十一間午に當仲町道城町境まで一丁五十八間子に當北町黒門まで六丁十五間亥に當る
一、八幡町本町の内西小路表地尻より見附八幡宮石橋際迄五十八間半南側五十四間北側六十三間半家並南八軒北十三軒町幅五間徐御制札より午未に當る此間四丁四十二間半
一、馬町本町の内東小路表地尻より荒町境まで一丁十七間半南側七十七間家並十六軒北側七十八間半家並十軒町幅四間二尺
御制札より巳午に當るこの間二丁三十九間
一、郷學所同町中程南側御制札より午に當る此間二丁四十五間
一、荒町仲町の内馬町東境より東出口まで二十八軒
徐南側二十七軒家並九軒北側二十九間家軒九軒町幅四間
御制札より辰巳に當るこの間三丁五十三間

一、馬場町本町仲町道城町三丁入會馬町荒町間より北に入る小路右町地尻より見附十念寺門前まで南北二丁七間半東側二十七間家並十五軒西側二丁七間半家並十七間町幅四間

一、鍛冶町仲町西小路表地尻より見附要□院前石橋まで三十八間半南側四十間家並十間北は三十七間家並六間町幅二間餘御制札より午未に當此間一丁二十二間

一、東町中町の内東小路表地尻より見附馬場町地尻にて八間半南北とも兩側家並五軒北は十一間町幅三間半

一、寺町仲町の内東小路表地尻より見附馬場町迄南北ともに三十二間家並南側内藤勇左衛門長屋五軒道城町分三軒北側仲町より六軒十念寺境内　御制札より巳午に當る此間四十間半町幅二間

一、諏訪町中町の内西小路表地尻より西見附諏訪明神居鳥際まで五十一間南側四十八間北側五十四間家並南十二軒北十軒町幅四間　御制札より戌亥に當此間一丁五十六間一東横丁道城町の内東小路表地尻より東地上町地まで四十一間家並南側十間北は十軒町幅一間半餘　御制札より丑に當る此間一丁二間

一、池上町道城町の内東表小路横町角より南寺町まで南北一丁三間東側觀水寺境地蓮池西側町家並四軒妙勝寺境内町側一間餘　御制札より卯に當る一丁四十一間

一、裏町道城町の内東裏小路横町地尻より北町境にて南北一丁五間東側町家一軒殘燒失後畑に相成候西側道城町表屋敷尻町幅二間半　御制札より子に當此間三十間

一、並柳町北町の内東小路表地尻より東西三十間餘家並南三軒殘り明地北一軒殘蜜藏院境内町幅二間御制札より子丑に當り此間二丁四十間

一、守辰館町北町の内東小路三春海道表地尻より高田御領御境杭まで南側八間北側五間寺家並兩側一軒宛町幅二間半　御制札より子丑に當り此間三丁五十一間

一、西横町北町の内西小路表地尻より見附長錄寺下馬石南側長錄寺境石まで六十間北側藥王寺境まで二十三間幅二間半

御制札より亥に當此間四丁二間

一、番町御本陣本町の内　御制札より午未に當此間三丁五十二間

一、道城町の内清水の流を須賀川と申唱候

一、當所の儀往古二階堂家居城天正十七己丑年没落仕古城跡一ヶ所城内に三ヶ月井一つ龜燈櫻怨霊の藤有之由申傳候へ共只今は形跡も無御座候

一、二階堂家落城文化元子年まで二百十六年天正十八庚寅年より寛永十九壬午年まで五十三年會津御領左の通

一、蒲生飛驒守氏郷公御領若松附田村中務及田村郡守山に在城天正十八庚寅年より同十九辛卯年まで年數二年

一、上杉中納言景勝公御代栗田刑部殿中宿村愛宕山に在居文録元壬辰年より慶長四己亥年まで年數八年

一、松平下總守忠郷公御代白川町野長門殿白川に在居慶長五庚子年より寛永三年迄年數二十七年

一、加藤左馬之介嘉明公同二口加口明成公寛永四丁卯年より同十九壬午年まで年數十六年

寛永二十癸未年より白川御領

一、松平二口吉浦忠次公寛永二十癸未年より慶安二己丑年迄年數七年

一、本多能登守忠義公同下野守忠平公慶安二己丑年より延寶八庚申年まで年數三十二年

一、松平下總守忠弘公天和元辛酉年より元録五壬申年まで年數十二年

一、松平大和守直矩公同大和守基知公同大和守茂知公元録六癸酉年より寛保元辛酉年迄年數四十九年

一、御當主様寛保三壬戌年より

一、當町畑の内古館と申字は江持村向に二次田源藏館跡の由天正年中没落し後畑に被成申候由

一、北町東保土原館と申字は保土原江南齋館跡にて落城後畑に被成申候由口は小栗山と申小森御座候

一、蜜藏院境内の續に並柳と申場所に芭蕉翁の碑を建置地銘は時雨塚と申唱候

一、當町より二十丁程戌亥に當山寺村迄に徹山陳場山と申場所は二階堂家落城の砌仙臺政宗公御陳館にて西川原表番の石大黒石にて合戰の砌佐竹の御加勢數多配付有之由申傳候

一、當所北の端に釋迦堂の跡に石佛の釋迦一像有之

所に西川の流釋迦堂川岩瀨の流しと唱候讀人知不
申古歌御座候

陸奥の岩瀨の渡水をへて
みつまた山に雲ぞかゝれる

川向岩瀨の森岩瀨山と唱森一圓山は二つ四つ葉蔦
出候由中宿村鎭守鎌足明神の宮御座候傳古歌に
後德大寺左大臣

かくとだに思ふこゝろを岩瀨山
下行水のしたかくれしつ

紀　貫之

陸奥の岩瀨の森の茂る日に
一聲くらきはつ郭公

一、釋迦堂如來本尊佛は二階堂家落城後長錄寺安置
仕今以毎年四月八日繁昌仕候釋迦堂川幅四十三間
一、廣表田所養水堰一ヶ所上堰掛り田所但長さ七間
幅三間一丁九反九畝十五歩本町一丁三反三畝二十
四歩中町一反九畝九歩
道城町　御制札より辰巳に當る此間二十丁
一、下堰掛り田所但長さ二十五間幅三間六反六畝十
八歩本町九反四畝歩中町一反八畝四歩道場町御制
札より辰巳に當る此間二十丁
一、養水溜八ヶ所
山寺前掛り田十三丁一反二十一歩北町但東西百九
十間南北百六十五間長沼御領山寺村分水三分山寺
村七分北町　御制札より戌に當る此間二十五丁十
五間
一、諏訪腰地掛り田二反一畝九歩本町三反八畝歩仲
町但東西十五間南北九間
御制札より戌に當る諏訪町端
清水尻地掛り田六反五畝十五歩本町六反七畝歩仲
町但東西七間五尺南北九間二尺　御制札より巳午
に當るこの間三丁餘
丸田地掛り田一丁一反七畝二歩本町一丁二反九歩
中町三反七畝二十一歩道場町三反三畝十二歩北町
但東西二十二間南北二十間　御制札より未に當る
此間三丁餘　濁り地掛り田三反七畝九歩本町一丁
一反九畝二十二歩中町一反六畝歩道場町但東西十
五間二尺南北三十四間自由地掛り田六反五畝三歩
本町九反四畝二十四歩仲町二反一畝二十四歩道場
町但東西二十七間南北二十八間　御制札より巳に

當る十九丁三十間
蛭田地掛り田六反五畝十五歩本町一丁三反四畝十二歩中町二反一畝十二歩道場町但東西七十一間南北三十間御制札より辰に當るこの間十九丁二十間
五斗蒔掛り田七反六畝九歩本町五反五畝六歩中町但東西十八間半南北二十間半
御制札より卯辰に當る此間六丁餘
一、御當領高久田村地境まで十八丁五十六間同村まで二十五丁四十四間　當所御制札より午に當る鏡沼村迄二十八丁
一、高田御領前田川村地境まで十二丁十一間同村まで一里三丁
當所御制札より辰巳に當る先村御制札まで行程
一、御同領和田村地境迄十七丁五間同村迄三十二丁
同御制札より辰に當る先村御制札迄行程
一、御同領濱尾地境まで十二丁四十間同村まで三十一丁
同御制札より卯に當先村御制札迄行程
一、御同領堤村まで三十一丁
同御制札より寅に當る先村御制札迄行程
一、御同領江持村迄二十二丁
同御制札より先村御制札まで行程
一、高田御領中宿村地境まで七丁二十一間同村まで八丁二十六間
御制札より子に當る先村御制札まで行程
一、長沼御領山寺村地塵まで十八丁六間同村まで二十丁二十一間
御制札より戌亥に當る先村御制札まで行程
一、土浦御領牛袋村地境まで十丁五十六間同村迄十六丁　同御制札より酉に當る先村御制札まで行程
一、當所境内一里塚一ケ所地銘さいかち町上當所御制札より未に當るこの間十八町餘
一、曹洞宗　廣福山　北町長祿寺
大職冠二十七代の後胤二階堂遠江守爲長後依數度軍功加增相成中部之內數ケ所且つ賜奧羽兩國守護職依家臣逆臣文安の初歸須賀川城其後寬政五年六月壽六拾七歳にて卒去御名號
長祿寺殿茂山道英
開山教[illegible]賜號佛日惠照禪師月窓明譚相成所生千葉六郎末葉也拾歳にて依最[illegible]寺開山乙堂和尚出家其

後氣得諸方善智識再歸最寧寺五代舊屋和當嗣法依之能洲惣持寺相成最寧寺等輪番相勤之干時稱小釋迦遠近之貴賤甚尊敬此時二階堂爲氏在鎌倉數見干師治口論佛祖其要親□慈悔故長錄元年於須賀川城外西原建立七堂伽藍寄附干右寺順請師爲開山第一祖山家數益重後花山院御宇遠慈師德敕持賜佛日惠照禪師嘉號幷紫色袈裟宗門榮事也依て當寺十代文□長老まで常被紫衣且依永平惣持寺本寺命奥羽兩國下野等寺院然當寺遂出生緣衣の義其上奥羽兩國一圓が爲貴寺支配許狀從永平寺雖賜本書矢布之元和元年永平寺寬永六年惣持寺右兩寺より僧錄許狀從關三寺時々來數通の證文有之故會津百二十五萬石時天察寺惠林寺當寺三寺相僧錄其後雖屬白川代々相僧錄動之其後相僧錄之義止雖然長沼横田守山等寺院先規之通當寺支配江戸公儀諸僧錄大帳當寺之義錄記分明也依之

大公儀御用之義古今無斷絕關三寺の直觸なり右由緒有之候に付

御領主御年禮等申上時御菩提所格別其外一家初禮に仰付且最寧寺住番其外御領内類例無之人別勸化等までに仰付被下候

一、境内　東西百間南北二百間　御除地

右境内須賀川落城以後天正十九年田丸中務殿須知須賀川當寺九代□當長老當寺之由緒申達所□百石之高へ寄附右之地其後

太閤公爲捨地奉行青木伊馬守殿下向の時右百石の處無相違寄附永可致收納寺中門前山林竹木等諸役免除の書附其上殺生禁殿等の高札迄□立給依之蒲生飛驒守殿榊原□□殿□丹羽左京太夫爲代々於右境内尚茂構無之本多能登守殿時初須賀川北町本尊に江結入候本寺下總國葛飾郡國府臺總寧寺

一、伏見院御孫近衛殿御子二階堂□□爲治公御子二階堂遠江守爲長公寬正五申年六月逝去

一、爲長公御子由城守行光公文明九丁酉年七月二十日逝去

一、行光公御子山城守行詮公明應九庚申年

一、行詮公御子信濃守行直公天正六年戊寅正月十一日逝去

一、行直公御子彈正□□□公天正六戊寅年□月二十三日逝去

一、照行公御子信濃守盛義公永錄七甲子年七月四日逝去

一、盛義公御次男信二郎殿天正九辛巳年八月二十六日逝去

一、盛義公御後室慶長壬寅年六月十四日逝去

一、客殿天明六午年燒失建立不仕候

本寺正觀音　木佛座像　長さ二尺　新作

開山堂　南向　東西六間　南北三間

寮　東向　東西二間半　南北七間

大庫裡　西向　東西二間半　南北七間

鐘樓堂　一間四面燒失後建立

右之外燒失後諸堂出來不申候

惣門

表裏木戶先下馬石二ヶ所直末孫寺院百三十ヶ寺境内の外二階堂家茶毘場七間四面

御制札より境内戌亥に當り此の間五丁二間

一、臨濟宗　獅巖山　北町普應寺

普應寺起由

奥州岩瀨郡獅巖山普應禪寺藤原親朝處建而救謚政宇廣知師右先卯元大和尚之開山親朝其先出鎮守府將軍秀鄉之後胤結城朝光下野大椽政光之男獅七郎住上野介從五位下實征夷大將軍源賴朝公之男其母寒河尼八田武者所藤原宗綱之女也文治五年八月賴朝故藤原泰衡於奥州朝光從有戰功賴朝賞以白川岩瀨名取三郡建久三年九月源實朝大鳥島津忠久薩州之守護職授之朝光建久六年二月二十四日卒壽八十七法號阿賴光生朝廣生廣及祐廣廣綱居城三祐廣有食邑奥州江襲父任躬治薩州口薩摩十郎左衛門殿島津氏再領職奥州稱白川彌七左衛門尉口曆元年正月二十日卒年七十九法號普光院一圓道英祐廣有二男其長宗廣叙從五位下上野介事後醍醐帝大効忠勞因增賜數郡建武四年九月三日於勢州妄濃津に卒年七十歲法號高源院君山道忠其次及彈師也宗廣之子弟親朝任大藏太輔叙從五位下轉修理太夫始號小峯觀應元年秋八月爲定廣薦福造禪師峰而屬之而所口口創僅有白川金原二郡永德二年十一月十五日卒法號永巽院東山通輝應永中上奥中奥諸士招鎌倉管領足利滿義之三子滿直主事之滿直因駐此寺以爲檀越嘉吉二年管領上杉長使二階堂大炊口領岩瀨郡明年春大炊口築城郭中領川因遷寺再建今寺所在是也島守麾却禪指桑猶俄變獨有此寺山軒然不照人物草

木同乾朽滅則嗣今佛燈之明永耿千千百歳之後其可保哉

癸巳之秋參登本山許閲　中秘記之項得上束一段之事當山之舊記目□□流傳悲無實據今幸獲此一段不堪觀躍謹書之而以備當山萬代之龜鑑者也

正德三年季秋之日

前住普暇淵碩榑

謹書　印有之

上來者奥州岩瀬郡須賀川獅巖山普應寺之記也自右混亂而不知其本田鑑傳寫而成鳥焉□也于茲正德癸巳之秋住持鵬淵座原登當山冀知其實據故出□中所在之秘記令謄寫之而以草彼前弊令□其實基矣老僧亦不勝隨喜下筆于後編而爲萬古不易之證也

正德三己癸秋九月日

前圓覺一百七十四世義海油叉書于

黄梅浮香閣下　印有之

普應寺開山寂應安七甲寅年文化元甲子年迄四百三十一年

本寺相摸國鎌倉圓覺寺

一、境内　東西七十三間餘南北五十七間餘

御　地

佛殿東向　五間四面

本尊釋迦如來　木像座像長ケ二尺　自作

庫　裡　南向　東西十一間長さ二尺

鐘　樓　堂　九尺四面

地藏堂南向　二間四面

本尊地藏　木像立像長さ二尺

王岑瓦南向　東西五間南北三間

末　山　五ケ寺

御制札より戌に當この間二丁七間

一、天台宗　清水山　北町　行法寺

慶長三丙申年開基源海上人岩瀬一郡行堂支配錫杖候也然中奥住持光海代寛文元年門末亂候條同十卯庚年八月二十日本寺羽州羽黒別當寂光寺主海上人より可令當郡行堂法成下知錫杖頭免許狀有之候當子年まで二百九年

一、境内　東西二十四間南北二十八間御除地

寺南向　東西六間南北四間

本尊大日如來　木像座像長ケ二尺五寸

不動明王　木像立像長ケ三尺　海上人作

秋葉三尺坊　木像立像長ケ三尺

同　堂西向　　三間四間
天稻荷神社　　白狐木像
御制札より子に當此間二丁五十間
一、天台宗　　醫王山　　北町　藥王寺
二階堂山城守行詮公家臣遠藤壹岐文龜三癸亥年建立
守本尊藥師如來を安置山寺養源庵と號別當職にす
住僧老齡にて八旬近き故米山寺と號然る處當所落
城の節燒失故山寺村に住す其後慶長三戊戌年盛茂公
後室御乳母高橋菊彌草庵建立山寺寶來山米山寺の
藥師如來を寫再本尊として敎音坊秀圓別當職相勤
依之境內を米山屋敷と唱へ又は菊阿彌畑と號す當
寺同門徒の內同寺號に有之間改醫王山藥王寺と號
文龜三年より文化元甲子年迄三百二年本寺當所千用
寺門徒
一、境內　東西十五間南北二十五間　御除地
寺燒失後未建立不仕候
本尊藥師如來　　同堂
御制札より亥に當る此間四丁二間
一、天台宗　　長命山　北町蜜藏院
二階堂家當郡御加增之砌爲城代家臣二階堂治部太
輔下向の砌行基之作正觀音を守下御堂建立然るに
治部太輔就逆臣鎌倉より二階堂爲長公岩瀨以下□
謀叛人許罪後當所へ入郡蜜藏坊明覺と申僧觀音別
當職相勤境內御除地と相成然る處天正年中落城の
節什物記錄燒失本尊正觀音尊像計長命山に安置申
奧文錄乙未年御堂建立今以每年八月十七日祭禮繁昌
也文錄四年より當子年まで二百十三年餘本寺當所
千用寺門徒
一、境內　東西十八間半南北十六間　御除地
寺　南向東西五間半南北三間半
本尊正觀音　　木像座像長さ二尺
御制札より寅に當る間四丁二十五間
一、時宗　大通山　　道場町　金　德　寺
開山建武丁巳年遊行七代佗阿上人當國下向の時此所
人民時宗門の類祭仕院家草創應永元戊寅年宿阿上人
合入院其後二階堂家當郡加增以來代々寺領へ寄附
須賀川落城の後勢□田丸中務正忠觀公御領此邊在
居守山之時小作田村の內寺領十石宛行其證文以所
持其後會津の侍從前に時之太鼓相勤山に及聞古從
會津道中宿次人足を取寄附□夜相勤之處太鼓破損

の後相止申候本寺相州藤澤山清淨光寺文化元甲子年迄四百七十年

一、境内　東西四十一間南北六十九間　御除地

本堂南向　東西八間半南北五間

本尊阿彌陀如來　木像立像長ケ一尺一寸

什物　二祖上人御所持の金磬同御筆掛物一幅

銘德治二年と有

庫裡　南向　東西三間半南北二間半

熊野權現堂　西向九尺四面

表門　西向　高さ一尺横九尺

御制札より辰に當るこの間一丁二十三間

一、天台宗　龍王山　道場町　觀水寺

慶長十一丙午年宗海上人建立以來繁昌口本寺羽州羽黒山別當寂光寺當る子年迄百九十九年

一、境内　東西九間四尺南北十六間半　御除地

寺　南向　東西六間半南北二間半

本尊大日如來　本像座像長ケ一尺五寸

一、天台宗　鹿島山　道場町　妙勝寺

文安三丙寅年本寺妙林前住明業法印開山其後住持中絶以來度々無住の節什物記錄等紛失故に次第不分明也

妙林寺門徒文化甲子年まで三百九十九年

一、境内　東西十七間南北十三間　御除地

本尊不動明王　木像座像長ケ二尺

御制札より寅に當るこの間二丁餘

一、社人　大宮司　道場町　三島木常陸亮

尊氏將軍三代の尊滿隆公應永六己卯年開基滿隆公當國笹川村に住稱笹川御所落城後二階堂行光公文安三丙寅年當社を今境地に引移す私先祖にて社人三島木上總介と申候然る處私祖父紀伊守職よく出精の由本所吉田殿達御聽奥州口代官役被申付候亡父紀伊守寛政六甲寅年五月吉田殿以御奏蒙勅許文官司紀伊守從五位下に位階仕其後吉田殿配下奥羽當三ケ國社人爲取締吟味兼被申付文安三年より當る子年にて三百五十九年笹川御所神社寶物等私處持仕如舊例每年正月元日右村へ罷越神事執行仕來申候吉田殿御着用の立烏帽子御直頂戴たとひ無官にても永々着用可仕旨にて被下置候

一、社境内　東西十一間南北十七間

慶長年中御竿入後町寄附

天照太神　一間四方
蛭子太神宮　三間四方
本社北向　二間四方
□□北向
幣殿北向
拜殿北向　東西五間半南北二間半
石鳥居　高さ一丈一尺横八尺
末社稻荷宮　四尺四方
同荒神宮　同斷
御制札より寅に當る此間二丁四十三間
一、吉田殿支配　神主　中町須田右衛門太夫
岩瀨惣社諏訪明神當所遷座慶長戊戌年より當る子年まで二百七十年由緒は先達而書上候に付文略
一、境内社地　東西八十二間餘南北五十間餘
本社東向　東西三間南北二間
拜殿東向　東西二間南北八間
神樂所南向　東西二間南北二間半
類燒後假屋
末社市稻荷宮東向　東西二尺五寸南北二尺　石祠
同　松□庵宮東向東西三尺五寸南北三尺　板葺
同　雷神宮南向　東西八寸南北九寸　石祠
同　天神宮北向　東西一間南北九尺　殿造
神寶太刀三振　一振末行銘二尺五寸三分
同　無銘二尺八寸
同　同斷二尺六寸四分
石鳥居東向柱四尺五寸廻り
高さ一丈一尺五寸副一尺
上杉中納言景勝公御建立
神主居宅北向　東西九間半南北六間半
御制札より社地まで二丁二十五間戌亥に當る境内外
御制札まで二十丁未申に當る
末社牛頭天王宮東向　東西二尺五寸南北二尺石祠
一、諏訪明神別當
天台宗　金剛山　中町　千用寺
人皇五十五代文德帝の御宇奥羽蝦夷之惡徒爲退散依勅令比叡山座主義勅命天下安全國家鎭護の道場建立永可爲祈□旨依宣旨仁壽元辛未年慈覺大師の開基於手袋庄寺領千石給之候其後足利將軍家の節二階堂遠江守爲長公當所居城の節當寺由緒に聞正元於手袋庄寺領千石給之候新領相勤文安三丙寅年

二階堂家當寺院に諏訪明神勸請學以別當兩職今以
相勤落城後寺領取沒收併奥州三ヶ靈場九百餘年の
舊跡にて他に□□靈室所持仕るよし申傳候今者開
山大師御所持の五帖幷碼碯珠數所持仕候に付先年
准后宮□良宮樣御尋に付奉備高覽
有叡感後代永々安置寺庫失神無之住持の僧相守獵
に拜覽不可許之旨御奉書御下知有之候委者享保年
中書上申候仁壽元年より文化元甲子年迄九百五十四
年本寺上野國世良田村長樂寺

一、境　内　東西三十四間南北三十二間　御除地
本　堂　南向　東西六間南北三間半
庫　裡　東向　東西四間半南北十一間半
書　院　南向　東西五間南北二間半
本尊阿彌陀如來　木像座像長ヶ一尺八寸慈覺大師
作

外　境　内　東西二十五間南北七間半御除地
地藏尊堂東向　木像立像長ヶ四尺　三間四面
神　明　堂　去申年燒失
辨財天堂　同　斷
末　寺　三ヶ寺

門　徒　十六ヶ寺
御制札より戌亥に當るこの間一丁三十二間
境内の外十念寺支配離三庵境内東西九間南北八間
寺東西三間半南北二間半子安堂西向九尺四面
御制札より辰巳に當る此間三十間餘

一、天台宗　妙見山　中町　妙　法　寺
文安三丙寅年二階堂家開基本寺妙林寺十九代明榮法
印妙見宮別當相勤申候元錄年中大火の節記錄什物
等燒失本寺兼帶院由寺號明榮代比叡山より免許妙
林寺門徒文安三年より當る子年まで三百五十九年

一、境　内　東西二十三間南北三十三間　御除地
寺　元錄年中燒失
本尊正觀音　木像座像長ヶ八寸　本寺預ヶ
稻荷宮南向　一尺四面　石　祠
御制札より辰巳に當る此間一丁十三間

境　内　東西三十五間南北十一間　御除地
御制札より辰に當る此間七丁

一、天台宗　羽黑山大勇法弘院　中町　妙林寺
天長元甲辰年弘法大師當國下向の砌於和田村大佛大
日如來を石へ彫作給開山は慈覺大師の處象と申僧

住職其後二階堂爲長公當郡加增御下向の砌法印明榮と申御歸依供奉之砌當寺無住に付住職と相成爲長公二の丸へ一寺御建立被成明榮法印居住の處天正年中落城の節兵火にて舊記等燒失に付往古の茂町代町野長門殿へ相願今境内引移り其後擯僧まで五十四代相續天長年中より當子年迄九百八十一年寛喜年中當時宗源と申僧比叡山へ相達上野國世良田村長樂寺客末山院山寺號は慈覺大師へ致免許候

一、境　内　東西二十八間南北二十二間　御除地

客殿東向　東西三間半南北七間
茶の間南向　東西三間半南北七間
庫裡南向　東西六間南北三間半
二階堂客守本尊
千手觀音（金佛立像長ケ三寸）堂東向三間四面
境内外妙林寺より一丁程未に當る羽黒權現の宮東向一尺五寸石祠

地内　東西二十四間南北二十一間　御除地

末寺　四ケ寺
門徒　十九ケ寺

御制札まで午未に當る此間三丁三間

一、天台宗　東光山　中町　滿願寺

二階堂爲長公從鎌倉下向下臣治部太輔を亡し爲長公須賀川へ入部此地に鎌倉神社佛閣寺院號を移給時治部太輔を菩提文安三年三月二十日妙林住明榮大般若爲修行寺建立然に天正年中落城之節燒失妙林寺門徒寺跡計に御座候當る子年まで三百五十九年

一、境　内　御除地

一、天台宗　一橋山　中町　滿藏　寺

二階堂爲長公鎌倉より初て入部の時守本尊正觀音當城より鬼門巳寅安置別當職當院寺領へ寄附然る處須賀川落城の時依　寶物錄記本燒失不分明也
千手觀音閻浮檀金今は本寺妙林寺境内に安置開基文安三丙寅年妙林寺住明榮當子年迄三百五十九年本寺妙林寺門徒

一、境内　東西五十一間南北十四間　御除地

寺　度々燒失假屋　東西六間南北三間
本尊阿彌陀如來　木像座像長ケ一尺　本地預ケ
御制札より午未に當る此間一丁二十二間

一、臨濟宗　藥王山　中町　要津院

開基寛正二辛巳年普王寺第八世德岩大和尚建立然處二階堂信濃守行直公内實逝去爲菩提御子照行公藥師瑠璃光如來を當寺に安置御堂建立供料へ寄附其後信濃守盛義公家臣保土原江南齋内室の姉は盛義の御乳人天正二甲戌年四月十七日卒當寺境内に葬寛政二年より當る子年まで三百四十四年本寺當所普王寺

一、境　内　東西三十七間南北二十五間　御除地
　客　殿　東西三間南北六間
　庫　裡　東西三間南北二間
本尊觀音　木像座像長ケ一尺二寸
藥師如來　同　同　行基作
御制札より未に當る此間二丁餘

一、曹洞宗　萬年山　本町　長　松　院
大職冠二十九代二階堂山城守從五位下藤原行詮朝臣の妻は三浦平八郎爲豐之娘文明七乙未年二月二十六日長逝麒山禪師を請し引導せしむ戒名長松院殿と號山城守殿右菩提の爲須賀川出郷手袋村に一寺を建立し萬年山長松院麒山禪師を招く開山第一祖とし同所に於て寺領三十丁御寄附候然るに天正年中須賀川落城人民逃放同十八年逃民漸々集る安積郡六槻の領主相樂三河守三男孫右衛門包純と申浪人當所本町を取立長録寺舊跡に長松院移し淨翁師を招く住持せしむ當寺五代より落城後田丸中務殿當所を拜領守山在居菩提所を取立了山和尚を招く合住持同萬年山長松院と號永樂二十貫文を寄附須賀川守山兩寺同山號同寺號にて了山和尚の兼帶也中務殿慶長五庚子年四月十五日逝去戒名朝德院殿全庵良剛大居士と號當寺中興開基中勢殿逝去の後無緣地に被成候其後當所長松院は相樂孫右衛門菩提所として取立守山長松院を末寺と改萬年山長興寺と號故相樂孫右衛門再中興開基とす於當寺功多し其依由緒相摸國大雄山最寧寺南塔司報恩院大慈院住番職今以勤來文明七年より當る子年まで三百三十年　本寺當所長録寺

一、境内　東西百二十五間南北六十五間　御除地
客殿東向　東西六間半南北八間半
庫裡南向　東西十二間半南北八間半
本尊釋迦如來　木像座像　長ケ五尺
禪堂　衆寮兼造　北向　東西六間南北三間

鐘樓堂
御制札より未申に當る此間二丁三十間
境内外
藥師檀　東西二十三間半南北四十七間半　御除地
一、朝庵寄落に付本尊佛長松院に安置
末寺　六ケ寺
御制札より午に當此間九丁三十五間
一、天台宗　岩瀨山十王院　本町　岩瀨寺
源義家公當國安倍賴時爲征討當國へ御下向天喜五年勸請給石清水の宮を岩瀨八幡と號當郡一社なり其後二階堂家下向の刻右之由緒故寶殿中興として專信心の輩多繁昌す然るに天正年中須賀川落城後文錄四未年當寺を建立して此地に遷座す當る子年まで二百十年本寺當所千用寺門徒
一、境内　東西二十五間南北三十五間　御除地
寺　東向　東西二間半南北六間半
本尊阿彌陀佛　木像座像長ケ一尺
八幡宮東向　九尺四面
拜殿東向　東西二間南北六間
疱瘡神東向　一間四面

石鳥居東向　高サ一丈口尺横八尺
御制札より午未に當る此間三丁四十間半
一、天台宗　般若山　本町　圓滿院
二階堂爲長公祈願所本寺妙林寺大般若經納置役寺にて文安年中妙林寺明榮建立大般若經守持然るに天正十七年落城の砌兵火にて記錄燒失當る子年まで三百五十九年
一、境内　東西三十間南北十三間　御除地
寺　去申年燒失後未建立不仕候
本尊大日如來　木像座像長ケ二尺
大般若經　同　斷
稻荷宮南向　三尺四面
御制札より巳に當る此間二丁七間餘
一、天台宗　八葉山　本町　觀音寺
奥州湯殿山信心之輩慶長十一丙午年一寺建立して林海上人と申行者を招住持とす本寺奥州羽黑山寂光寺當る子年迄百九十九年
一、境内　東西十八間半南北二十六間　御除地
寺　東向　東西二間半南北四間
本尊大日如來　木像座像長ケ一尺

不動尊　木像座像長ケ一尺
同　堂　二間四面
同　石佛　立像四尺
同　堂西向　一間四面
御制札より未に當るこの間三丁四十一間
一、修驗修上寺山眞德寺　本町　德　善　院
由緒の義は當十月中書上候開基明應十五戊子年當る
子年迄三百九十七年本山聖護院宮
一、境内　東西二十六間餘南北六間餘　御除地
客殿東向　東西四間半南北六間半
庫裡南向　東西十二間南北二間半
本尊不動明王　木像立像長ケ二尺五寸
熊野權現堂　東西五尺四面
本地佛三尊
阿彌陀木像立像長ケ一尺古佛
藥師木像立像長ケ一尺定朝作
千手木像立像爲長公鎌倉守來佛
拜殿東向　東西二間南北四間一尺
廻　廊
こゝに西國三十三ケ所觀音安置
華表石東向　高き一丈横八尺
御制札より未に當る此間三丁五十間
境内外字瀧の上　御制札より未に當る此間二十丁
朝日稻荷宮
拜殿南向　東西六間南北二間
往古よりの神社に御座候へ共社地本町御百姓持畑
二十四歩地主寄進に御座候處斷絶仕候に付天明七
未年より拂院持仕候間右場所何之頃勸請仕候也年
號相分り兼申候
一、淨土眞宗　應現山　本町　勝　誓　寺
本願寺三代覺如上人御弟子眞榮と申僧延文五庚子年
當國下向長沼に於て淨土眞宗の一宇建立して城主
新國上總介殿菩提寺也然るに天正年中長沼落城後
全授と申住僧當所へ引移り當寺文錄四乙未年霜月二
十七日造營す開山玄榮より拂僧まで十九代相續延
文五年より當る子年まで四百四十五年本山京都西
本願寺
一、境内　東西四十六間餘南北二十間餘　御除地
本堂東向　五間四面
本尊阿彌陀如來　木像立像

祖師親鸞聖人繪像　一幅
七高僧繪像　一幅
太子繪像　一幅
本願寺満如上人繪像　一幅
親鸞聖人繪像　四幅
庫裡　南向　東西七間南北四間半
表門　東向　高さ一丈横九尺
御制札より午に當る此間六丁二十間
一、修驗宗　祖神山　本町　常法院
開基萬壽年中當所往還道路に付鹽竈笠島の道祖神
其後永承年中地藏院榮良と申修驗別當後中絶社殿
地計にて記錄等無御座候然る所寛永三丙寅年安樂院
秀良と申修驗入院仕擔當迄相續仕候院山號の儀は
聖護院御門跡達奏免許寛永三年より當る子年まで
百七十九年本山當所德善院
一、境内　東西三十四間南北五十間　町寄附
客殿　南向　東西三間南北五間半
本尊不動明王　木像立像長ケ二尺　春日作
社頭　西向　三尺四面
本地佛地藏尊　木像立像長ケ八尺　弘法大師作
華表石　西向　高サ八尺横六尺
御制札より午に當る此間八丁二十六間餘
一、當所寺院二十二ケ寺
内　七ケ寺　本町
　　七ケ寺　中町
　　三ケ寺　道場町
　　五ケ寺　北町
一、同社家二人
内　一人　中町
　　一人　道場町
會津附之節御定書之寫
定條々　須賀川町
一、高荷おろし候事初十日に古町中十日は中町十日は北町たるべき事
一、たちん附候事も右日次たるべき事
一、御傳馬諸役儀三町同前たるべき事
右條々若いはひのともがらあらば罪科にしよせしむるべき候也御執達如件
慶長三年二月二日
蒲生源左衛門

書判
玉川數馬之助
同斷
町野玄番
同斷
小倉作左衛門
同斷
蒲生左門
同斷

右本紙相樂七郎右衛門所持仕候

一、檢行吉田忠三右衛門祖吉田采女に田丸中務少輔殿より被下御書付の寫

須賀川之内にて七石分
成候扶持に可致□一退候也
天正十九年三月十三日　御在判
北町檢行

右書附所持仕町割以來檢行相勤采女より忠三右衛門迄十一代相續仕候

一、當所吉右衛門祖野川小太郎へ二階堂爲長公より被下候感狀三本所持仕候

一、二階堂家代々茶毘場　御制札より申に當る

中町西裏五丁二間有享保二十年乙卯仲夏佐藤小左衛門二階堂家關基廣福山長錄寺現住碧鳴代相共に謀て碑を建高さ一丈三尺其□を勤七月七日を期として二階堂家代々之法名を唱施餓鬼執行小左衛門子孫御會之節罷出候事令以□□無御座候
右は此度御尋に付御調書申上候以上
須賀川町檢行

文化元甲子年十二月　吉田忠三右衛門

庄屋　安藤甚五郎
同　三澤孫左衛門
同　市原常藏
同　藤井惣右衛門
檢行　佐藤宗藏
同　安藤彥兵衛

御代官中

一、德善院持朝日稻荷境内東西四十二間南北二十四間此内一反二十四歩御年貢地石鳥居高サ八尺横六尺南向

一、朝日稻荷境内に牛頭天王石宮本社より申に當る

諏訪明神の末社に付先達て須田右衛門太夫より書上申候石の鳥居東向高サ八尺横六尺程に相見へ候得共例其儘差置申候

一、徳善院境内熊野宮拝殿の前自然石碑銘控口に見出し兼候よしに付石壇に仕別紙御口受申候

一、長松院持上新町先薬師檀共薬師の儘佛御座候由此節は臺石斗相殘佛像は無御座候そのわきに一朝庵と申庵室御座候處是又破壊仕無御座候地名は薬師檀と申先年當所十念寺へ右地内南端貸地に仕場處へ念佛堂を建道信者詣置千日之間念佛供養仕候間千日堂と唱候由申傳候薬師たん間數先達て長松院より書上置申候

一、濁り池地名は秋山内と申候へ共溜水半日濁り水ゆへにごとり池と唱申候

一、中宿村先に道場町北町本田畑新畑御座候都合仕候得ば四丁餘飛地御座候先村地當町分へ飛地無御座候

一、諏訪社地外須賀川右衛門太夫居屋敷東西三十六間半南北五十六間中町地分御除地諏訪神主社地は北町地分にて御年貢地に御座候間先書申上候

一、諏訪祭禮毎年七月二十六日夕より八月三日まで執行仕候下社家流鏑馬祭仕候右同年同日神輿町中渡御町之屋敷にて狂言古來より仕來申候

一、千眼寺持財天丈ケ三寸木佛座像作は相知不申候石之宮一尺五寸四方東向祭禮別に無御座候諏訪祭禮の節副祭禮に仕候

一、十念寺支配離三庵子安堂宮境内間數書先書申上候厨子入子安觀世音丈ケ一尺二寸木像座像祭日四月十六日九月十六日

一、須田源藏古敷下蝦夷穴堀井二つ西の穴二尺五寸上幅一尺五寸下幅二尺深さ四尺東二方穴竪一尺五寸上幅一尺二寸下幅一尺五寸深さ三尺乞食住居候處は岩の下に筵を掛け出し住居候蝦夷穴には無御座候

一、北町黒門より山寺村まて十四丁六間内に當り同村より牛袋へは二丁程中に當り北町田所掛りにこの地へは山寺村より四丁程

一、市原貞右衛門境内杉山の内石碑四基

右忠孝爲孝子也
正應二年八月二十六日
三像阿彌陀如來像

竪四尺
幅一尺二寸
厚サ四寸程

正和元年
七月二十八日

竪四尺
幅一尺二寸
厚サ五寸位

二基は相知候へ共外二基は文字等相分不申候
右も彌陀佛信心の者は諸願相叶候者にて近在よりも承り傳參詣仕候尤其廻り掃除等仕候へば命に障り候樣申傳手入不仕其儘差置候由に御座候

一、行法寺錫杖へ從羽黒山寂光寺免許寫

寂光寺

御判定

奥州岩瀬郡須賀川町北町行屋行法寺如先規錫杖壹本相違有間敷寺也

寛文十庚戌曆八月二十日

羽黒山執行寶前院主海　印

同寺　御判追加の事

奥州岩瀬郡須賀川清水山行滿寺如先規會補錫杖

□者專一世別行之戒律可抽天下泰平之懇祈並守先例條目之旨支配下へ宜加下知者也仍而如件

寶曆十一辛巳年八月朔日

羽黒山執行別當代

智願院法印智印判

右行御寺之義去□書上には慶長元年開基の旨申上候處此度尙又穿鑿仕候處天正九癸丙年開山成就源海上人當る子年迄二百三十二年に相成申候

一、德善院境內に自然石碑銘書上申候

右爲子孫寫置者也

文久元辛酉年三月吉日

風土記書上終

淺川騒動見聞錄

淺川騷動見聞錄　卷之壹

夫諺に四海困窮せば天の錄長終らんと上一人の心を以て民の德厚きに寄とかや爰に石川郡淺川は越後國高田城主榊原式部太輔公白河、岩瀨、田村、石川郡にて四郡合て八萬三千石の御陣屋元也千時領分の大庄屋民の油を絞り上えは少々の益筋を申立皆面々の身拵へ既に村高千石あれば大庄屋の諸入用靑銅二百貫餘づゝも相掛け大庄屋一人に付金六兩二分宛の馬壹足棄潰す三兩二分づゝの下人二人並物書給金三兩二分皆々是を一年の巾着へ入常に人馬入用の節は其村々の人馬をひきえ其上淺川え詰て一夜の宿錢三匁づゝ四百泊位に數書正し支配の百姓どもより取上其上諸運上を巨細に申付剩百姓等は本より下賤の者なれば迚上下著用は金何兩羽織何程腰物袴にて何兩と運上を申付るも是亦大庄屋共の計を□□□是を停止す然るに寬政九己年春苗代も針苗になり靑色を出し陽氣を催す頃成るに四月六日俄に靑天かき曇り强て剛風甚敷吹來り砂石を飛し氷霰夥敷降り來り苗の痛むことは恰も礫に□するが如く餘りのこと右の氷霰日方に當しめ見れば二匁八分より三匁位も有之分て淺川領分の苗代に甚敷障り白河棚倉抔の領分には少しも障り無く淺川下の苗代ばかり障り有依て領分の百姓共俄に種籾を水に浸し二番苗代を播き候へ共餘りにおくれたることなれはろく〳〵にも生せず田三ケ一宛は植付ず是一統の類とそはなりにける其砌にも御領分村々より御見分の御役人を願候へども大庄屋ども上を滔ひ彼是いひ廻し等閑に致し剩出來□□□百姓共より冥加米を可献と無體の賦役を申付領分中より米八百俵大庄屋共へ立上の御益筋にと申立みな役前の御いしように致し此砌にも百姓共彼是と難澁の願申せとも大庄屋ども合點せず願は追て可然樣と百姓共を立縮め難儀に難儀を重ねしが騷動の根とぞ成にける、是迄の奉行內藤次郎左衞門替り合まで伊藤勘左衞門知行五百石にて己五月替り合ける然るに村々より植付いたさず荒所年貢の儀勘辨被下度旨數度願出候へ共大庄屋共指留め當年新奉行のことなれば幾重にも諸願等は成間敷重ねて春にも至り候は御上表を取計んと無體に荒所の御年貢を取立百姓

ども□さなるを上には御存なけれども逆心の種となり胸にせまつて門松も建ずに年ぞ積りける　諸親類へは其年の禮儀は□□ひ勤め合□は自然と騷動の噺と成りぬ心には染やすき人心なれば何となり評議決着す折節翌年午の春正月二日の朝なり白川の町え狼の縞犬來り人多くなやむ尤此犬は殺し候へ共無程友犬來り世上を騷かし村々迄も是を危みしと成り是はよき幸と村々より願出陣屋の鐵砲不殘借出し正月二十二日の夜村々え落し文を配る

來廿四日の晩社八幡館に於て各方へ申談度旨有之候に付其村名主銘々よき鉄鎌御持參にて御出會可被下候尤御出無之候はゞ其村へ不殘火を懸け可申候此旨心得違無之樣可致傳合候已上

正月二十二日

尙各御出合砌金山組中御誘引可申合候

上書に火の用心と認一通づゝ一夜の內に村々へ配る然所間もなく廿四日の夜明に至り八幡館にて火を揚げ鐵砲の音しければ續く仁井田金山堀之內番澤村邊迄も一度に放つ鐵砲の音二□□に響くすさまじく野狼もかくや何者の計にや智謀の程こそ奥床し四方八方時の聲一度にあげし聲には山も崩るゝ計りなり第一番に金山村大庄屋石井又左衞門打潰さんと関の聲を上ければ同村の鄕士鈴木傳左衞門諸親類を引添て鈴木磯右衞門同傳右衞門同忠平彼等四人にて罷出て大勢に向申樣は此度の各方御憤我々共も察入候乍去御疲れの程如何なれば先朝飯の仕度等家內の者へ申付置候へば御酒一ッ宛被召上可給旨大勢に申聞ければ大勢の返答には先大庄屋を打潰し其上に可立寄旨四人の者共へ禮儀を述ければ傳左衞門の申樣は各々御尤には候へ共石井又左衞門宅へは御陣屋より江泉喜平次殿同勢十四五人にて御差控被在若騷動にても有之候へば氣の毒千萬此上は我々共え御任せ被下なばごの樣にも取計候はん各聞濟可被下旨大勢に向ひ申ければ百姓共返答に御深切の志忝仕合に候乍去迚も覺悟を極めし上は大庄屋の面々をば一人も不殘打潰し次に惣体役人原潰さねば淺川下の百姓は中々取續方便なし夫とも達て御差留被申なば其元等迚も同樣に打潰さんなどゝ大勢の怒りの聲々申ければ此有樣に驚て鈴木氏には引取たり既にえひ〳〵関の聲石井又左衞門は老年の出來分限已の極月類燒にて一ッ

有土藏に住居して最早普譜に取掛り材木柱も揃たり一番手の住宅に依て江泉喜平次同勢十四五人にて百姓共を制すれども中々ちつとも不聞入今迄こそは上々も恐れん所詮覺悟を極めし上は御代官にても御手代なりとも片端より打殺せと大勢一度におめいて騷れば皆散々に逃散るを不叶と又左衞門家内不殘引連れ入山さして落にけり百姓共一時に住居の土藏を微塵に潰し材木柱もよきにてさゝらん打割竹は細かに刀にて切り目も當られぬ計りなり續て潰すは同村の組頭善左衞門社宮村堀の内駒付諸共打潰し釜子村へと急ぎけり陣屋元へは口口の住宅に依て御奉行伊藤勘左衞門馬上由敷立向ひ百姓共へ云聞せ候は其方共願の筋有て此度騷敷致方何等の譯柄に候や某は漸く舊冬替合未だ諸帳面等も調も不濟先奉行内藤氏の仕置たるのみ願もあらば望の通取斗んこの處を辨へて鎭り呉よと慇懃に被申し流石は陣屋の奉行なり詞に爭はなかりけり百姓共感に堪え大勢ひつそりと鎭りたり頭取と見えし百姓四五人奉行の前に手をつかへ成程御尤至極の御口上御直に戴し義は我々共恐入候併此度の儀は御慈悲を加へ下さるべし我々共の願は第一大庄屋共の不取計是等の役義は小前の不服領分大庄屋惣体なしに致度次に駒付庄屋共馬喰諸共新法に御取替ひ下なば御領分の御百姓共末々迄の願なりと申上ければ勘左衞門願の筋は聞届しぞ乍併大庄屋と申役義は昔より有來りたる役人故江戸表へ伺て其上にて望に任せん武士の正直濁らぬ返答返て害と成にけり大勢の口々に江戸へ引合する迄は當分口の云廻しあたら足をとゞめしぞ皆人々も打續き釜子指て急ぎける　跡に伊藤勘左衞門懷中より矢立取出し馬上にて書翰を認め封じ櫻井伴平呼出し白川棚倉双方へ頼の使者を遣すべし我は是より百姓共を今一應取鎭めんとおんみつ方に何やらさゝやき跡を慕ふて追て行く斯く釜子村大庄屋鈴木專介屋敷の構と云は地面高にて二十間餘の長屋門を建高さ一丈五尺の樫作り下りせかへて門扉に乳首を打て惣金物さもいかめしき門構ひ北の方の鏡には穀物藏に文庫土藏を建並べ南には酒藏に水車を建置き裏は竹木の植込にて枳穀の生垣手前には高塀をかけ忍び返しを打ちなご用心嚴敷屋敷の住居專介家來に申樣は家財の道具は隱すに及まじと申聞ければ數多の家來の其中にも

實心なる下人罷出此者申樣には扨此度は迚も遁れぬ運の盡今迄の古衣裝皆ぬぎ捨て新敷衣裝ともを着替て袖袂に何やかや手に引提て立退く第一なりと勸められ心は跡へ殘れども是非なく寺へ忍びける跡に實心の下人一人當時入用の諸道具に飮料迄も持出し隱して置きたる諸道具は後の調法と成にけり干時大勢込入〳〵殘し置たる諸道具をみぢんに崩して夫より仁井田村へと押寄る序に栃本大庄屋門屋迄も打潰し二子塚村へさしかゝり庄屋駒付二軒ともに打壞し滑津村にと急ぎ行再應ながらも奉行勘左衛門馬上達て取鎭め候へ共中々耳えも不聞入口々に申けるは斯樣成騷敷事の義は又と御覽成間敷乍恐私共と一同御出馬被遊て潰て廻る先々を御一覽可被下給と惡言して大勢の中へ取卷く川原田村の河原迄無是非御出馬被成けるかゝる惣口不届の族後に切捨給ひしも斯くぞ可有と見へにけり勘左衛門も無是非こゝゝ思召陣屋へこそは歸られける斯る處に滑神村入口にて大音を上ければ大庄屋野木平左衛門妾は久々病氣にて打潰されし有樣を見るより胸に突上げてはかなく身こそなりにける

同村馬小百姓是等も是等も不殘打潰し此處より二手三手に別れて亂る一手は中野目村島圓甚左衛門表向に長屋門玄關構の普請の樣子に外美を盡したる構也此者久年より物持と人々の物語なり此度は四文錢に南口多く有酒藏を潰し見ければ五尺の桶につぶ錢三本あり雜穀俵數切散し右の錢全く取替てまき散したる其場所は步行に足へあたる音濱邊を渡るが如くなり夫より續て前田川大庄屋遠藤門次郎鄕士同權五郎百姓一人打潰し北門次郎此度の口んしんの能さ穀藏の內は奧の方へ長持箪笥を積み仕廻其上へ唐紙障子等にて俵の繩を切ほどき皆一面に打かぶせ入口の土藏に油樽を並べ置きたる有樣は花々敷事ども也酒藏の六尺桶の中へつぶ錢入れ上よりは油樽の鏡を拔き上へ一面油を替へ家の內には何もなく御寺へとぞは忍びける跡に大勢打寄て長屋門から居宅迄不殘潰して穀藏の油樽の鏡を拔けば土に一面押出すより轉んで步るかれず又酒藏の粒錢も手にひつついて拔けられず能くも工夫を仕置きたる人々あきれ打棄てゝ捨五郎の方へ押寄せる捨五郎も今は覺悟して家財の諸道具を表へ出し其身は鑌帷衣額に鉢卷して箱に腰

を掛け前に算盤諸帳面刀の鯉口を拔かけて終に是迄押領を仕たる覺はなけれども間違あるなら某が首を渡さん受取れと十面つく〳〵申ければ百姓共は見向もせず家斗潰して引取り濱尾村の大庄屋代々山川門之介兼て奢ものなるよし家屋敷有も村並びなれども遙か引込て馬場先長く高土手にて喰違にして四ツ足門其脇に石垣を築き塀構ひ屋敷廻りは空堀や構ひ森雨の節は水溢村通行も難成小舟などにて通行致す屋敷也南向に玄關を構ひ屋根は不殘惣すくろ座敷の間數も七つ八つ鐵かべに唐紙壁青具壁を塗り散し御成座敷とも云つべき樣子にて奢と云も愚也夫より一手は一の關二手は中富喜右衞門方潰しにとぞは急き行和田新城へ手分して小作田村へ集りて八九日の賄させ騒動後にぞ喰潰し夫より溜出す中津川柳橋を渡りなば下澤村の小百姓谷田川村の大庄屋家財諸道具殘御寺へ廻し隱置き其疑心で長命寺打潰されし其上に什物過去帳本尊佛體に住職も打殺せと云より早く火箸を住職の鼻先へ突付れば餘りの儘長命寺長刀取て大勢を切立〳〵切まくりもう叶はじと逃行鹽田日照田狸森小倉淨金下も小山田不殘潰して押廻す此時□

□二人有直ちに淺川御役所へ届の訴有ければ役所よりも長命寺へ□の御禰奈有にける間て人々勇敢さすが都の僧なりと感せぬ者はなかりける

淺川騷動見聞錄　卷之貳

去程石川大庄屋鈴木茂七郎を始として藥王寺並鄉士鈴木茂市郎下役なれども茂左衞門是等も同く潰されけり中にも鈴木茂市郎は代々鈴木庄右衞門とて此者永久續方限にて大庄屋役義許容候處今は弟に役義を讓りて其身は許容と成て威を振ひ被在身分なれば領分の百姓より疑心を可受事聊有間敷依て家財は法通に投こみ家内の者へ云聞し油斷して居る處へ間を聞ゆる関の聲茂市郎袴を着して玄關に控し有樣は千石取の士にも劣らぬ器量と見へにける扨又庄右衞門の屋敷と云は昔石川昭光公御家老の御屋敷也其砌譯ありて拜領したる屋敷也尤年數以上九の口手これを吹にて惣たるきなくを建の要害は類ひ少なき構に見へにける茂市郎大勢に向ひ高聲に申聞せけるは各々方嘸疲れのほども察入酒一ツ御上げ致さん支度も家内へ申置き候緩々仕度召されべしと挨拶し扨亦相談致し度旨有別の仔細に候はねとも某の有金八千兩年來の封印付則あれなる藏に有石の金子に不足なら其上え借出して八萬石の御百姓末々迄も能仕形永代難義の懸らぬ樣に一相談致度此上は某に勘辨めされて任せ給るべしと百姓共へ申ければ百姓共も得心し鄉士の方へ答へけるは然らは御任申すべし斯樣に騷動致すことなれば無證據は難成墨附一書可被下と打揃てぞ申ける茂市郎申樣成程各々そのこと一札認め差上ぐべしと硯引寄さら〳〵と書終て讀聞せ押返し印判なくては承引難成迚茂斯迄御厚心印形致し給はるべしと口々揃て云ければげに尤と云ながら柏手打てふり向けば床にかざりし五挺の鐵砲一度に轉じてがわら〳〵と茂市郎心におもふ樣斯並へ置きたる飛道具一度にどうとまろびしは何條事の有やらんと思ひながらも笑みを含み元の形に直し置又さん〳〵と手を打てど勝手の者は誰あつて數多の人に驚て隱れ居り庄右衞門下男を呼び長持簞笥を隱さんと續々運ぶ下女下男徐り隙取り候故茂市郎こらひ兼印形取に立んとする間又も上より弓と鎗はつれて落しさたんの拍子重藤の弓にて茂市がみけんにはつしと當りまろびし形の通にさん離の卦に當りて運の盡鈴木の家の斷絕も殘念や口惜やと暫し猶豫の其中に玄關先の百

姓等はみな〳〵承知して控ゆれど門前より後に續く大勢ははるかの隔る人故譯柄迚も知らざればすわ玄關にて何者か扨は了簡ならねばと一度に揚し関の聲長屋門より打潰す茂市郎覺悟して栗毛の駒に鞍置せ下部に鎗をとりさせて其身も忽火事裝束ひらりと駒に打乘て裏門口より立退けば元來鈴木氏の屋敷と云は表に間口六十間裏程地形下りにて裏に大河を構ひ霖雨などの節は水を浮べ此事を知る百姓共絹布綿布の夜着布團數多の百姓集りて引裂やら切裂やら裏の河へ持出し穀藏潰す百姓共俵物川へ持出しまるき錢迄搔ぎ出し夜着や布團を川へ打込其上に俵物やまるき錢を押にかへ忽ちに樋を開け屋敷の内へ水を浮せ膳椀建物皿左鉢みぢんに崩して打込たり扨又鈴木金藏は是迄數多潰せども類なき普譜の有樣は樫き柱に筋野打樫八分のはめ板に巖繩にてしつかとしめ油石灰ねば土にて組建たる戸前の樣子は堅固也然れども終には土藏を打こぼち小判小粒四文錢など投散らせしは土砂を飛す如くにて恐ろしくも又盛なり金銀の冥加はか計後の世迄もいとおしや鄉士の家の諸道具は筆にも辭にも盡されずあらまし聞たる品數を爰に記し置く

一金八千圓餘　金櫃なり
一惣異椀百五十人前
一本朱膳椀五十人前
一鎧　三　領
一吸物椀二百人前
一金梨地膳十五人前
一弓五挺
一銀の水呑一
一四文錢六十把　質藏に有
一金の鷄一羽
一掛物　正宗公直筆　其他數多
一丸膳百人前
一綿布の夜着百五十人分
一朱たんの大黑　是は弟方へ讓る
一金のインキン佛道具也
一書物類多し　長持二棹
一掛物　石川昭光公直筆也
一屏風　舜慶筆大字
一絹布夜着百人分
一青銅百十把
一金銀　當分取扱不分明
一猪口手鹽皿數不知
一朱椀五十人前
一鐵砲五挺
一朱膳五十人前
一甲斐信玄乘鞍
一鎗三筋
一屏風　各筆極彩色其外三双數多し
一猫足膳百人前
一金の延餅一重
一刀脇差數不知
一銀の銚子二ツ
一小南京皿四百五十
一茶の湯道具三通
一銀の水かめ一
一京都燒皿百五十
一碁盤六面石共
一絹布の衣類數不知

以上

右の品數微塵に潰して北山形に山白石里白石も打潰し山村庄屋を潰さんと村入口より鬨の聲山村庄屋を潰さんと込入けり森右衞門は代々續力持爐の端に居たりしが殘念や運の盡五十人や百人ならよもや負けじとなき齒をかみ持たる火箸繩に捻其儘そこに打棄て何國ともなく落て行く夫より坂地湯江渡中野村川邊を越て中畑戸捲に形見母畑村上道渡下道へ渡る澤井の淺川は城山出合と云合せ追々爰に籠りける

此山に二日二夜立籠る城山は陣屋の後にて高山故是に籠られ候ては甚陣屋の御迷惑なり一昨夜こそ八幡館にて俵を建し噺あれば智謀のほども奥床しと三百挺の鐵砲を一度に放し城山へ火を掛け燒拂へども百姓共不動して廿六日七日にも至る頃追々馳付百姓共日は西へ赴けば相圖の火煙を一度に揚げ爰の峯彼處の山にて鬨の聲今日夜討の定なれば最早時刻も黄昏時四方の山より鬨の聲雲霞の如く押出す人野山下殘一面に見る人にはあきれ果膽をつぶさぬものはなし白河道の門端に水車を建置し車を大勢打寄て忽打破る奉行勘左衞門銀拵の大小にて鹿毛なる駒に鞍置くや其勢五十餘人にて手勢は晒木棉のたすき掛け大橋詰より御立出奉行百姓共へ申けるは其方共昨日も申聞け候處不得止事領中に假に打壞ち以の外に候へ共是迄押寄の上は定て當所にも打壞つ者有之べし併爰元の義は陣屋元に候へば無心ながら某に用捨せしめ吳間敷哉強て願申候へ共百姓共の中には御奉行の御意御尤には候へ共迚も是迄參りし上は矢吹屋駒付馬喰迄是非打壞ち申度強て申に付然ば右の三軒を打潰し候上は早速引返給はるべしと吳々申聞られ陣屋を堅め門先迄引返し控居られたり斯と見るより百姓共手に〳〵篝火明松燒し矢吹屋を打潰す元より矢吹屋覺悟にて家財の諸道具も寄て廻し其身は御寺に忍びける右三軒も忽潰し陣屋の門先間迄をば押寄る勘左衞門高聲に御申けるは百姓の者共某が申ことを能も聞入不申き先達ても云聞け通り其方共願の筋何なりとも某の聞屆可申旨再應云聞せけるが騷敷致さずとも願の筋を神妙に申立よと申候へ共五千餘人の百姓なれば不行屆や礫打等致者間々有之候へ共中にも鉈鎌を投げ勘左衞門不得止事白川棚倉双方へ御引合致し前山へ原に成樣燒ければ白川棚倉御堅め一度に

御支度提灯御普請子役前山孫九郎町内を駈廻り町中不殘篝火可差出と相觸らる是迄聞くより淺川の町中はさながら晝の如くなり白川棚倉兩加勢堅めの場所へは幕を打篝火焚て鐵砲の筒先揃て待居たり干時奉行勘左衞門耐かね鎗の鞘をはづし頭取たる者二三人一度に鎗にて突留たり又引返す鎗先て一人突留め其儘鎗打捨て刀を抜て働を見るより附從ふ若士拔連れ切出る續く伊東間右衞門殿五人切捨を被致たり同二人津右衞門切らる湯川某は大鐵砲にて三四人打くだき其外大島百井なんど豐田荒川杵崎等江原福岡内山小倉血氣の勇士が働にて即死の百姓廿六人其外山に二三人都合〆廿九人兼て武功の家柄なれば足輕小頭其外迄爰をせんどゝ働ける忽手負百人餘と云も愚也此有樣に驚て逃んとすれど詮方なく押合もみ合逃兼る此事後の百姓共知らぬ者の有之前へ進む者も有り切り立てらるゝ太刀風に恐れわなゝき我がちに逃んとすれども數多の人に押分べき樣もなく人の上へ倒るゝあれば又其上へ重なり倒れ重り追て切らるゝものありあはてふためく其有樣うでを切れて逃るもあり町家の内の椽の下引ずり出され切らるゝあればひらりと軒へ飛上るを下より御投人切落し一本足にて逃んとするを肋をかけて差通しかゝる惡事の企なくばかゝる横死を遂まじく切捨られし有樣血は累々として川を支へるが如く死体は山の如くにて見るも中々恐々しく斯る稀代の惡事とは源平兩家の戰も是には如しと思はれて前代未聞の咄の種舌を卷き感せぬ者ぞなかりける

淺川騷動見聞錄　卷之參

謀事を以て、翌二十七日御奉行村々に廻文を差出す
此度百姓共願の筋有之候義にて大勢騷敷致方無據切
捨申付候者有之候へ共此後此儀に付何事も合用捨吟
味仕置候等一切申付間敷候惣百姓何れにも相談致し
此後騷義無之樣致し御百姓相談の義第一に候尤も此
上夫々難儀の者共へは御手當等可申候其旨間違無之
樣に可致候
右の趣金山鈴木傳右衞門より急來申聞べく候
正月二十七日　伊藤勘左衞門
別紙の通り仕置相付候此段御承知可被成候尤拙者義
御銘々へ□□□□處急には相見兼候に付書付を以て
得御意候御差圖御座候に付如斯御座候以上
正月廿七日　鈴木傳右衞門
金山組中
追て駒付役義取立右樣の御座近村々早々御廻し可被
下右書付組中村々小前村役人より御聞せ可被成候御
領中大庄屋幷駒付共役錢取立役三分は不殘取放し愼
め申付候右之趣金山鈴木傳右衞門より急來可申聞候
以上
正月二十七日　伊藤勘左衞門
千時二十七日雨天陣屋着待此日の堅めは綿入の小袖
一枚宛からすねにて刀一腰づゝ白川御加勢の堅め此
日は陣笠にさし裝也棚倉の御加勢堅め此向は小笠原
流の飛道具を持つ
伊藤勘右衞門領分の番太呼寄死骸を彼等に改めさせ
其上さらし置く樣番太に申付る
同廿八日朝五時奉行の□□死の傍へ近く寄り箱に腰
打掛番太共へ申渡し候は
此度無宿者共集り領分村々百姓共を引添騷敷致方依
之無宿頭取之者共無據切捨可付御慈悲は昨日一日さ
らし置者也
右死骸番太共大穴を堀不殘打込假埋め置し也
打潰候家數名前左の通り
金山大庄屋　石井又右衞門
釜子大庄屋　鈴木專助
谷田川大庄屋　力丸市郎右衞門
濱尾大庄屋　山川紋之助

前田川　大庄屋　遠藤門次郎
栃橋大庄屋　遊佐順藏
栃本大庄屋　根本八右衞門
滑津大庄屋　野木平右衞門
淺川大庄屋　矢吹孫右衞門
山白石　大庄屋　松浦勇右衞門
中野田　大庄屋　兼谷左右衞門
石川大庄屋　鈴木茂七郎
淺川駒付　矢吹茂右衞門
湯谷渡村庄屋　中田庄右衞門
狸森庄屋　八彌
淺川馬喰　彌市右衞門
田中村馬喰　彌太郎
坂路庄屋　六右衞門
宮村庄屋　角左衞門
上道後庄屋　丈右衞門
棚橋駒付　村上良藏
中畑役義頭取　岡崎長右衞門
石川中野村庄屋　二瓶藤十郎
石川形口庄屋　喜右衞門

前田川庄屋　遠藤拾五郎
下澤村庄屋　德右衞門
里五石馬喰　藤口口藏
川邊庄屋　圓谷清藏
橋本庄屋　小松惣右衞門
前田川庄屋　深谷唯八
下道後庄屋　角右衞門
山形役義頭取　森右衞門
田中村庄屋　吉田奎右衞門
石川中野庄屋　良介
矢吹庄屋　與茂七
市關庄屋　吉田榮藏
口橋百姓　庄藏
中畑庄屋　小針良藏
谷田川　長命寺
栃本百姓　松右衞門
前田川百姓屋九軒同村百姓　鯨藏
石川町　藥王寺
石川町庄屋　鈴木彌平兵衞
同下役　茂右衞門

石川口口　鈴木茂市郎
以上
右之通二月朔日迄書付を以て追々住居申出候此外口上にて申出候分しかと相分り兼申候に付相分り次第追て御知らせ可申候　以上　陣屋元

三月上旬相候申候所全八十六軒外に喰潰し家數多く有之候然は其砌承り候に九十二軒と申事無覺束候

白川より淺川へ御加勢一番手

一物頭　加藤佐右衞門　一横目　角谷　文內
一醫師　齋藤　玄良　一小荷駄形　內　善七
惣數七十六人右之內　又法之者十六人

同　二番手の御加勢

一郡代　立見作十郎一横目　篠宮　郡吾
一醫師　中野　宗因　一勘定奉行西垣武右衞門
一代官後藤六左衞門　一勘定人渡邊與三右衞門
一勘定人新貞彌右衞門一鄉手代金子傳右衞門
一小荷駄　形小島新吾
六十五人　配又供之者二十二人

三番手御加勢蕪內村へ控居

一番頭　久德小兵衞　一番頭　同　右門
一番頭井上八郎右衞門　一物頭　宮崎半兵衞
一物頭　宮崎　久間　一書院番支配也伊久間鄉左衞門
一物頭、渡邊孫右衞門　一同　伊久間孫四郎
一御長柄支配坂井東藏　一同　坂井　亦八
御馬廻中
一西山孫左衞門　同　外　衞
一坂山左衞門　岩崎熊吉
川崎英藏　松田數馬
關町勇八　小河彌兵衞
高見文左衞門　同　文　藏
三谷傳藏　野田利右衞門
西尾長吉　影山東吉
豐田　恪　松本五郎右衞門
桐澤三左衞門　吉野勝右衞門
伊久間忠右衞門　多々良吾藏
坂本和左衞門　伊藤爲八
中山　績　森　常右衞門
內田源藏　杉野騰八
一横目駒井忠兵衞　醫師　中村流鎌
鐵砲五駄小荷駄五十二疋人數四百八十人餘

陣笠に陣羽織を着し鐵砲五十挺爲持長柄十八筋

一白坂町堅總勢二十五人　森　儀左衛門
一籏宿村堅總勢二十五人　杉浦綱三右衛門
一增見村堅總勢□□□人　佐藤代右衛門
一須賀川堅總勢三十五人　庭場平右衛門
以上

棚倉より淺川へ御加勢一番手

一物頭　野邊直記　一郡奉行　尾澤治兵衛
一徒横目岡崎　忠次郎　一勘定人長谷川文五郎
一徒　九西　忠藏　一同小頭志村數右衛門
一小頭　平間文右衛門　一小頭　關谷　庄太
一同心小頭　高崎定右衛門　一同心小頭　伊野　藤太郎
一下横目鈴木戶右衛門　一小荷駄氣形又供之者
同二番手玉野村に控居
一物頭　三宅藤右衛門　一横目　草野藤右衛門
一徒　佐久間甚右衛門　一勘定人磯　村　榮吉
一勘定人中根　林太夫　一下目付山口郡右衛門
一小頭　田邊篠右衛門　一同心小頭　菅野　新九郎
一武具方の者

一白坂宇源太　一森　裏五郎
一小島七郎右衛門　一草野元兵衛
一白坂　杢右衛門　一森　三五郎
一賄方　小柳津林右衛門　一賄方　中島熊右衛門
一賄方　山口　住藏　小荷駄氣形物供之者
同三番手城内に控淺川へ繰上參勤
一物頭　富田　武兵衛　一郡代　山口又左衛門
總勢二百八十人餘
水戶地境の明神堅め
一郡奉行　覓　助次郎　一總勢五十人餘
二本松笹川へ堅め
一物頭　安田友右衛門　一物頭　青山　伊記
一大目付佐野　善兵衛　物頭へ足輕三十人宛
以上

人勢百四十四人捕手十二人
三春一番手地境赤沼へ堅め
一物頭　秋田　勘解由　一小頭　大磯森右衛門
一小頭　佐久間　伊八　一人數八十人餘
同　二番手
一大目付不破　右近　一醫師　熊田　白國

一物頭　松井庄右庄門　一御臺所役　大木　義助
一騎馬乘五騎　右近下供二十人
總勢百五十人餘
右赤沼へ出立の上跡へ罷出參勤
會津領內三代へ堅め
一番頭　神室內藏之進
榊原江戶屋敷より淺川へ一番手
一物頭　足輕供勢三十五人　村上　太助
一物頭　足輕供勢百人　烏井與右衞門
右者正月二十九日淺川へ着二月七日江戶へ歸る越後高田より淺川へ一番手
一領奉行二十人へ支配共　鷲塚　源兵衞
一手代　二月二日淺川へ着　淺野　庄藏
一目付（道勢二十人外に鬼日付二人）　村田彌右彌門
一物頭（足輕五十人小頭二人徒目付二人）二月十日淺川へ着　中根　六藏
一御中老　千石領　清澤　主稅介
一御付家老　三千石領　原　權左衞門
高田出立にて淺川へ二月二十五日着
淺川御陣屋定詰役人
一領奉行伊藤勘左衞門　一日付領印　百井文右衞門
一郡方　林　與五兵衞
一代官　伊奈間右衞門
一代官　豊田武右衞門
一積方　伊崎　喜藏
一金方　江原　勇助
一勘定人荒木幾右衞門
一勘定人淺野　吉藏
一勘定人遠山　甚藏
一賄方　岡平吉右衞門
一同　献　甚左衞門
一同　德原五左衞門
一同　佐久間　逸平
一普請方役　前山　孫九郎
一切夫　百井　文之助
一切夫　前山　孫太郎
一手代　福岡　彦三郎
一物頭　小坂　直右門
一勝手方寺西　清藏
一騷動の百姓共諸々の高山へ籠衞二月五日不殘山より出拂候
一五月十日前後江戶捕手役人來りて咎人多く召捕白川本町にて遂吟味淺川領分咎人多く出る
一頭取人野手島村半十郎と申者未三月七日御陣

屋元にて打首相成筆取人同村にて喜傳太と申
者此者越後高田へ引籠に相成る

淺川騒動見聞錄卷之參　終

大正七年三月二十八日印刷
大正七年三月三十一日發行

不許複製

非賣品

編輯兼發行者
福島縣福島市杉妻町十三番地
岩磐史料刊行會代表者
釘本衛雄

印刷者
東京市小石川區久堅町百十五番地
水谷景長

印刷所
東京市小石川區久堅町百十五番地
水谷商會印刷部

發行所
福島縣福島市杉妻町拾參番地
岩磐史料刊行會

GANNAN-DO
巖南堂書店
TEL.(261)0396
東京・神田神保町二ノ二

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03076 0813